

活ならざるものに對して小形である。現今使用されてゐるもの、一般を見るに鰹鮪等を主要目的とするものは、出來上り浮子方の長さ一〇〇〇—一七〇〇米、鯖の如きものを主要目的とするものには八〇〇—一五〇〇米、鰹の如きものを主要目的とするものには五〇〇—二五〇米のものが用ひられて居る。勿論之は單に目的物の種類のみに関するものでなく、其地方に於ける群集の程度海の状況等に依りても大いに考慮して定めらるる必要もあるが、漁具使用者の熟否・使用方法の巧拙に依つても甚だ差異を要するものである。網の中即ち使用する時の深さは、淺所に於て用ひらるゝものはその普通に使用さるゝ場所の水深に従ふべきであるが、必ずしも網裾が水底近く迄到達して水底を魚群遁逃の一時障壁として用ひざるべからざるにはあらず。水深甚だ深き所に於ても、網巾を其目的魚類の習性に從ひて充分深くするときは、一時的に其遁逃を防ぎ得、間もなく網裾縮括を完了すれば、充分漁獲を擧げ得るのであるから、目的魚族に依つて適當の深さのものを使用するを可とする。鰹・鮪等を目的とするものに於ては、一〇〇—一八〇米、鰹を目的とするものに於ては七〇—一四〇米が用ひられて居る。又この巾は、浮子方の長さに比して甚だしく過當比なるは使用の便宜上より見るも、水底に關係なく使用するものには於ては、網裾縮括の適度を保たしむる點より見るも無理を生ずる事となりて不可とすべきである。この比は、長さに對し、巾は八—一七%なるを便とする。巾は網の各部同一なるも可であるが、普通は主要とする部分のみ前述の巾で、其他は状況により適度に減少されて居る。大型のものに於ては、中央部に深く兩翼端に至るに從つて淺からしめてあるが、圍繞せる後魚の遁逃を防ぐ意味よりすれば、寧ろ兩翼端に近き部分に於て最も巾深きを可とする。即ち、最初圍繞せるときの形は大體に於て圓形なるべきも、兩翼端を合せたる位置に於て網裾部を縮括するときは、此

縮括する船の位置は圍繞内に引込まることとなつて、圍繞形は一種の心臟形に近い形となるを免れず。兩翼端より全長の八分の一内外の附近が急曲して、俗に謂ふ「フキダシ」と稱する形を取る。この「フキダシ」の部に於ては、網巾が他の部分よりも相當に深くなければ網巾は緊張して沈子方を淺くすることとなり、兩翼の會合部が少しく深層の網巾より見るときは、廣き遁逃路を造ることとなる。この缺點を補ふためには「フキダシ」部は、他の部分に比して相當深きことを必要とするのである。此漁具に使用すべき網地の網目の大きさは最後に魚群を集めて捕るべき魚捕部に於ては、目的物が容易に逸出せざるために適當なるものたることを要する。即ち大體の準據は網目の一脚が切斷するもなほ脱逸し得ざるために、魚の體巾の三分の二以下の程度にすべきである。他の部分の網目は、そのまゝの場合魚の脱逸せざる程度、即ち魚の巾よりも稍々小なる程度に於て可なるべく、網裾に近き部分の如く圍繞初期の少時のみ擴張され、間もなく網裾縮括のため一ヶ所に集めらるゝ部分の網目は、普通部分の二三倍以上の廣目のものを用ふるも差支なきやうである。浮子はなるべく浮力多きを可とする。即ち其浮力は各其附着する位置に於て充分網巾を浮上せしめ得ることは勿論、更に魚群の衝突・網の縮括等に對して浮子方の水面下に沈下せざるために、相當の過剩浮力を有することを必要とする。その配置は、魚捕部に於て最も多く、兩翼端に至るに從つて減少することを得る。沈子は敏捷なる目的物に對して網の沈下を速かならしむるため、相當に多量に附する必要がある。勿論材料は鉛が用ひらるゝが普通である。その配置は魚群を圍繞するにあたり最初に投入される所に於て最も少く、最後に投入さるゝ部分に至るに從つて多く附すべきである。一般に網を中央より左右對をなるべく同形に構成するを可とする。即ち使用中潮流其他の影響を受けて、圍繞網形の變化する場合に左右對

應することが便であるからである。

浮子方及び沈子方の網に對する網地の縮結は、投網時・網地の纏絡等の故障を少からしめ、その投出を便ならしめるためにはなるべく少きを可とするが、網の深さの方向への開張沈下を早からしむることも亦重要な要件で、これがためには縮結は寧ろ大なるを可とする。これ等の點を考慮して、少きものは一割内外より多きは三割位迄普通二割―二割五歩位縮結されて居るが、之も使用の方法・目的物の状況等に依つて決定さるゝを要する。網を使用するに一艘の船を以てする一艘旋と、二艘の船を以てする二艘旋の二種がある。一艘旋に於ては、網は一艘に積載し一端を短舟に保持せしめて、この端より網を投出して目的物を圍繞して、再び最初の網端を短舟より受取り使用するものであるが、二艘旋に於ては、網は二艘の船に分載して兩船舫をなし、右側の一艘は左舷より網を投入し左側の一艘は、右舷より網を投入して共同して目的物を圍繞するのである。前者を眞網船・後者を逆網船と云ふ。一艘旋と二艘旋に於ては各々利害得失を有して居る。一艘旋に於ては、船の操縦は甚だ容易で漁況に従ひ、相當の長距離に對し比較的迅速に移動することを得、相當に大型の船を用ひ得る。二艘旋に於ては操作稍々複雑なるを免れぬが、魚群の進行方面に對して適當の距離に於て、兩船離脱して投網するため魚群を圍繞することに於ては便宜多きも兩船が舫をなす場合が度々生ずるため、波浪高き場合に於ては作業甚だ困難を來たし、大型の船に於ては舫は一層の困難を生ずるに至る。之等のために、一般に一艘旋は稍々沖合性を帶び、二艘旋は内灣又は沿岸性を帶ぶることを避け難い。以下大體に於て二艘旋法の使用法に就いて述べれば、網の投入位置方向は大體魚群の状況に従ふもので、要は半ば投網した場合に丁度網口の中央に魚群が進入し來る程度を可とし、

又潮流に對しては下流より投入して上流に終り、恰も潮流を受けて旋網するを爾後の操作上可とする。風に對しては之と全く反對に風向を脊にして旋き風上より初めて風下に旋き終るを可とする。風潮共にある場合は、其程度に依り何れにより多く従ふべきやを決定すべきである。以上は操網中永く網形を失はざるため、及び網裾部が縮網に纏絡して網裾の縮括を障礙し、或は網を破損するが如き故障を防止するために重要な事項である。網の投入圍繞は最も迅速なるを可とする。このため最近に於ては漁船を機走せしめて使用するもの多く、其成績も良好である。實際に於てはこの投網圍繞速度は機走の場合に於ては一分間二〇〇―二五〇米、漕槽の場合にはこの約半速度の様である。機走に於ては斯の如く迅速なるがため人手を以て網を投入しつゝ旋網することは殆ど不可能で、寧ろ機走力に依つて網は自然に引き出されて投入さるゝに委さねばならぬ様な状況である。然るにこれは網の奔出中に浮子網・沈子網或は身網地等網具の何れの部分かに多少の故障起り纏絡等のことある場合は、瞬間的に網の大破損を招來するがため、初めの網の積載に就いては充分細心の注意を以て、順序整然と之をなすことが甚だ重要である。之等の網の投出、或は繰揚げに際してこの故障を除き、充分便宜を得るために船上に轉向自由にして網の摩擦部にはローラーを備へた網積臺(turn table)を設置してこの上に網を整頓積載するものもある。投網形は勿論時の状況に依つて多少の差はあるべきも、大體に於ては兩翼端の會合點に立ちて見たる時、圓形よりも寧ろ確々縦に長き楕圓形なるを、爾後の操作上に便なるが如くであるが、實際に於てやゝもすると却つて横に長き楕圓形となり勝ちであるから、此點に注意することを要する。投網し終れば兩船は舫をなして縮網を引き締め網裾を縮括するのであるが、縮網は機力を以て引き締めるを便とする。此引き締めの速さは一應速きを可とす

る様に考へられるが、實際に於ては必ずしも左様ではない。即ち此速度が過度に早い場合には、縮網が甚だしく緊張されるために船に近き部分程水面近くに吊上げられ、従つて網裾を浮上せしめ、此の部分より魚群の逃逸を容易ならしめることとなる。此缺點を防ぐために、船の方より縮網を通して相當重量の鉛製分銅を使用されることもあるが、強力なる機械力を以て迅速に縮網を引締める場合は此の分銅をも浮上せしめることとなる。従つて此引締速度に就いては相當の考慮を拂ふ必要がある。そして網中の魚群の動靜に従つて之を加減するを可とする。魚群が水面に浮上して居る間は、相當迅速にするも可なりと雖も、魚群が水面より沈下して居る間は、寧ろ極めて徐々にするを可とする様である。即ち浮子網が或る程度迄弛緩して浮子が充分浮上して居る程度の状態に於て引締むるを可とする様である。

網巾に對して著しく淺き場所に於て、使用さるゝ場合又は潮流の方向が網の側方又は魚捕部外方より來る如き場合に於ては身網地の余裕が縮網の上に掛かりたるまゝ引き締めらるゝこととなり此の場合此余裕網地は縮網が緊縮さるゝとき撚りをなしつゝ引き締めらるゝにより縮網に纏絡して錨を通過し來り網地の纏絡は次第に太さを増すがために遂に錨内に詰まり所謂「カンクイ」の状況となり、錨内を通過して縮網を引締むることは不可能となり、或は網地に大破損を與へ、或は網裾の縮結を不可能ならしめることがある。此の障礙は相當度々出現する上に操作上に最も困難を生ずるものである。之を防止するためには潮流の方向に留意して、なるべく之を受けて投網することは勿論であるが、更に縮網をなるべく小徑滑面のものとし撚りの増減を少なからしむることである。このためワイヤーロープを使用するを可とする。

網裾が完全に締括され縮網が兩船に充分繰取られたる場合は、錨は全部兩船の船首下に集合し來り、網裾は錨の下方に菊花狀の褶をなして集められる。此の時網内の魚群は初めて完全に網を以て包圍され、遁逃の道を失ふこととなるから、以後の操作即ち兩船への網の繰入れ及び漁獲物の收納は急ぐ事を要せぬのであるが、身網の何れかの部分に破損を生じ居る場合もあり、天候或は潮流等の急變し來ることもあり、かゝる場合に余りに長時間を要することは甚だ危険なるが故に、之等の點に留意して状況に應じて操作の緩急を適度ならしむることを緊要とする。

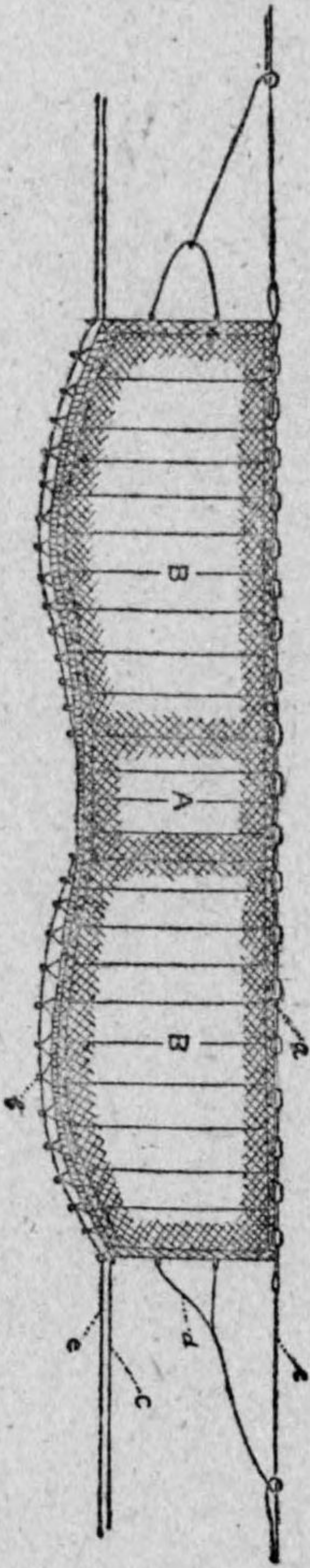
右の如く數多の漁船と作業手を使用してなす複雑なる作業を各部相應して統一せる作業として遂行せしむることとは其効果を充分發揮せしむるために第一喫緊事である。此各部の脈絡と統一を保持するためには従業各人の協同心を必要とするは勿論であるが、猶ほ全體を統括する指揮者及び其統制を補助して各部を分擔する幹部を定め命令系統を整然として活動せしむることを要す。之がため普通各船には船長又は船頭を置き各其船を統一指揮せしめ、之等を統括指揮せしむるために沖合(又は大船頭)一人を定め、此沖合は多くの場合網船以外の漁船に塔乗して、全作業を指揮する。此の船は一般に手船大手船等と稱せられる。猶ほ此の外に漁獲物積取り運搬のために使用とする運搬船を必要することもあり、場合によつては網船の動作を補助せしむるために雑用船を要することもあるから、旋網類の使用に當つては其規模の如何に依り、又漁獲物の種類多寡に依り相當多數の漁船を使用し各船の協同作業を以て、全作業を完成されるのである。

旋網類に於ては單に魚群を目撃し、又は其徴候を見て直ちに之を使用して漁獲するもの、外に火光・餌料等を

以て目的物を誘ひ集めて使用するもの、或は桂繩等と稱する威嚇の用具を使用して目的物を驅り集めて使用するもの等がある。火光即ち集魚燈を用ふるものは多くの場合火船と稱する集魚燈の使用を専らとする漁船を使用され桂繩等を使用するに當りては又其専用の漁船桂船又は振繩船等と稱するものを必要とすることゝなる。如斯規模も擴大され作業の複雑化し来るに依り之等の各船の作業の分擔程度及び其方法各船内の各人の業務の分擔人員の配置或は機械力應用の範圍方法等旋網類の如き漁具の使用に當りては、攻究さるべき主要なる項目が多々あるのである。

旋網類の如き大形の網具に於ては、又漁具の腐敗損傷等を防護することも甚だ主要なる事項の一となる。現今に於てはマニラトワインを使用する鱈鮪旋網の如き網絲の太き網目の粗大なるものに對しては、多くコールドター又は其類似の油類染料を用ひらるゝことが多いが、染料のための網地の増重量は網地の使用量が多であるが故に、漁具使用上に相當重大なる結果を來たすため、鱈の如きものを目的とする網目細小なるものに對してはカツチ、又は其の類似の如き染料を用ひられる。兎に角網漁具の運用漁具中に於ては最も規模の大なる漁具であるが故に染料の使用に就いては特に慎重なる考慮を要するのである。然るに輓近の状況を見るに漁船も次第に機械化され、又堅牢の度を増すに従ひ、作業は逐年激烈となり目的物の状況さへ良好であれば殆ど寧日なく繰業さるゝことあり。網の修繕・手入・或は染網等のために就業日数を減殺さるゝことは、全業務の成績上に重大なる不利を來らしむることゝなり。従つて染網・日乾等の手数はなるべく之を避けるが如き風あり。網具保存上の対策は愈々必要を痛感さるゝに至つて居る。然るに一方網具使用の状況を見るに、一日中に於て多くとも五、六回を出

です、しかも其の一回に於て眞に網具が水中にある時間は投網時より揚網完了迄僅かに一、二時間に過ぎず、(勿論漁獲甚だ豊饒なる場合は十數時間揚網し終らざることもあるが)。網具の腐敗の水中に於て進行する程度は甚だ輕微であつて、實は濕潤のままに船上に積載して居る間に腐敗することが、甚だ重大であるのである。故に従來の如く日乾等の乾燥方法を用ひずして、濕潤のままに積載し居る間に於て、簡単に容易且つ安全廉價に防腐の目的を達する方法を考案することは、最も緊急にして重要なことである。



第六十六圖 籠中着網の構造一覽

A 魚網部 B 手綱部 C 網口 D 網架 E 網繩

緣	F	魚捕緣	綿絲 30番手	18	6.06	10	106	1	縱目 縱縫	"	106	
	a	魚捕浮子肩	"	"	"	"	15.2	1	橫目 橫縫	"	15.2	
	a'	魚捕沈子肩	"	"	9.1	20	"	1	"	"	"	
	b	脇浮子肩	"	15	"	10	"	1	"	"	"	
	b'	脇沈子肩	"	"	"	20	"	1	"	"	"	
	網	c	奥袖浮子肩	"	13	"	10	106	1	"	"	106
		c'	奥袖沈子肩	"	"	"	20	"	1	"	"	"
		d	中袖浮子肩	"	12	"	10	109	1	"	"	109
	地	d'	中袖沈子肩	"	"	"	20	"	1	"	"	"
		e	袖浮子肩	"	12	"	10	113.5	1	"	"	113.5
e'		袖沈子肩	"	"	"	20	"	1	"	"	"	
G		袖端	"	15	6.06	10	15.2	1	"	"	15.2	

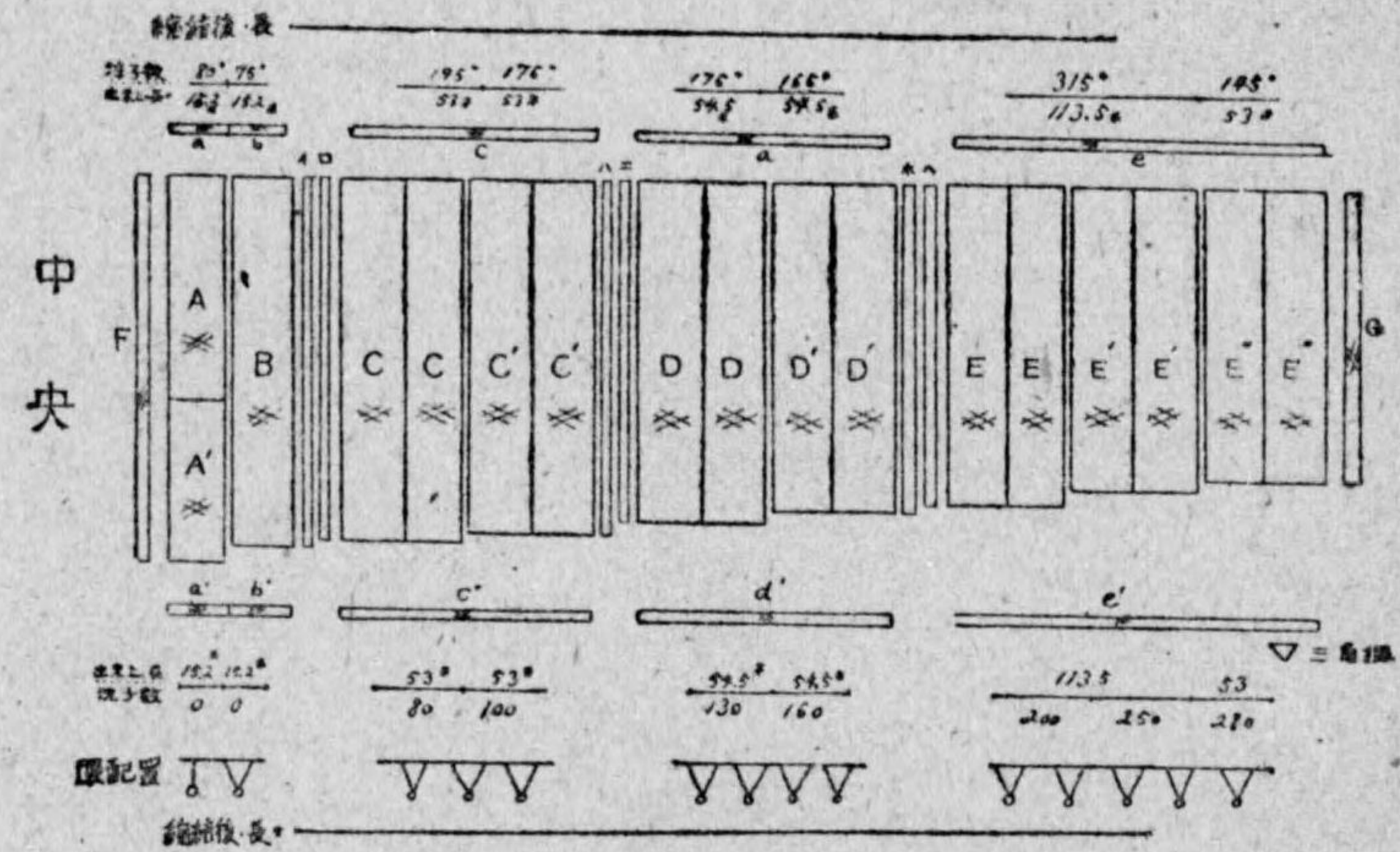
備考 上記所要量ハ片側分ヲ示ス。

鯉巾着網所要材料表 (其ノ二)

符號	名稱	材料	太サ	目合	掛目	長サ	反數	縫合	結節	所要量
イ	脇緣	綿絲30番	15號	9.1	10	113.5	1	縱目 縱縫	本目	113.5
ロ	奥袖緣	"	12	"	"	109.0	1	"	"	109.0
ハ	"	"	12	"	"	103.0	1	"	"	103.0
ニ	中袖緣	"	"	"	"	97.0	1	"	"	97.0
ホ	"	"	"	"	"	91.0	1	"	"	91.0
ヘ	袖緣	"	"	"	"	83.0	1	"	"	83.0

備考 上記所要量ハ片側分ヲ示ス。

旋網構造例其一 鯉巾着網構造一例



第六十七圖 鯉巾着網網地配置圖

鯉巾着網所要材料表 (其ノ一) (網地配置圖参照)

符號	名稱	材料	太サ	目合	掛目	長サ	反數	縫合	結節	所要量
A	魚捕	綿絲 30番手	15	6.06	100	22.7	9	縱目 橫縫	本目	22.7×9
A'	"	"	"	9.10	"	"	7	橫目 橫縫	"	22.7×7
B	脇	"	12	"	"	20.4	12.5	"	"	20.4×12.5
C	奥袖	"	8	12.1	"	37.9	9	"	"	37.9×18
C'	"	"	"	"	"	"	8.5	"	"	37.9×17
D	中袖	"	"	"	"	"	8	"	"	37.9×16
D'	"	"	6	"	"	"	7.5	"	"	37.9×15
E	袖	"	6	15.2	"	"	5.5	"	"	37.9×11
E'	"	"	"	"	"	"	5	"	"	37.9×10
E''	"	"	"	"	"	"	4.5	"	"	37.9×9
	三角網	綿絲 20番手	25	9.1	1~15		27	"	"	

鯉巾着網所要材料表 (其ノ四)

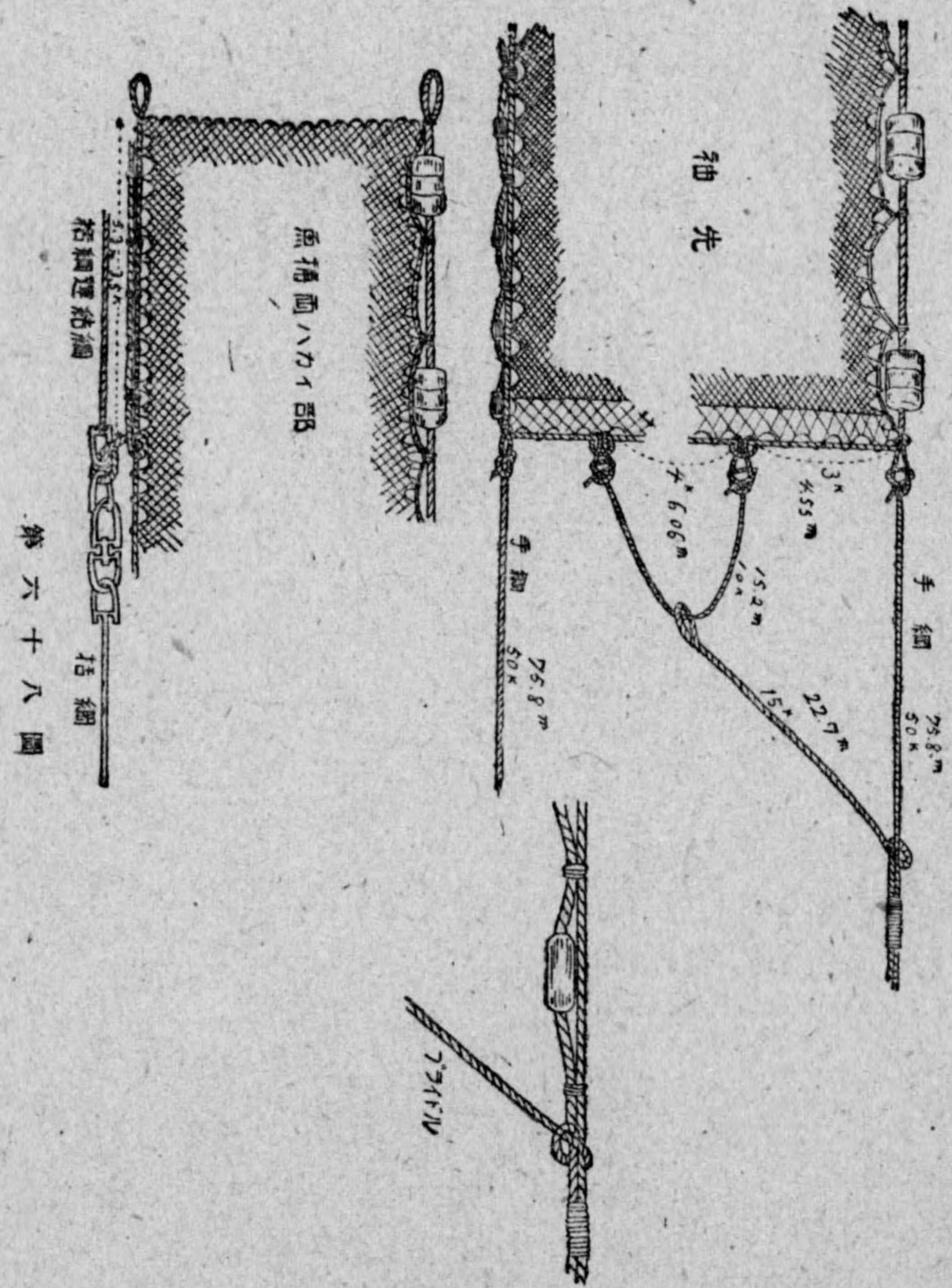
	名 稱	材 料	本數	大 サ	長 サ	所 要 量	
網	浮子通網	マニラロープ	1本	徑0.9	412米	420米	
	浮子添網	"	"	"	"	"	
	沈子通網	"	"	1.06	"	"	
	沈子添網	"	"	"	"	"	
	袖縁網	"	2	1.21	15.2	30.4	
	ブライドル	"	13	1.52	22.7	295	
	又木網	"	2	"	15.2	132	
	手網	"	2	1.82	75.8	152	
	括網先手	"	1	"	45.5	46.0	
	分銅網	"	1	1.52	22.7	23.0	
	類	括網	スチールワイヤー	1	0.91	455	455
		括網連結網	"	1	1.82	4.5	5.0
		魚捕くもで	ターロープ	1	2.42	6.06	7.0
	属	縫合絲	綿 絲		6~35號		大約57疋
環		亜鉛鍍鐵	5個	内徑1.52	内徑15.2	5個	
"		"	8"	"	" 16.6"	8個	
分銅		鉛 鐘 型	1	45疋		1個	
具	シャツクル	鐵 製	5個	内徑1.82		5個	

備考 上記所要量ハ片側分ヲ示ス。

鯉巾着網所要材料表 (其ノ三)

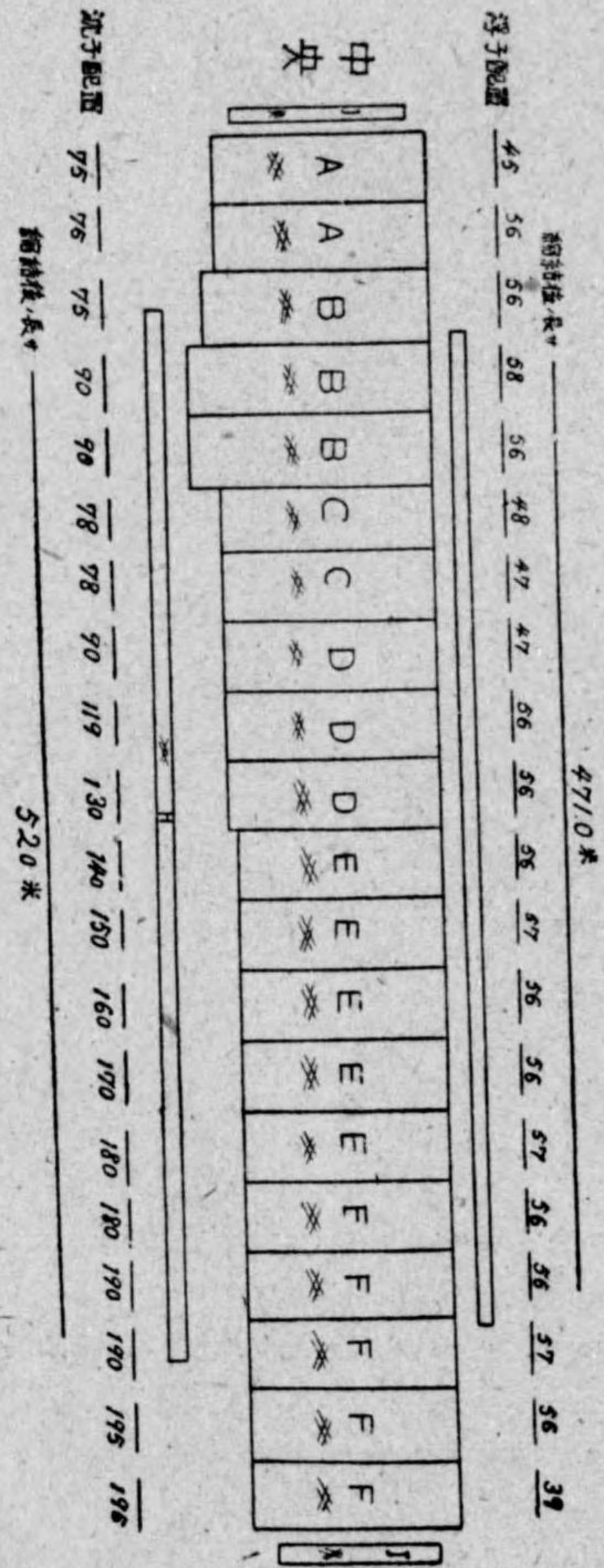
	名 稱	材 料	大 サ	網ノ長サ	間 隔	數 量	
浮子	魚捕	コルク	圓筒型 徑10	15.2米	9.1	80個	
	脇	"	"	"	12.1	75	
	奥袖	"	"	53.0	15.2	195	
	"	"	"	"	18.2	175	
	中袖	"	"	54.5	"	"	
	"	"	"	"	21.2	165	
	袖	"	"	113.5	24.2	315	
	"	"	"	58.0	27.2	145	
	沈子	奥袖	鉛	鼓型 150瓦	53.0	66.0	80
		"	"	"	"	53.0	100
中袖		"	"	54.5	42.0	130	
"		"	"	"	34.0	160	
袖		"	"	113.5	25.0	450	
"	"	"	53.0	19.0	280		

備考 上記數量ハ片側分ヲ示ス。浮子總數 1325個 沈子總數 1200個



第六十八圖

旋網構造例 其二
 鯖巾着網構造一例

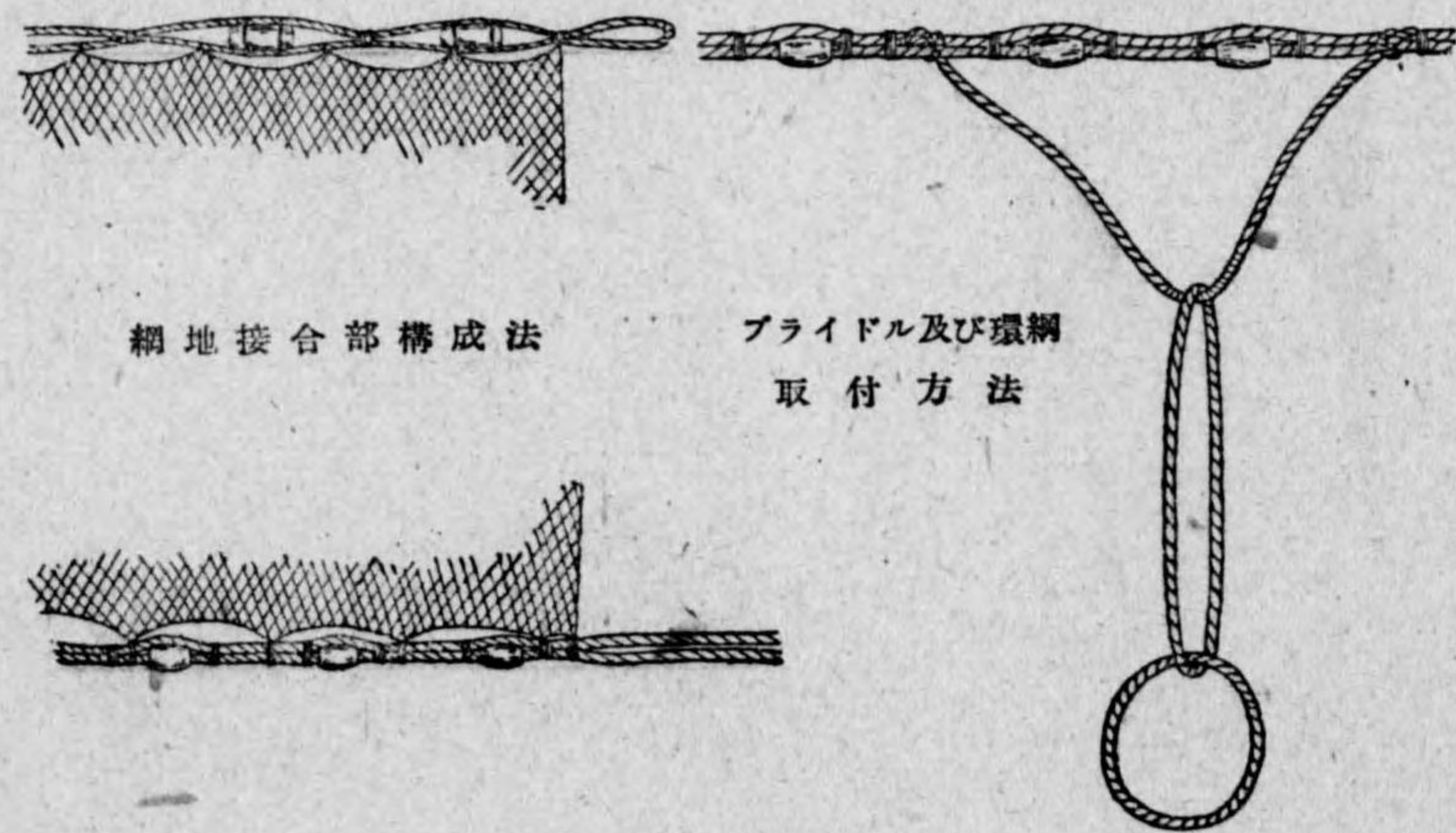


第六十九圖 網地配置圖 (片側)

鯖巾着網所要材料表 (其ノ二)

	名 稱	材 料	大 サ	長 サ	數 量	
網	浮 子 網	棕 栲	徑 1.52 種	471 米	2 條	
	沈 子 網	ターロープ	"	520	"	
	環 括 網	ステイール ワイヤー	1.36	606	1	
	手 網	マニラロープ	1.82	91	4	
	ブ ラ イ ド ル	"	1.52	3.03	25	
	環 網	"	"	"	"	
	縁 網	棕 栲	10 耗	1136.0	1	
	目 通 網	マニラトワイン	"	1750.0	1	
	類	浮子結付網	"	"	909.0	1
		沈子網ト網地 接合網	"	"	682.0	2
浮子網ト網地 接合網		"	"	"	2	

備 考 上記數量ハ片側分ヲ示ス。



第 七 十 四 圖

鯖巾着網所要材料表 (其ノ一) (網地配置圖参照)

符號	名 稱	材 料	太 サ	目 合	掛 目	長 サ	反 數	縫 合	結 節	總 長
A	魚 捕	綿 絲 20番手	1	4	100	37.9 ^米	12	反 横目 横縫	本目	37.9×24 ^米
B	真 袖	綿 絲 20番手	7	"	"	"	14	"	"	37.9×41
C	中 袖	"	4	"	"	30.3	12	"	"	30.3×24
D	"	"	"	"	"	37.9	12	"	"	37.9×36
E	袖	"	3	"	"	"	11	"	"	37.9×66
F	"	"	4	"	"	"	"	"	"	37.9×44
G	縁網(浮子肩)	"	6	6.06	20	546 ^米	1	横目	"	546米
H	縁網(沈子肩)	"	"	"	"	576 ^米	"	"	"	576
I	縁網(魚 捕)	"	"	"	"	45.5	"	縦目	"	45.5
J	縁網(袖 端)	"	"	"	"	42.2	"	"	"	42.4
K	三 角 網	"	"	"	25~1	1.21	50	"	"	"

備 考 上記總長ハ片側分ヲ示ス。且合節ハ 10 種間ノモノトス。

浮子及び沈子並に屬具

名 稱	材 料	大 サ	片側數量	所 要 量
浮 子	コ ル ク	24.1×10.6×9.1 ^{cm}	1071ヶ	2142
沈 子	鉛	150瓦	2650	5300
分 銅	"	262.8瓦	1	2
環	鐵	肉徑1.52種 内徑15.2種	25	50

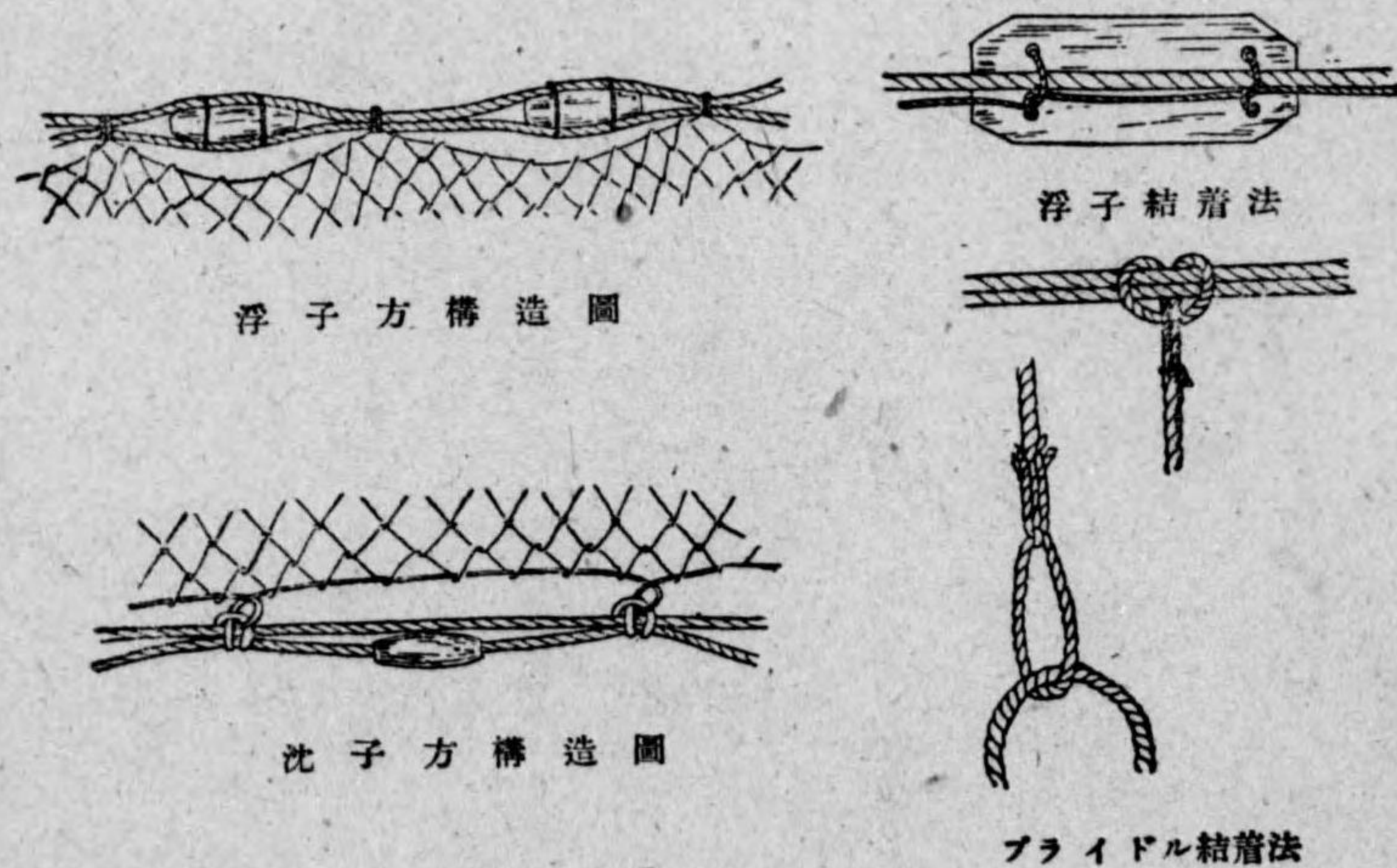
備 考 上記所要量ハ兩側分ヲ示ス。

巾着網所要材料表 (續)

網類並ニ屬具	名 稱	材 料	本 數	太 サ	長 サ	所要量
網類並ニ屬具	浮子通網	棕 栢	2本	徑1.21糎	113.5米	227米
	浮子添網	"	"	91	"	"
	沈子通網	"	"	"	128.8	257.5
	沈子添網	"	"	"	"	"
	括手網	マニラ	1	2.42	303.0	303.0
	ブライドル	"	1	1.21	121.0	121.0
	縫合絲	綿 絲	約10丸	10號	3.8	6.8
	環	鐵	18	內徑1.21糎	內徑1.36糎	10丸

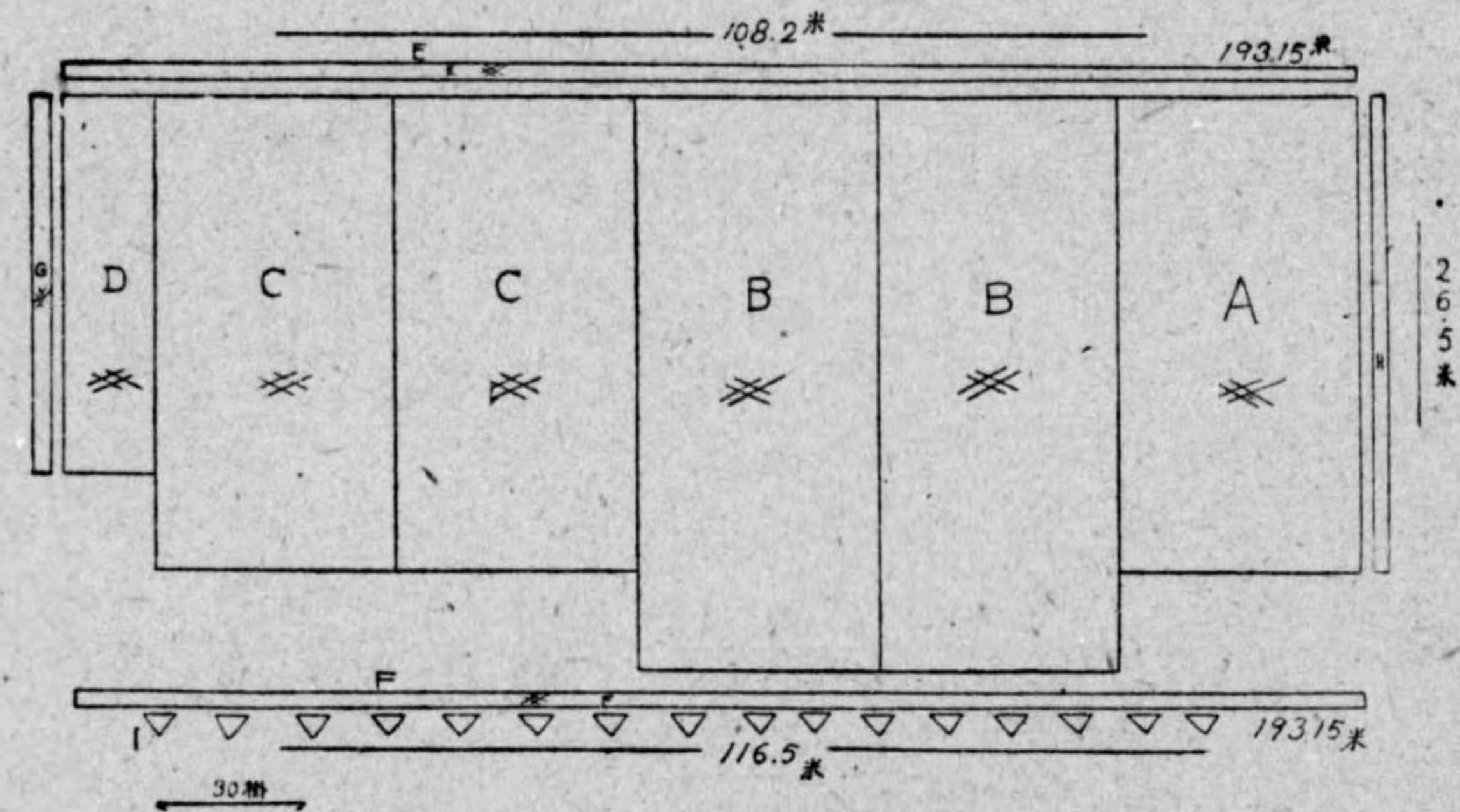
浮子=桐 楕圓半月型 長サ 24.2 糎 巾 12.1 糎 厚サ 6.06 糎
總數 750 個

沈子=鉛 大 鼓 型 長サ 3.03 糎 徑 1.51 糎 重量 262 瓦
總數 1600 個



第七十二圖

旋網構造例其三
鯖巾着網構造一例



第七十一圖 巾着網地網配置圖 (片側)

巾着網所要材料表 網地配置圖參照

符號	名 稱	材 料	太 サ	目合	掛目	長サ	反數	縫合	結節	(兩側分)	
										總長	
A	袖	綿 絲 30番手	2	16.5	100	30.3	50	橫目 本目	1515	2	
B	中 袖	"	"	"	"	"	60	"	"	1819	4
C	奥 袖	"	"	"	"	"	50	"	"	1515	4
D	魚 捕	"	3	"	"	"	40	"	"	455	2
E	緣網浮子肩	"	7	46	20			橫目	"	193.15	
F	沈子肩	"	"	"	20			"	"	193.15	
G	魚 捕	"	"	"	10			縱目	"	32.0	
H	袖	"	"	"	20			"	"	26.5	
I	三 角 網	20番手	5	6.6	30~1		18	橫目	"	18	2

第七節 建 網 類

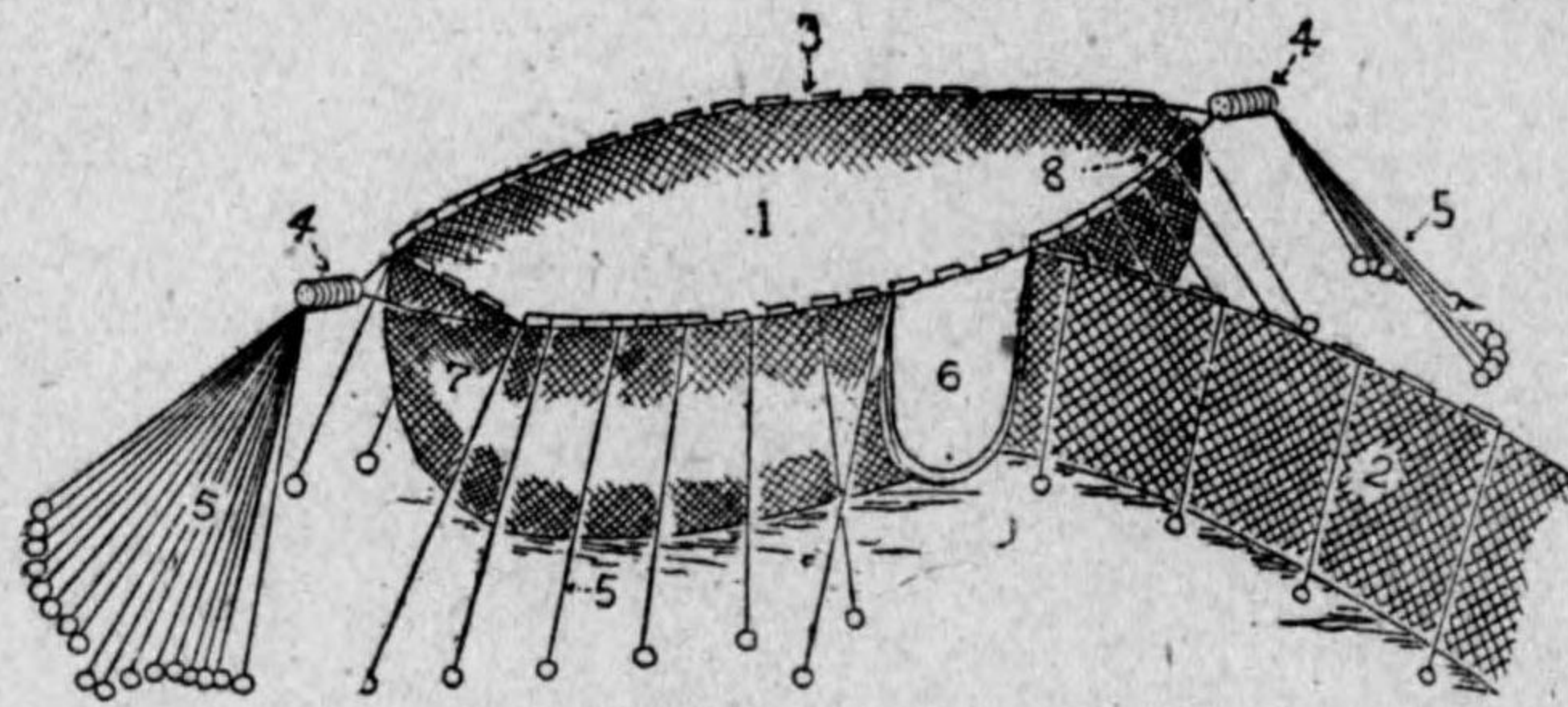
此の類は陥れたる目的物を入れて抄ひ取る處の囊網部(又は身網部とも云ふ)陥れたる目的物を一定範圍に圍みて其游泳を制限し、更に囊網部に入らしむるための圍網部、及び目的物の游泳方向を誘導して、圍網部又は囊網部に陥せしむる處の垣網部(袖網部又は道網部とも云ふ)の三部よりなるものであるが、時には囊網部が圍網部を兼ねるものもあり、また囊網部のみを以てなるものもあり、或は垣網部のみにして之が圍網部を兼ねるものもある。一般には浮子沈子共に有するが、稀に之を缺くものもある。其の要點は魚類の游泳通過する地點に、位置を一定して固着設置さるゝ點にあり。かくして魚類を誘導陥入せしめて漁獲する趣の網漁具であつて、我が國漁業法に云ふ定置漁業に使用さるゝ漁具は大部分此建網類である。此の類を其設置の形状、漁獲の趣向に依り更に左の六種に別つ事を得る。

一、臺網類
四、出網類

二、落網類
五、張網類

三、掛網類
六、網臥類

一、臺 網 類



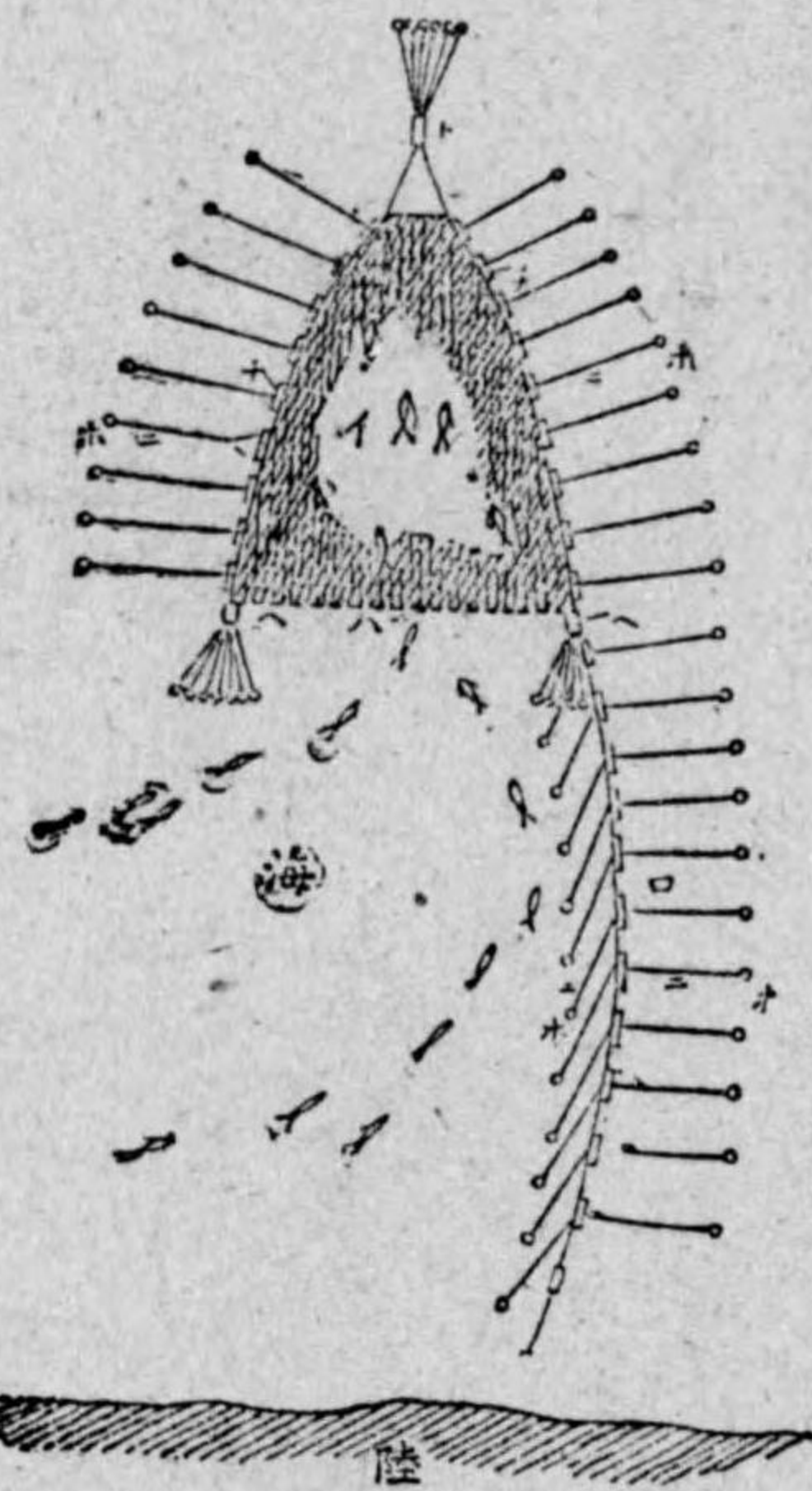
第七十三圖(1) 大謀網一般圖

- (1) 囊網部
- (2) 垣網部
- (3) 浮子及び浮子綱(がわ綱)
- (4) 大浮子(臺)
- (5) 錨及び錨綱
- (6) 囊網口(はぐち)
- (7) 縮出し部(揚網し始める部)
- (8) 魚捕部

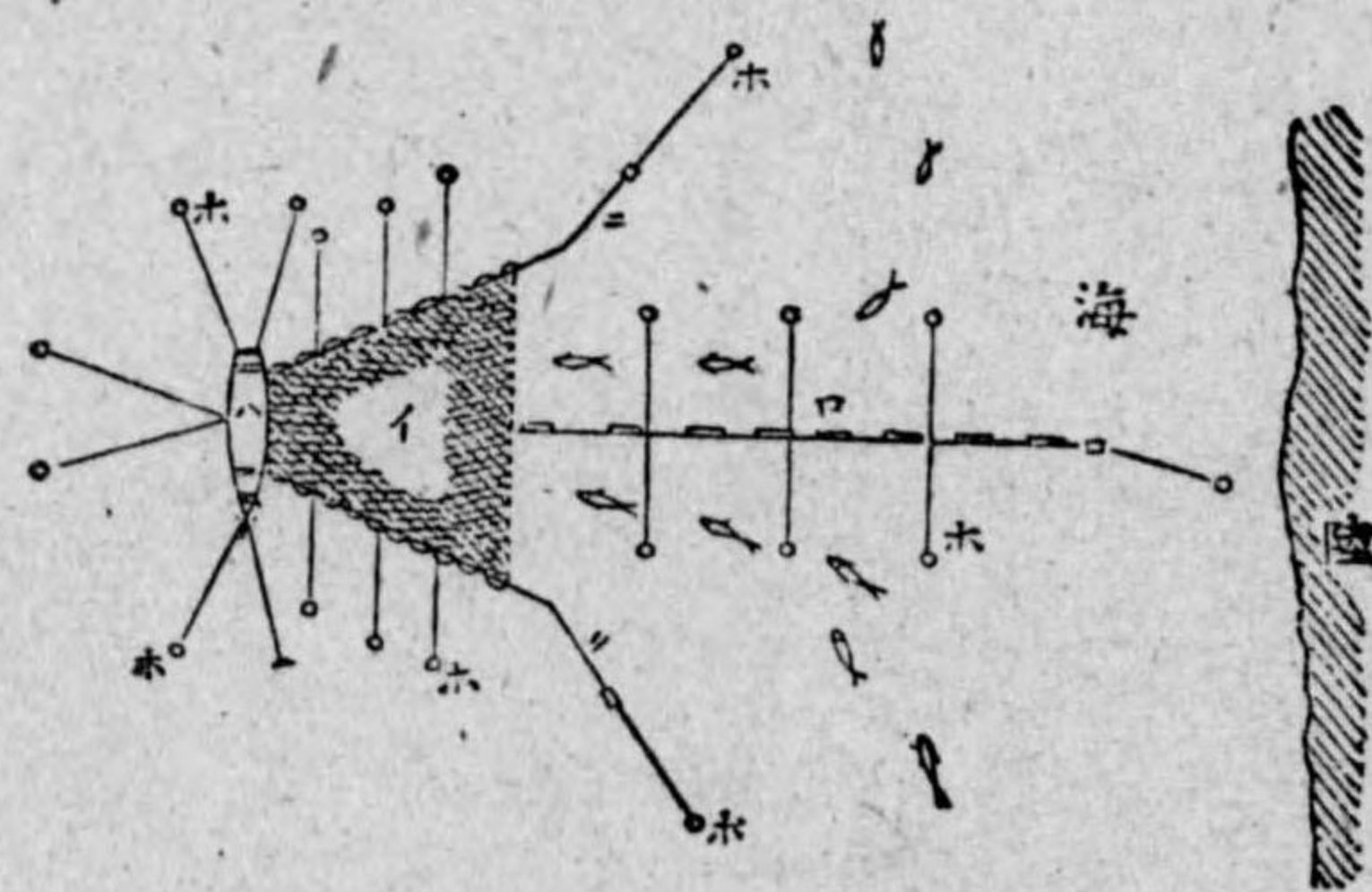
此類は垣網部を以て、直ちに魚類を囊網部に誘導陥入せしむる趣向の建網類であつて、垣網部は囊網部開口の一側より接続さるゝ所謂片口のもの、開口の中央附近より接続さるゝ所謂兩口のものがある。目的魚群の回

遊し來る方向が一定して、且つ確知せらるゝ場合には片口に造られ、一定せざる場合には兩口を使用されるのであるが、若し一定せずとも其來游する方向に輕重ある場合は、其度合に應じて主要とする側を廣く、他を狭くせる兩口とさるゝを普通とする。囊網部の形状は種々なるも大別して稍々三角形に近く其一邊が全く開口せるが如きものを大敷網型とし、楕圓形又は四角形等の形に近く開口は其一部分のみで、囊網部の全容積に對し比較的開口小なる形のもの大敷網型となす。大敷網型に於ては魚群は甚だ陥入し易しと雖も、又逃出し易き缺點を有するが、游泳速力早くなく、且つ群の移動を直ちに感知し得る如き場合に使用するを可とするもので、各種大敷網(各地)麻苧臺網(富山灣)鰯臺網(富山灣)根拵網(神奈川)三艘張根拵網(神奈川)鯉張揚網(大分)各種行成網(東北北海道各地)各種建網(東北北海道各地)鮭金折網(北海道)等は此の型に屬する。大謀網型は稍々入り難き缺點あれども、又陥入せるものは逃出し難き

他端に達して遂に漁獲物を収納するのであるが、大敷網型に於ては囊網口を揚げ直ちに囊網奥部に向ひて揚網し、繰越し行きて漁撈を遂行するものである。何れも操作されるは囊部のみである。此類中には建網類中規模最も大なるものあり。囊網部の長徑三〇〇米以上に達し、垣網部の

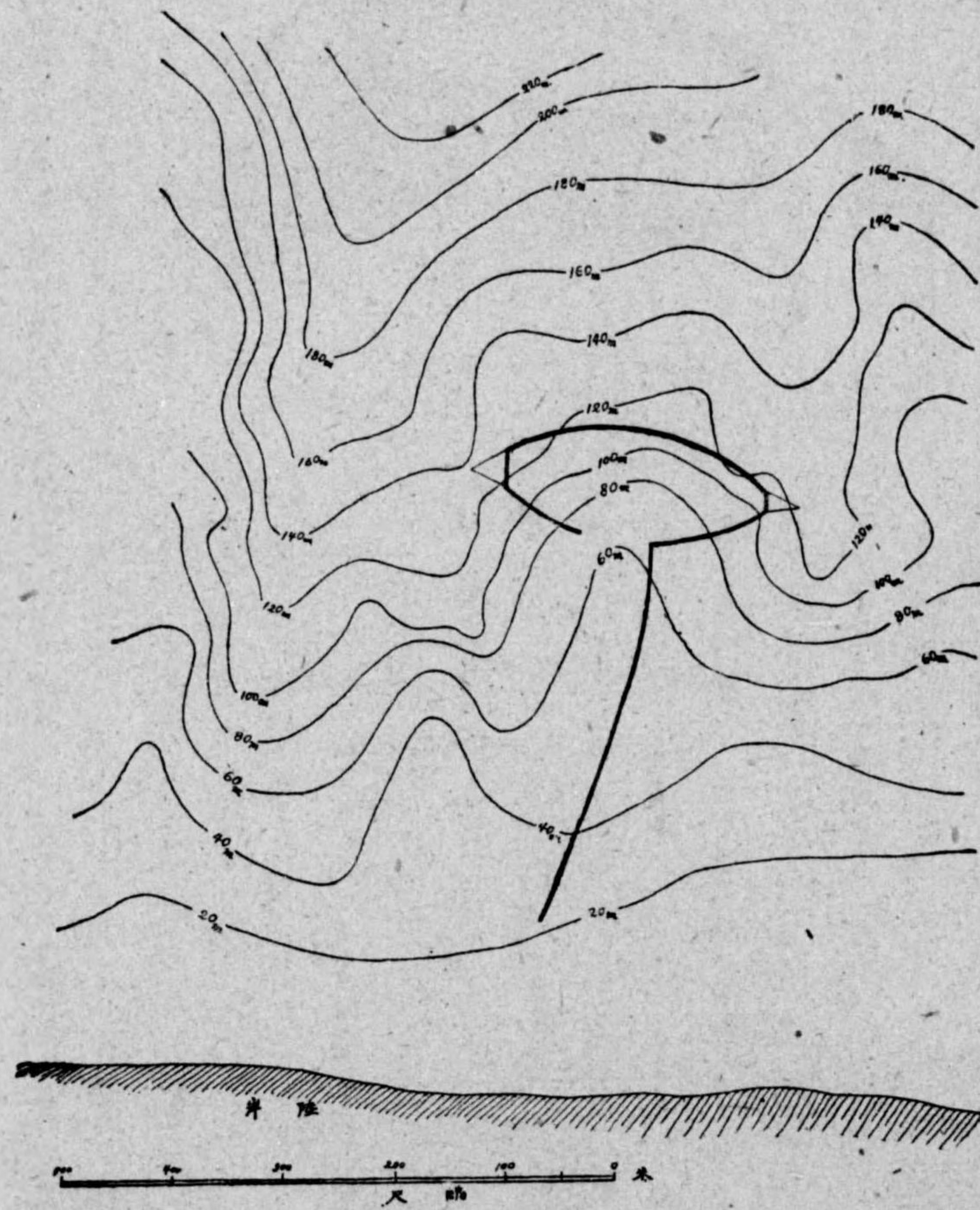


第七十三圖(3) 大敷網敷設状況
イ 身網 ロ 垣網 ハ 大浮子
ニ 碇 ホ 子

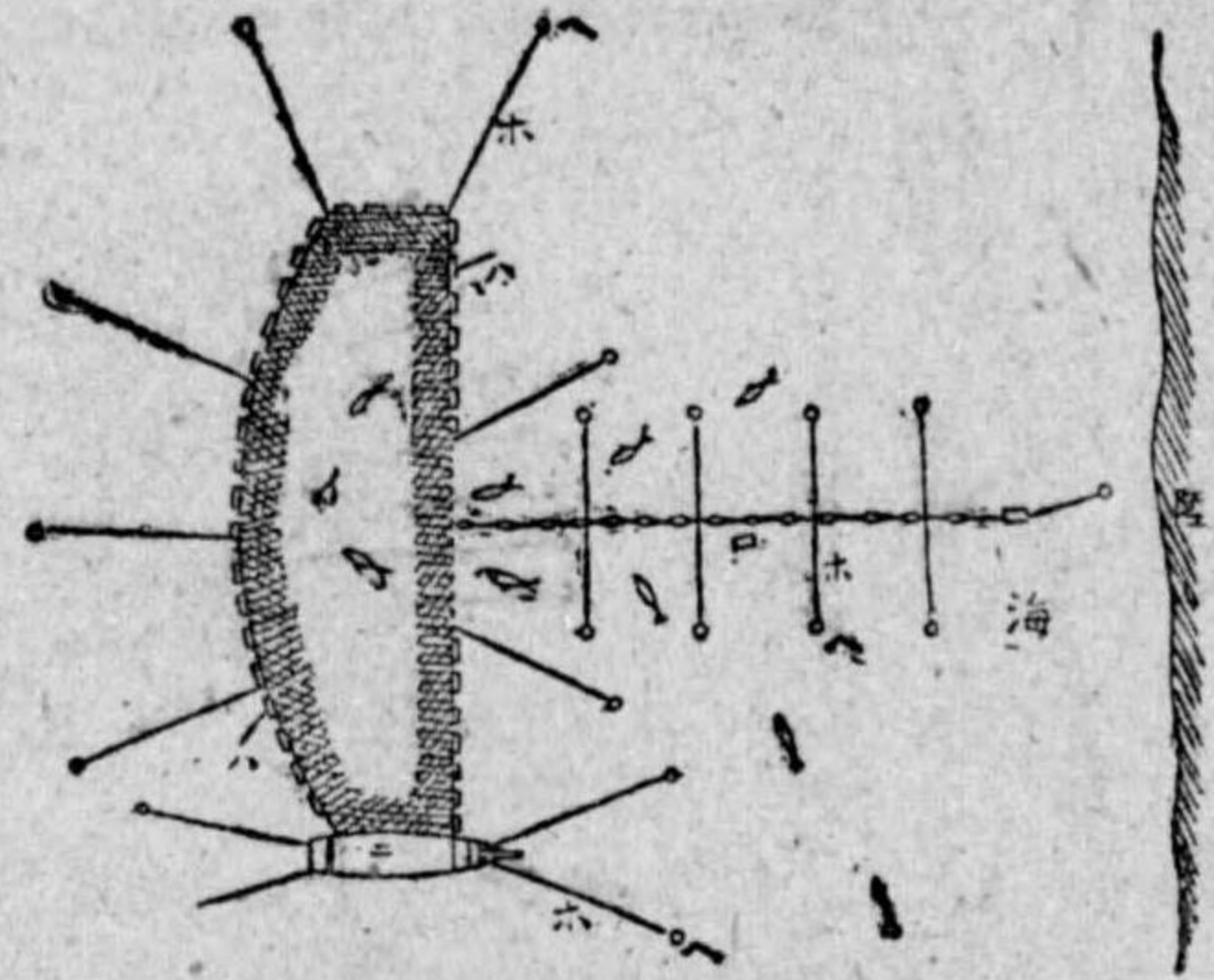


第七十三圖(4) 行成網敷設圖
イ 身網 ロ 垣網 ハ 碇船 ニ 碇網 ホ 碇

が故に相當に游泳早き入網を確知し難き魚群に對しても、漁獲稍々確實なり。唯前者に比ぶれば繰網幾分複雑なるを免れず。之等の兩型は共に垣網及び囊の外形(水面に於ける)は、數多の浮子と碇とを以て希望の形狀に緊張固定され、入網せる目的物を漁獲するには、大謀型に於ては囊口に沈下せる網地の扉をなすものを引き揚げ囊口を閉ち、楕圓形囊網部の一方の端(此の端を締め出しと云ふ)より數隻の漁船を以て網を繰り揚げ繰越し行きて、



第七十三圖(2) 大謀網敷設位置附近の海深例
(神奈川県小八幡漁場)



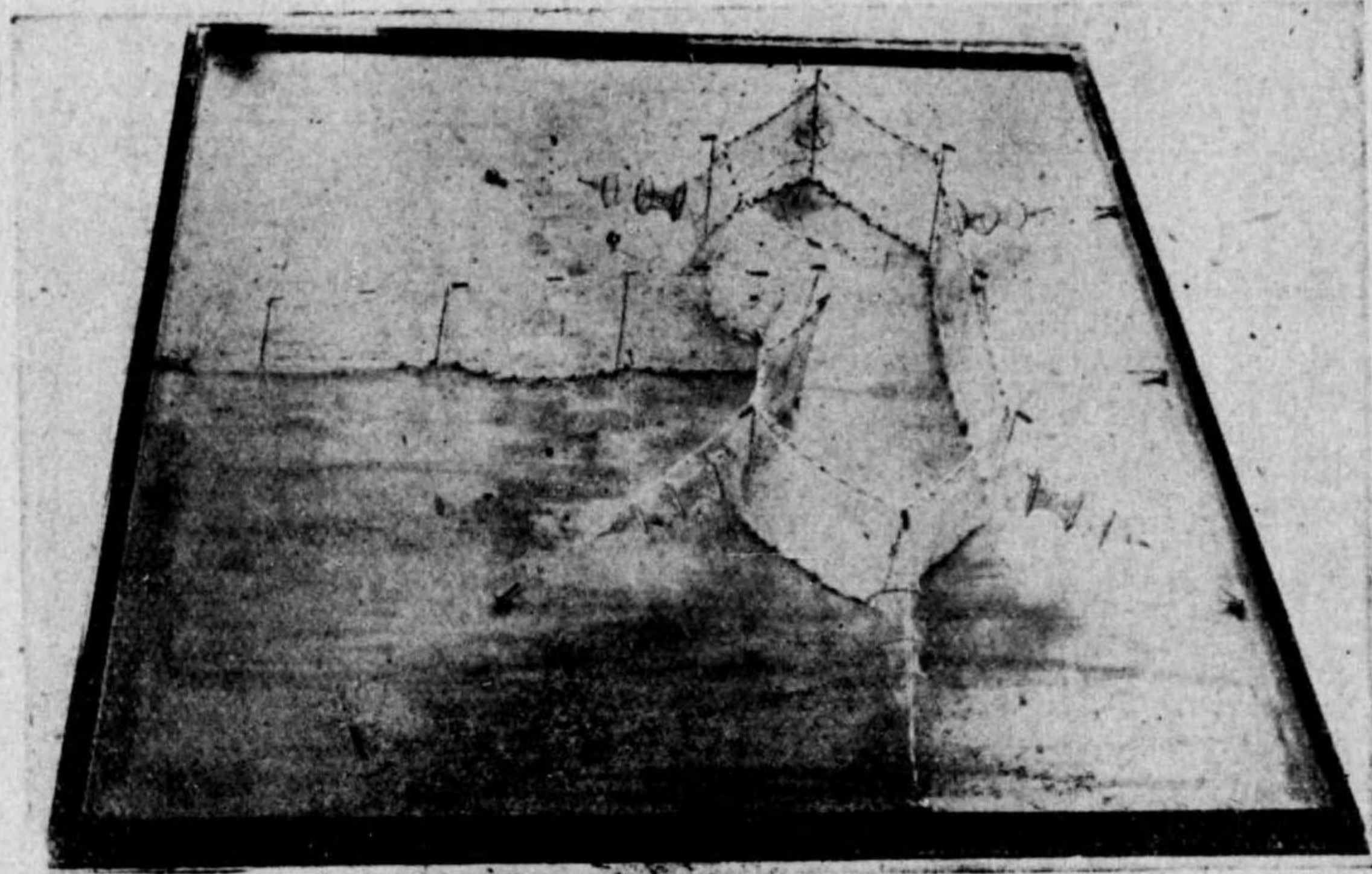
第七十三圖(5) 角網敷設状況

イ 身網 ロ 垣網 ハ 浮子
ニ 枠船 ホ 碇網 ヘ 碇

延長も一五〇〇米以上に及び、敷設位置も水深七〇米以上の附近に迄及ぶものがあり、建網類中のみならず、漁具としても最も大規模のものとなさるゝものがあるのである。

二、落網類

此類は大體臺網類に類似せるも、其構造は少しく複雑にして、囊網部の開口部には乗上りと稱せらるゝほど漏斗形をなす部分有し、網具への陥入口は囊網部に近づくに従ひ次第に浅くし、漏斗形の奥口部を最も浅く造り、囊網部は廣く深く造らるゝを特徴とす。即ち此乗上りを附するは、囊網部に陥入せる魚類は、容易に逆行逃避し得ざらしめたるものである。更に乗上り前面を、入り易く逆逸し難き形の圍網部となせるもの、或は乗上りを二段以上に設備せるものもある。落網類は斯の如く入網せる目的物の逃避を困難ならしむるため、之を臺網類に比すれば其構造・形状共に遙かに複雑となるを免れず。且つ逃避を困難ならしむることは、又目的物の陥入を困難ならしむるを免れず。従つて大群を陥入することは容易ならざるため、小型魚類の餘りに大群ならざるものを主要目的として使用さるゝ傾向あり。その規模も従つて大ならず。此類の網漁具は、飄網又は小臺網と稱する所多く、又落網(福井・京都)銚口網(石



第七十四圖 落網敷設圖

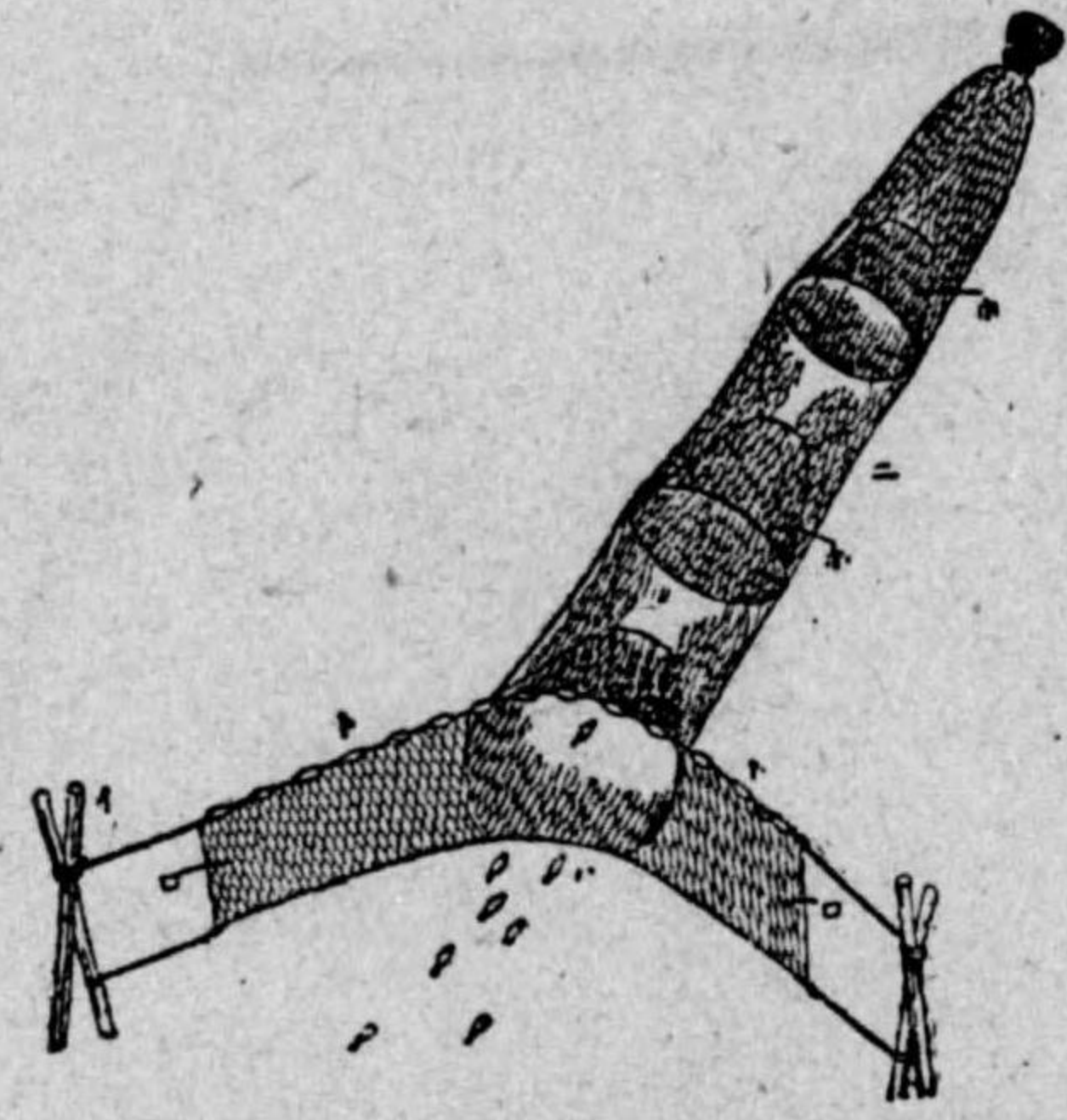
川)等は此の類に屬して居る。

三、罅網類

此の類は圍網部と垣網部とより成り、垣網部に依りて目的物を圍網部に誘導陥入せしむる趣向のものである。圍網部は之に依つて漁撈を完了せしむるものにあらずして、唯單に陥入されたる魚群が此範圍内より自由に逃避去し得ざらしめたるもので、此の部は繰揚げらるゝことなきが故に、圍繞の網地は水面より海底に到達せしめて、之に依つて障壁をなさしめ、圍繞の内部には底網を缺くものが普通である。圍網部に陥入せる目的物を完全に漁獲するためには、適當の囊網を圍網の中途に附屬せしめ、目的物を圍網部より更に此の中に陥入せしめて、此の囊網のみを繰揚げてなすか、或は圍網部に刺網類を入れて之に刺さしめ、或は纏絡せしめて完全に漁獲する等の方法を用ひられて居

る。此の類に属するものは柵網・柵建網・壺網等と稱せらるゝ地方多く、又角建網(愛知)・沖建網(福岡)・萬歳網(大分)・三味線網(山口)等は此の類に属して居る。

四、出網類

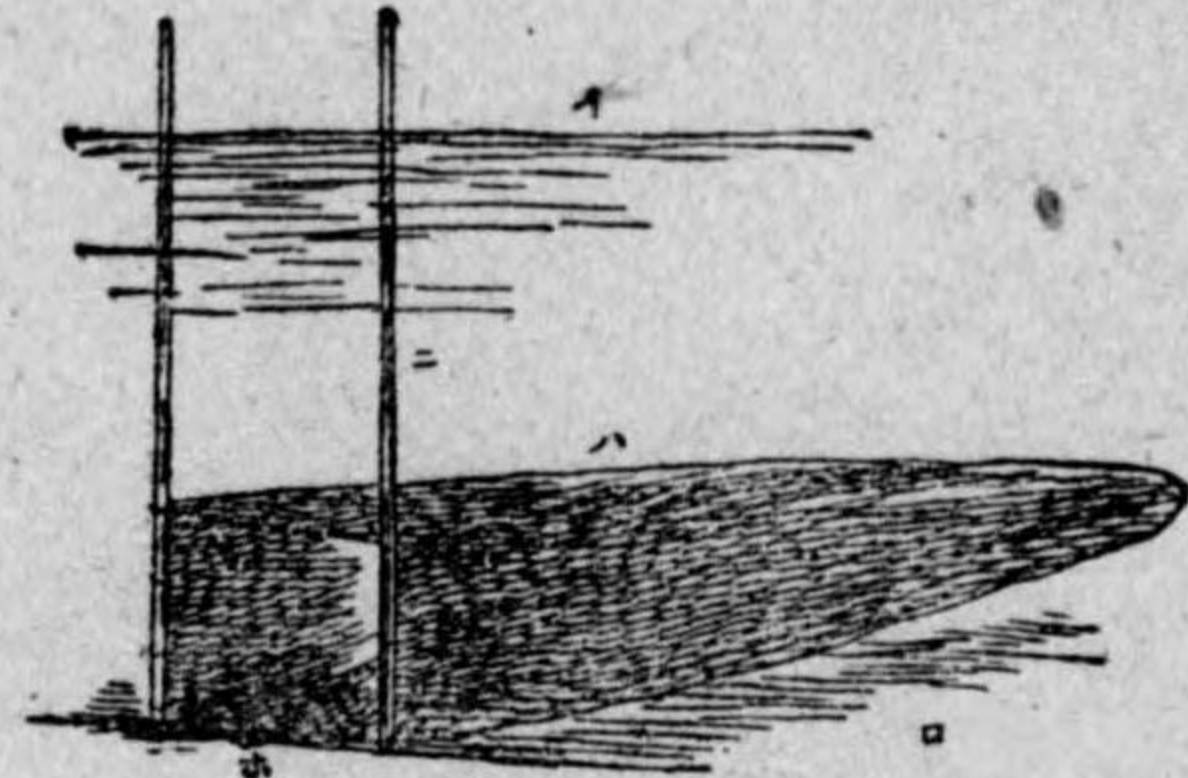


第七十五圖 長袋網敷設状況

イ 支柱 ロ 壺網 ハ 壺口 ニ 壺網
ホ 返し網 ヘ 壺尻 ト 浮子

此の類は带状を成せる垣網部のみを以てなるもので、浮子沈子を備ふるを普通とし、碇又は木竹の支柱を以て定位置に敷設し、主として目的物の通路を遮断するのみのために用ひられ、之のみを以てしては漁撈を完了し得ざる場合多く、他の何等かの方法を併用して之を完了するものである。干潮時には干出する浅岸に於て、満潮時魚群の進入し來り干潮と共に沖合に散出する要衝の地點を撰びて敷設し、満潮直後の落潮前期に於て網を開張通路遮断を完行し、干出の後に此の網漁具のために、遂に沖合へ逃逸し得ざりし魚類を採捕する趣向のものは、建干網と稱し此の類に属するのである。

五、張網類



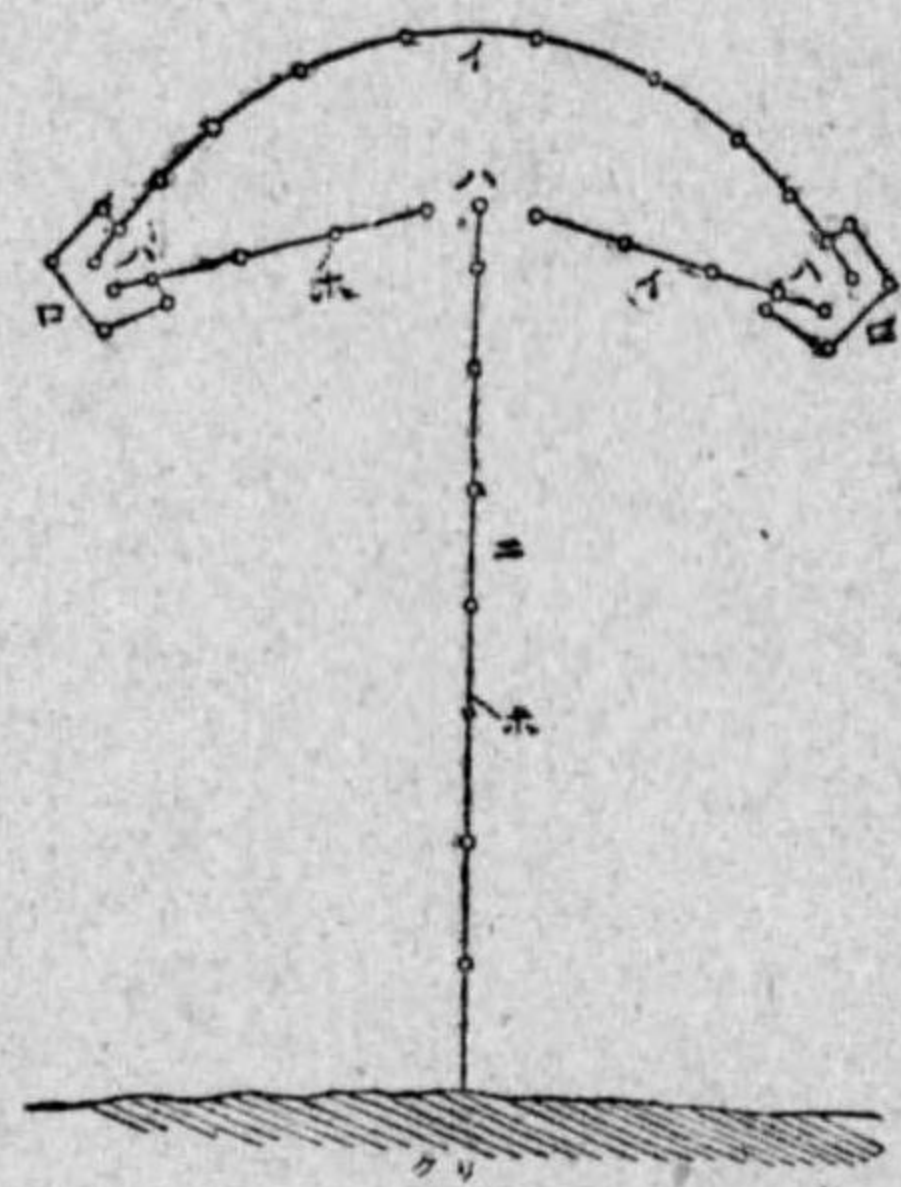
第七十六圖 桧木網敷設状況

イ 水面 ロ 水底 ハ 壺網
ニ 支柱 ホ 壺口

此の類は規模の最も小なる建網類にして壺網部及び翼網の二部で成るものと、壺網のみを以てなるものがあるが、何れも碇又は木竹の支柱を以て、魚類の通過する要衝の地點を選んで敷設して、之に陥入せしめて漁獲する趣向のものである。建網類中に於て最も小規模のものであつて、往々敷設の位置を變更して殆ど運用漁具の如くに使用されるものもあるが、多くは最良の位置を選び、敷設することが第一必須条件なるがため、自然其位置は一定し來るものである。鮫鱒網(熊本)・バツシヤ網(長崎)・瓢網(秋田)・桧木網(瀬戸内海)・越中網(島根)・股引網(岩手)・長袋網(茨城)・胴網(石川)・伏網(石川)・底建網(青森)等は此の類に属するものである。

六、網罟類

此類は垣網部と圍網部の二部よりなり、柵網類に酷似するものであるが、たゞ全部木竹の支柱を以て必要の形に敷設するもので、且つ圍網部は入るに比較的容易なるも出するに容易ならざる形状を取らしめ、且つ之に迷入する二段三段或は猶ほ以上の段階を用ひ迷入せる魚類は圍網内を游泳する内に、次第に奥部の狭き圍網中に誘かれ遂に抄網等を用ひて容易に漁獲し得せしめて居るものである。網罟(各地湖水)・水晶形器械網(宮城)・張切網



第七十七圖 網敷設状況
 魚入口、支柱、網口、網

設するに至るべく、又水深深き場合に於ては抄網等を用ひることは必ずや不便を來たし柵網類の如き囊網を利用さるゝに至るべきを以て、實は同一分類に屬せしむるを可とすべきか。

(秋田)等を此の類に屬するものとする。此の類は從來かく一類として分類せられ居るも、其の魚類陥入漁撈の様式に於ては柵網類と殆ど區別し難く、規模稍々小にして支柱を以て定置さるゝ點最後に漁撈を完了するために、囊網、又は刺網類等を使用されず抄網を多く用ひらるる點等に僅かに相異點を認むるも、之等は敷設場所淺きがために現在支柱にて足るも之を稍々深き水域に敷設するに至れば必ずや碇を以て固定敷

以上は建網類中大體著明なる區分に依つて、分類せるものであるが、實際に於ては彼是其構造の利點を混合して、其目的物の習性敷設位置の状況、並に企業規模に應じて最も都合よき構造及び様式に造らるゝものも多く、例へば臺網類の網口に落網類の要領を加味せるもの、或は柵網類の如き圍網部を採用し之に落網類の如き囊網部を附したるもの等、種々のものを生じて居るのである。之等は何れの點が重要に用ひられあるやにより、其の屬する類を決定すべきものなるべきも、實際に於ては何れの點を重要なりと決すべきや、甚だ困難にして、従つて其屬する部類を定め難き場合少くないのである。

元來建網類は以上記述せる如く、網漁具を一定の位置に相當長期間固定して、敷設するものであるがために、

其敷設・管理・繰網に容易なる地區、即ち内水・内灣・或は極めて海岸に近き附近等比較的出漁容易なる淺水地、域に於てのみ使用され居り、陸岸を遠く離れて之を敷設經營することは甚だ困難である。又陸岸近くに於ては、魚群の游泳移動の方向は陸岸に障りされるため、陸岸に平行なる方向に定まる傾向を生じ、従つて凡そ其方向を豫定し得るため、此の點より又陸岸を遠く離れて敷設することは不得策である。

建網類は一般に魚群の來游陥入するを待つものであるが故に、其敷設位置は魚群來游の要衝たることを必須の要件とする。即ち此の位置の良否は其の漁獲成績上に死命を制する第一條件である。此の定位置を占據して漁業を遂行して成績を擧ぐるがためには其位置に關して他人を排斥する獨占權を必要とするが故に、我が國に於ては是を免許を以て確立して居る。従つて良好なる位置に於ては其漁業權は非常に價値を生じ、之に關聯して種々の紛争を惹起することも稀ではない。又他の條件に就いて見れば甚だ適良の位置をなすが敷設位置の底質砂泥にあらず、多く岩礁をなすが如き場合は其岩礁の高低甚だしければ止むを得ずとするも、餘りに高低甚だしからず又範圍も廣大ならざる場合には、別に適當の網地の四圍に充分の沈石を附し、廣く開張したるまゝ沈下せしめて、岩礁全部を被覆せしめて、敷設網が岩礁に纏絡するが如き障りを除き敷設し得る場所とするなど、其位置の價値に依つては相當程度の人工を加へることもある。

建網類中に於て、規模も大にして漁業上重要と認めらるゝものは、臺網類・落網類及び柵網類であつて、殊に鱒又は鮭を主要目的とする臺網類・鮭鱒を主要目的物とする落網類を最も重要なものとなすことが出来る。鮭鱒は遼河性を有するが故に、河川又は河口附近に敷設することを必然とするが、鱒鮭の如き大型の魚類は近岸の海

深相當に深きところに於ては、極めて陸岸に近く回游するが故に、之に好適する漁場即ち敷設位置は多く陸岸迄相當の水深ある地區を可とし、鰯を主要目的とするものに就いて現在知られ居る成績良好の地區を見るに富山灣・若狭灣・相模灣・駿河灣・土佐灣・或は三重縣南西岸等皆陸岸の近く迄相當の水深を有する地區であり、猶ほ之等の灣形中に於ても、好漁場の位置は多くは灣形の奥部に於て中央より西部地區に存在する所に共通點を見出し得。即ち相模灣に就いて見るに、成績良好の漁場は其の中央平塚・大磯附近より、西部網代伊東附近迄に點在してある。駿河灣に於ては同じく蒲原附近より西部三保・焼津附近迄に在る。三重縣南岸は著しき灣形とは云ひ難きも、志摩半島より紀伊大島に至る間は大体に於て稍々一つの灣形をなし、好漁場は其中央部より西部に亘つて居る。土佐灣に於ても同様の傾向を示して居り、紀伊より四國東部室戸岬に至る不完全なる大灣形の中に於ても、豊後水道南口より宮崎縣に至る不完全なる大灣形内に於ても、更に日本海方面に就いて云へば、富山灣に於ても、若狭灣に於ても、何れも皆其灣形の中央部より西部に好漁場を見る。更に之等各地の各建網の敷設方向を見れば、太平洋岸に於ては陸岸に立ちて望めば、皆左方に開口して居る。日本海側に於ては、同じく右方に開口して居る。何れも偏東方向より來游するものを漁獲する施設となせるを知る。之に依つて、大体に於て鰯群は偏東沖合より大形灣内に進入し來り、陸岸に接すれば一度偏西沖合に轉向し、更に或る程度の沖合に出すれば、再び向岸性を示しかく繰り返しつゝ、遂には偏西沖合に去るものと推定することを得る。之等の各地に於て稍々時期を異にして、鰯を主要目的とする建網類の状況は鰯の場合と全く反對の現象を示し、囊の開口も亦逆方向に開くを常として居るが故に、鰯の來游状況は鰯に比してほど相反するものと見るを得べきか。

鰯を主要目的とする建網類の敷設位置の地勢に就いて見るに、敷設位置の網前は自然の一小灣形をなして居るか、陸岸には凹凸なしとしても海底には網の前面に相當深き溝谷が沖合より進入して來て居ることは良好漁場の持つ通性である。此の點を鰯が比較的海底近くを來游する性質を有する點に照應して考ふる時は、鰯群が多くは此の海底の溝形にほぼ従つて進入し來たり、陸岸の淺所に達して太平洋側に於ては左に、日本海側に於ては右に轉向するものであると、推定してよい。垣網部は陸岸に近き所に發して、沖に向つて此の魚道を遮斷して敷設せられ、其先端に囊網部又は圍網部が敷設されるのであるが、此垣網部の魚道遮斷の角度、即ち敷設方向が漁獲成績に影響するところは頗る重大である。即ち敷設位置の附近に於ては魚群の游泳方向はほぼ此の附近の等深線に平行すると見得べきが故に、之に直角の方向に垣網部を敷設すれば最も短かき垣網を以て、最も廣く魚道を遮斷し得る筈であるが、垣網の如き障礙に直角的に衝突する魚群はこゝに移動速力を失ひ、混亂に陥り爾後一定方向を取り難き傾向がある。魚群を囊網部に誘導する點に於て、缺陷を示し易きこととなる。若し又垣網の方向を魚道の方向と一致して、約等深線と平行となすならば自然魚群は垣網に平行して移動し、其方向へ誘導する點に於ては最も良好なるべきも、魚道を遮斷することゝはならず。従つて魚道の或る中間の間に游泳し來るものを多數集めつゝ誘導して囊網に陥れると云ふ點に於ては全く効果をなさぬ筈である。従つてこの中間を取つて、等深線と大體四〇―五〇度附近の角度を以て敷設するを最も可とすべきである。しかし魚群は元來沖合より進入し來たるものであるがためか、一般に障礙に面したる場合多くは沖の方向へ轉向する傾向を有するが故に、一方に開口するものゝ垣網部は魚群の來游方向に對して多少の灣形をなさしめて居る。要するに垣網部の設置形状は其地勢

に應じ目的物の來游狀況に鑑み、充分慎重に考究して決定することを要するものである。更に囊網部或は圍網部の形狀及びその垣網部に對する方向等は目的物が陥入し易く且つ逃出し難きことを考慮して定むる外に、又其地に於て其の時期に最も普通なる潮流の方向に對して、最も抵抗少なく網地が潮流のために吹き歪められて形狀を甚だしく變化せしめざる様に敷設することを必要とする。垣網部は魚群の通過を遮斷する目的のものであるが故に、其網絲の材料は蘆繩等水中に於て鮮明なる色澤の材料を用ふるを可とする。太さも亦そのために相當粗大なる方を却つて有効とし、直徑七―八耗以上のものを使用するゝことも稀でなく、鮮明なる色澤の相當太き網絲を用ふれば網目は非常に廣大で實際には自由に目的物が通過し得るものを用ひてもよく實効を擧げ得て、網目一―二米のものを用ひらるゝことは普通である。圍網部は此の中に陥入すれば、魚群も游泳範圍を甚だ狭小に制限せらるゝため、自然度々圍網に衝突するため遂には網地に狂れて恐怖せず、網目を通過脱出するに至るべきが故に、網目は相當に狭小なものとする必要を生ずる。特に囊網部は一方より繰り揚げて目的物を漁獲する場所なるが故に、一層其必要を生ずるが、魚群に比して網の包む範圍が廣い間は此の必要は軽減される理由があるから、囊網部に於て始め頃繰り揚げらるゝ附近は相當廣大なる網目を使用されるが、次第に繰揚げが進行して魚群を收容する範圍が縮小するに従つて、其部分は次第に網目の狭小なるものが用ひられ、最後に魚群を寄せ集める所謂魚捕ウツドの部分は最も狭小なる網目を使用するゝを一般とする。取付くべき浮子の浮力は其部分の網地網類を充分に支へ、浮子を水面に保つに充分なることは、勿論其れ以上に多少過剰の浮力を有せしむることを必要とする。此の豫備浮力の量は其漁場に於て屢々見らるゝ多少の潮流に對しても、充分浮子が水面より沈下せざる程度ならしむる

ことが必要であるが、然し又餘りに過大なる豫備浮力を有せしむることは、偶々起れる強き潮流の力に對抗して浮子を水面に強力に浮かせ置くことゝなり、従つて諸網類・網地等に損傷を生ぜしめ、或は固定せる錨を移動せしむる等の故障を起す原因となるが故に、かゝる場合に於ては適當に浮子を沈下せしめ網地擴張の高さを低め、甚だしき時は之を海底に沈着せしめて潮流の強き抵抗を緩和せしめて、損傷を防ぐが如き適當の程度に豫備浮力を制限すべきである。

建網類は永く水中に敷設せらるゝを特徴とするが故に、之に使用するゝ諸材料は又水中に於ける腐敗に堪へ得るものを選び、又は防腐の手段を講ぜねばならぬ。特に臺網類の如き大規模のものに於ては諸材料は莫大に及び之に要する經費が漁獲高に對して相當重大なる負擔となるべきものであるから、其撰擇上には細心の注意を以て諸材料の性能を鮮明にし、適所に適材を用ふることを必要とする。水中に永く沈没さるゝために、諸用材が腐敗さるゝことに就いては充分の注意を要する事は勿論であるが、たとへ腐敗には相當に堪へ得るとしても、永き沈設の内には水中の塵埃が附着して遂に動植物の着生せるものあるために、網目を閉塞し或は著しく重量を増し繰作を困難ならしめるに至るから、多くは數十日毎に必要な部を取り揚げ代へ網と稱する同一構造のものを別に備へ置き之を入れ代へ取揚げたる部分は之を陸上に於て日乾して附着物を除去し、或は防腐法を施して數十日後の次回に又入れ代へを行ふ如き手段を用ひて居る。此の入れ代へは以上の如き理由に依り止むを得ずして行なふものであるが、作業上漁獲能率上より云へば甚だ好ましからざることであつて、規模の大なるものに就いては、中々容易なる作業にはあらず相當の勞力と時間を要するは勿論、作業完了迄は一時漁獲不可能なるが故に、魚群の來

游の間断なき盛漁期に於ては容易に決行し難い。然らばとて入れ代へ時期となり居るものを適當の機を見て決行せざれば、大群が陥入したる場合網自体が既に相當増重し居れるため之に加はる魚群重量のため網の引き揚げ容易でなく、取り揚げ中に天候海況の悪變に逢遭し、或は網具に損傷を生じ遂に長蛇を逸する結果を來たし、或は急潮の突發のために網を切損流失する等種々の故障を生ずるに至るのである。之等の故障は常時に於ても相當漁獲成績に影響するものであるが、殊に盛漁期に於ては一層痛烈なる影響を與ふるものである。

網形は一度陥入せる魚群は、容易に逃脱し得ざる如く充分考慮して造られ居るものではあるが、實際に於ては完全に逃脱を防止し得るや否や、甚だ疑はしきもので殊に臺網類の如く入り易きことを多く考慮するものは、從つて逃脱の恐れを増すものであるが故に、魚群の陥入せることを知り得たらば、直ちに揚網して漁獲すべきである。水面に跳躍しつゝ來游する魚群、或は水面に近く上層を來游する魚群は其跳躍に依り、或は魚群の游泳が水面に及ぼす波紋に依り、或は魚の體色が及ぼす水色の變化に依り、或は魚體が閃かす銀光に依り、其の所在を認め得るが、之は一般に眼高、高き所に於てよりよく觀察し得られるため、斯の如き魚群を目的とし、又は斯の如き魚群の多き時期に於ては網具敷設の適當の位置に監視船を繫泊せしめ、此船上に魚見臺を高く築造して此の臺上より絶えず監視し、或は船舷より水中覗き眼鏡を用ひて水中を監視せしめて居る。地形有利なる場合に於ては、陸岸の高き岬角の頂上或は樹木上等監視に都合よき場所に特に監視所を設けて、こゝに於て絶えず監視せしめて居る。又稀に陸岸に監視専用の高き櫓を築造して、其頂上より監視するものもある。之等の監視者は魚群の陥入を推知すれば、直ちに適宜の信號を以て之を各就業船に知らしめ、各就業船は此の信號に依つて機を失せず、直

ちに各配置に就き、囊網の開口を塞ぎ揚網して漁獲を完了するのである。斯の如く上層の魚群の魚獲に就いては機宜に適したる操作をなすことが相當容易なる所もあるも、少しく深層を回游し來る魚群の漁獲に就いては、其來否を推知する事甚だ困難なるがために、全く機を見て操作することを得ず。通常は朝・晝・夕等時刻を定め、一日中數回盲目的に揚網して漁獲の有無を知るのみである。勿論此の場合に於ても、其定刻は自己の從來の漁獲傾向隣接せる他漁場の成績天候海況等に依りては多少伸縮してなるべく其時の機宜に適應せしむる様に力められるが、實際は魚群陥入の時期に過早に揚網して徒勞に終ることもあり、又魚群陥入の好期を逸して逃脱後に揚網するが如きこともあるべきに依り、若し深層を回游する魚群の來否動靜を推知し得る適當の方法が発見されるれば、誠に好都合にして繰網を理想的になし得るのみならず、場合に依りては網形を變更して最も陥入し易く操作に便利なる形状、大きさに定め得て、特に鱒の如き主として深層を回游し來たるものを目的とする臺網類の漁獲能率を大いに向上せしめ得べきであるが故に、從來之等の深層魚群の在否を感知せんとする種々の方法、例へば水中に或る音波の如きものを放ち之が魚體に依つて反射されて來るものを探知して、之に依つて魚群の所在及び其動靜を推知せんとするが如き方法が考案研究されつゝあるも、現在に於ては未だ實用に適するものはないのである。

更に建網類の多くは魚群を陥入せしめるに就いては、單に垣網部を以て魚群の游泳方向を圍網部、又は囊網部に消極的に誘導するのみで、何等積極的に魚群を誘致陥入せしむる方法を講ぜられざるが、之と類似の要領を以てする敷網類に於ては、餌料を用ひ或は集魚燈を以て魚群を積極的に網中に誘致する方法が講ぜられ居る點より見ても、將來に於ては同様なる何等かの方法を用ひて更に積極的に誘導陥入せしむることを考案すべきである。

名	稱符號	材	料	太 径	長	さ	數	備 考
錨網(南の臺)	a	ル	マニラロープ	二・四二	六二二	三	一	此網に側竹を附し錨を投じて固定し網は此れに結着され型を保つ
錨網(北の臺)	b	ヲ	マニラロープ	二・四二	六二二	三	一	此網に側竹を附し錨を投じて固定し網は此れに結着され型を保つ
浮子網(囊網)	イ	ヲ	マニラロープ	一・〇〇	八三三	一	一	此網に側竹を附し錨を投じて固定し網は此れに結着され型を保つ
錨網(囊網沖側)	ロ	ヲ	マニラロープ	三・九四	一八二	二	二	此網に側竹を附し錨を投じて固定し網は此れに結着され型を保つ
同上 又木網	ハ	ヲ	マニラロープ	三・〇三	七五・七	二	四	此網に側竹を附し錨を投じて固定し網は此れに結着され型を保つ
錨網(囊網地側)	ホ	ヲ	マニラロープ	三・九四	九一・〇	一	一	此網に側竹を附し錨を投じて固定し網は此れに結着され型を保つ
同上 又木網	ヘ	ヲ	マニラロープ	三・〇三	七五・七	一	一	此網に側竹を附し錨を投じて固定し網は此れに結着され型を保つ
錨網(垣網)a	ト	ヲ	マニラロープ	三・九四	九一・〇	五	五	aは垣網の端口側に投下される錨網
錨網(垣網)b	チ	ヲ	マニラロープ	三・〇三	九一・〇	五	五	bは垣網の端口と反対側に投下される錨網
石まわし	カ	藁	網	七・五七	一〇五・〇	一	一	沖測浮子網と地側浮子網を結ぶ網
かつらご	キ	藁	網	七・五七	一〇五・〇	一	一	沖測浮子網と地側浮子網を結ぶ網
ぼたん(囊網部)	ク	藁	網	三・六四	六・一八九二〇	一	一	數多の土俵を一本の錨網に連結せしむる網
浮子方縁網(囊網部)	コ	藁	網	七・五七	一〇五・〇	一	一	數多の土俵を一本の錨網に連結せしむる網
浮子方縁網(囊網部)	カ	藁	網	三・六四	六・一八九二〇	一	一	數多の土俵を一本の錨網に連結せしむる網
幕網(浮子方を除く全部)	ケ	藁	網	七・五七	一〇五・〇	一	一	數多の土俵を一本の錨網に連結せしむる網
幕網(浮子方を除く全部)	キ	藁	網	三・六四	六・一八九二〇	一	一	數多の土俵を一本の錨網に連結せしむる網
浮子括網	ク	針	マニラロープ	〇・七六	一五九	二	二	幕網の縁網
引手網	コ	針	マニラロープ	〇・九一	總長五七七〇	四	四	竹を數本又は數十本結付する網
環網	カ	棕	マニラロープ	三・〇三	九一	四	四	竹を數本又は數十本結付する網
下あたり	キ	棕	マニラロープ	三・〇三	九一	四	四	竹を數本又は數十本結付する網
ふらせ	ク	棕	マニラロープ	三・〇三	九一	四	四	竹を數本又は數十本結付する網
(魚捕部)	ケ	棕	マニラロープ	三・〇三	九一	四	四	竹を數本又は数十本結付する網

網の部 (側張圖參照)

名	稱符號	材	料	太 径	長	さ	數	備 考
垣網	ハ	藁	網	一・〇五	九一・〇	三	三	三三一九三九〇〇
浮子下縁網	ホ	マニラトワイン	網	二・四八	二四・二	一	一	一九一五
魚捕前縁網	ニ	マニラトワイン	網	九・九	六・二	一	一	三五一一一三六・二
幕網	ニ	マニラトワイン	網	九・九	六・二	一	一	三〇五四・五
	ニ	マニラトワイン	網	九・九	六・二	一	一	一九六〇・〇
	ニ	マニラトワイン	網	九・九	六・二	一	一	三一〇七
	ニ	マニラトワイン	網	九・九	六・二	一	一	二五一五・九

名	魚	取	網	符	材	料	太	目	合	掛	目	長	反	數	結	又	節
"	"	"	"	四	"	"	"	"	"	"	"	八・七九	"	"	"	"	"
"	"	"	"	三	"	"	"	"	"	"	"	七・五八	"	"	"	"	"
"	"	"	"	二	マニラ	トワイ	三・二五	九・一	四五	一〇〇	二五	一・五二	"	"	"	"	"
"	"	"	"	一	"	"	"	四・五五	四	四五	二五	一・八二	"	"	"	"	"

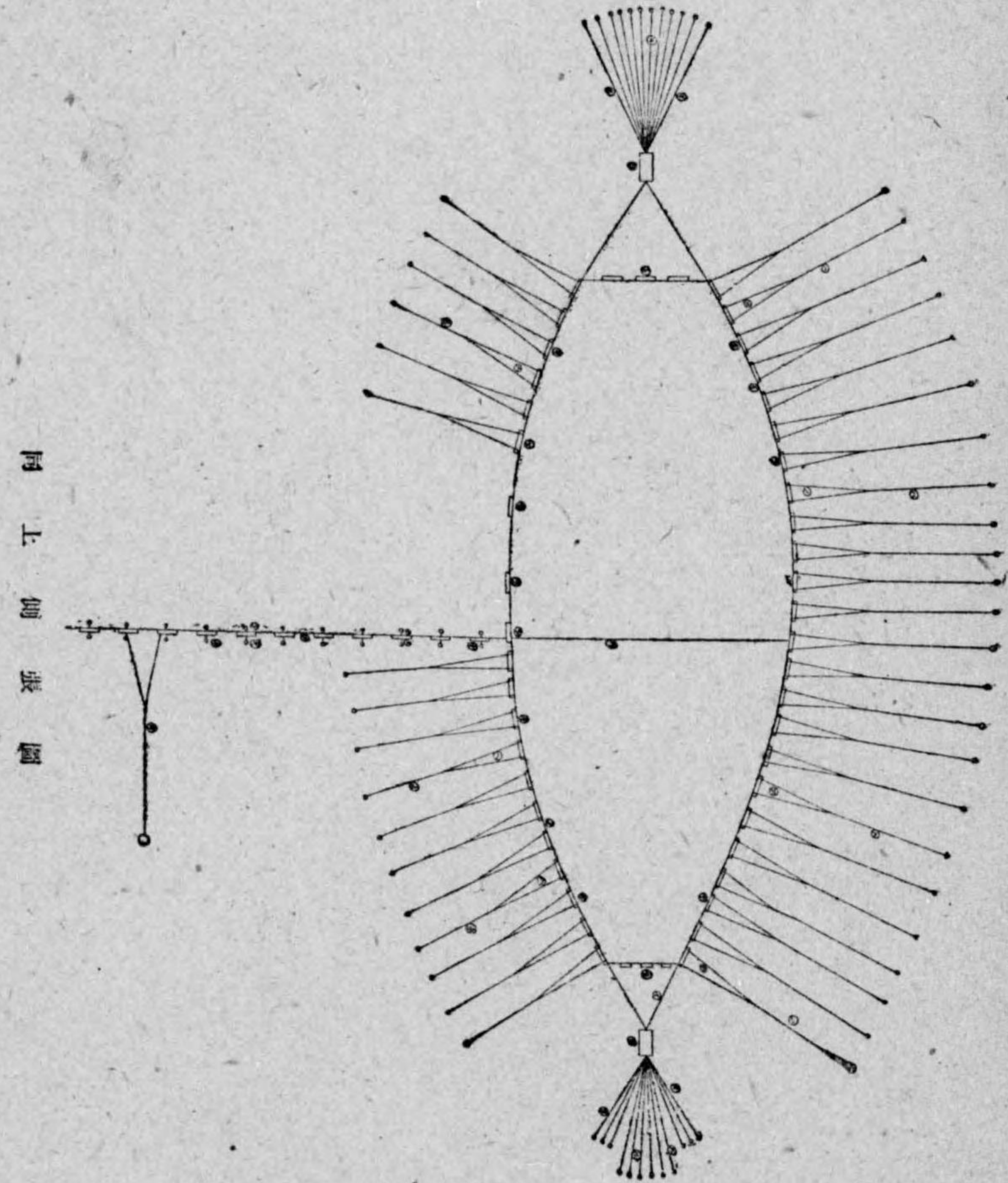
I 網の部 (網地配置圖参照)

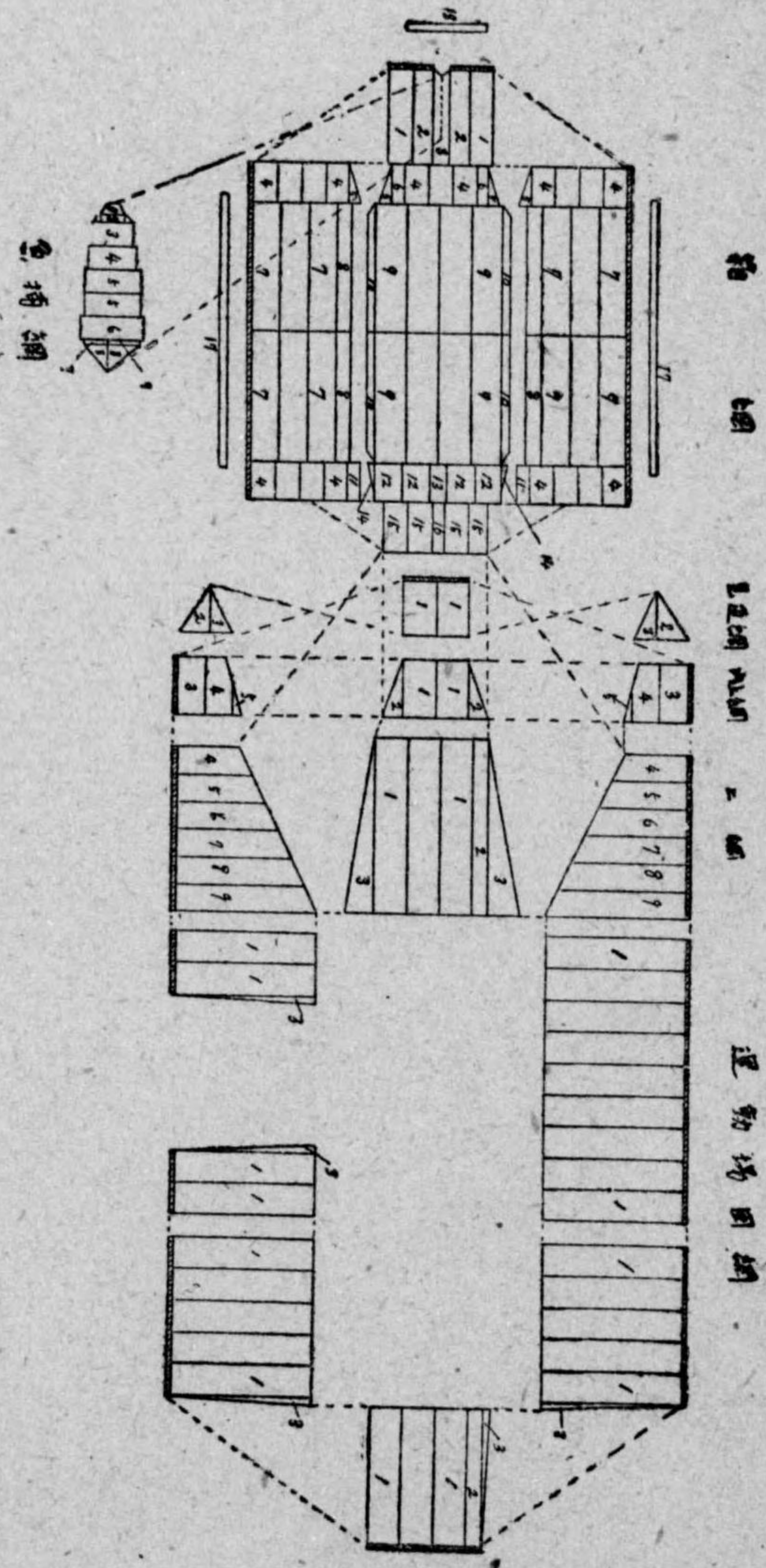
水深 箱網及び圍網附近は 33 meters にして殆んど平坦なり、垣網起點の箇所は 10 meter にして漸次沖に向ひ深度を増す

但し箇網
 沖側長さ……………八三・五 metres
 最大幅……………四八・五 "

圍網
 沖側長さ……………一四四・〇 "
 最大幅……………六五・〇 "
 垣網の長さ……………六一四・〇 "

建網構造例……………(其二)
 落網構造一例
 鱒落網材料表





運物場網

第六章 釣漁具

釣漁具と云ふのは、尖銳の金屬製の釣鉤ツリバネを主體として、之に適當の糸を附し餌を裝して用ひ、自的物を之にかからしめ、又はかけて捕獲する方式の漁具を總稱して云ふのである。釣漁具はこの釣鉤を主體とするのであるが之と糸即ち縲糸の外に、目的物に釣鉤をかけるのに有利ならしむるために適當の餌料を用ひ、之等のものを活動せしめて使用するに便ならしむるために、竿を用ひるものもあり、その上に釣鉤の附近に之を速かに沈下せしめるために錘フエリを用ひ、この錘、即ち釣鉤の沈下の深さを適當に定めるために、浮子ウツキを用ひることもある。古來この釣・縲・餌・竿・浮・錘の六種のものを、釣の六物と稱し、この六物を完備せる釣漁具を、完全形のものと云はれて居ることがあるが、實際に於ては之は釣漁具中の寧ろ特別の形と見てもよい。即ち竿釣具と稱する部類に屬するものが、之等を完備することが多いのであるが、河川湖沼、又は極めて海岸の近くで、多く浅い水層に於て使用されるに止まり、普通の人々の見聞に觸れる場合は多いが、實際に於ては漁業に多く使用されて漁獲を多く揚ぐるものは、寧ろこの完全形の内より竿を缺くものが多いのである。

釣漁具を網漁具に對比するときは、多くの特異點を見出し得る。第一に漁具の規模に於て、一般に網漁具に比

して小規模であると云ひ得る。勿論網漁具に於ても、甚だ小規模なる抄網の如きものもあるし釣漁具に於ても、^{ハエナリ}の延繩の如く一規模に於て釣鉤の數も數百本を附し、其使用時に延長する長さも二〇軒以上の長距離に及ぶものもあるのであるが、全般を見渡すときは、釣漁具は甚だ小規模で、又其構造も簡單で、従つて使用方法も割合に容易なるの便があり、又従つて其企業に於ては、小資本を以て足るの傾向を有して居る。又漁獲上に於て釣漁具にありては、目的物を常に個々に釣獲するの傾向を有して居る。勿論延繩の類は多數のものを一時に釣るの趣向を廻らして居るとは雖も、矢張りその釣鉤一本では一尾の魚を得るに過ぎない。規模が小ではあるが、目的物を得る方法は却つて巧妙に出来て居る。即ち多くは餌料を以て誘惑して之を漁獲するのであるから、漁具の使用方も簡單ではあつても、巧に使用することを必要とする。従つて網漁具に比して、酷漁に陥る弊が少いのである。しかし又それだけ受動的であつて、目的物の状態に依つて漁獲の難易を生ずる場合が多くあるの憾みがある。又之に反して、網漁具に比して自由なる點もある。それは漁場の制限の少いことである。即ち水底に岩礁等が存在して網漁具の使用には堪へない場所でも、或は水が甚だ急であるとか水深が深く數百米にも達して、網漁具の使用には甚だ不便であると云ふが如き場所に於ても、釣漁具は充分に使用し得ると云ふ様な點があるのである。猶ほ今一つの有利なる點は漁獲の模様が個々の逐次的であるため、漁獲物の損傷されることが少く、従つて常に網漁具の漁獲物に比して、漁獲物の鮮度が良好である點である。

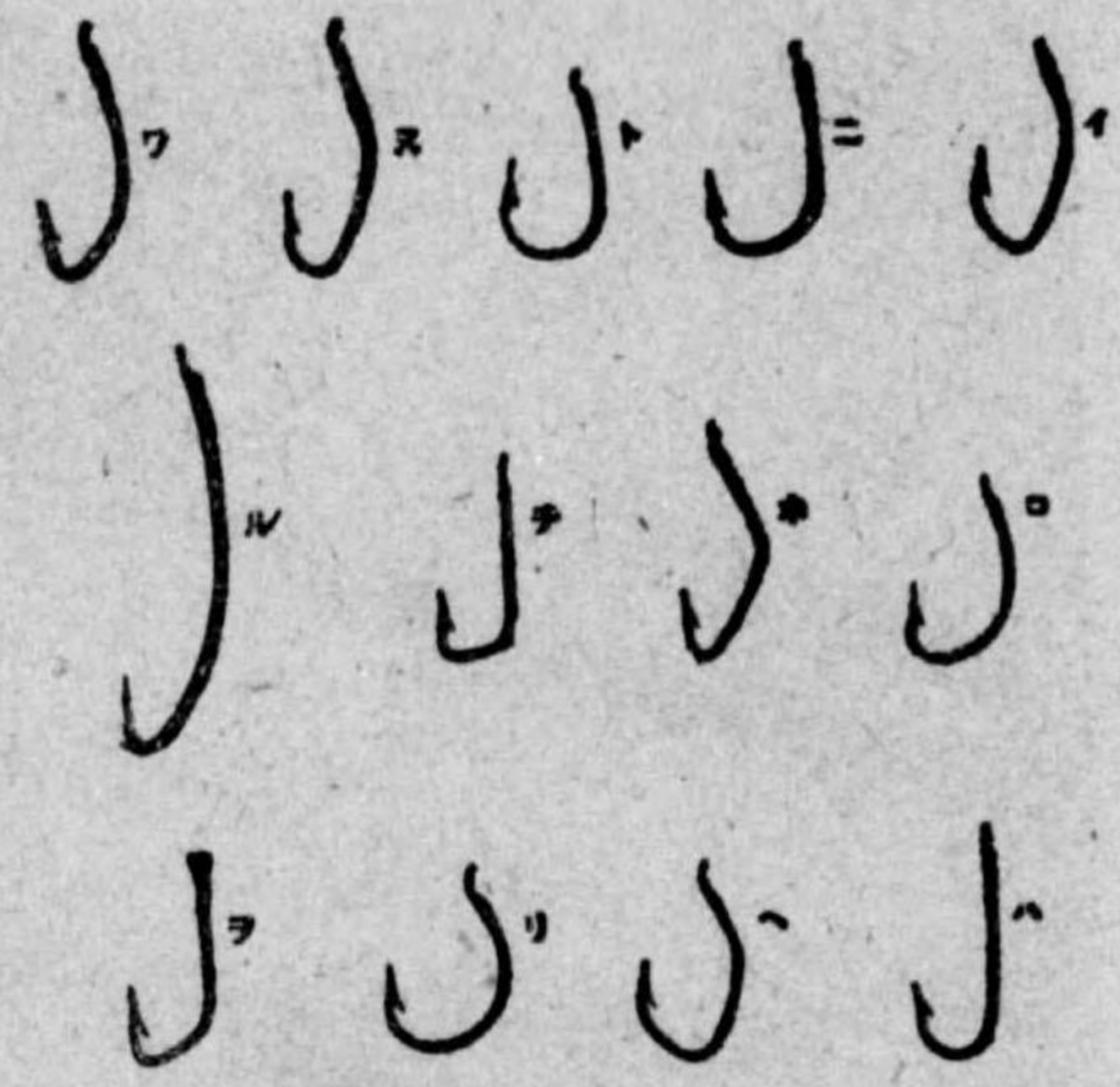
第一節 釣 鉤

釣鉤は單に「ツリ」又は「ハリ」などと云ひ、又時には更に略して「チ」とも云はれることもある。例へば釣鉤の附近の糸を「ツリ」の許と云ふ意味から「チモト」と云ひ、釣鉤の形を造る場合に、之を曲げる器具を「チマゲ」と云ふ。釣鉤は釣漁具の最も緊要なる部分であつて、普通鐵、眞鍮等の金屬線を適當の形に曲げ尖端を尖銳ならしめ、之に依つて目的物に掛けて採捕の目的を達するに使用するものである。

釣鉤に使用される材料は最も普通のもの鐵であつて、鐵の内では鋼鐵と鍛鐵とが用ひられて居るが、鋼鐵の用ひられるのは、形態の大きな強力な目的物に對する場合であつて、鍛鐵を使用するものが多い。鍛鐵は工作には容易であるが、やゝ軟弱の嫌があるから、之を硬強ならしむるに成形せる釣鉤を、木炭と硝石粉末の混和物の中に入れて赤熱して取り出し、急冷して焼を入れて作るものが多い。焼入れしたものは、強剛となり彈性にも富むが過度の場合は折損し易く適度の程度に止めることが必要である。この釣鉤の強剛の程度は、之に力を加へて形を変化せしめて見て充分變形し得て、釣鉤が殆ど直線狀に延びたる後に折損するの程度を良好とする様である。即ち充分に變形し得ざる前に折損する様なものは、焼入れ過度と見ねばならぬ。又直線狀に迄伸びた後にも猶ほ折損するが如きことのないものは、焼入れの不足せるものと認め得るのである。又折損したる後の折面を、

擴大鏡を以て觀察して、其面が暗黒色で粗荒に見ゆるものは焼入れの過度のもので、之に反して折面が光輝ある銀白色を帯びて滑澤なる面に見ゆるものは、焼の不足して居るものと認め得る。鐵製の釣鉤は錆を生じ易く、そのために尖銳の度を失ひ、或は使用上に不便を來すことが多いから、適當に防錆の方法を講ずるを可とする。防錆の方法としては、ワニス・漆等を塗布するものもあるが、最も普通のものはこれに錫鍍を施すものであつて、之を銀鉤と云つて、近時の鐵製釣鉤は多くこの銀鉤となつて居る。鐵の外に多く用ひられるものは、眞鍮であるが、之は工作が容易であり、錆を生ずることも容易でなく、又錆を生じたとしても鐵に比すれば淡く、使用上に障碍となる程度に至ることは容易でないからであるが、質は鐵に比すると遙かに軟弱であるから、一般に小形の微力な目的物に對する場合に於て使用されるのである。然しこの軟弱なる點は又場合に依つては却つて特長となるので、例へば延繩類の如き一時に多數の釣鉤を使用して、しかも目的物が多數に釣獲されるが如き場合は釣り揚げたる後の目的物よりの釣鉤離脱の手續は、漁撈作業の進行上に相當の障碍を與へるのであるが、釣鉤が軟弱なるものであれば、糸を持つて強く引くか或は強く一振動すれば釣鉤が延直して、容易に漁獲物を離脱し得るのみならずその延直したる釣鉤は直に指頭を以て、迅速容易に原形に屈曲し得るの便があるのである。この故に眞鍮製の釣鉤は食食で不活潑なものを目的とする延繩の類に多く用ひられて居る。この外に釣鉤の材料としては、角・骨・貝殻・木・竹等種々のものが用ひられることがあるが、之等は現今では多くは未開地方に於て使用されるのみで金屬の使用を充分になし得る開化の地方に於ては、殆ど凡て以上の金屬を使用して居るのである。

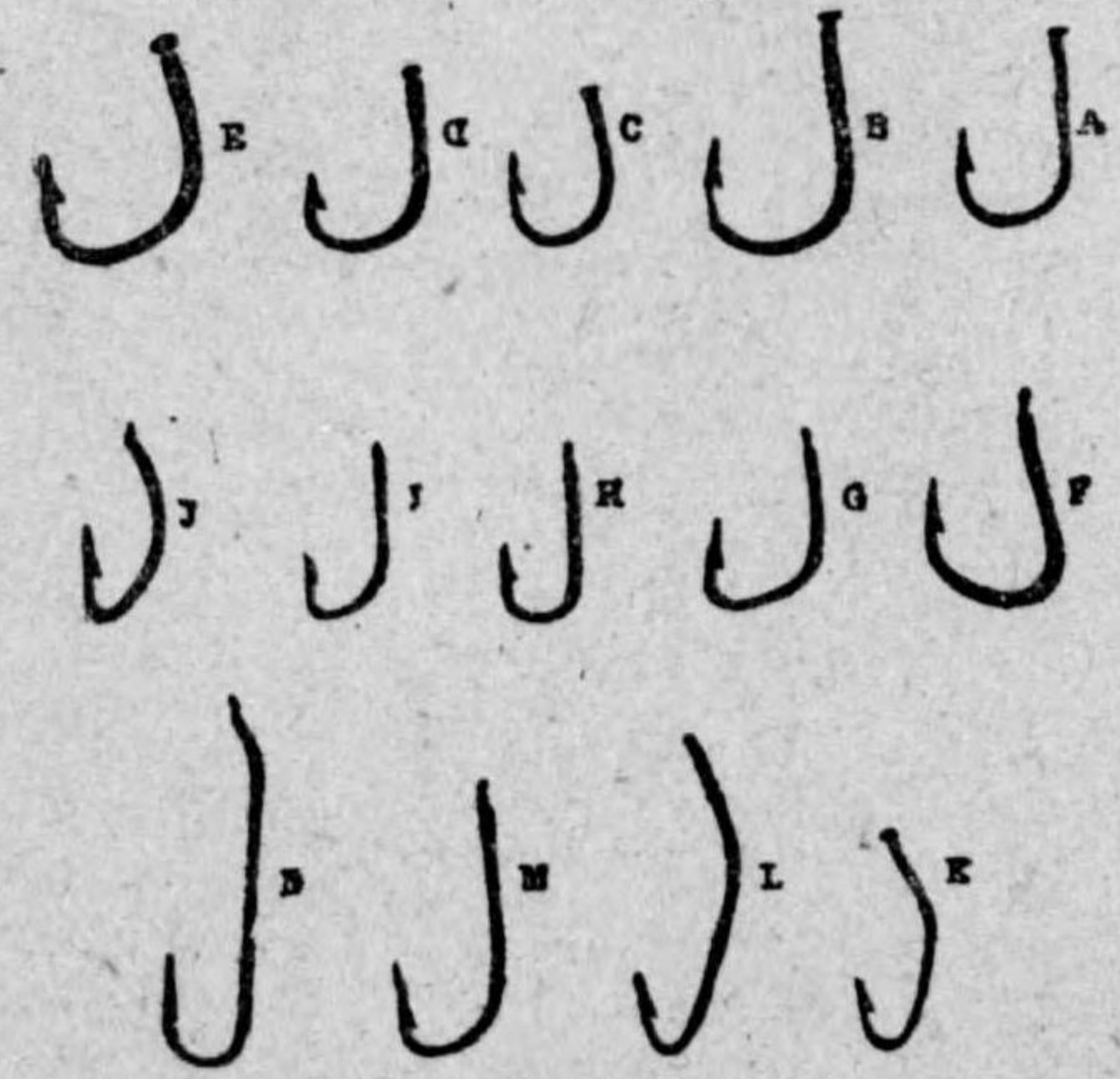
釣鉤の形は種々のものがあるが、金屬を以て製するものは殆ど全部類似して、一定の彎曲形即ち所謂釣鉤形を



第八十一圖 釣鉤の型(一)

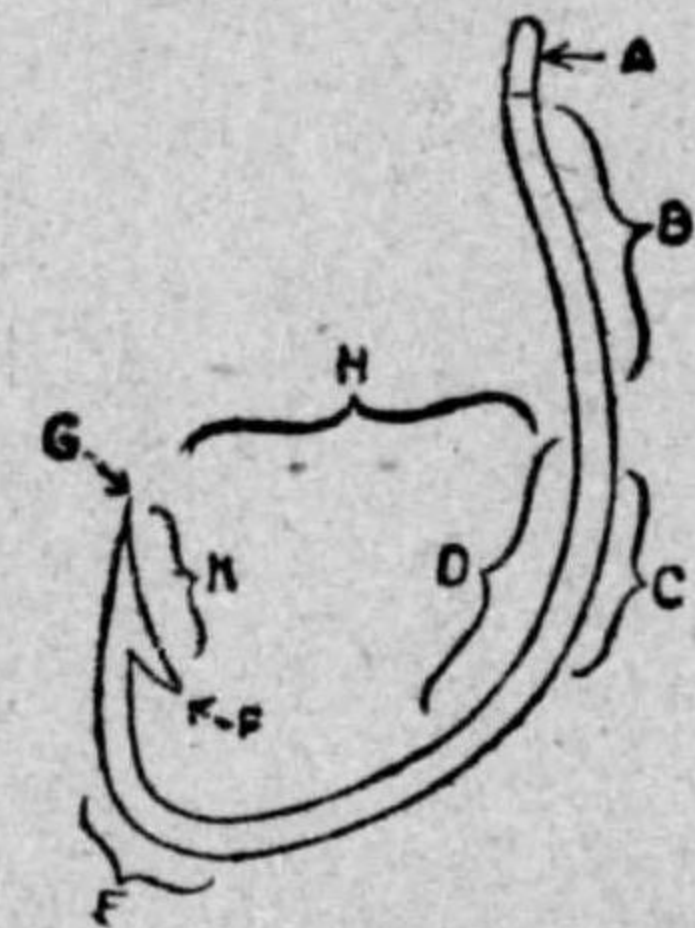
(甲) 關東風の型

- | | | | |
|-------|--------|--------|------|
| イ 角形 | ホ ミコシ形 | リ 丸カイツ | ヲ 袖形 |
| ロ 行田形 | ヘ 角カイツ | ヌ 瓢形 | |
| ハ 田邊形 | ト 錠形 | ル カキダシ | |
| ニ 丸形 | チ イナヅマ | ヲ 籠釣 | |



(乙) 關西風の型

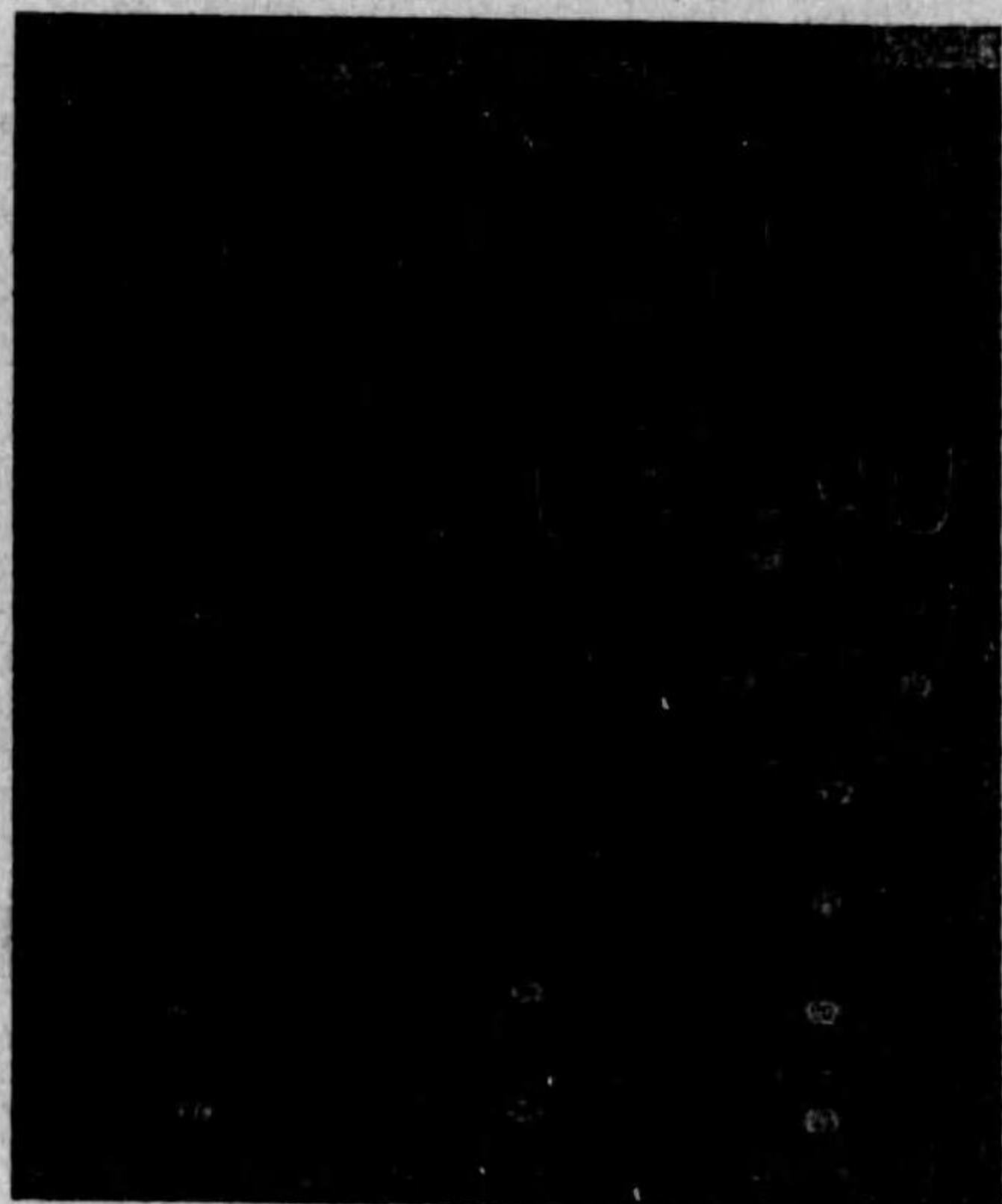
- | | | | |
|---------|---------|---------|---------|
| A アマ形 | E ワサナベ形 | I ヒキ形 | M 海鰻釣カケ |
| B イセアマ形 | F ハヘコミ形 | J 郡山形 | マ |
| C インアマ形 | G ミコシ形 | K イナヅマ形 | N 海鰻釣カケ |
| D アラビ形 | H シツリ形 | L エド形 | ヅリ |



第八十圖 釣鉤局部名稱圖

- A. ……カエシ、シリ(普通)、カイシ、ツブシ(東京)カセ(安房)シビレ(關東)シビレ、シビリ、シギリ(關西)、シユモク(土佐)、シツコ(東北)
- B. ……タキ、ドゥ
- C. ……コシ、ヲ、マガリ、ヲ、マゲ
- D. ……ワン、ド(コシの内側の彎曲程度に就いて云ふ)
- E. ……サキマゲ
- F. ……アダ(普通)、アギト(群馬)、アゲ(青森)、イケ、エゲ(高知)、イカシ(伊豆)、マ、リ(山口)、カガリ、カギ(宮崎)、カスミ(豊後)、カ、リ(長崎五島)、シタ(九州)、メカリ(肥前)モドリ(志摩)
- G. ……サキ
- H. ……フトコロ(この中の廣さを云ふ)
- K. ……アグサキ

なして居り、その各局部にはそれぞれの名稱を有して居る。しかし此彎曲形状は仔細に觀察すれば目的物の種類に依り、釣具の種類及び使用法に依



各種釣鉤型(二) (高知縣産)

- | | | |
|------------|------------|------------|
| (1) 鱈手釣用 | (8) | (16) |
| (2) 鱈延縄用 | (9) 小船釣用 | (17) 鱈釣用 |
| (3) 船手釣用 | (10) 鰯釣用 | (18) 鰯手釣用 |
| (4) 鱈延縄用 | (11) 鱈延縄用 | (19) 鱈延縄釣用 |
| (5) 鱈釣用 | (12) 鱈釣用 | (20) 伊勢尾型 |
| (6) 太刀魚手釣用 | (13) 小船手釣用 | (21) 袖型 |
| (7) 鱈延縄用 | (14) 鰯釣用 | (22) カイズ型 |
| | (15) 鱈手釣用 | (23) イーゾマ型 |

り更に又地方的にも種々の變化があることを認め得る。特に日本に於ては此形状の變化が多様であつて、各々に就いて各利害得失が認められて居るが、之を大體に於て分類すれば丸形、角形及び長形の三種の基本形に歸し得る。而してその地方的分布の状態は日本に於ては、大體に於て三重

和歌山兩縣附近より以西の太平洋側並に若狹灣以西の日本海側は多く丸形を基本形としたものが使用され、三重縣附近以東宮城縣附近迄の太平洋側に於ては、角形を基本形としたものが使用され。若狹灣附近以東及び北海道より岩手縣附近に至る間に於ては、主として長形を基本形としたものを、陸内の淡水區域に於ては、全國一般に丸形を基本形としたものを使用されるの傾向があるが、しかしこれは又古來釣鉤の製作は漁業者各自の自製に依つて居たために、この地方的特徴を示したるものゝ如く、近時多くの釣鉤は其製作専門家の製作供給を待つこととなりたるために、地方的變化は次第にその程度を減少し來り、各地共通の形が用ひられるに至る傾向を示して



第八十二圖 釣鉤型の分布圖

目的物の種類釣具の使用法の差異に依る形の變化のみが依然として存する如くである。歐米諸國に於ては一般に統一されて、丸形と長形の中間形を基礎とした形状のものが用ひられて居る。

釣鉤の大きさを示すためには、用材の太さ長さ及び形状を以てすることを必要とするのであるが、一般には釣鉤の形状の大小に依つて、略ぼ之に適當の用材の長さ及び太さが、大體に於て決定し居るがために、單に用材の太さのみか、又は長さのみを以て示さるゝ場合が多いために、精確なる大きさの示されぬ不便がある。用材の太さは現今種々の方法を以て示されて居る。その一つは用材の直徑の大小に依り番號を以て呼ぶ方法であるが、この番號には英國基本ゲージ(English standard wire gauge)、バーミンガムゲージ(Birmingham wire gauge)、亞米利加ゲージ(American wire gauge)の三種が行はれて居るが、この内最も普通なのはバーミンガムゲージである。その二は用材の長さ曲尺一尺の重量を以て呼ぶ

鐵線ゲージの比較及び釣鉤材料太さの関係表

番 號	S.W.G. の直徑 耗	B.W.G. の直徑 耗	A.W.G. の直徑 耗	關東の稱呼 (S.W.G. に相當 する) 匁 數	關西の稱呼 (S.W.G.に相當 する)番號	相當す る普通 の釣鉤 の長さ 寸	S.W.G. の番 號に相當する 一米の瓦數
4/0	10.16	11.5316	11.6840				818.07
3/0	9.45	10.7950	10.3886				714.44
2/0	8.84	9.6520	9.2456				572.98
0	8.23	8.6360	8.2296				458.67
1	7.62	7.6200	7.3406	30.0		6.0	357.22
2	7.01	6.6136	6.5438	25.0		5.5	302.34
3	6.40	6.5786	5.8273	20.0		5.0	252.04
4	5.89	6.0452	5.1895	18.0		4.5	213.63
5	5.38	5.5880	4.6213	15.0		4.0	178.37
6	4.88	5.1562	4.1153	12.0		3.7	145.20
7	4.47	4.5720	3.6647	10.0		3.5	122.94
8	4.06	4.1910	2.2636	8.0		3.2	101.60
9	3.66	3.2592	2.9065	6.0	1. 大	3.0	82.29
10	3.25	3.1036	2.5880	5.0	1. 中	2.7	65.02
11	2.85	3.0480	2.3048	4.0	2. 大	2.5	53.41
12	2.44	2.7686	2.0526	3.0	2. 中	2.2	42.93
13	2.03	2.4130	1.8278	2.5	3. 大	2.0	33.59
14	1.83	2.1082	1.6376	2.0	3. 中	1.7	25.41
15	1.63	1.8300	1.4496	1.5	4. 大、中、小	1.5	20.57
16	1.42	1.6490	1.2908	1.20	5. 大、中、小	1.3	16.25
17	1.22	1.4732	1.1496	1.00	6. 大、中、小	1.2	12.45
18	1.02	1.2446	1.0236	0.80	7. 大、中、小	1.1	9.15
19	0.91	1.0668	0.9116	0.60	8. 大、中、小	1.0	6.35
20	0.81	0.8800	0.8118	0.50	9. 大、中、小	0.9	5.15
21	0.71	0.8128	0.7229	0.40	10. 大、中、小	0.9	4.06
22	0.61	0.7112	0.6439	0.30	11.	0.8	3.11
23	0.56	0.6350	0.5723	0.25	12.	0.8	2.29
24	0.51	0.5588	0.5105	0.20	13.	0.7	1.92
25	0.46	0.5080	0.4547	0.15	14.	0.7	1.59
26	0.42	0.4572	0.4049	0.10	15.	0.6	1.29
27	0.38	0.4064	0.3604	0.08	16.	0.6	1.07
28	0.35	0.3556	0.3211	0.06	17.	0.6	0.87
29	0.31	0.3302	0.2860	0.05	18.	0.5	0.73
30	0.29	0.3048	0.2545	0.04	19.	0.5	0.61
31	0.27	0.2540	0.2268	0.03	20.	0.5	0.53
32	0.25	0.2286	0.2019				0.46
33	0.23	0.2032	0.1790				0.40
34	0.21	0.1778	0.1600				0.33
35	0.19	0.1520	0.1425				0.28
36	0.17	0.1266	0.1270				0.23
37	0.15	0.1012	0.1130				0.18
38	0.13	0.0758	0.1006				0.15
39	0.12	0.0504	0.0897				0.11
40			0.0798				0.09

S. W. G.=British standard wire guage or Legal standard wire guage.
 B. W. G.=Birmingham or Stub's iron wire guage.
 A. W. G.=American or Brown Shorpe's wire guage.

もので、之は關東地方に多く用ひられて居る。その三は特殊の番號及び其同一番號内にて更に大、中、小を附して呼ぶもので、多く關西地方に用ひられて居る。斯の如く種々の方法があつて統一されず、ために不便を感じる場合が多い。故に之は將來何等か統一した方法を用ふるを可とすべく、統一するとせば用材の長さ一米の重量を互數を以て示すが如き方法を適當とするであらう。釣鉤の大きさを長さを以て示す場合は、其用材の長さ即ち釣鉤を正直にしたるものとしての長さを曲尺を以て示されて居るが、之も亦耗を以て示すを可とする。太くて短かい釣鉤もあり、細くて長いものもあるが、大體に於ては略ぼ太さに對して、それに普通の大さと云ふものが定まつて居る。之等は約次表の如くである。

釣鉤の大きさ及び形狀に就いては、それぞれ目的物の大きさ性質、又釣獲の方法に依つて、各相當の利害得失を有して居るものであるから、實際に於ては其場合に依つて、適當の大きさ及び形狀を選ぶ必要があるが、普通の釣鉤に就いては凡そ次の如き得失を考へ得るのである。

一 小形の釣鉤即ち目的物の大きさに對して相當と思はれるものよりも、特に小形の釣鉤を用ふることは、取扱ひ上に於ては不便の感あるも、目的物を釣獲する即ち目的物に喰はしむる爲には容易である。従つて敏捷で釣獲に困難なるものに對して使用さるゝ傾向を有する。

二 小形にして太き釣鉤は、餌を奪はれ易き傾向あるも前條の意味よりして、敏感にして強力なる目的物に對して使用するを可とする。

三 大形にして太き釣鉤は、大體に於て前述のものに反するのであるから、釣獲容易にして多量に漁獲し得る

場合等に於て其有利なることを認め得る。又目的物に對して、比較的大形の太き釣鉤を使用して釣る場合は、その活動飛躍の力を制壓して禦し易からしむる傾向を示すものである。

四 「クキ」の長い釣鉤は餌を付する場合、釣りたる魚を取り外す場合等取扱ひ上に便利であるが、目的物の喰込みは良好ならざる傾向がある。従つて釣獲の容易なるとき一時に釣鉤の数を多數使用すると云ふが如き場合に利用される。延繩の類に於てこの例をよく見受けるのである。

五 「フトコロ」の狭き釣鉤は、目的物が之を捕食しても掛かりの點に於て稍々不良であるが、一度掛かりたる場合刺痕大とならず容易に離脱し得ざる利點あるが故に、釣り上げに際して長時間を要する場合、即ち延繩の如きものに適する。「フトコロ」の廣いものは大體之に反する上に、目的物が強力を以て釣鉤の形を變ぜしめ伸直し易いものである。

六 「アグ」が大で精巧なる釣鉤は、掛かれる目的物の離脱が容易ならざる利點と同時に不便を有する。

七 「サキ」の内側に曲れる氣味ある釣鉤は、魚類が之を捕食した後に自身の活動に依つて泳ぎ去る場合、必ず口邊に出で、掛かるが故に、目的物の生活力を容易に殺滅せざる利點を有して居るから、延繩等の如く目的物が釣鉤に掛かりたるまゝ長時間放置することある場合に、漁獲物の新鮮度を永く保持し得る利益を有する。之に反して「サキ」の外側に向ふ氣味ある釣鉤は、目的物が之を嚙下した場合其位置に直ちに掛かる傾向あり、従つて一般に内臓の奥深く掛かるため、猛烈なる性質のものを釣獲する場合其猛威を殺滅する利點を有する。

八、「ヒネリ」……釣鉤の彎曲は通常一平面上に於て彎曲されて居るのであるが、又時に左様でなく、「クキ」の

部分と「アグサキ」の部分とは同一平面でなく少しく捻ねられたるものがある。これを「ヒネリ」と云ふのであるが「ヒネリ」を有せしむるのは、要するに目的物の掛りを良好ならしむるためであるが故に、斯の如き釣鉤は多く敏感伶俐の目的物の釣獲に使用して有利である。

其外釣鉤には二本又は三本を其「クキ」又は「カハシ」の部分に於て、連結、若しくは接合せしめて、錨形或は之に類似の形とせるもの、又は一本の主要となる釣鉤の「サキマゲ」の附近に於て、更に他の小形の釣鉤（之を孫鉤と云ふ）を短かく結付したるもの等がある。之等は何れも目的物の釣獲を確實ならしめ、或は餌料の装着を確實ならしむる等の意味よりなされるものである。

第二節 縲 絲

釣漁具に於て、釣鉤を結付して使用さるゝ絲を縲絲（ツリイト）と云ふ。釣漁具構成及び使用上重要な部分であつて、地方に依つて「ヤマ」（關東）「ヨマ」（關西）「ヤメ」（日本海方面）「ヨミ」（伊豆）「ヤミ」「ヤンマ」等と云はれて居る。

縲絲の原料としては、大體に於て網絲の原料とほぼ同種類のものが多く用ひられて居る。即ち大麻・ラミー・綿・マニラ麻・絹・テグス・銅・鐵・眞鍮等の金屬線等が、最も多く用ひられるものである。この内大麻は縲絲

には現今最も普通に用ひられて居り、一般に細絲に於ては網絲のものよりも遙かに上質のものが用ひられるが、太絲に於ては網絲とほぼ同程度の品質のものが用ひられる。綿絲は絲を多量に必要とする延繩類に用ひられることが多く又網絲の裝備及び局部の構成、例へば「セキヤマ」を造る場合にその「セキ絲」に使用し、或は「ヤマツボ」を構成するに、その部分を緊縛裝備する等の場合に用ひられ、「マニラ」麻は多く太絲を多量に要する場合、例へば鮪延繩魚延繩等の如きものに用ひられて居る。絹絲「テグス」等は多く小魚を目的とする手釣具に用ひられ、特に「テグス」はその場合釣鉤に近き部分即ち「チモト」に賞用されて居り。金屬線は曳繩、延繩、稀に手釣具の「チモト」に用ひられる。これ等網絲の材料は網絲に用ひられる同種類の材料に比較するときは、一般に良質のものが用ひられるの傾向を持つのであるが、之は釣漁具に使用する。之等の材料は網漁具の場合に比較すれば概して少量にて足るがために、材質の良好なるがために價格の不廉となることは、甚だしき苦痛とはならぬものと考へられるからである。

網絲の性質として一般的に必要な條件は、強靱なること、繊細なること、取扱上に於て容易に紛絡せざること、腐敗損傷に堪へること等を挙げ得る。従つて其構造は撚りを用ひる場合に於ても、網絲に比し下撚り強く絲が硬く撚り上げらるゝ傾向あり。これに柿澁の如き被覆性の染料を施して、使用中に起る撚りの増加を防ぎ、紛絡の度を少からしめ、前述の諸條件を具備せしめんとするを普通とする。稀に撚りの増加を防ぐ目的を以て組紐とせるものもある。「セキヤマ」の如きも一つにはこの意味を以て、考案された網絲の一種である。「セキヤマ」は又「ヨリコシ」「セキヤモ」等と稱せられ、多くは大麻等普通に網絲に用ひらるゝ材料を以て、必要の太さの網絲に

直 徑……R	2.4	1.8	1.5	1.2	1.06
抗 張 力……P	236.0	135.0	101.0	75.0	63.75
$\frac{P}{R^2}$	41.0	41.7	45.0	52.0	56.7

製作し、其表面を他の絲を以て間隙なく緊密に積卷したもので、中心とする網絲は抗張力を強大ならしむるためなるべく撚りを少く製作し、積卷する絲、即ち積絲には絹絲、麻絲、綿絲等の極めて細きものが用ひられる。又目的物の齒牙等に觸れて摩擦損傷するを防ぐために、細き銅、眞鍮等の金屬線の用ひらるゝこともある。この「セキヤマ」を構造する理由は、網絲を細絲を以てよく強力ならしむること、摩擦のために損傷さるゝを防ぐこと、撚りの増加をなからしめ、且つ水の浸潤に依りて絲を澎漲柔軟ならしむることなく、常に適度の硬さと屈曲度を保たしめ、以て取扱上に便利を得ること等にあるのであるが、又缺點としては乾燥せしむることが稍々不便で、従つて腐敗を招き易いことである。

中心を野州産上質麻の三子撚りとし、「セキ」絲を綿絲二十番手二號を以てせる普通に使用さるゝ「セキヤマ」數種に就いて、其抗張力を試験せる結果を見るに、ほぼ上表の如き結果を得て居る。

人造「テグス」と稱せらるゝものは、普通絹絲を「ゼラチン」質を以て染め、「フォルマリン」液を以て處理して、「ゼラチン」を絲の表面に固着せしめて造つたもので、外觀は、「テグス」に酷似して居るが、水に浸した後は透明度を失つて白色を呈し、少しく長時間水中に使用すれば、著しく柔軟となり、「テグス」の代用とすることは不適當であるが、普通の網絲として相當に使用し得らるゝものである。絹絲を以てせる網絲は、この外に種々あるが、日本に於て使用さるゝものは、生絲を用ひ、多く柿澁の如きものを以て染め、之を以て其表面を被覆

し、濕潤状態に於ても絲の硬さを失はざらしめて使用取扱上の便利を得せしめて居る。これを澁「スガ」と云ふ。歐米諸國に於ては、絹絲、亞麻絲等に「ワニス」を塗布し又は亞麻仁油等を以て染め、絲の表面を被覆硬化せしめて、丁度澁「スガ」又は人造「テグス」の如くならしめて、絹絲として使用されるものがある。

「テグス」即ち、天蠶絲は、樟蠶(Calendra Saponica)の絲腺を摘出して製したものである。樟蠶は、南支那廣東廣西等の地方の特産とも云ふべきもので、従つて「テグス」は多くこの地方より産出され、我國に於ては、之等を輸入して使用されて居るものである。近時臺灣に於て飼育するものもあるに至つた。樟蠶の幼蟲は、樟、楓等の葉を嗜食して成長するもので、蠶卵は五―六月頃孵化し、凡そ六週間位で老熟して粗硬な網目狀の繭、俗に謂ふ「スカシダワラ」を造る。

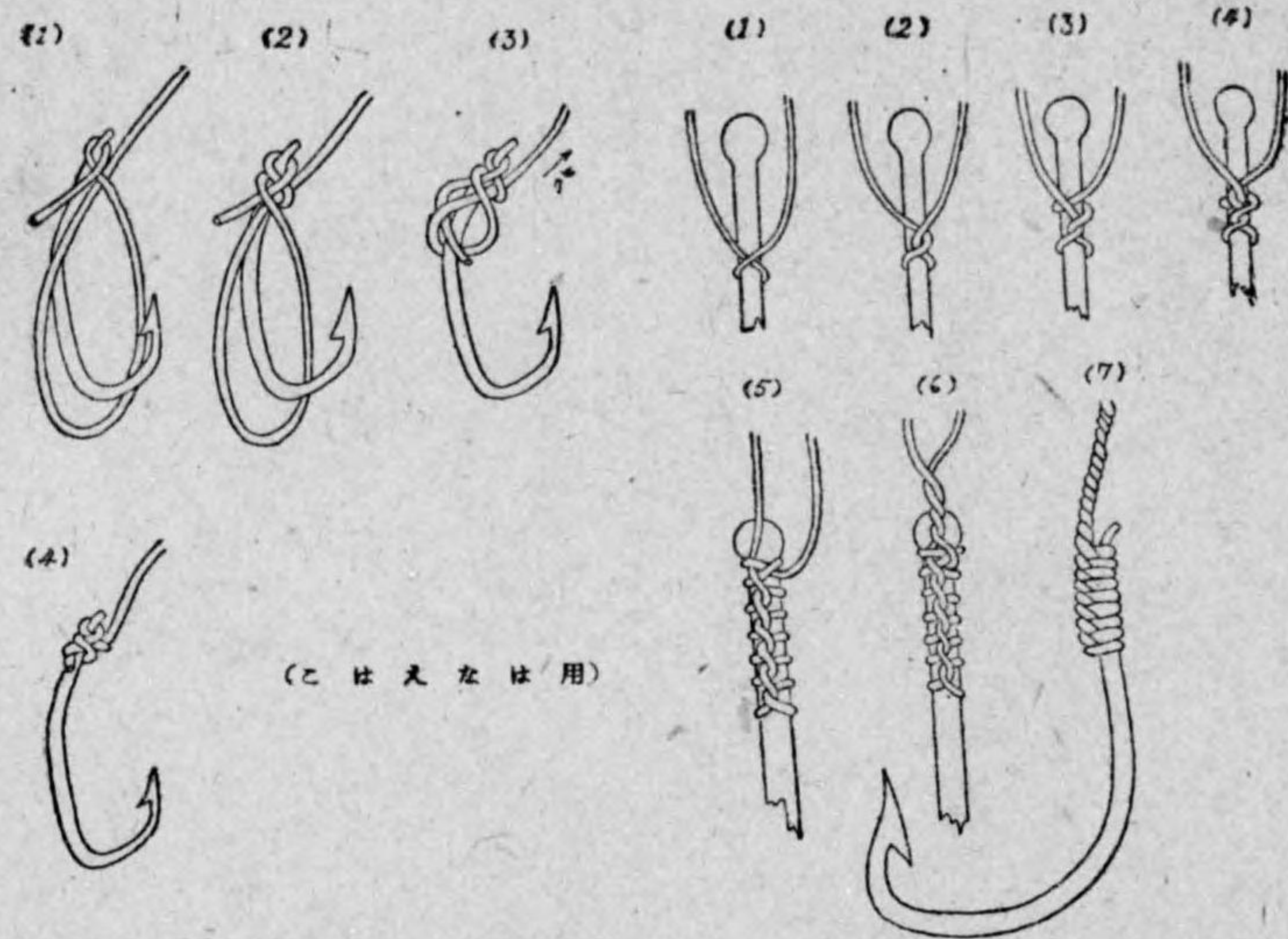
樟蠶より「テグス」を得るには、その上簇前に絲腺を摘出するのであるが、蠶蟲成熟の程度は、其の背部に生じて居る疎硬な毛が成熟と共に短かく且つ柔軟となるから、之を握りて刺毛の有無を感ずることなきに至れるものを、充分成熟したるものとして容易に判別し得る。この時に至つて、水中に沈めて斃死せしめ、翌早朝に蠶の腹部を中間の四對の大なる足の二對目の點より引き裂けば、中に縮れたる一端褐色を帯びた半透明の絲腺二條を見る。之を取り出して、食酢又は二〇―三〇倍の水酢酸水に浸し、三〇―四〇分を経れば、半透明部は内部の「ヒロイン」稍々硬化し、表面の「セリシン」は透明度を失ひて白色を呈するに至る。この適度を逸せず靜かに清水の中に移して附着せる酸を靜かに流し去り、一端を竹串等に固定せしめて靜かに絲腺を引き伸ばしつゝ、同時に脂頭を以て絲腺表面の「セリシン」を抜き去り適度に引伸ばし終れば、その端を他の竹串等に附して引伸ばし

たるまゝ日光の直射を避けつゝ、風通しよき場所に於て充分乾燥せしめるのであるが、かくして得たる「テグス」は、猶ほ其表面に「セリシン」等の附着物を有することあるが故に、更に清水に浸して日當りよき處に數日放置して太陽熱に依つて酸酵を起さしめ、附着物を分解除去し、よく水洗して後に充分乾燥せしむるのである。「テグス」は、種類品質を異にするもの甚だ多く、之等を鑑別することも亦甚だ困難であるが、釣漁具に使用するものは、一般に上質のものにして、主なるものとして左の數種を挙げ得る。

廣東と稱せらるゝものは、支那産「テグス」中品質上等のもので、「テグス」は全般に透明ではあるが、多少黄色を帯ぶるものであるが、廣東はその色最も淡く長さ二米位あり、中部太く兩端に至るに従つて稍々細いものである。俗に一番口と稱せられ、我國へは七月頃入荷する。

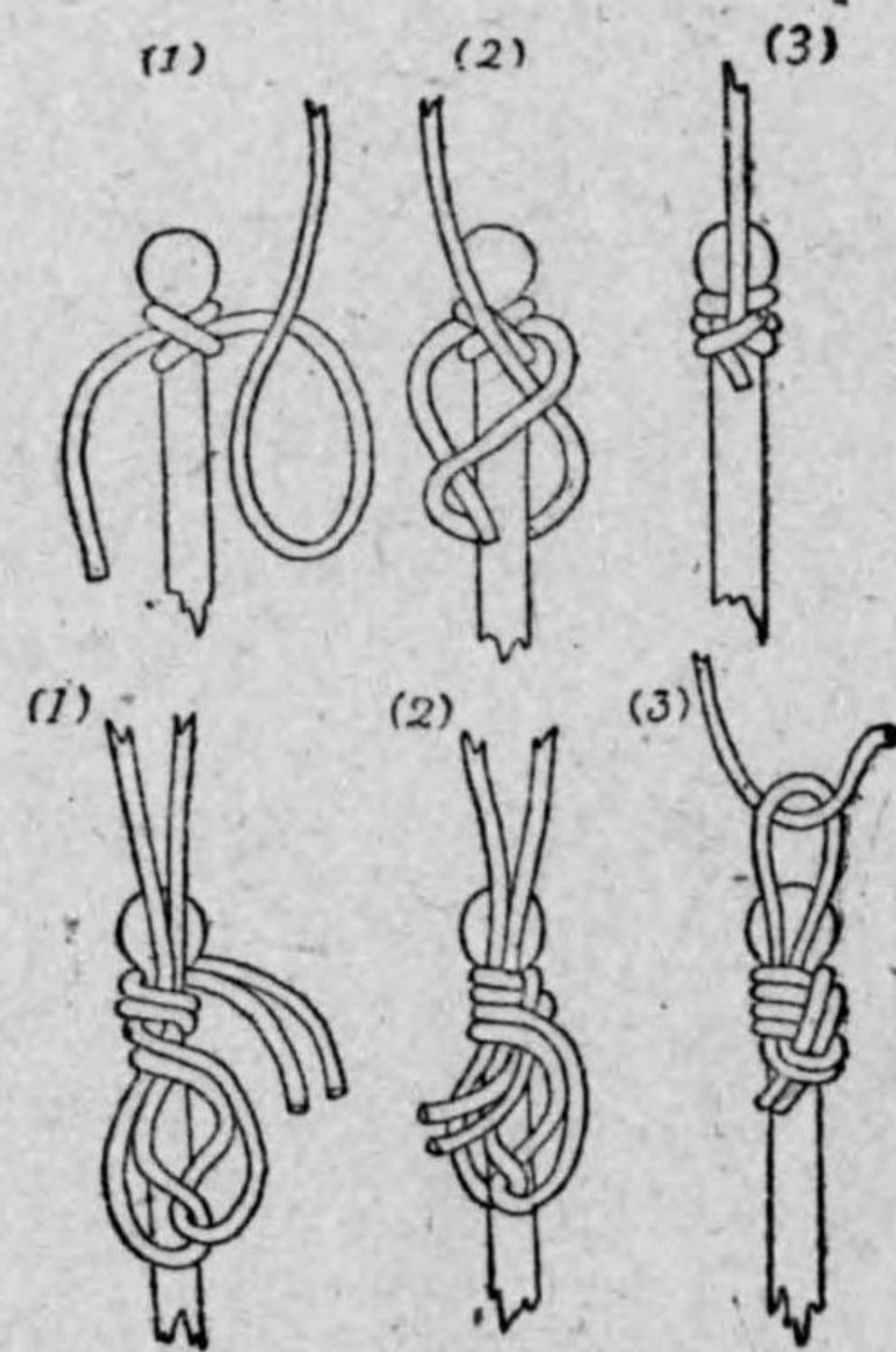
「マテ」或は「マテグス」と稱せらるゝものは、廣東よりも稍々細く長さ一米二〇―一米五〇位を有し、光澤ある白色をなせる根部稍々太く、透明なる中部及び末端に至るに従ひ稍々細くなり、末端は稍々瘤狀をなして居るが我國に輸入後、之を切り放して販賣されるものが相當ある。大體に於て線條に扁平部の少いもので、二番口と稱せられ、我國へは五月頃入荷する。

「ヘチマ」と稱せらるゝものは、長さ一米―一米五〇のもので、根部より中部迄は線條稍々丸きも、末端に至りて扁平なるもの多く、一番口二番口の混合物であつて、前二種の内より細く短かきもの撰出されたものと見るべきか。その他に、「アイス」と稱するものもあるも、「ヘチマ」と別種のものとは認め難く、寧ろ「ヘチマ」の中より更に細短なるものが撰拔されたものであらう。「ヘチマ」アイス」共に線條は稍々縮れたる氣味を有す。



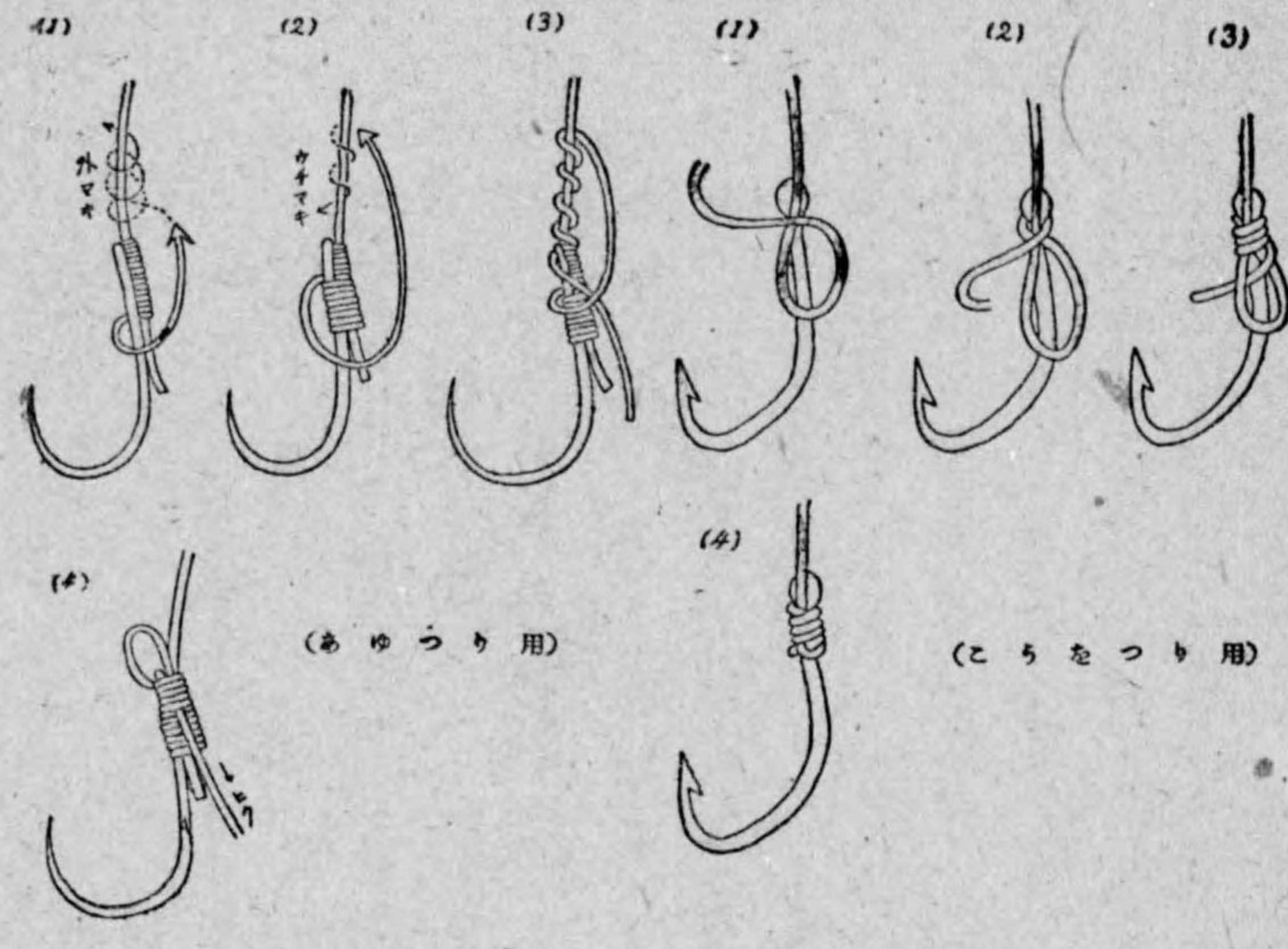
(こはえなは用)

(たいつり用)



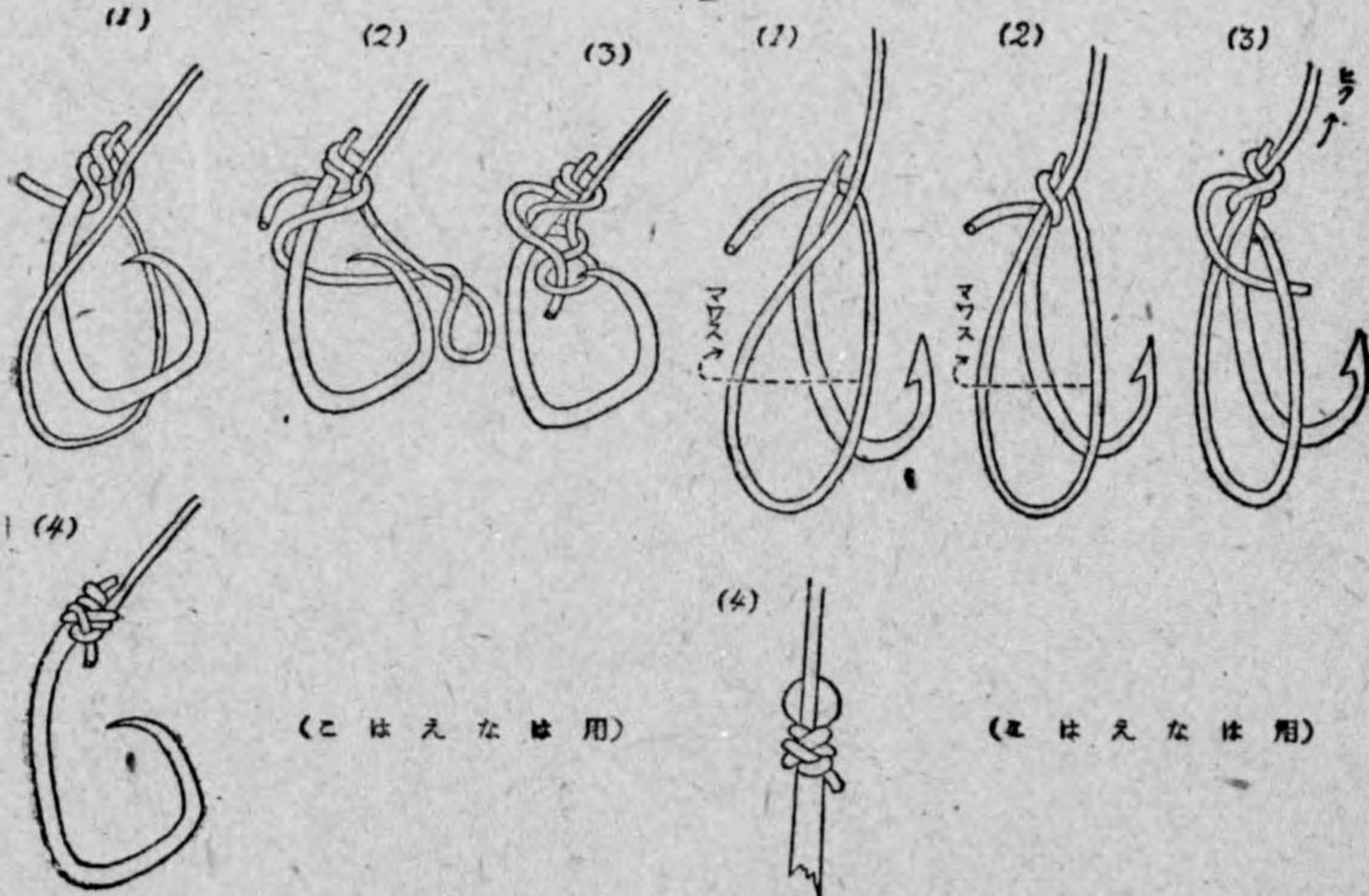
(たいつり)

絹糸の釣鉤への結着には、種々の方法を用ひられて居るが、其要點は迅速容易に結着し得ること、結着の確實堅固なること、結着後の結節の出來上り太からざること等にして一般に絹糸が釣鉤彎曲形の内側に結着されることを原則とするが、これは釣鉤の尖端が容易に目的物に刺し込まれることを考慮するためである。時には釣鉤の「カヘシ」の部を環形に造り、之に絹糸を結着せしむる趣向のものがある。これは「チモト」



(あゆつり用)

(こらをつり用)



(こはえなは用)

(こはえなは用)

第八十三圖 釣鉤へ絹糸の結着法

(1)(2)(3)……等は構成の順序を示す

に金屬線を用ふる場合に多い。斯の如く縋絲の結着は釣鉤の形状・大小・其釣具使用の状況に依つて、結着上の要點に輕重の差を生ずる筈なるが故に、其重點とする處に従ひ、結着方法を適當に撰ぶべきである。

第三節 釣 竿

釣竿は釣鉤の位置を容易迅速、且つ自由に活動せしめ、目的物が釣鉤を呑み込みたる時、之を急に引きて魚に合せ釣鉤を確實に掛からしむることを容易にし、其力を適當に調節せしめ、又魚の釣上げに際して魚の活動に依る絹絲の張力を適度に緩和せしむる等を、主要の目的として使用さるゝものであつて、我國に於ては主として竹を以て造られる。

竹は其生育の状況に依つて各異なる特徴を有するもので、一般に開潤にして乾燥し岩石に富む瘠地に疎散に野生するものは之を野竹と稱し、短節にして元口と末口との太さの差大きく、且つ強硬にして枝角即ち幹枝の間の角度大に従つて、枝痕即ち枝の發生點に於て幹に縦に生ずる凹溝が輕小である等の特徴を認め得るが故に、釣竿としての適材は之等野竹に得らるゝものである。野竹に反して濕氣多く壤土深き肥沃の地に密生するものは里竹と稱せられ、水分に富み、長節にして元口と末口との太さの差少く、枝角小なるがために枝痕は著大なるを免れない。材質は軟弱なる氣味あるを特徴とする。他の器物の工作材料には適する所多きも釣竿としては適材を得難い。

釣竿に用ひらるゝ竹の種類は、眞竹・葉竹・矢竹・女竹・紫竹・五三竹等を普通とする。眞竹 (*Phyllostachys bambusoides*) は又かわ竹苦竹等とも稱せられ、我國に於て最も普通のもので、大なるものは直徑一〇—一五厘長さ一五米以上に達し、節間長く幹の色は稍々帯黒綠色を呈し、筍の籬には細毛著しく且つ黒色の斑点を見る。大型魚類、例へば鯉釣等の強力を要する釣竿に用ひられる。葉竹 (*Phyllostachys puberula*) は又淡竹と稱せられ、眞竹に次いで多く見らるゝもので、高さ十米以上に達するものもあり、眞竹に似て葉繁く幹の色は稍々淡く筍の籬には黒斑點のなきものである。眞竹に次いで大型魚類用の釣竿に使用されることが多い。紫竹或は黒竹と稱せらるゝものは、葉竹の一種で一般に普通の葉竹よりも稍々細く幹の色が紫黒色を呈して居るためかく稱せられる。遊魚用釣竿に製せられるものである。五三竹 (*Phyllostachys aurea*) は又布袋竹、佛面竹と云はれ、竹幹の根部に近き節は不規則で膨らみを有し高さ三—四米に達するものである。小魚釣遊魚用等に使用される女竹 (*Arundinaria Simoni*) は又山竹「ナヨタケ」「シノベタケ」等とも稱せられ、高さ六—七米に達するものもある。幹節低く筍の籬は灰白色をなし、小魚釣用又は遊魚用に用ひられる。矢竹 (*Arundinaria japonica*) は又「ヤシノ」とも云はれ、高さ六—七米に達し女竹に似て竹幹は一層堅硬で、節間長く節低く元口に對する末口の落ち少く遊魚用釣竿に製作される。

釣竿材料として竹を伐採するに就いては、將來虫害を蒙ることを防ぐため、其時期を選ぶを要す。この伐採時期は、一般樹木の樹液の幹枝へ吸含さるゝこと最も少き時期を可とするが故に、晩秋落葉樹の落葉し盡せる頃より二月頃迄の間を可とする。この時期に於ても特に闇夜に當る日を選び、月明の日は竹幹に水氣を含むこと多き

ため之を避くるを要す。竹の年齢は強きものを得るには三年生四年生等を選ぶも、輕きことを主眼とするために一年生を用ひることもある。又竹齡の如何にかゝらず輕きものを得んがために、其根部を傷つけて立枯とすることもある。これを「ウキス」と云ふ。

釣竿は又其構造に依つて、延竿と繼竿の二種に大別し得る。延竿と稱するは一本の竹をそのまま用ひて一本の釣竿とするもので、最も強固で良材を得れば、最も使用に適するものであるが、携帶に不便であるがため、數本の短き部分に切り組み、使用にあたりて之を順次に挿し繼ぎて、一本の釣竿となすことがある。これを繼竿と云ふ。多くは遊漁用のものである。延竿を造るには小刀を以て丁寧な枝を切り取る。竿の折損するのは多くはこの枝痕の部分より生ずるが故に、この際竹幹を傷つけざる様注意することを要す。枝を切り被ひたるものは、次に靱殻、磨砂等を以て肌面をよく磨き附着せる白粉其他の汚物を去り、二三日乾燥した後矯正して油抜きをなす。矯正は竿を炭火上に靜かにしかも充分に熱し、木製の溝型を有する矯正器を用ひ、竿をこの溝に嵌め靜かに矯正して歪を直すのである。油抜きは之と同時に油抜きを普通とする。即ち炭火に炙りて幹表に浮き出づる油分を拭ひ去るのであるが、時には長き火爐の炭火の上に灰を被ひ之に數十本の竿を同時に掛け、炙りて、油分の浮き出づるものを雑巾等を以て拭き去ることもある。かくして矯正し油抜きせる釣竿は、之を二〇—三〇日間晴天に日乾して工作を完了するのである。輕釣竿の如きものは伐採枝落し後、約一週間位海水中に浸し置きて後この工作を施す。之は後來の虫害防禦のためである。繼竿の工作は甚だ技術を要するものであるが、大體に於て延竿と同様に油抜きして乾燥せし竹材を數多取り、この内より適當のものを選び抜きて手元の材となる第一部に適當なる第二

部を嵌め繼ぎ、この第二部に適當なる第三部を選び出して嵌め繼ぎ、かく數多の部分を含せて遂に一本の繼竿を完成するのであるが、之等の各部分は之を抜き離したる時は、第一部の幹中に第三部を挿入收納せしめ、第四部を第二部中に、第五部を第三部幹中にと云ふ風に順次挿入收納せしめ、終れば遂に全部が第一部及び第二部の二本の中に收められる如く造るものがある。これを二本仕舞と云ふ。若し之に準じて三本に收納し終る如く造るものは三本仕舞と云ひ、種々の仕舞方法がある。一般に一本の竿を多數部分に繼ぐもの程、仕舞數を増さざるべからず。又一本の竿を仕舞數少く仕舞ふもの程、幹の中空を充分太くせざるべからざるがため竿の強さを害ふ。繼竿はかく數多の竹の良好部分のみを抜き取り組合せて、一本の竿を仕上ぐるため、曲疵なき割合に良好なる竿を構造し易きも接續部は損傷し易き恐れがある。

延竿繼竿の外に矧合せ竿あり。孟宗竹又は太き眞竹等を細く割り六枚位を竹刀の如く矧合せ、互に漆の如きものを以て密着せしめ、更に所々を絹絲の如きものを以て強く巻き締めて、一本の延竿の形を構成するもので、歐米に於て用ひらるゝ遊漁用釣竿の構造に模し、手元には稍々太き木製の把手を附するを通例とする。屈撓し易くしかも強靱なる釣竿とし得るもので遊漁用に用ひられる。

釣竿の具備すべき要件は目的とする魚類に依り、使用する場所に依り、使用の方法に依り、各多少の差あるべきものであるが、一般に於ては凡そ次の如き點を挙げ得る。

- 一 正直なること。勿論なるべくは強き矯正を用ひずして正直となし得るものを可とする。矯正したるものに於ては充分乾燥固定せしめて、容易に舊の曲疵に傾かぬものたるを要す。

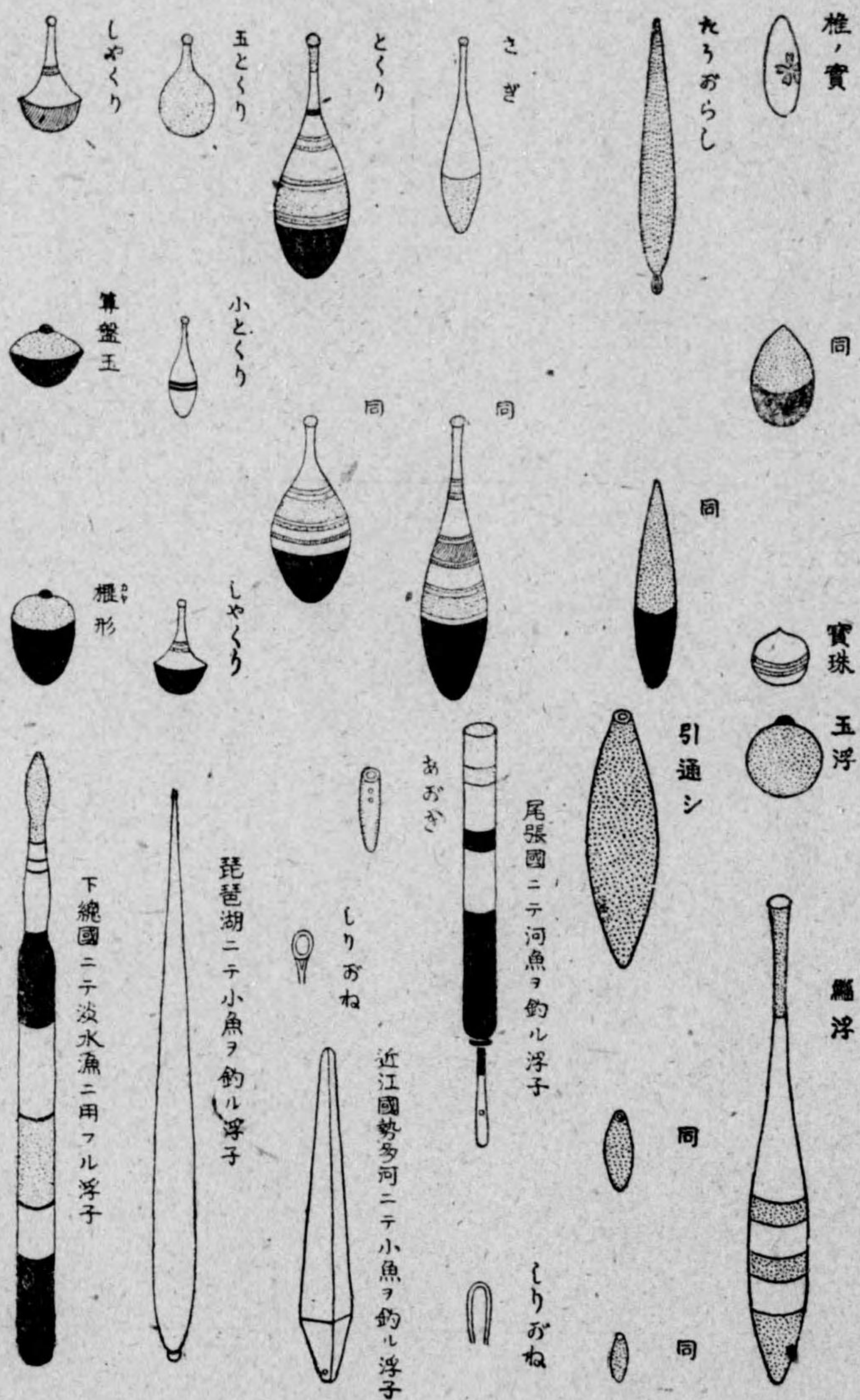
- 二 材料正圓に近きものたること。即ち竿を何れの方向に屈撓するも、其難易の程度形状相等しきものであること。
- 三 強固にして容易に折損せざること。
- 四 なるべく軽量なること。
- 五 屈撓順調なること。即ち先端に至るに従ひ順次に屈撓し易きものなること、但しこの屈撓の強弱は使用の状況に依り目的物の種類に依りて差異あるものであるが、屈撓後は正しく原の正直に復するものであることを要す。

第四節 浮子・沈子・其他

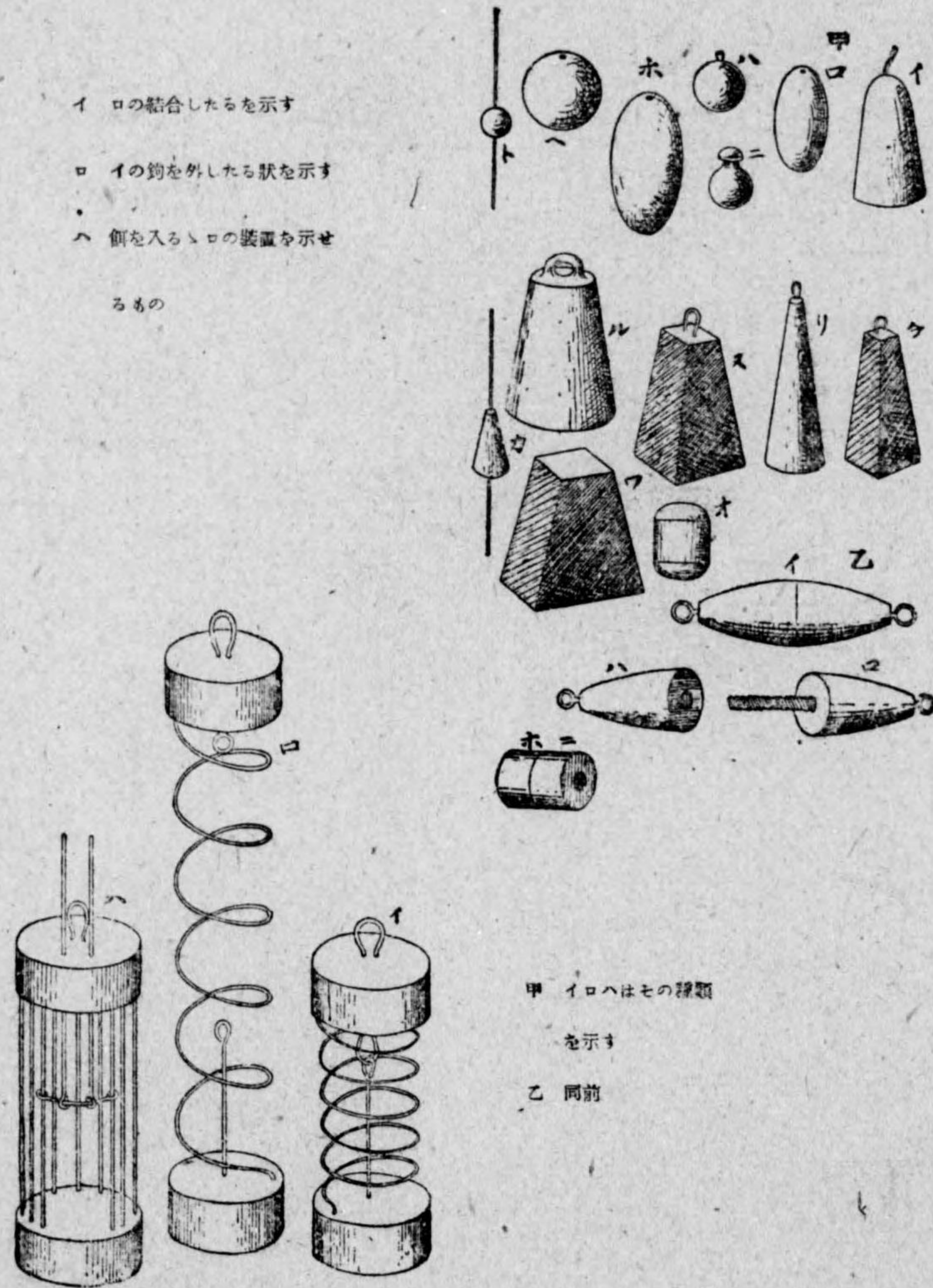


第八十四圖
釣具用浮子
(延繩用ボンデン)

浮子は釣漁具に使用されるものは「ウキ」「ウケ」「ウカシ」等と稱せられ、緋絲を水面に保たしめ、釣鉤の位置を



イ ロの結合したるを示す
 ロ イの釣を外したる状を示す
 ハ 側を入るゝロの装置を示せるもの



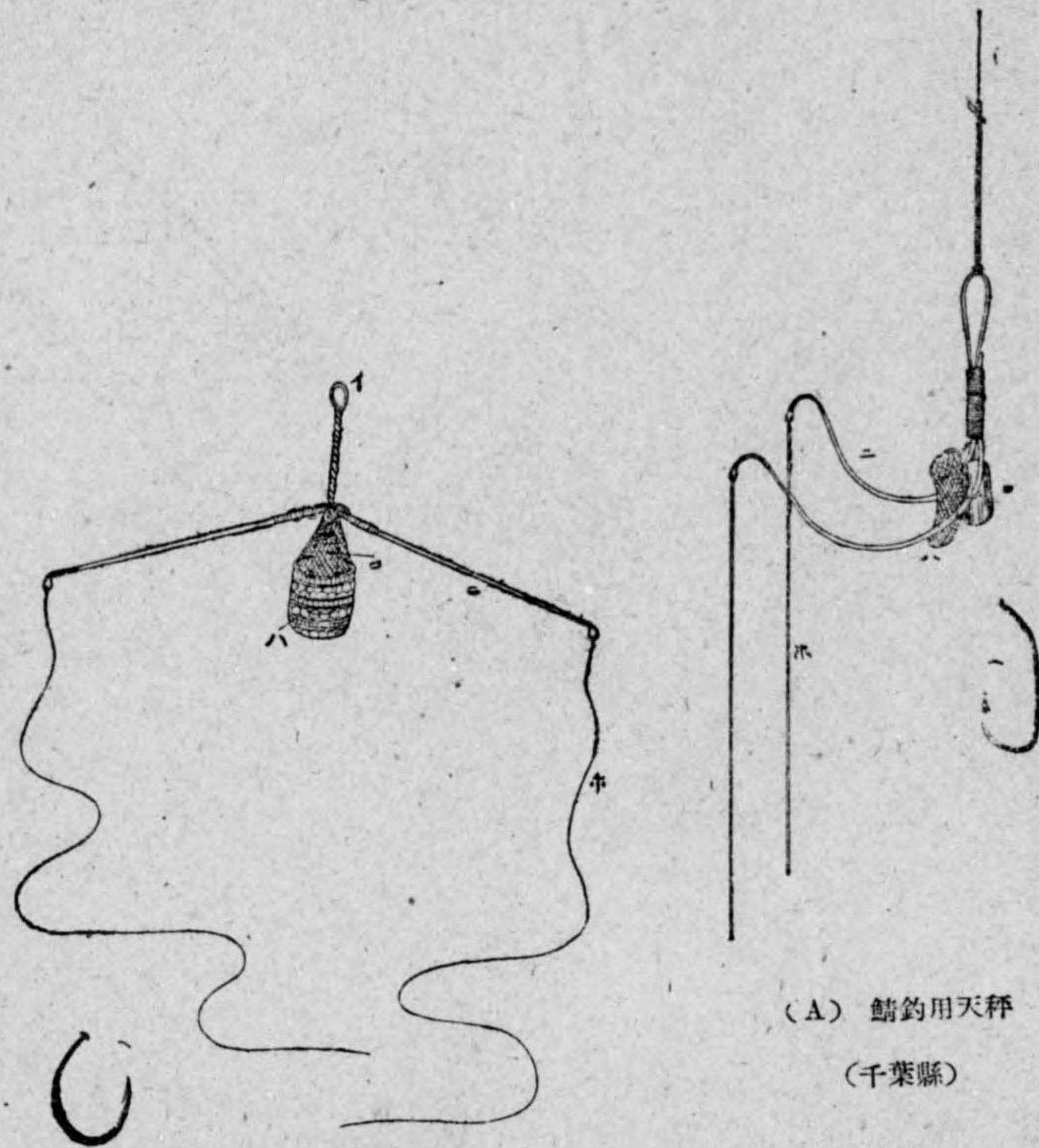
第八十六圖 釣具用沈子及び碇

(一)(二)延縄の浮板大なるもの
 徑一尺五六寸深さ一尺四五寸
 小なるもの徑八九寸深さ一尺位
 (三)同 河魚用
 (筑前地方にて用ゆるもの)
 徑一尺位
 (四)同
 桐材徑四寸長七寸(箱根蘆湖にて使用せるもの)
 (五)延縄の浮標
 長さ二尺(能登の圖にて使用のもの)
 (六)鮎延縄の浮標
 方言ゴム
 短きは二尺五寸長きは六尺
 (七)延縄の浮標
 長さ八寸琵琶湖にて使用のもの



甲 延縄の浮標全形
 (筑前地方にて使用のもの)
 (イ)火標 高さ一尺一寸位
 (ロ)同上部の覆 高さ一尺四寸
 下方の廣さ一尺三寸位
 (ハ)火標の燈
 (ニ)鯛子浮標の中に入するもの
 乙 同上構
 上方の廣さ 一尺四寸位
 下方の廣さ 一尺三寸位

第八十五圖 釣具用浮標



(A) 鯖釣用天秤

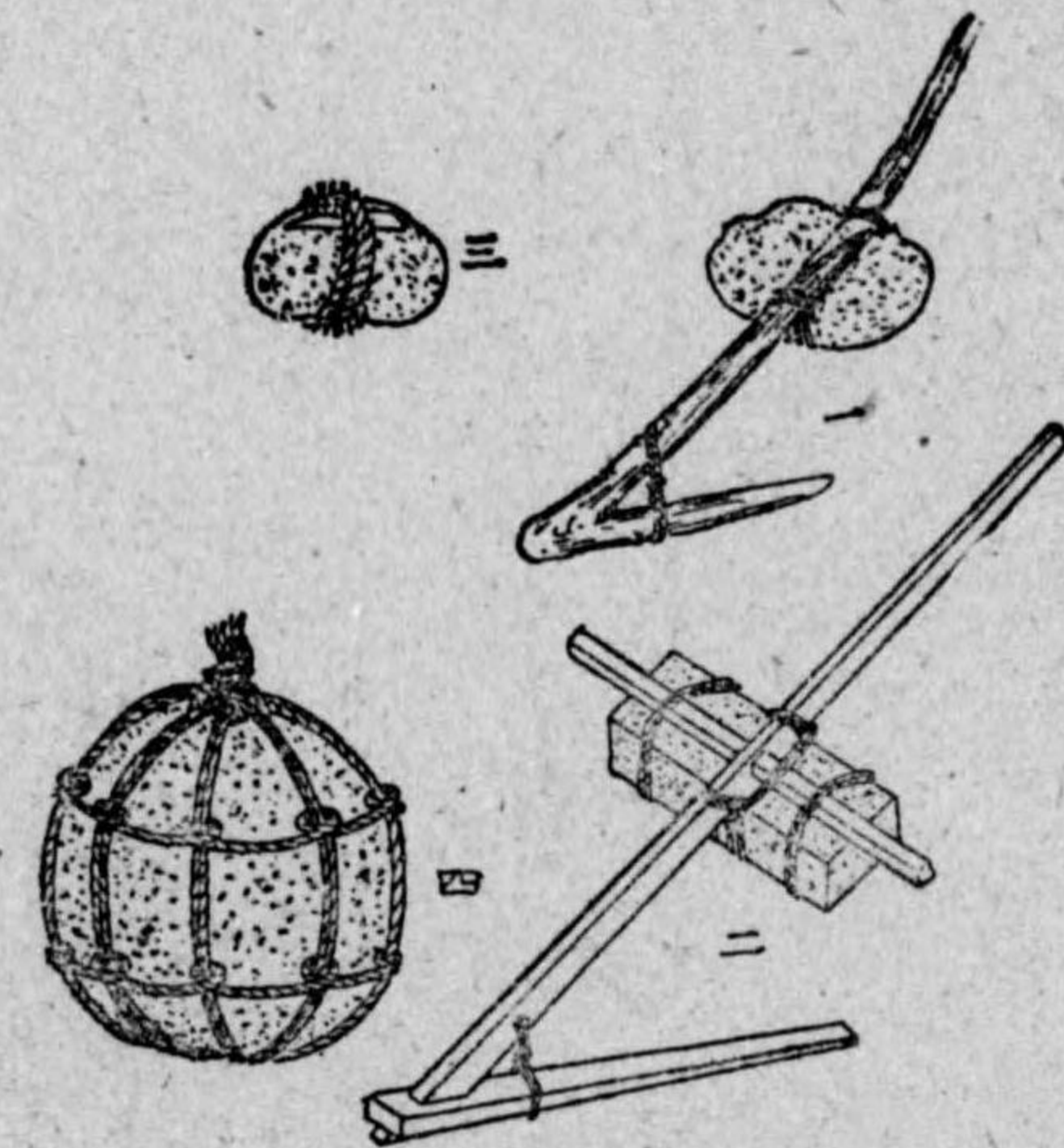
(千葉縣)

(B) 鯖釣用天秤 (高知縣)

附 録 糸 釣
 糸 釣 秤 砵
 糸 釣 秤 砵
 糸 釣 秤 砵

秤 砵 釣 魚
 秤 砵 釣 魚
 秤 砵 釣 魚

第 八 十 七 圖 (甲) 天 秤

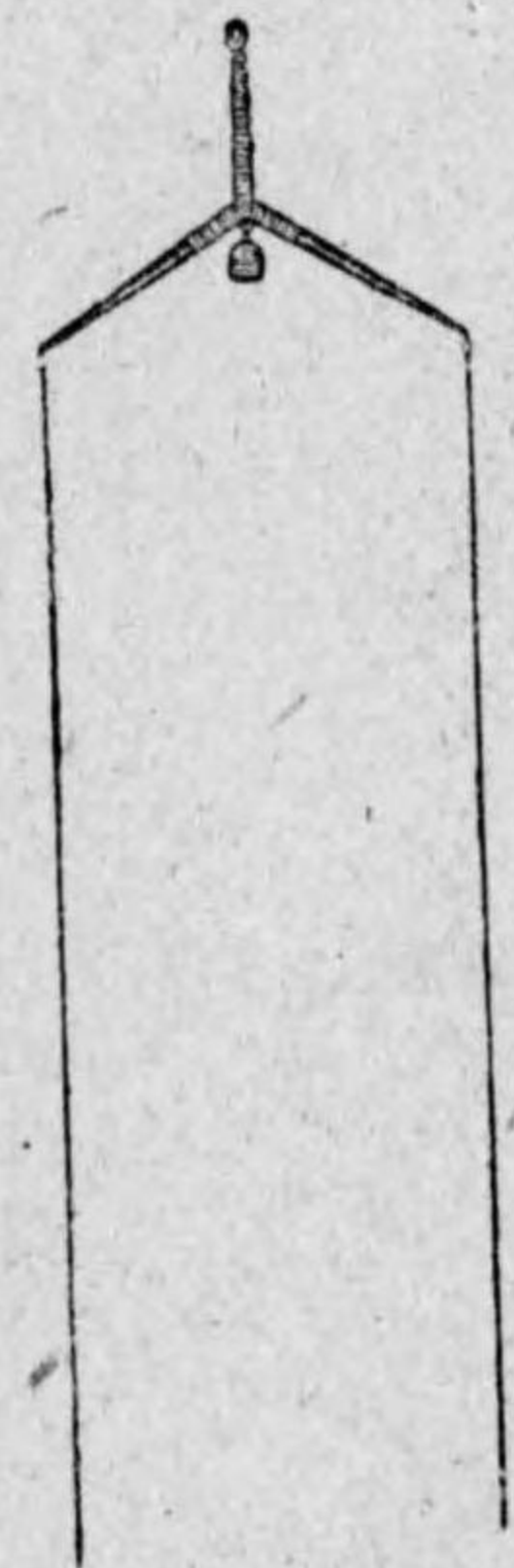


一 延 繩 砵
 二 同 第
 三 延 繩 用 手 石
 四 同 前

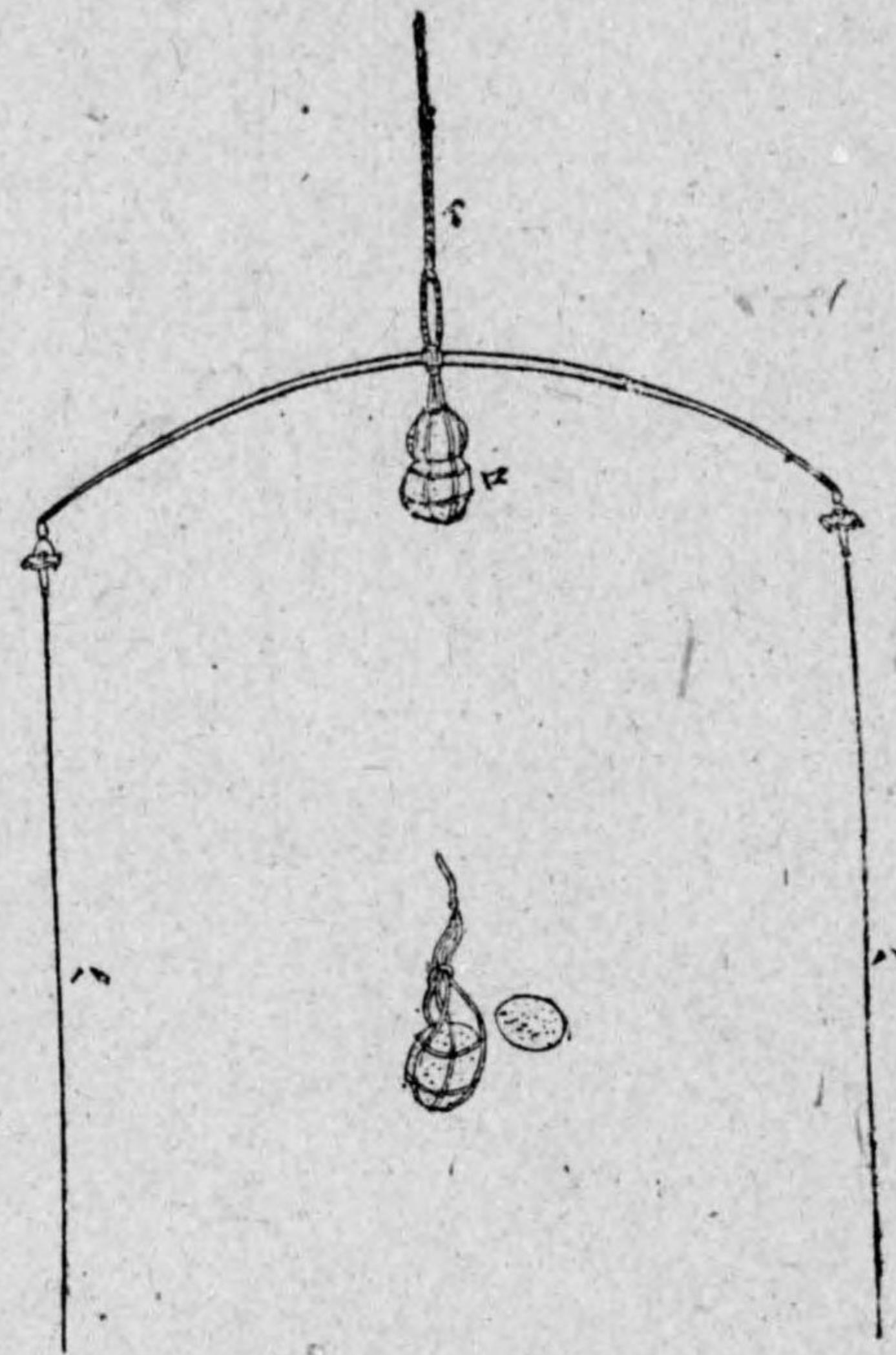
を標示せしむるものに於ては、浮子の之に従ふ動作著しき如き形状及び取付方法及び取付け方
 具の所在位置を標示するに使用さるゝものには稍々大形のものを用ひられ、更に標旗其他の標識をなし得べきも
 のを附屬せしむるを通例とする。

沈子は釣漁具に使用さるゝものは「ビシ」「ジズミ」「ラモリ」「ラモシ」等と稱せられ、特に石を用ひる場合は手石
 小手石等と稱せらるゝこともある。釣鉤の沈降を早からしめ、希望の深さに沈下せしめ、或は釣鉤の位置の流動
 を固定する意味を主として用ひられるものは、碇或は手石と稱せられ、碇には普通の鐵製錨又は木碇を用ふ。鉛

水面下必要の位置にあらしむるために用ひら
 るゝもので、兼て目的物が釣鉤を捕食せるを
 その動靜に依りて推知し得せしめ、或るとき
 は又釣具の所在位置を標示することを兼ねし
 むることもある。材料は網漁具に用ひらるる
 ものと殆ど同様にして、桐材「コルク」等を
 最も普通に使用され、形状は種々なれども、
 魚の活動に依つて浮子が水中に引込まれたる
 場合、水の抵抗強からざる形状及び取付け方
 法が用ひられて居る。釣鉤に當れる魚の動靜

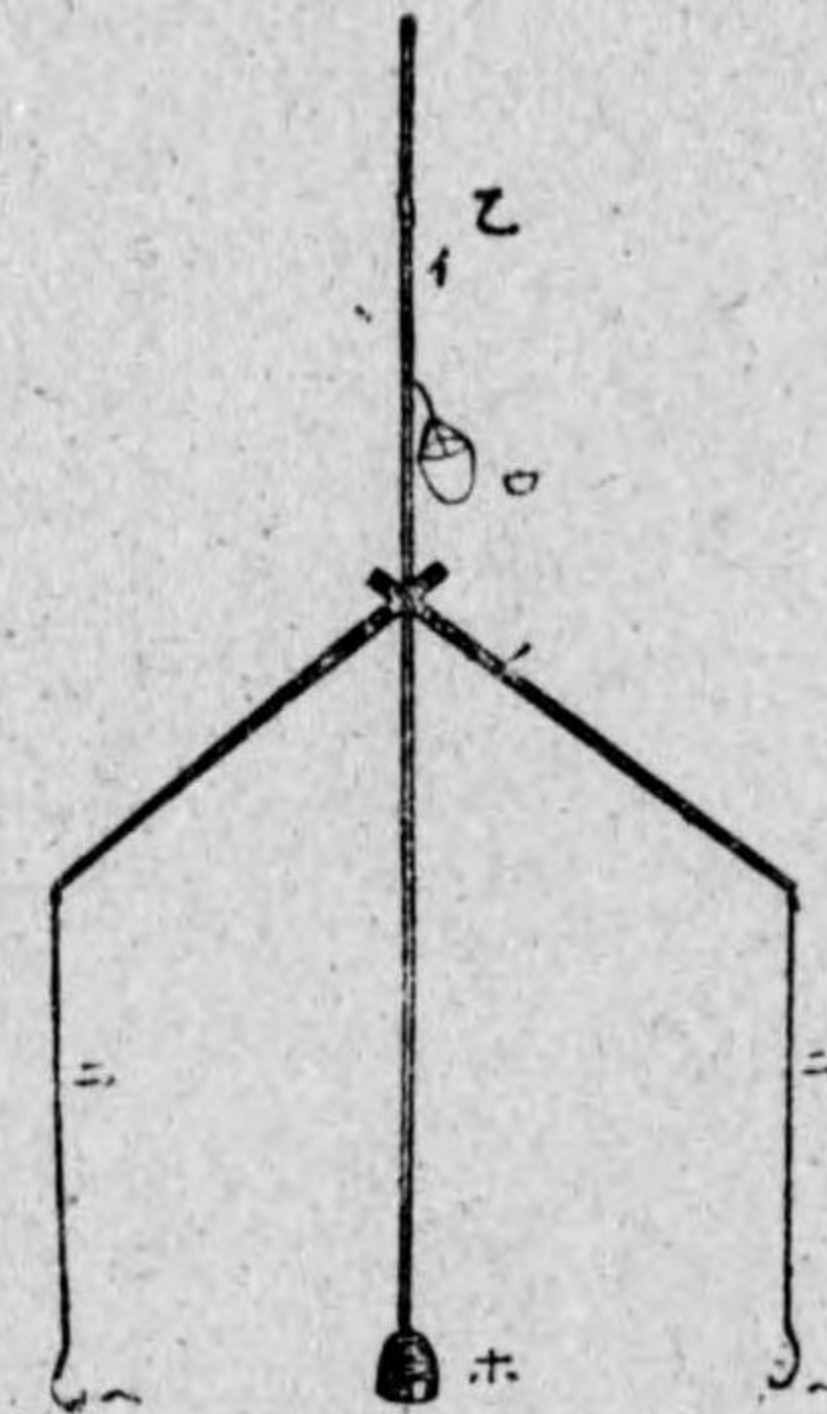


(F) 「ムツ」釣用天秤
(静岡縣)



(E) 「ムツ」釣用天秤 (同縣)

- イ 緒 絲
- ロ 石 の 籠
- ハ 麻 緒 絲



(C) 「アブラメ」釣用天秤
(青森縣)

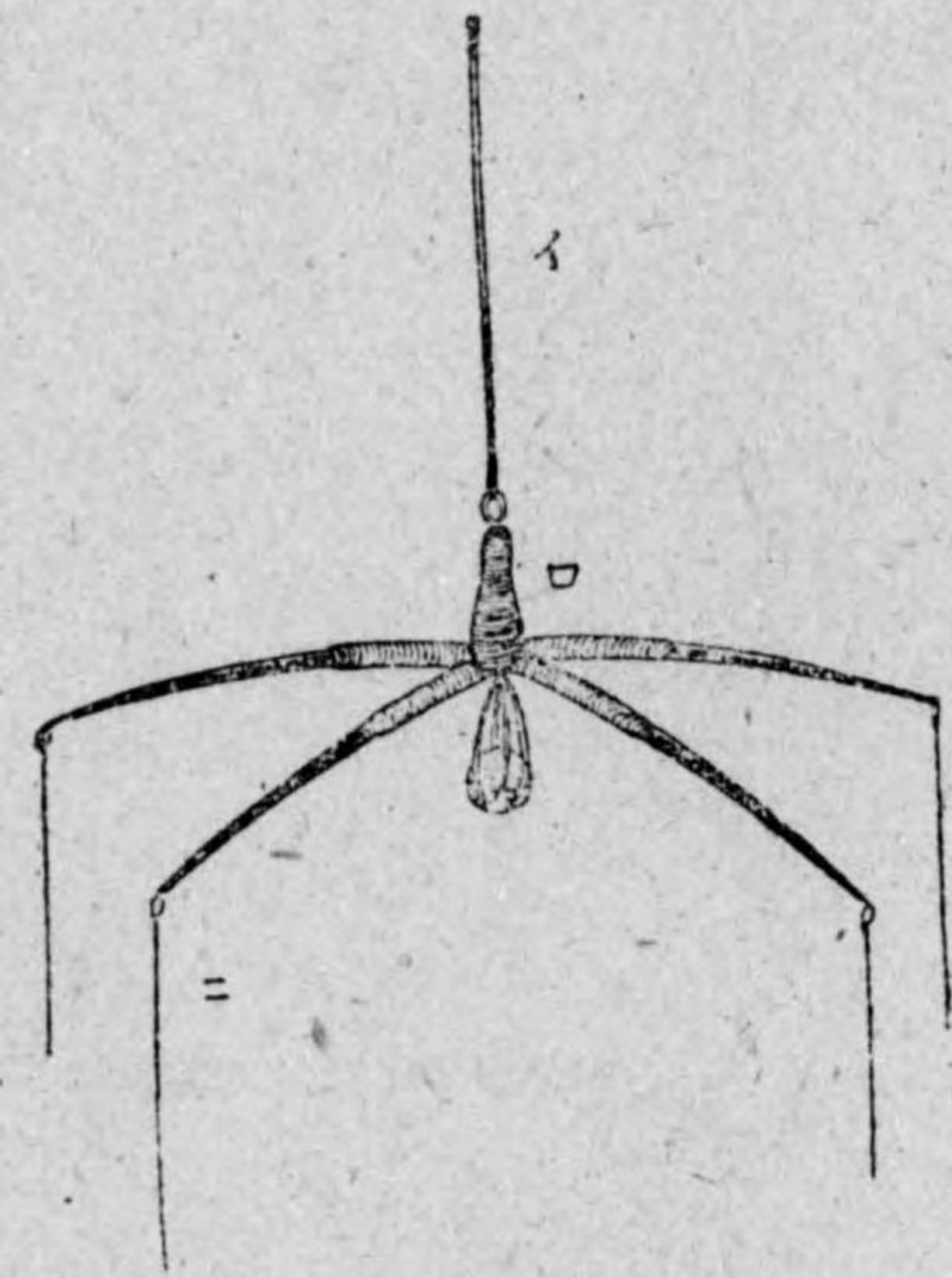
- 甲
- イ 緒 絲
- ロ 河豚の皮にて作れる餌料袋
- ハ 漆器(天秤)
- ニ 小 緒 絲
- ホ 沈 子
- ヘ 釣 鉤



(D) 「ムツ」釣用天秤
(神奈川県)

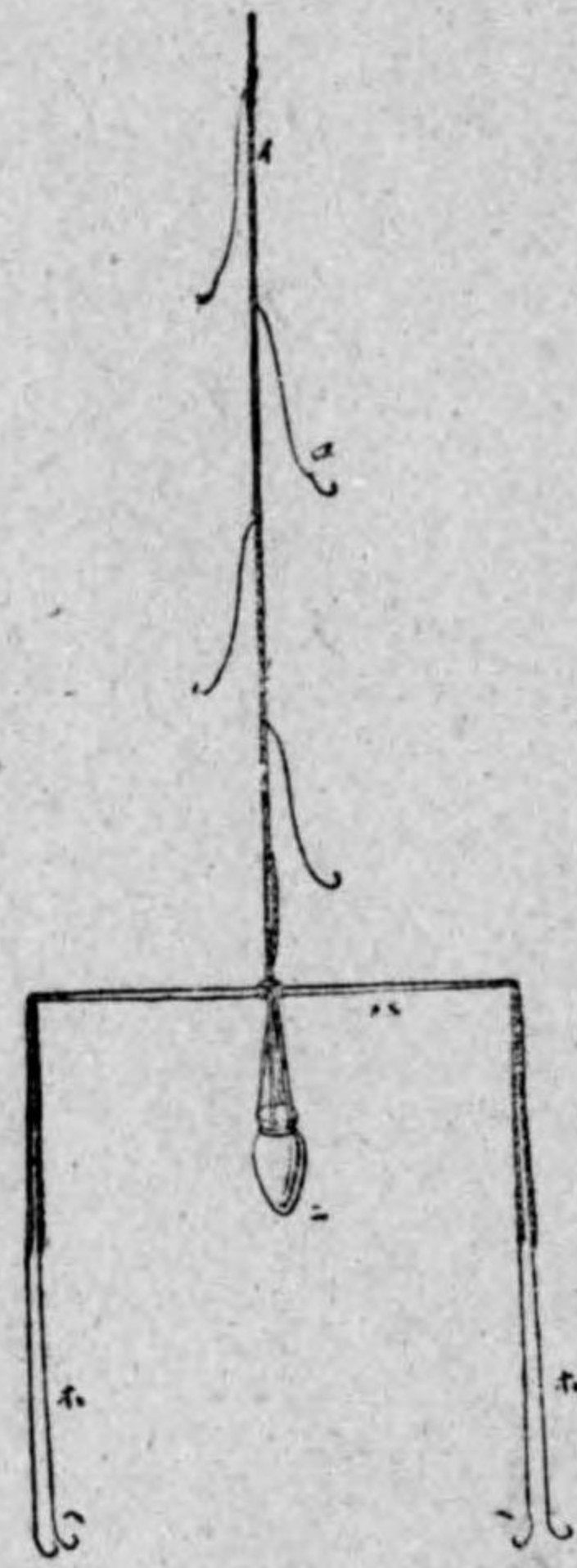
- イ 緒
- ロ 石 の 籠
- ハ 竹製天秤
- ニ 麻製緒絲
- ホ 釣 鉤

- 乙
- イ 緒 絲
- ロ 河豚の皮にて作れる餌料袋
- ハ 漆器(天秤)
- ニ 小 緒 絲
- ホ 沈 子
- ヘ 釣 鉤



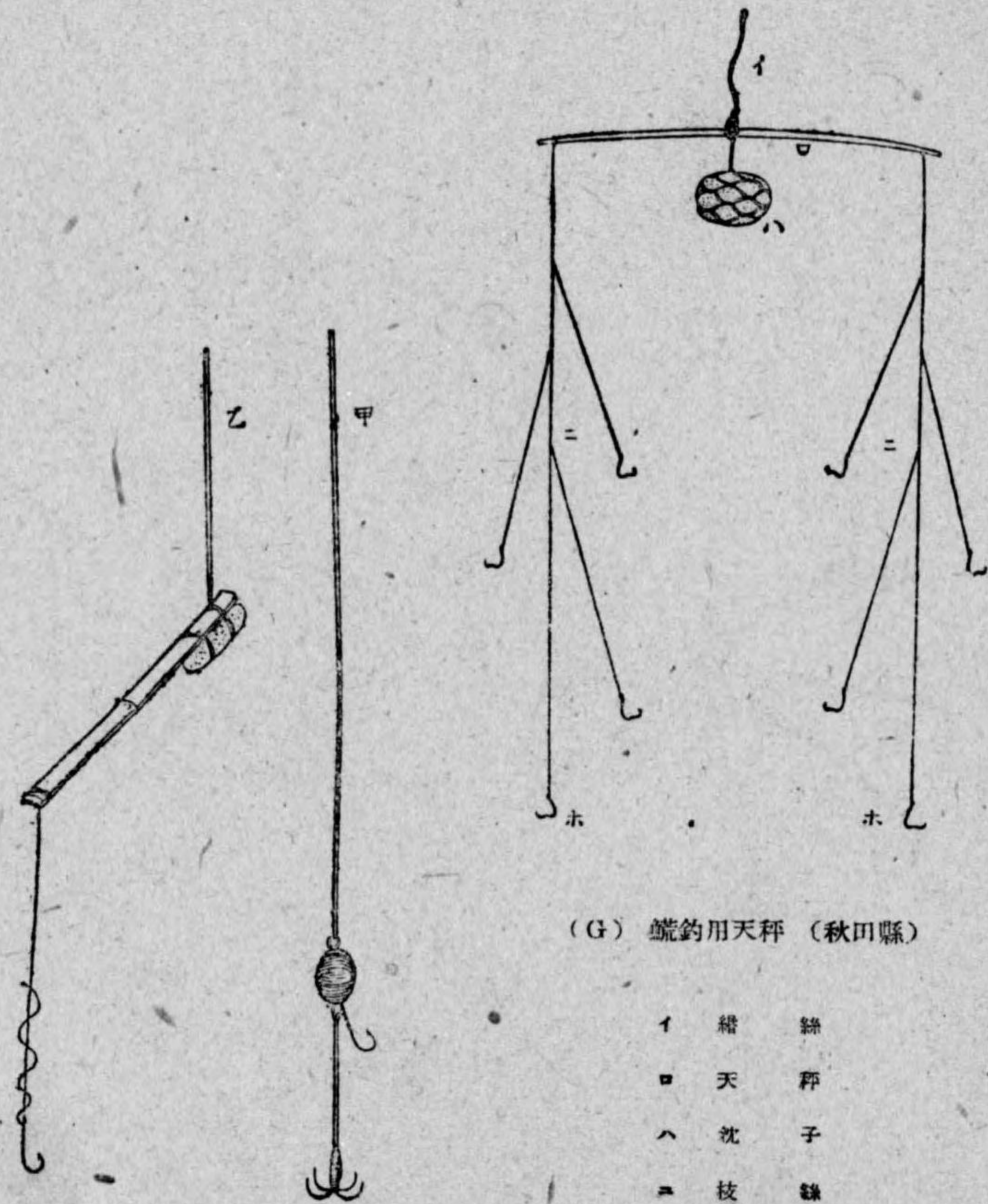
(J) 「アコウ」釣用天秤 (千葉縣)

- イ 緒 絲
- ロ ホウデ
- ハ 籠 (石)
- ニ 麻製脚柱



(I) 「アコウ」釣用天秤 (千葉縣)

- イ 釣 繩(立繩)
- ロ 繩 杖(差繩)
- ハ 天 秤(ヘゴ)
- ニ 籠
- ホ 緒 絲
- ハ 釣 鈎

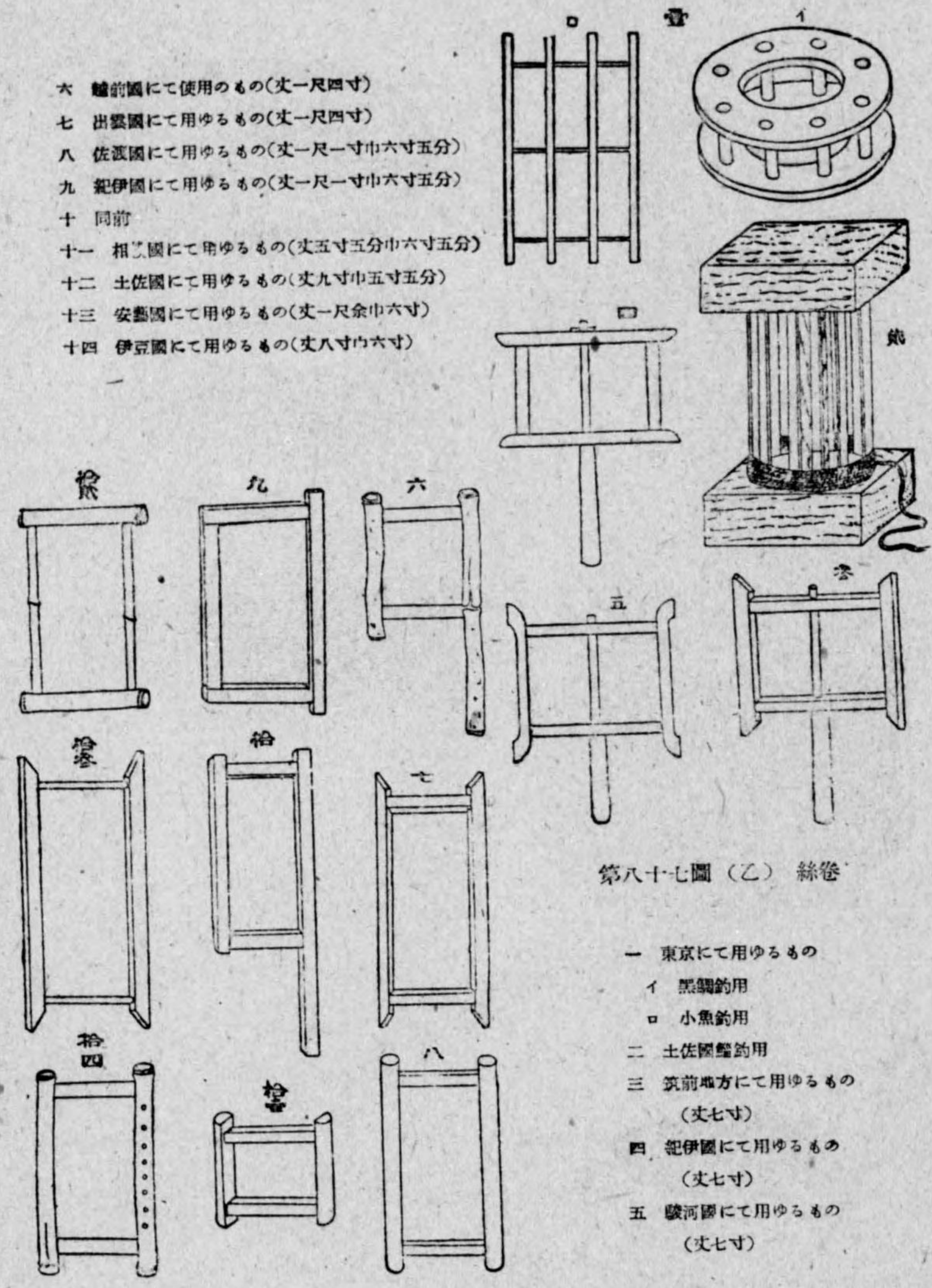


(G) 鱧釣用天秤 (秋田縣)

- イ 緒 絲
- ロ 天 秤
- ハ 沈 子
- ニ 枝 籠
- ホ 釣 鈎

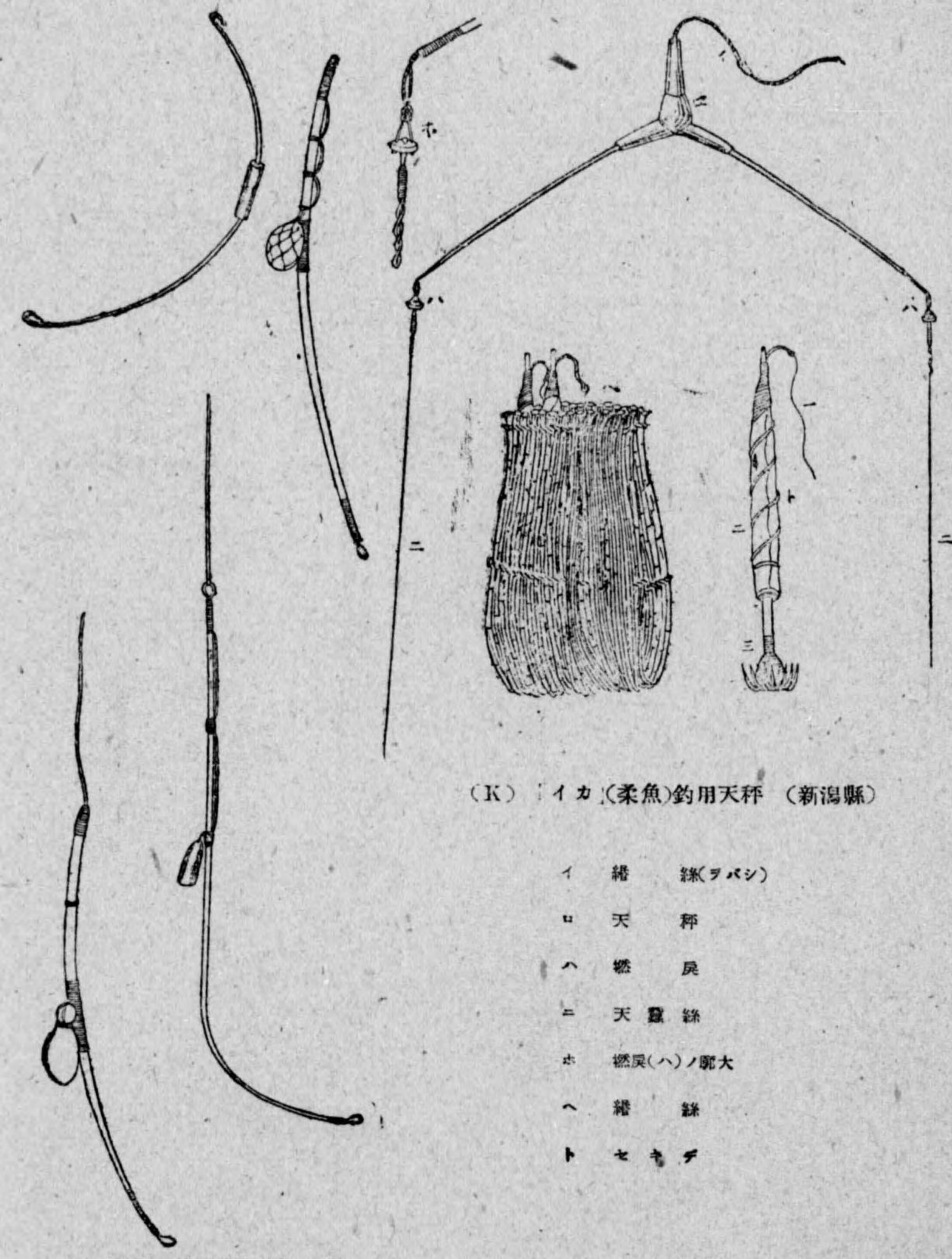
(H) 太刀魚釣用天秤 (廣島縣)

- 六 輪前國にて使用のもの(丈一尺四寸)
- 七 出雲國にて用ゆるもの(丈一尺四寸)
- 八 佐渡國にて用ゆるもの(丈一尺一寸巾六寸五分)
- 九 紀伊國にて用ゆるもの(丈一尺一寸巾六寸五分)
- 十 同前
- 十一 相模國にて用ゆるもの(丈五寸五分巾六寸五分)
- 十二 土佐國にて用ゆるもの(丈九寸巾五寸五分)
- 十三 安藝國にて用ゆるもの(丈一尺余巾六寸)
- 十四 伊豆國にて用ゆるもの(丈八寸巾六寸)



第八十七圖(乙) 糸巻

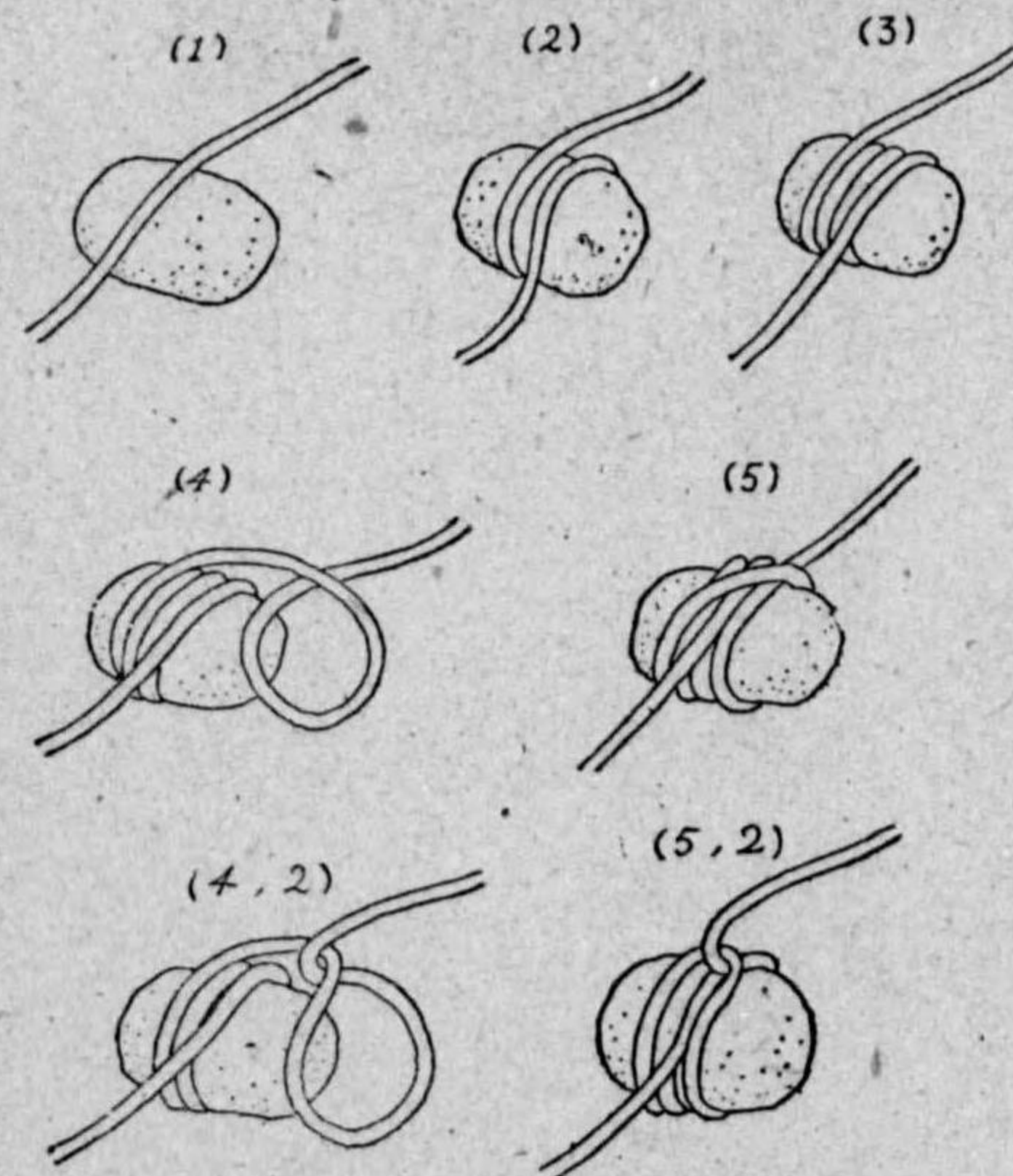
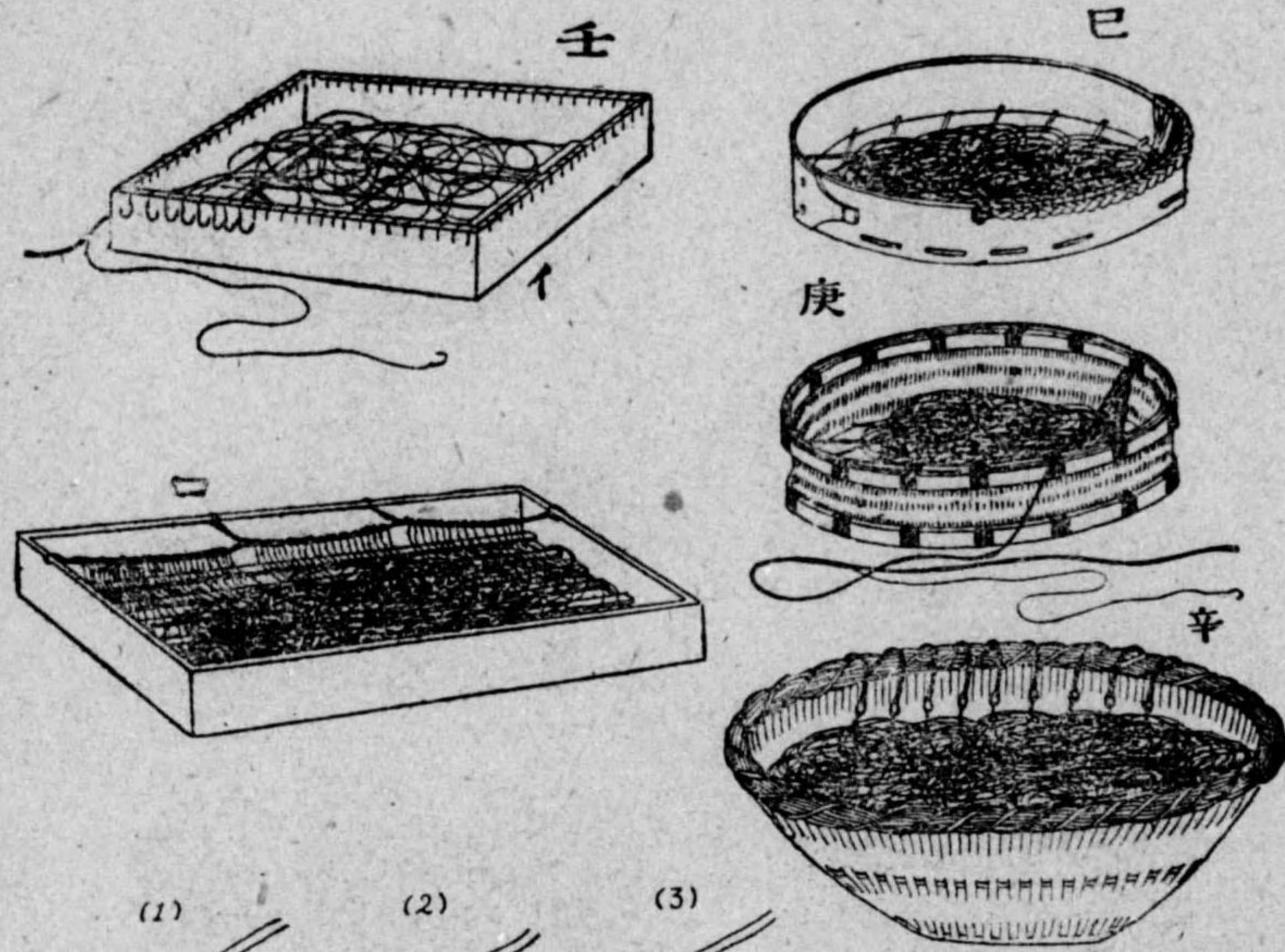
- 一 東京にて用ゆるもの
- イ 黒鯛釣用
- ロ 小魚釣用
- 二 土佐國釣用
- 三 筑前地方にて用ゆるもの(丈七寸)
- 四 紀伊國にて用ゆるもの(丈七寸)
- 五 駿河國にて用ゆるもの(丈七寸)



(K) イカ(柔魚)釣用天秤(新潟縣)

- イ 緒 糸(ワバシ)
- ロ 天 秤
- ハ 懸 戻
- ニ 天 籠 糸
- ホ 懸戻(ハ)ノ脚大
- ヘ 緒 糸
- ト セ キ デ

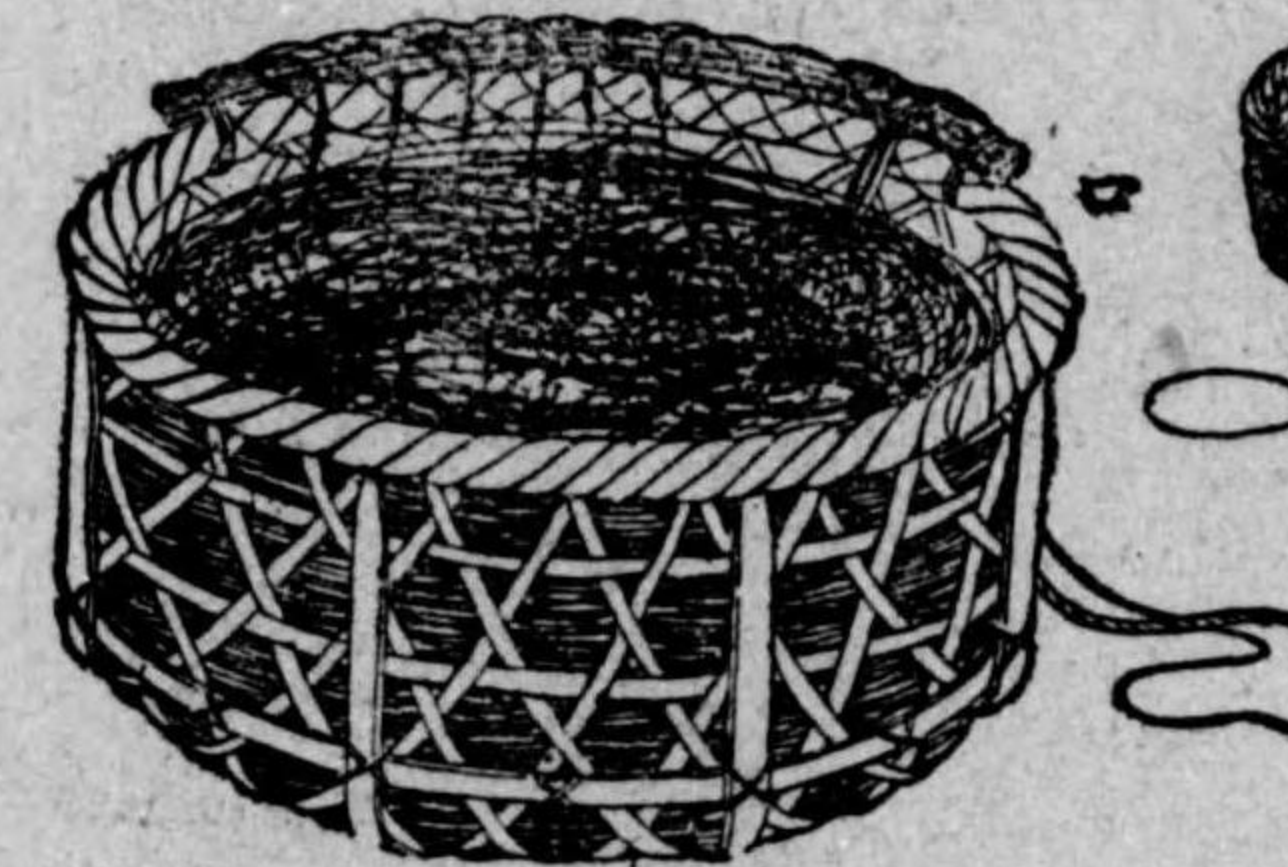
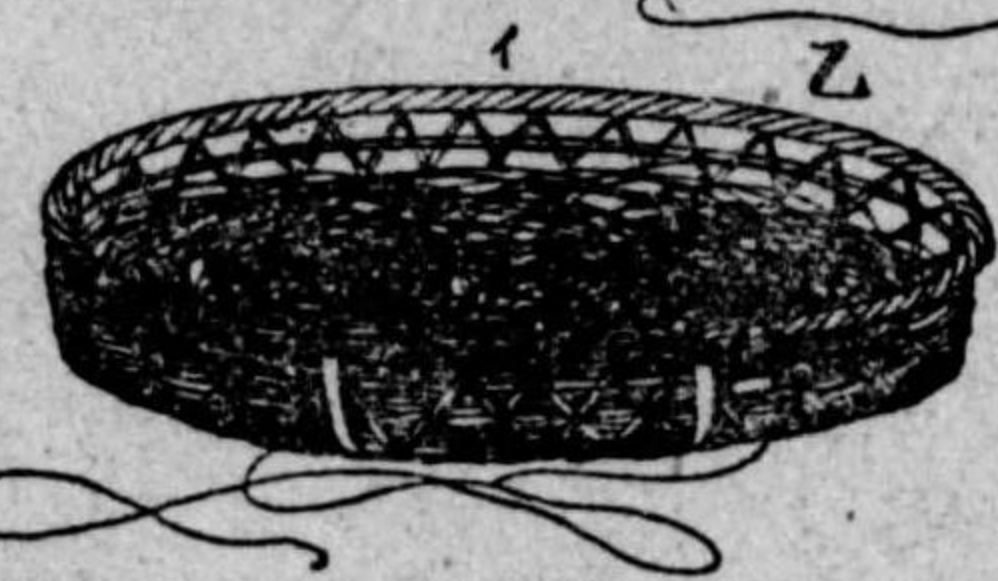
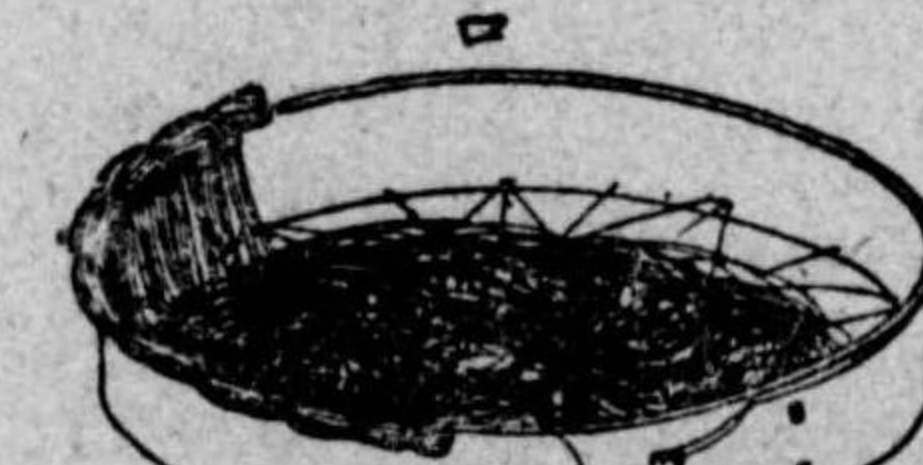
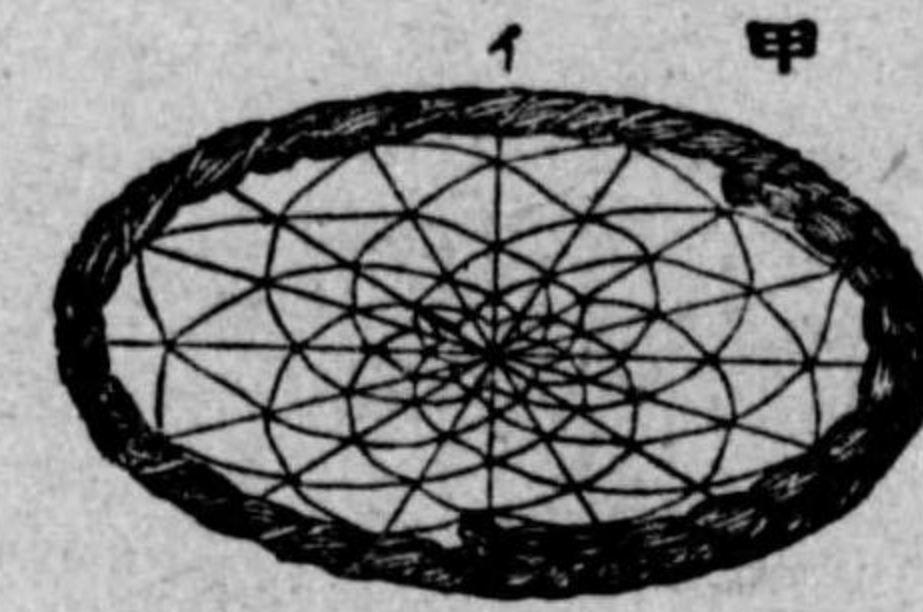
(L) 片天秤の種々



小底延繩に於て幹繩へ沈石の結付法

- 巳 石見國にて使用せる延繩鉢
徑 一尺三寸
- 庚 長門國にて使用せる延繩鉢
徑 一尺三寸
- 辛 筑前國地方にて使用する鮫延繩
橢圓形にして長徑二尺五寸短徑一尺三寸
- 壬 阿波國にて使用する延繩鉢
イ 徑一尺
ロ 長徑一尺五寸短徑一尺

- 甲 東京地方にて使用のもの
イ 徑一尺二寸五分
ロ 徑一尺三寸
- 乙 房州地方にて使用のもの
イ 徑一尺三寸
ロ 房州地方にて使用する鮫延繩鉢
(徑二尺五寸)
- ハ 同前 釣懸部を示す
- 丙 同前 相模國にて使用する延繩鉢の
釣懸部の構造を示す



第八十七圖(丙) 繩鉢種 *

製沈子の普通のもの、球形・圓筒形・圓錐形等種々の形状をなせるものあり、状況に依つて沈子の重量を加減する必要ある場合に於ては、その加除を自由ならしむるものがある。この中には、鉛の薄板を切りて適宜に縲絲に巻付けるものあり、之を「紙ビシ」又は「板ヲモリ」と云ふ。又沈子の内には沈子に長さ適宜の弾力ある金屬製又は木竹製の枝條を附し、その先端に更に適宜の長さの縲絲と釣鉤を附せるものがある。之を天秤と云ひ、「ビシ」を備ふるが故に又「天秤ビシ」とも云ふ。

其他手釣具に於て縲絲を巻き付けて收納するものに木枠を用ひ、延繩を收納するには鉢、籠、「カメ」「コシキ」等と稱する容器を用ふる。之等は木・竹・等を以て、圓形或は方形等種々の形状に構造される。又縲絲の撚りの加除は縲絲の紛亂を招く原因となり、且つ損傷をなさしめやすき故に、必要に應じて、適宜の撚換を附ける。之を「サリカン」「マワシヨリトリ」等と云ふこともある。

第五節 餌料

餌料は又「エド」「エバ」「エサ」「エデ」「エボ」「エ」等と稱せられ、殆ど凡ての釣漁具にこれを用ひて、目的物を誘致し釣獲を全うするもので、重要な要素となり、その適否善悪は漁獲率に重大なる影響を與へるものである。餌料に使用さるゝ材料は誠に種類多く、釣獲すべき目的物の種類に依り、使用の時期或は時刻に依り、甚

しきは其時の氣象状態に依り、或はその場所に依り、釣獲の方法に依り、適種の餌料を異にするものであるが、大體に於て動物質のものが多く使用され、植物質のものは甚だ僅少である。動物質のものに就いて云へば、海に於ては魚類、甲殻類・頭足類・斧足類・腹足類等多く用ひられ、淡水に於ては、昆蟲類・蚯蚓類等が多く用ひられ、植物質のものは米・麥粉・米糠等が主として用ひられて居る。

餌料の種類は勿論其時期其地區に於て、釣獲せんとする目的物が最も多く捕食して居る天然餌料の種類に従ふのを一般に好成绩を得らるゝものとする。これ等の餌料の具備すべき要件に就いて見るに、色彩は餌料の種類に依つて、各固有の色を有するも、其固有色の鮮麗なるを可とするのが一般の如くである。形態も亦固有の形態を有するのであるが、一般には活形を保持するを可とする。特別の場合として、目的物の形態力量に比して割合に餌料の形態が大きく強力なる場合には寧ろ死形を可とすることもある。ことに色彩形態は餌料に就いては通常最も重要な條件なるが如く、活潑なる目的物に對しては之のみを以て足るものと考へられ、擬餌を用ふる場合の如きは、この色澤形態のみを以て、擬餌の効果を擧げて居るのである。次に考ふべきは餌料の味であるが、之は色澤・形態の如く重要ならざるが如きも、全然無視すべきものにも非ざるべきか。殊に沈着なる魚類にして、餌の捕食に靜かなるものに對しては相當の關係を有するものと考へられる。一般に苦・辛・酸の味は不可なるものと考へられるが、鹹味は鹹水に於て使用される場合は、如何程強き鹹味も殆ど影響を認めがたく、淡水に於ても味の影響せざることが多い。果して之等味感に依つて餌料の効果を擧げ得るや否や、多少疑はしき點もあるが、通俗には吾人の食して美味とするものを矢張り餌料の味として、良好なりとされて居る。香氣或は臭氣に就いて

見れば適確には判定し難きも、一般に食用油脂類又は澱粉の焦げ付くが如き、吾人の食慾を刺激する種類の香氣を有するを可とすると認められる。要するに釣鉤を活動せしめつゝ釣獲する場合に用ひらるゝ餌料は、色澤、形態を主とする傾向がある。其活動敏速なるに従つて餌料の効果は色澤・形態のみを以て收め得るのであるが、釣鉤を静止して釣獲する場合に於ては、色澤・形態の外に餌料の味及び香をも考慮する必要がある。更に硬軟の度亦無視し得ざる場合がある。多くの場合適當に柔軟なる餌料を可とする傾向を有する。

餌料を其使用用途に依つて區分すると、大體に装着餌料と、撒布餌料の二種となし得る。装着餌料と云ふのは直接釣鉤に装着して、目的物釣獲に使用する餌料で、刺餌、着餌等と云はれる。撒布餌料は釣鉤に装着することなくそのまま水中に撒布して、目的物をこゝに誘集して釣獲に利便を得るために使用するものである。釣鉤に装着し得ざる細小のものもよく使用され、釣漁具使用の場合のみに限らず、網漁具使用に際しても、魚群誘集のため屢々使用されることあるもので、撒き餌「カブシ」・「カブセ」等とも稱せられ、かくして魚群を誘集することを「カブス」と稱す。

餌料は又其實體の状態に依つて、これを活餌料、鮮餌料、貯藏餌料、人造餌料、及び擬餌に別つことを得る。

活餌料は動物體を生活のまま餌料とするもので、多くの場合最も良好なる餌料となるもので、他の餌料を以てしては釣獲非常に困難なる場合に於ても、活餌料を用ふれば容易に釣獲し得る場合多く、時には一部に於て活餌料を使用し始めたために、附近の他の餌料を使用するものは、皆急に釣獲を減少するが如き現象をさへ生ずることもある。しかし、生活體であるだけに、餌料の運搬取扱上に於ては、一般に甚だ手数を要することを缺點とする。

る。活餌料中最も重要なものは鯉釣りに使用さるゝ鯉活餌であつて、その取扱上に就いては次の如き注意を必要とする。

一 小容積内に游泳することを慣熟せしむること。即ち自然に於ては廣濶なる區域に游泳し居りしものを、取扱ひ上相當狹隘なる範圍に、比較的濃密なる程度に收容することは必要のことであるが、急に游泳範圍を狭小ならしむることは多數の死魚を生ずることゝなるが故に、數段に狭小ならしめて慣熟せしむることが必要であるので、かく慣熟せしめたものを「イケツケ」鯉と云ひ、採捕したるまゝのものを「アラエサ」「アライワシ」と云ふ。

二 容器内の通水を良好ならしむること、即ち小容積内に濃密に收容するがために、内水の流代は勉めて良好ならしむることを必要とする。一小容積内に收容し得る鯉の數量は或る程度迄は、殆ど内水新陳代謝の程度に比例するが故に、充分に通水口を廣くし、或は唧筒を使用して内水を交換代謝せしむる等の方法が講ぜられるのである。

三 餌鯉の活力を漫りに消耗せしめざるために、收容内の水の動搖を防止し陰影を與へて、安靜ならしむること。

四 水溫の上昇をなるべく防止し、水質の變化する場合に適當の處置を講ずること。例へば船内の活魚艙に鯉を收容したるまゝ、河川港に入港するが如き場合は、不適當と認めたる時は、之を他の適當の容器に收容して港外に止め置くが如き、赤潮襲來せる場合に於ては、上層に浮かせたる活魚容器は適當に口を閉塞して逃脫を防

ぎ、赤潮の影響せざる深さに一時沈下せしむる等の方法を講ずることを要す。

五 更に害敵鳥魚の襲撃を防止し、永く蓄藏するときは相當に餌料を給與して活力を失はざらしむること。鮮餌料は動物體の新鮮なるものをそのまま餌料とするもので、餌料自體に活動なきものであるが、餌料としては最も多くの場合に使用され、色澤形態は一般に新鮮なるもの程良好であり、餌料効果も亦新鮮度高きもの程優良である。従つてなるべく新鮮度を失はざらしむる様な取扱を必要とする。用途に適當なる大きさのものは一個體をそのまま使用する。之を丸餌と稱する。場合により必要の大きさに達せざるの餌料は、二個體又は數個體を一本の釣鉤に刺し、或は細絲を以て適當の大きさに結束して使用する。必要以上に大型の餌料は數片又は數十片に切斷して使用する。之を切り餌と云ふ。余りに大ならざるものは筒切(或は輪切とも云ふ)にし、甚しく大なるものは、三枚に卸して短冊切とする。切餌に於ては釣獲目的魚種と同種類の魚肉を以て餌料とすることが屢々ある。之を友餌と云ふ。鮮餌料の効果は一般に活餌に次いで良好とされて居り、運搬取扱上に於ては殆ど不便なきものであるが、貯藏に堪へ難き缺點がある。餌料採捕後余りに永からざる時間内に使用することを要し、従つて餌料供給の圓滑を缺くこと多く、又長時日の出漁に不便を感じるがため、自然多くは出漁前に餌料を採捕して自給され、沿岸の釣漁にのみ使用さるゝの傾向がある。

貯藏餌料は主として鮮餌料を永く貯藏に堪へしめ、餌料の供給を圓滑ならしめ、或は長時日の出漁に使用するため、種々の貯藏方法を講じたものであるが、更に進んで人工を加へて、餌料の効果を一層増進せしむるに至れるものもあるのである。貯藏の眼目はなるべく鮮餌料と差異なからしむることにあるので、色澤・形態及び硬軟

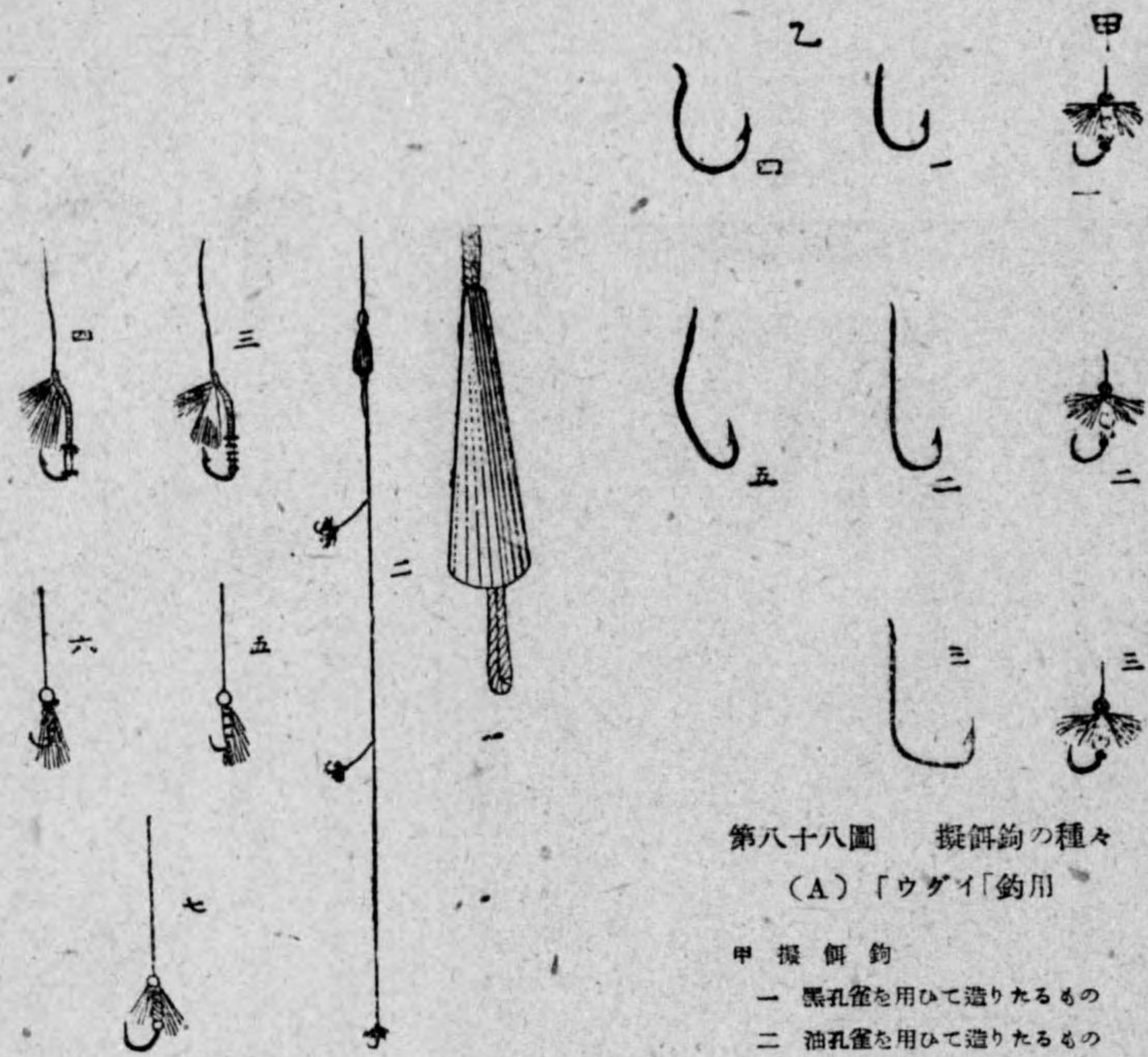
の度を失はざることに留意さるべきである。貯藏の方法としては鰯の如く素乾品とすることも稀にあれども、このものは勿論効果は遙かに低下する缺點を有する。最も普通の方法は鹽藏であるが、餌料としては鹹度の強きことは著しき障碍となることなきを以て、貯藏に充分堪へしむるため一般に充分に食鹽が加へられるのである。色澤を損せざるがためには明礬を加へ、或は鹽糠を用ひる等の方法が用ひられる。鹽藏餌料のおもなる缺點は、肉質を硬化脆弱ならしむる點にある。近時最も良好なる貯藏方法として、冷凍法の用ひらるゝものあるに至つて居る。冷凍餌料は餌料を冷凍機を以て冷却して凍結せしめたもので、之を冷蔵庫に收納し、又は氷藏して寒冷に保ちて、凍結を融解せしめざれば永久的に貯藏し得るので、使用の際適當に凍結を融解すれば冷凍のために幾分餌料肉質を粗糙ならしむる傾向はあれども、概して凍結當時の鮮度を保ち得て性能が鮮餌料と差異なく貯藏餌料としては最も好結果を得らるゝものである。

餌料を貯藏の域より脱して、更に人工に依つて餌料の効果を著大ならしめたるものゝ内、最も重要なものは「油イカ」である。「油イカ」は主として「スルメイカ」(*Onnastrephes sloani pacificus*)を普通の鰯に製造する如く、外套腹部を割き内臓を除去し、よく水洗して、乾し、適度に乾燥したるとき、(外觀は充分乾き指頭を以て肉を押せば凹痕を残し得る程度)一枚宛魚油に浸して揚げ、木桶の如き容器内に空隙なき様、底部より順次に並列積み重ね約六七分量にて止め、その上に魚油を少量(約鰯を覆ふ程度)注入して、二、三日冷所に放置し鰯が此魚油を吸収し終りたらば取り出して、鰯の下積上積を交代せしめて前同様に適量の魚油を注加し、再び數日間放置し斯の如く數回繰り返し、鰯が充分魚油を吸収して柔軟となり注入せる魚油の減量せざるに及べば、少しく

多量の魚油を注加して、鰯が充分沈む程度とし数日間冷暗所に貯蔵するのである。かくして製造完了せる鰯は甚だ柔軟となり、淡赤色を帯びて新鮮なる「イカ」に酷似するに至るのである。この製造に使用する魚油は、玉筋魚油を優良とし、時に鱈油の優良なるものを代用することもある。油漬「イカ」は鯛類の釣獲に最も賞用される餌料にして、目的物の大きさに應じ鮮餌料と同様に、適當の大きさに切斷して使用されるのである。

人造餌料は米・麥の粉末・魚油・魚肉等種々の材料を目的物の種類、使用の場所、方法、時期等に應じ、適當に混和して製造するものである。淡水に於て使用されるものが多い。特に遊漁に於て使用されるものはよく研究され、各種の場合に對し混和さるべき材料の種類、分量、混和方法等は一種の秘傳の如くに傳へらるるものがあるが、何れも多くは澱粉質の如き粘質の物質を主體とし、魚肉・昆蟲類・蚯蚓の如き蟲類、時には蛇の脱皮等の如きものを少量混和され、刺餌としては使用の便利上相當の粘着凝集力を有せしめ、其香味は嚴密に吟味されるものである。撒餌として人造餌料を使用することは漁業上にも度々見られるところであるが、この場合は勿論刺餌の如く凝集力を必要とせぬ。

擬餌は眞正の餌料に非ざること勿論であるが、其使用されるは餌料と同一の意味を以て使用せらるるもので、其材料は金屬・角・骨・皮・羽毛・介殼・木竹の類が多く用ひられ、淡水に使用するものには多く昆蟲類に、海中に使用するものには多く小魚類・甲殼類等、目的物の種類と其の場合に最も適良なる眞正餌料の形態・色澤に酷似せしめて製作され、多くは釣鉤に固着せしめて使用を輕便ならしめて居る。金屬としては、鉛、錫「ニッケル」眞鍮等が多く使用され、其金光銀光の光輝を利用し、適當に造形し兼ねて



第八十八圖 擬餌鉤の種々
(A) 「ウグイ」釣用

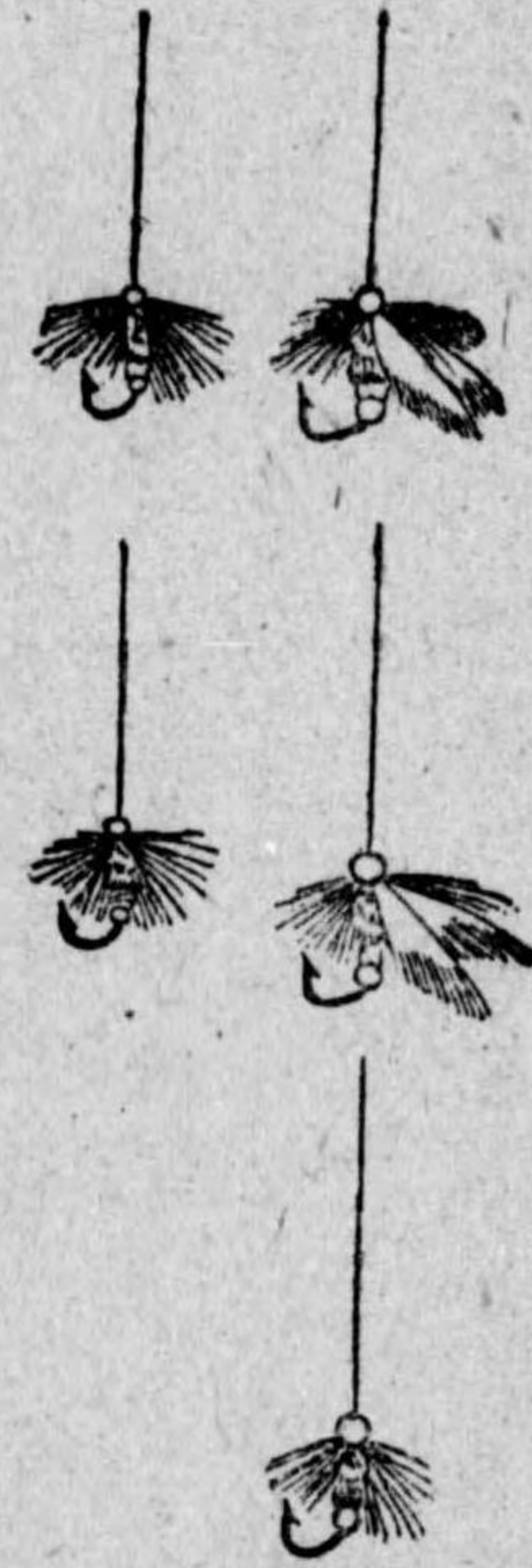
- 甲 擬餌鉤
 - 一 黒孔雀を用ひて造りたるもの
 - 二 油孔雀を用ひて造りたるもの
 - 三 紅孔雀を用ひて造りたるもの
- 乙 釣鉤の形状
 - 一 東京近傍にて使用するもの
 - 二 式部及び上野國にて使用するもの
 - 三 加賀國にて使用するもの
 - 四 越後國にて使用するもの
 - 五 上野國利根川にて使用するもの

(B) 鮎釣用

- 一 沈子
- 二 装置の全形
- 三、四、相模國馬入川地方にて使用の釣鉤
- 五、六 加賀國にて使用の釣鉤
- 七、土佐國にて使用の釣鉤

釣鉤に適度の沈降力を與へ、以て使用を容易ならしむるを主眼として用ひられる。角骨類に於ては牛角、水牛角、鹿角、鯨骨、鯨鬚、魚骨（旗魚の吻端の如き）の如きものが多く使用され、その白色或は帶黑色等の水中に於ける特殊の色澤を利用し、金屬類と略同様の意味に使用される。介殼類にありては鮑、蠔、真珠介、夜光介等が多く用ひられ、其真珠光を利用し前述の金屬或は角骨類を以て造れる擬餌主體に、小片を嵌入象眼して使用されること多きも、又之を以て前述の金屬類の如く擬餌の主體を構成することもある。羽毛類に於ては多く鳥類の羽毛が用ひらるゝのであるが、時には羊毛絲、綿絲類等の用ひらるゝこともある。多くは白色、赤色、褐色、時には紫光黑色のものを單一に、或は相混入して用ひられ、擬餌の主體に附加して適當に紛飾して、眞正餌料の形態、色澤に一層酷似せしむるために用ひられるのであるが、時には之を以て、擬餌の主體たらしむることもある。皮類では多く魚皮（フグ皮、イシナギロ中皮等）が用ひられ、細長の切片として羽毛と略同様に擬餌の主體に附し、形態・色澤を紛飾するために用ひらるゝことが多い。

擬餌は形態・色澤のみを以て、眞正餌料と同等の効果を擧げんとするものであるが故に、此形態・色澤は最も細心の注意を以て選擇構造せざるべからず。空中に於ては如何に眞正餌料に酷似するとも水中に於ては色澤及び活動動態が相似されば、餌料効果は殆ど期待し得ぬのである。故に要領を得たる擬餌は、空中に於ては一見何の餌料を模したるものなるや判じ難きものも、水中に於ては眞正餌料に酷似するが故に、よく顯著なる効果を示すのである。色澤は使用時の水の清・濁・天候の晴・曇・寒・熱・風向・風力等に依つて、適應色澤を異にすること甚だ顯著なるものがある。殊に鮎、鱒等淡水のものを目的とする場合は、一層之が顯著であるが、一般に於ては



(C) 「ヤマベ」釣用

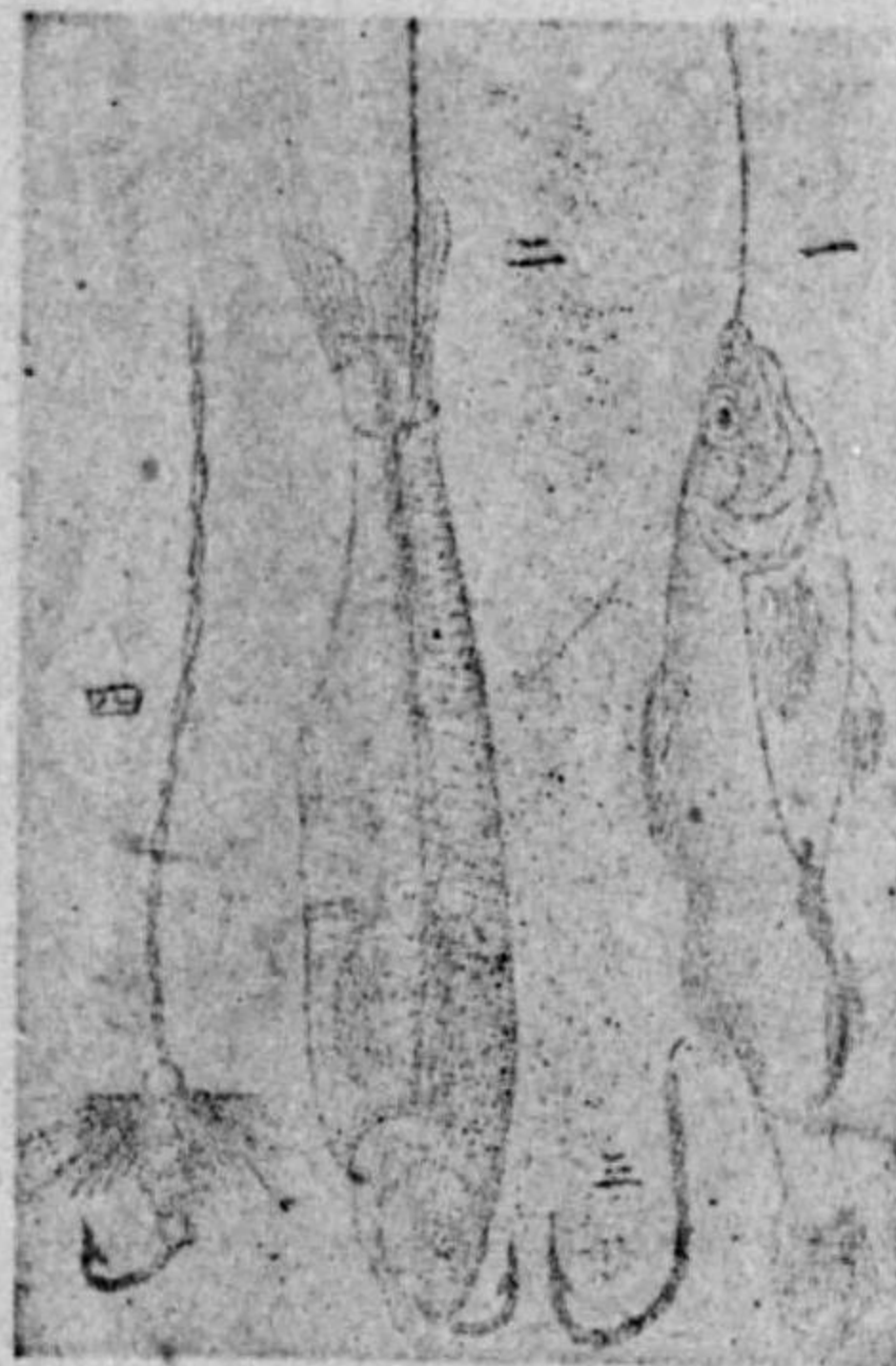


第八十九圖 各種擬餌鉤

- (1) 鮎延用
- (2) 鱒延用
- (3) 鱒延用
- (4) いか(するめいか、キリいか)手釣用(靴は鉛を用ふ)
- (5) 鱒釣用(擬餌釣竿に使用の牛角を主軸として居るもの)
- (6) 鱒釣用(頭部鱗鬚を附せるもの)
- (7) 小鱒釣用

濁水、曇天の場合には鮮麗濃厚の色澤のものを可とし、海中に使用する場合は白色又は白色に近い淡色のものを可とする傾向がある。

擬餌を以て効果を収め得る目的物は、常に生活體を捕食し居る性質猛烈敏捷なるものであることを要する。静止物を捕食する沈着なる性質のものに對しては、擬餌は殆どその効果を擧げることを得ぬものである。尙ほ使用上より云ふも、なるべく真正餌料に酷似せしめるためには、擬餌を運動せしめつゝ使用する方が容易に酷似せしめ得るが故に、擬餌の使用は絶えず運動せしめつゝなすを原則とする。従つて運動に都合よき、水面か又は比較的淺層に於て使用さるゝを普通とする。



第九十圖 裝餌法の種々
(A)「ハス」釣用
一 小魚の口より刺したる例
二 小魚の尾部より刺したる例
三 右に使用する釣鉤の形状
四 同用擬餌鉤

餌料殊に刺餌の大きさは目的物の大小に従ひ、又釣鉤の大小に従ふを普通とするが、目的物に對して稍々大形の餌料は目的物をして強烈に捕食せしむる傾向を示し釣鉤に對して稍々小型の餌料は目的物に餌料のみを奪はるゝ傾向を示す。

刺餌を釣鉤に装着する方法、即ち裝餌法は餌料の效果に甚大の影響を與ふるものであるから、深く注意する必要がある。裝餌法は餌料の種類目的物の種類使用の方法等に依つて、相當に要領を異にする必要あるものであるが、一般

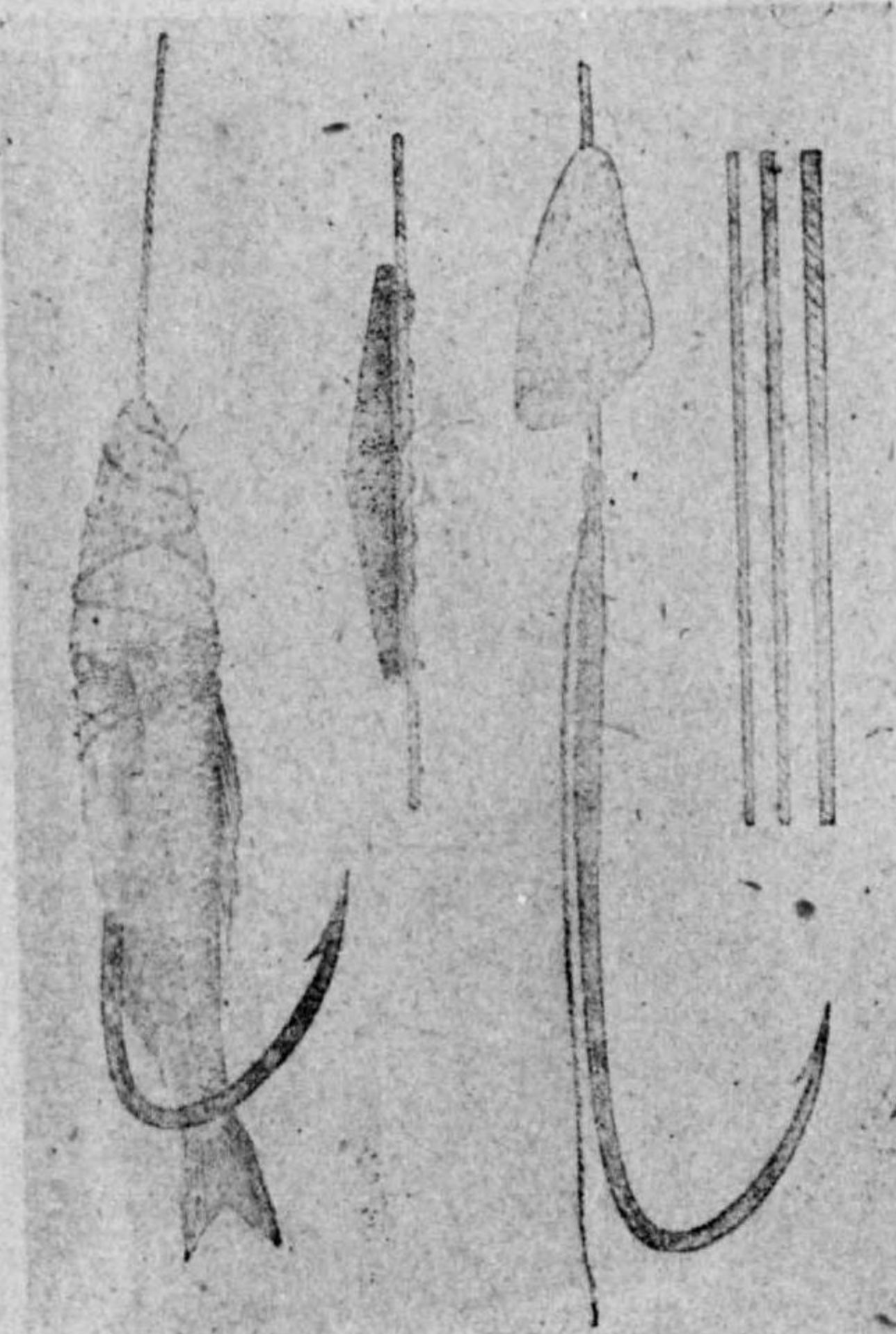
成績に重大なる影響を與へるものであるが故に、裝餌方法容易なるものを選び又その方法に熟練することは相當重要な事項となす。

二 裝餌の確實なること。——この點は特に機敏にして強力なる目的物に對しては、相當重要な事項と見るべきである。切餌中特に短冊切のものが、多くは釣鉤尖端を肉の側より刺して皮の側に刺

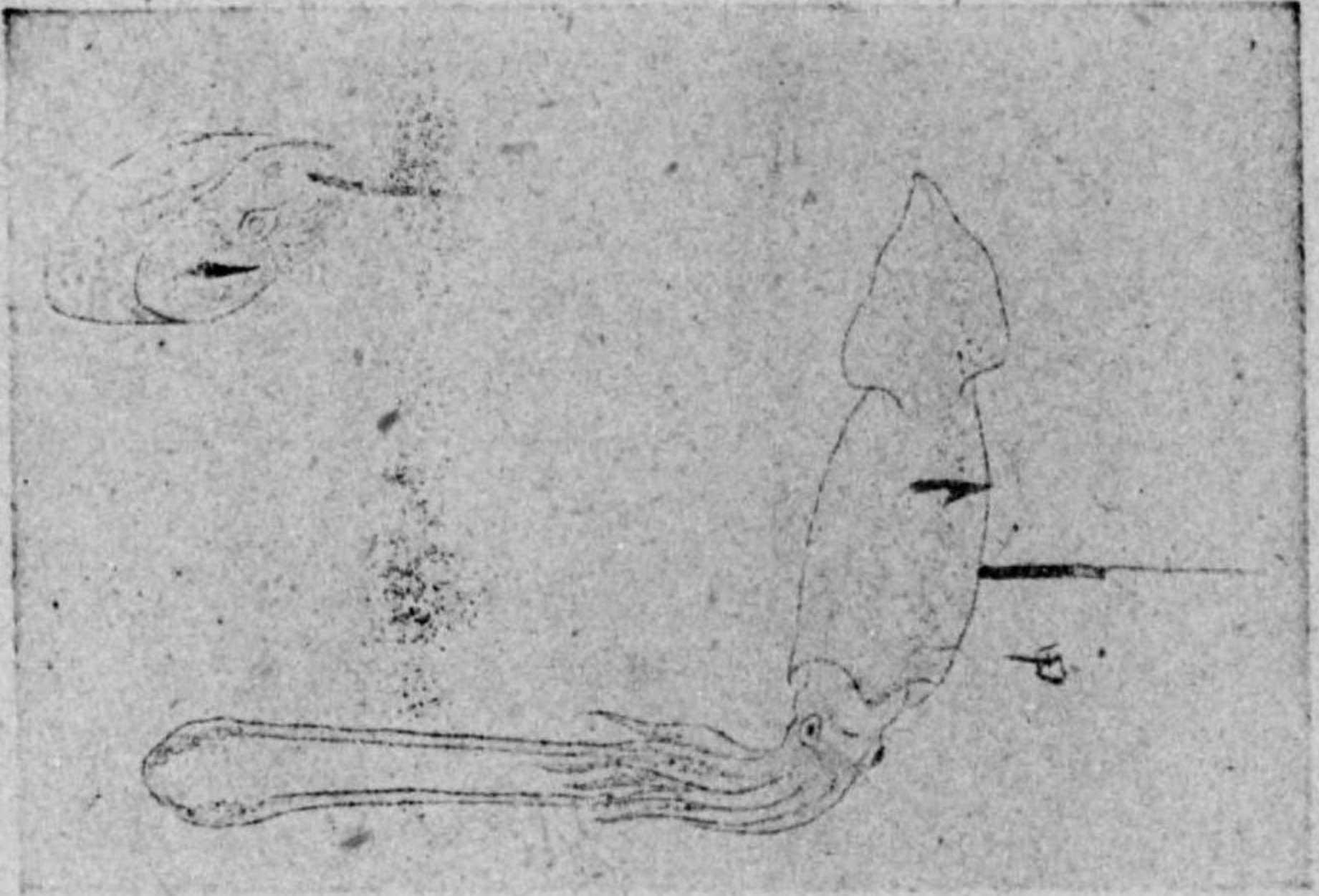


(B)「ナマス」釣に蛙を用ひたる例
一 東京にて使用のもの
二 上野國館林地方にて使用のもの
三 羽後國秋田地方にて使用のもの
四 加賀國にて使用のもの
五 越前國にて使用のもの
六 近江國琵琶湖にて使用のもの
七 餌料

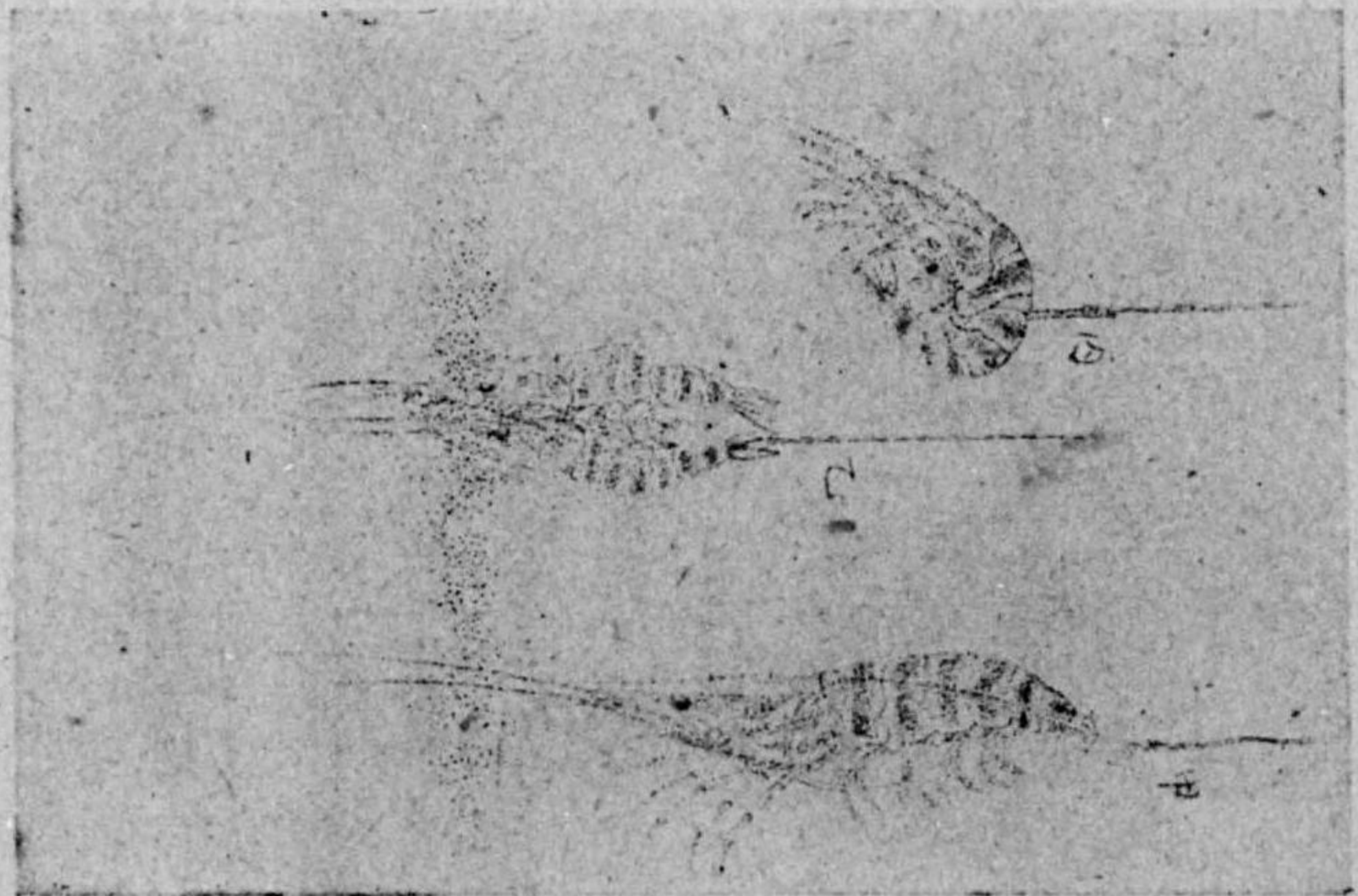
的には次の如き要點に就て考慮すべきである。
一 裝餌の迅速容易なること。——この點は一時に多數の釣鉤を使用する場合、或は釣獲頻數なる場合等に於ては漁獲の



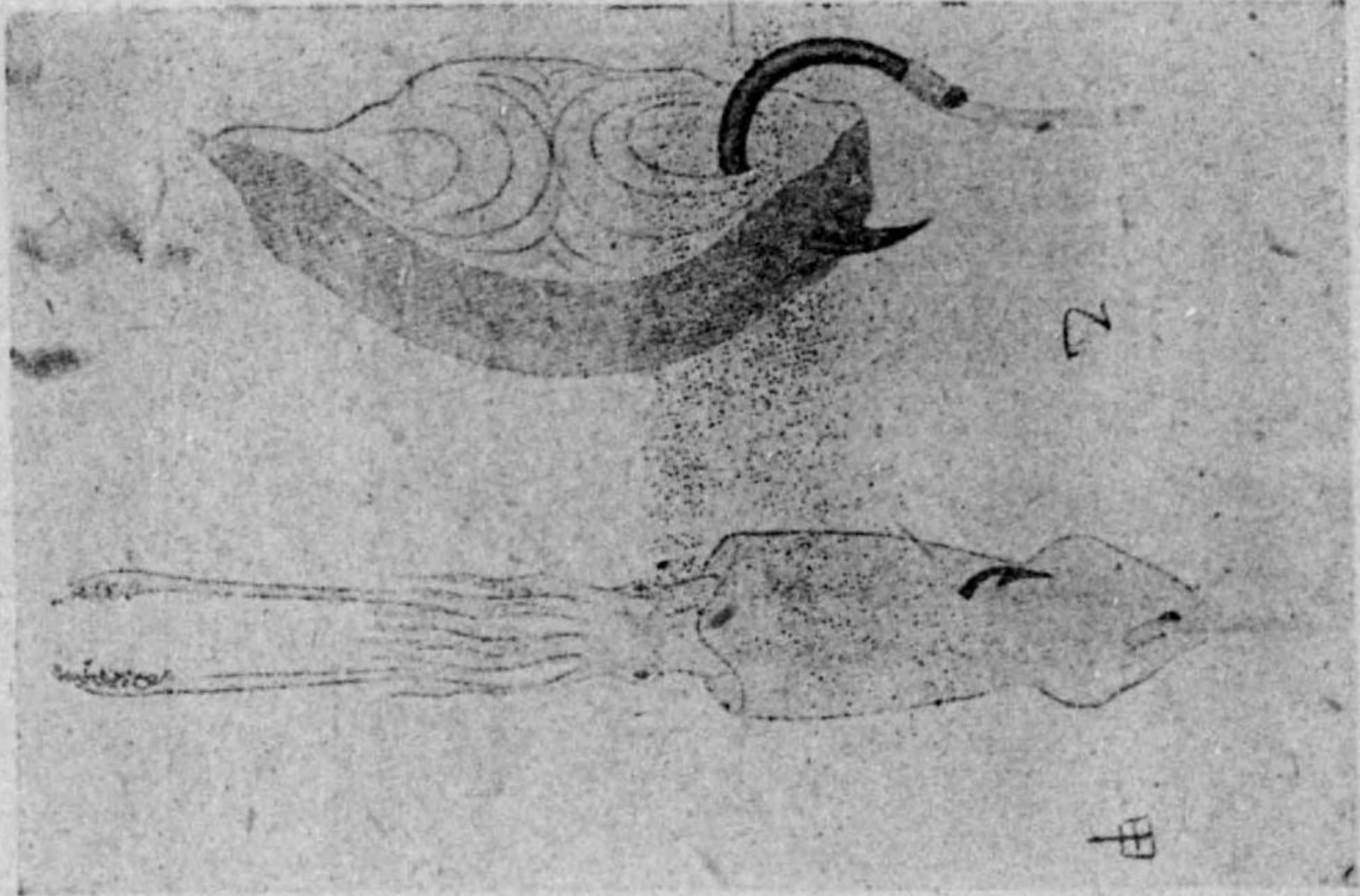
(C) 鱒 曳 繩 用



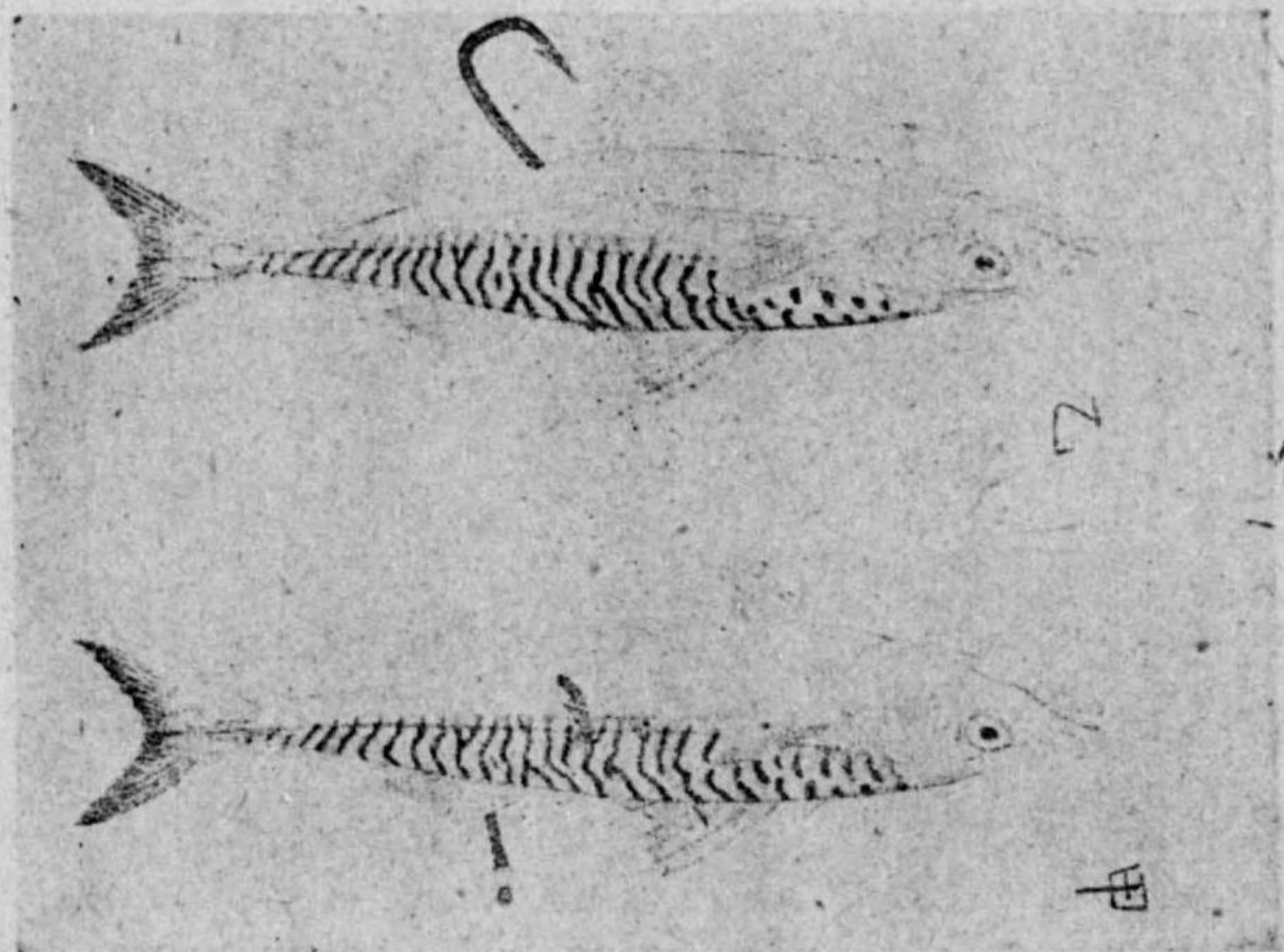
甲 鱒延種釣 (柔魚)
乙 同 上(断切例)



甲 鱒 釣(蝦延種の例)
乙 丙 (同二尾同時に延獲の例)



甲 鮎 延種(イカ延種の例)
乙 鮎 延種(魚肉延種の例)



甲 鮎 手 釣(延種延種の例)
乙 同 引 網(鮎延種の例)

るゝ場合に、よく見らるゝ方法で、之等の場合は多く沈着伶俐なる魚類に對して使用さるゝからである。海中に使用される餌料にして、丸餌・切餌等に於て甚しく釣鉤の露出せる装餌をなしあるは、目的物が余りに敏感ならざると、装餌を容易ならしむる等のためである。

各種餌料の用途表

種 類	使用 法	使 用 地 方 名	種 類	使用 法	使 用 地 方 名
背黒鰻	活魚	臺灣・鹿兒島・愛媛・千葉・山形・石川・京都・朝鮮	ごかい	活餌	愛媛・福島・福井
鰻腹皮	短冊切り	臺灣	しゃこ	鮮餌	愛媛・岡山・徳島・千葉・宮城・京都・鳥取・鳥根・山口・朝鮮
二番柔魚	鮮餌切身短冊	鹿兒島・静岡・宮城・青森・秋田・新潟・富山・京都・福岡・佐賀	玉筋魚	活餌	愛媛・廣島・京都・福岡
蛤	鮮餌切身又ハ一尾ガケ	鹿兒島・大分・愛媛・廣島・茨城・福島・新潟・福井・長崎・朝鮮	鯉	鮮餌一尾又ハ切身	愛媛
真鰻	死魚切身又ハ一尾	鹿兒島・宮崎・愛媛・三重・神奈川・石川・京都	みゝいか	活餌	愛媛・廣島・大阪・神奈川・鳥根
一番柔魚	鮮餌切身又ハ一尾	鹿兒島・山形・長崎	ぎそゝ蟲	鮮餌切身又ハ一尾ガケ	愛媛・香川・兵庫・徳島
飯蛸	鮮餌	宮崎・廣島・京都	たけぞう蟲	鮮餌切身	岡山・香川・福岡・長崎
鰻(しら)	活魚	宮崎・岡山・石川・京都	べいか		岡山・徳島
柔魚	鮮餌	宮崎・愛媛・三重・神奈川・石川・福岡・京都・鳥取・關東州	ちこべかだに		岡山
蠶	活餌	茨城・福島・山口・福岡・長崎	赤蝦		廣島・岡山・徳島・山形・石川
			手長蛤	鮮餌切身	岡山・香川・大阪・徳島・京都
			海月	鮮餌切身	鳥取・鳥根・山口・福岡・佐賀

油柔油	適宜ニ切りテ使フ	徳島・茨城・福島・宮城・石川・福井・鳥根・關東州	岩蟲	鮮餌	石川・鳥取
まむし		徳島	八ツ目鰻	煮沸し一寸位ニ切ル	京都
かわつ蝦	活餌	三重	しらひげ蝦	鮮餌一尾ガケ	鳥取・鳥根
まどう蝦	鮮餌一尾ガケ	静岡	川蝦		鳥根
二番柔魚子	鮮餌一尾ガケ	静岡	もろぎ蝦	活魚	鳥根
柔魚ノ内臓	鮮餌一尾ガケ	静岡	ささいか		鳥根・福岡・佐賀
車蝦	活魚	千葉	かつちり		鳥根
鰻	活餌	千葉・山形	鯖		鳥根
或種ノいそぎん	活餌	千葉	おこうむし	鹽漬十尾巻キ	山口
ちやく	鮮餌切身	茨城	鱈	水煮後輪切	山口
しんご	鮮餌切身	徳島・福島・宮城・長崎	ちんちろ蟲	活餌	福岡
海蟹	一尾ガケ活餌	北海道・富山・福井・鳥根・福岡・長崎・佐賀	鹽漬鱈	一尾掛ケ	福岡・佐賀
鱈	活魚	秋田	黒蟲	煮沸シテ使用	佐賀
鱈喘蝦	鮮餌切身	秋田	秋刀魚	鮮魚三ツ四ツ掛ケ	長崎
盲目鰻	鮮餌筒切り	秋田・新潟・鳥根	銀	活魚	長崎
すむし	鹽漬	山形	こち	活餌	長崎
ほたるいか	鹽漬	山形	おだむし	活餌	熊本
こうなご	生餌	山形	樂吉類(ランチトウ)	活餌	關東州
大羽鰻	鮮餌一尾	新潟・長崎		小ナルハ・一尾	
かざみ	鮮餌切身	新潟		大ナルハ切身	
うで海鼠	切身	石川・京都・佐賀			

赤蝦	鱒	愛媛縣ニ於テ鱒ヲ一尾ガケトシテ使用ス	狗母魚釣	柔魚	鮮餌一尾	大分
				飯蛸	岡山	岡山
海鰻	海鰻	開キテ釣具ニ 結付ク	串刺シ	海鰻	岡山・愛知	岡山
				鰯ノ眼球	岡山	岡山
眞鮫	眞鮫	鮮餌切身	鮮餌切身	眞鮫	香川	香川
				茂吉蟹	大阪	大阪
陸蟹	陸蟹	鮮餌切身	鮮餌切身	陸蟹	大阪	大阪
				ハツ目鰻	山形	山形
ハツ目鰻	ハツ目鰻	生ノ切餌	生ノ切餌	ハツ目鰻	山形	山形
				ヤリ柔魚	富山	富山
ばい	ばい	生ノ切餌	生ノ切餌	ばい	山形	山形
				カサゴ釣	千葉縣ニ於テ海鰻ノ切身ヲ用フ	
眞蝦	眞蝦	活餌	活餌	眞蝦	岡山・大阪・神奈川	岡山
				玉筋魚	岡山	岡山
あぶらめ	あぶらめ	鮮餌筒切り	鮮餌筒切り	あぶらめ	岡山	岡山
				海鰻	大阪	大阪
しやこ	しやこ	鮮餌筒切り	鮮餌筒切り	しやこ	神奈川	神奈川
				鱒		
はちめ釣	はちめ釣	活餌	活餌	二番柔魚	山形	山形
				鰯柔魚	山形	山形
眞鰻	眞鰻	鹽漬又ハ生	鹽漬又ハ生	眞鰻	山形	山形
				うるめ鰻	山形	山形
八ッ目鰻	八ッ目鰻	生ノ切餌	生ノ切餌	八ッ目鰻	山形	山形
				ヤリ柔魚	富山	富山
ばい	ばい	生ノ切餌	生ノ切餌	ばい	山形	山形
				カサゴ釣	千葉縣ニ於テ海鰻ノ切身ヲ用フ	

赤蝦	鱒	愛媛縣ニ於テ鱒ヲ一尾ガケトシテ使用ス	狗母魚釣	柔魚	鮮餌一尾	大分
				飯蛸	岡山	岡山
海鰻	海鰻	開キテ釣具ニ 結付ク	串刺シ	海鰻	岡山・愛知	岡山
				鰯ノ眼球	岡山	岡山
眞鮫	眞鮫	鮮餌切身	鮮餌切身	眞鮫	香川	香川
				茂吉蟹	大阪	大阪
陸蟹	陸蟹	鮮餌切身	鮮餌切身	陸蟹	大阪	大阪
				ハツ目鰻	山形	山形
ハツ目鰻	ハツ目鰻	生ノ切餌	生ノ切餌	ハツ目鰻	山形	山形
				ヤリ柔魚	富山	富山
ばい	ばい	生ノ切餌	生ノ切餌	ばい	山形	山形
				カサゴ釣	千葉縣ニ於テ海鰻ノ切身ヲ用フ	
眞蝦	眞蝦	活餌	活餌	眞蝦	岡山・大阪・神奈川	岡山
				玉筋魚	岡山	岡山
あぶらめ	あぶらめ	鮮餌筒切り	鮮餌筒切り	あぶらめ	岡山	岡山
				海鰻	大阪	大阪
しやこ	しやこ	鮮餌筒切り	鮮餌筒切り	しやこ	神奈川	神奈川
				鱒		
はちめ釣	はちめ釣	活餌	活餌	二番柔魚	山形	山形
				鰯柔魚	山形	山形
眞鰻	眞鰻	鹽漬又ハ生	鹽漬又ハ生	眞鰻	山形	山形
				うるめ鰻	山形	山形
八ッ目鰻	八ッ目鰻	生ノ切餌	生ノ切餌	八ッ目鰻	山形	山形
				ヤリ柔魚	富山	富山
ばい	ばい	生ノ切餌	生ノ切餌	ばい	山形	山形
				カサゴ釣	千葉縣ニ於テ海鰻ノ切身ヲ用フ	

鱈	活魚	石川・福井・鳥根
柔魚	鮮餌切身	福井・山口
平子鱈	鮮魚一尾ガケ	京都
しらす	鹽漬十尾ガケ	山口
真蝦	活餌	岡山
さつば	活餌	岡山
鱈	活餌	岡山・徳島・三重
柔魚	鮮餌切身	岡山・宮城
蛸	鮮餌切身	岡山・兵庫・徳島
きす	鮮餌	岡山・朝鮮
つなし	活餌	岡山
玉筋魚	活餌	香川
鱈	活餌	香川
手長蛸	鮮餌一尾又ハ切身	香川・大阪・徳島
赤蝦	活餌	兵庫・徳島
飯蛸	活餌	兵庫・大阪
秋刀魚	鹽漬	兵庫
鳥介	鹽漬	大阪

ぐち 釣 (延縄)

小鱈	活魚	徳島・高知・朝鮮
るりいか足	活魚又ハ鹽漬	徳島
鱈	活魚	徳島
仔鱈	活魚又ハ鹽漬	徳島
背黒鱈	活魚	宮城
背黒鱈	活魚	臺灣
小蝦	活餌	臺灣
真蟲	鮮餌切身	岡山
ちろり	活餌	岡山
穴しやこ	活餌	岡山・長崎
赤蝦	活餌	岡山・徳島
しかた蝦	鮮餌切り身	岡山
蛸	鮮餌切り身	岡山
しらさ蝦	鮮餌切り身	徳島
鱈	鮮餌切り身	關東州

赤 鱈 釣

臺灣ニ於テ活魚ノ儘頭部ニカケタル背黒鱈ヲ使用ス

五目鯛釣	沖繩ニ於テ蝦ヲ使用ス	
鱈	鮮餌切身	宮崎・神奈川
蝦	活餌	大分
しらす	鹽漬	高知・千葉
車蝦	鮮餌切身	愛知
二番柔魚	活餌又ハ鹽漬	静岡
鱈	生貝	神奈川・佐賀
なみのこ	生貝	千葉
鮎釣	關東州ニ於テハ鱈ノ細切又ハ小鱈ノ細切ヲ使用ス 北海道ニ於テハ柔魚ヲ使用ス	
黄華魚釣	關東州ニ於テハ鱈、鮮餌一尾ガケ又ハ切身、さつばモ同ジ様ニシテ使用ス	

海 鱈 釣

岩手縣ニ於テ生玉筋魚ヲ使用ス		
鱈	鮮餌切身	岡山
さつば	鮮餌切身	岡山
赤蝦	鮮餌	岡山・徳島
ゑさだ蝦	鮮餌	岡山
手長蛸	鮮餌	岡山
玉筋魚	鮮餌(頭ヲ取ル)	岡山
鯖	鮮餌	大阪・朝鮮
さいら	鹽漬	大阪・徳島
團子	鹽漬	大阪
しらす	鹽漬	徳島
蛸	鮮餌短冊切り	徳島
二番柔魚	鮮餌短冊切り	秋田
鱈	鮮餌切身	秋田
こうなぎ	活餌	山口
盲目鱈	鮮餌切身	朝鮮

こらなご	活魚	山形
養鳥賊	活餌	富山
柔魚	鮮餌切身	石川・朝鮮
手長蛤	鮮餌切身	關東州
鰈	鮮餌切身筒切り	關東州
あいなめ	鮮餌筒切り	關東州
鯖	鮮餌筒切り	關東州
小鱈	鮮餌筒切り	關東州
鱈	鮮餌切身	關東州
玉筋魚	活餌	岩手

柔魚ノ仔	富山	
めじか釣	高知縣ニ於テしらすヲ鹽漬セシモノヲ一尾又ハ數尾ヲ使用ス	
かじか釣	宮城縣ニ於テ蚯蚓ヲ使用其ノ他川釣ニモ使用ス	
鱈釣	鮮肉 皮ヲ剥キテ用フ 一尾カケ 適宜・切り身	岡山 岡山 石川 石川
こぶだひ釣	岡山縣ニ於テ赤蝦ヲ尾ヨリ腹ニカケテ使用ス	
かぎ延繩	岡山縣ニ於テ玉筋魚ヲ肛門ニ懸ケテ使用ス	
すげ延繩		

岡山縣ニ於テ	岡山縣ニ於テむいゑびヲ頭ト尾ヲ去リテ使用ス
ふぐ釣	
岡山縣ニ於テ	船ハ脚部皮膜ヲ剥脱シテ用ヒ柔魚ハ三角位ニ切り針金ヲ貫キ釣鉤ニ縛シテ使用ス其ノ他白蝦・赤蝦ヲ使用ス 山口縣ニ於テ 中羽鱈ヲ鮮魚ノマ、使用ス
うみたなご漁業	兵庫縣ニ於テ穴しやこヲ使用ス
ぼーちよ手釣漁業	大阪府ニ於テごかいヲ使用ス
がつちよ延繩	大阪府ニ於テ蚯蚓ヲ使用ス
油目釣	大阪・神奈川

えそ釣	しゃこ 白魚 玉筋魚 ごかい 船蟲 手長蝦 ぬばる	大阪・神奈川 大阪 徳島 徳島 徳島 愛知 關東州
がしら釣	泥鰌 玉筋魚 鱈 鮭 こーぞり 海豚ノ皮	大阪 徳島 徳島 徳島 徳島 長崎
はげ釣	徳島縣ニ於テ蝦・鱈又共餌ヲ使用ス	

鯖ノ蟲	鮮餌活餌	大阪
團子	人工餌	大阪
玉筋魚	活魚	徳島
さかな蝦	活魚	徳島
小蟹	活魚	高知
ばらかい	高知	高知
蛹	高知・熊本	高知
柔魚油漬	切身	愛知・石川
岩蟲	切身	島根・福井
海苔	鮮餌切身	島根
柔魚	鮮餌切身	福井
船蟲	鮮餌切身	長崎
芋	鮮餌切身	長崎・熊本
鰻	鮮餌	北海道・石川
柔魚	生魚	北海道・石川
こうなぎ	鮮餌輪切り	山形
八目鰻	鮮餌	新潟
養柔魚	鮮餌	富山

目 抜 釣

白蝦	糠漬	富山
鱈	鮮餌切身	富山
小鯖	鮮餌切身	石川
小鱈	鮮餌切身	石川
螢柔魚	鹽漬	石川
大羽鱈	鹽漬	石川
鱈	鮮餌筒切り	長崎
鱈	鮮餌一尾又ハ切身	朝鮮
背黒鱈	生餌又ハ鹽漬	宮城
二番柔魚	鮮餌四ツ切り	宮城・北海道
玉筋魚	鮮餌一寸五分切	宮城
乾鰻	細カニ切ル	宮城・岩手
牡蠣	鮮餌	宮城
鰻	鹽漬	岩手
鰻	短冊切り	青森
鰻	鮮餌切身	北海道

鱈	活魚	臺灣・宮城
豚肉	鮮餌切身	沖繩
鯖	鮮餌切身	鹿兒島・宮城・宮崎・石川・朝鮮
アナゴ	鮮餌	宮崎
こうなぎ	鮮餌	宮崎
うつぼ	鮮餌	宮崎
とうべ	鮮餌	宮崎
生柔魚	活魚	宮城・北海道・石川・朝鮮・島根・岩手
干柔魚	鮮餌筒切り	宮城・岩手
生鱈	鮮餌筒切り	宮城・岩手・北海道
一番柔魚	鮮餌短冊	宮城・青森・岩手
二番柔魚	鮮餌一尾又ハ短冊	青森・山形
鮎	鮮餌短冊切り	青森・北海道・山形
鱈	活魚	山形・秋田
鰻	活魚	石川
鰻	鮮餌筒切り	島根・朝鮮
鰻	鮮餌筒切り	島根
鰻	二尾ガケ	長崎
海鼠	鮮餌	朝鮮

目 抜 釣

石膏魚	鮮餌一尾	關東州
鱈	鮮餌切身	關東州
鰻	鮮餌切身	關東州
背黒鱈	活魚	島根
鰻	鹽漬又ハ活魚	山形・北海道
鰻	鮮餌切身	關東州
玉筋魚	鮮餌	北海道
鰻	鮮餌筒切り	北海道
鰻	鮮餌筒切り	關東州
八目鰻	鮮餌筒切り	秋田・山形
水魚	活魚	北海道
鰻	活魚	秋田
飛魚	活魚	高知
鰻	鹽漬又ハ鮮餌筒切り	高知
柔魚	鮮餌筒切り	三重
鰻	生魚鹽漬又ハ油漬	神奈川・石川・福井
二番柔魚	鮮餌切身	山形
		新潟

眞蟲	赤蝦	鮮餌切身	岡山	生魚切身	石川	小鱈	鹽漬	長崎
				鮮餌切身又ハ一尾ガケ	鹿兒島	岩蟲	鳥根	
めばる釣				めばる	しやこ	鮮切り身	神奈川	
岡山・神奈川				玉筋魚	活餌又ハ筒切り	岡山	岡山	

第六節 釣漁具の分類

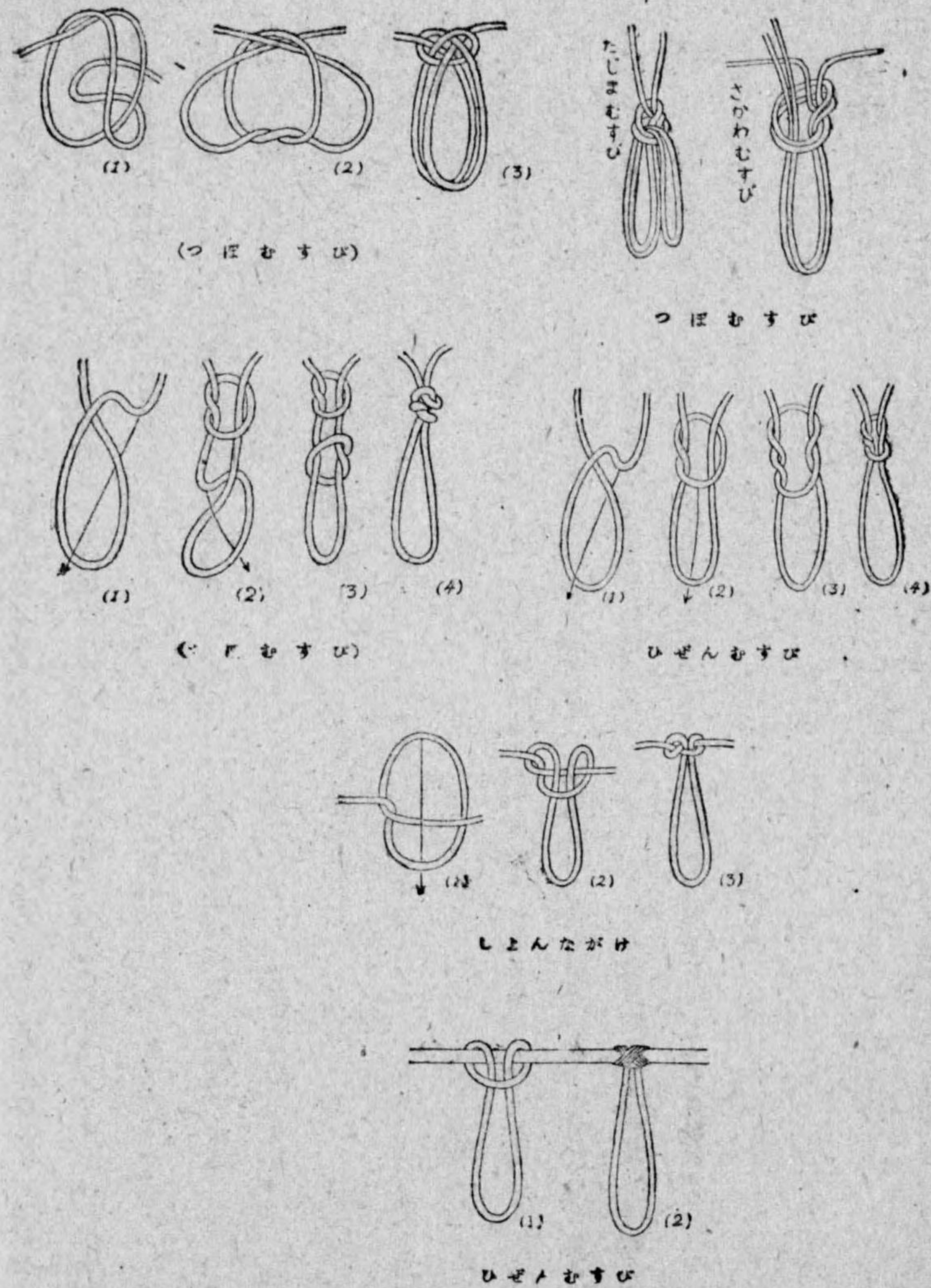
釣漁具は目的物の性質、使用の場所に依つて使用の方法を異にし、従つて漁具の構造に種々の相異を生じ、實際使用されるものには構造上に於ても種々のものがあり、其構造の異なるに従つて又使用の方法も種々に異なり、各種類に依つて特長を異にしてゐる。之等の種々の釣漁具を其特質に依つて分類すれば、一本釣具と延繩釣具の二種に大別し得る。

一本釣具と云ふものは、目的物を一個一個に釣獲するを主眼として構造されたる釣漁具であつて、従つて構造上一本の釣鉤を以て一漁具を形成するを根本としたものである。而して其使用に當つては目的物を釣獲のために漁具が運用されるものである。時には鮎の蚊鉤(擬餌釣)釣具の如き鯉鰭等の天秤釣の如き、一具に數本の釣鉤を

用ひるものもあり、鯰・鰻等の置釣具の如き、適切なる位置に置き目的物釣獲のためには運用せざるものもあるが之等は一本釣具の様式より出でて多少の特異質を示したものと認むべきで、一本釣具に包含すべきものである。斯の如く目的物を一個宛逐次に釣獲することを主眼とするものであるから、一般に規模は極めて小なるもので、一具を運用するには一人以上を要せざるものであるが、時には鯉鰭竿釣の内に於て稀に見る合せ竿の方法の如く一本釣具一具を使用するに二人或は三人を要するが如きこともあるが、此の場合に於ても此の方法は元來一本釣具より出で、目的物一個體が強大であるため一人にては運用し盡せざるために、變態的にかく使用せざるものであるが故に、一本釣具とすべきである。一本釣具を更に類別して竿釣具・手釣具・曳繩釣具の三種となすことを得る。

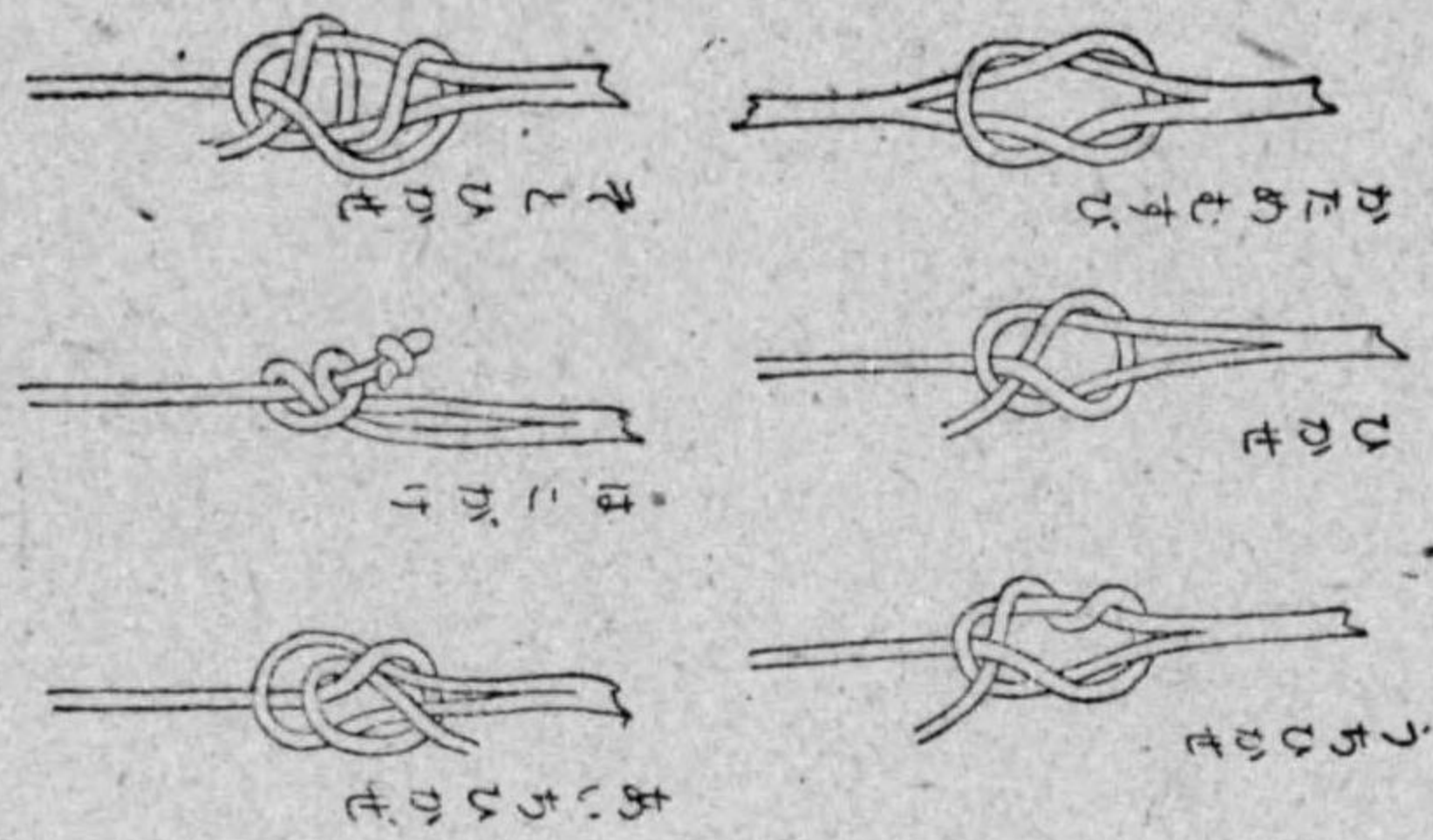
延繩釣具は目的物多數を一時に釣獲することを主眼として構造し使用せざるもので、一漁具に數多の釣鉤を用ひられて居る。一般の構造は長き主要なる縲絲、即ち幹繩(ミナナヅ)(或は道繩・脈繩等とも云はれる)に多數の短き枝絲を適當の間隔に結付分岐せしめ、各枝絲の他端に各一本の釣鉤を結付したものであつて、更に其位置を保ち或は標示するために、浮標繩・浮標・浮子繩・浮子・沈子繩・沈子・碇綱、碇等を附することもある。同一目的物の分布及び游泳は主として水平なるが故に、此の幹繩は必ず水平方向に延長して使用せざるものである。目的物個々に對して使用するものでなく、多數の群集に對して使用されるが故に、一本釣具の如く目的物の動靜に應じて漁具を運用されることなく、必要の位置に延伸されて目的物の來つて釣獲せざるを待ち、收納せざるを、迄は其儘に放置せざるを一般とする。一延繩釣具の延長は使用場所の廣狹、目的魚群の游泳範圍等に依つて一定し難いが、一

般に甚だ長く数十杆に及ぶものがあり、漁獲の多寡は其の規模に比例するところがあるが故に、一本釣具に比して著しく大規模のものであるから、使用のため伸展する場合の外、運搬・格納等の取扱上に於ては、之を適當の長さの部分に分離して適當の容器に納むるを可とする。此の容器には普通淺き竹籠・木箱等を用ひられ、其數量は幾鉢・幾枚・幾「カワ」等と稱せられる。一鉢の中に收容さるべき延繩の分量は、材料の太さ釣鉤の數、枝絲の長さ等に依つて各差異を有するのであるが、大體に於て濕潤せる場合にも一人にて、容易に持ち運び得る範圍内の重量（二〇—三〇疋内外迄）に止むること、釣鉤數の甚だ多き場合は、其數を八〇—一〇〇等計算に便利なる數量内に止むること、各鉢の構造を同一ならしめ、使用の時如何に連繫せしむるも全部が一樣となり支障なき様便利ならしむること、等の諸件を考慮して適宜に決定製作すべきである。幹繩の材料及び太さは目的物の大きさ、力量及び枝絲の數量を考慮して定むべきであるが、漁獲を良好ならしむるためにはなるべく細きを可とし、取扱上より云へば稍々太きを便利とする。枝絲の太さは漁獲を良好ならしむるためにはなるべく細く長きを可とするが、取扱上より云へば太く短きを可とする。又幹繩の太さに比して甚だしく細き枝絲は、幹繩の使用中の擦の加除に従ひて、枝絲が幹繩に巻き付けられ易き傾向を有する。之等の點を考慮し、且つ目的物の力量・習性に従ひて決定すべきである。各枝絲の幹繩に附着する間隔を枝間エマヤと云ふ。枝間はなるべく等間隔ならしむるを便上便利とする。枝間の廣狹は、目的物の大 小及び目的物群集の疎密に従つて決すべきであるが、又使用上の便否をも考慮することを必要とす。使用上の便利より云へば、枝間は枝絲の長さの二倍より大ならしむれば、隣接する枝絲の紛糾する憂を少からしめて可とすべきであるが、之より狭しとするも枝絲の長さ以下とすることは、使



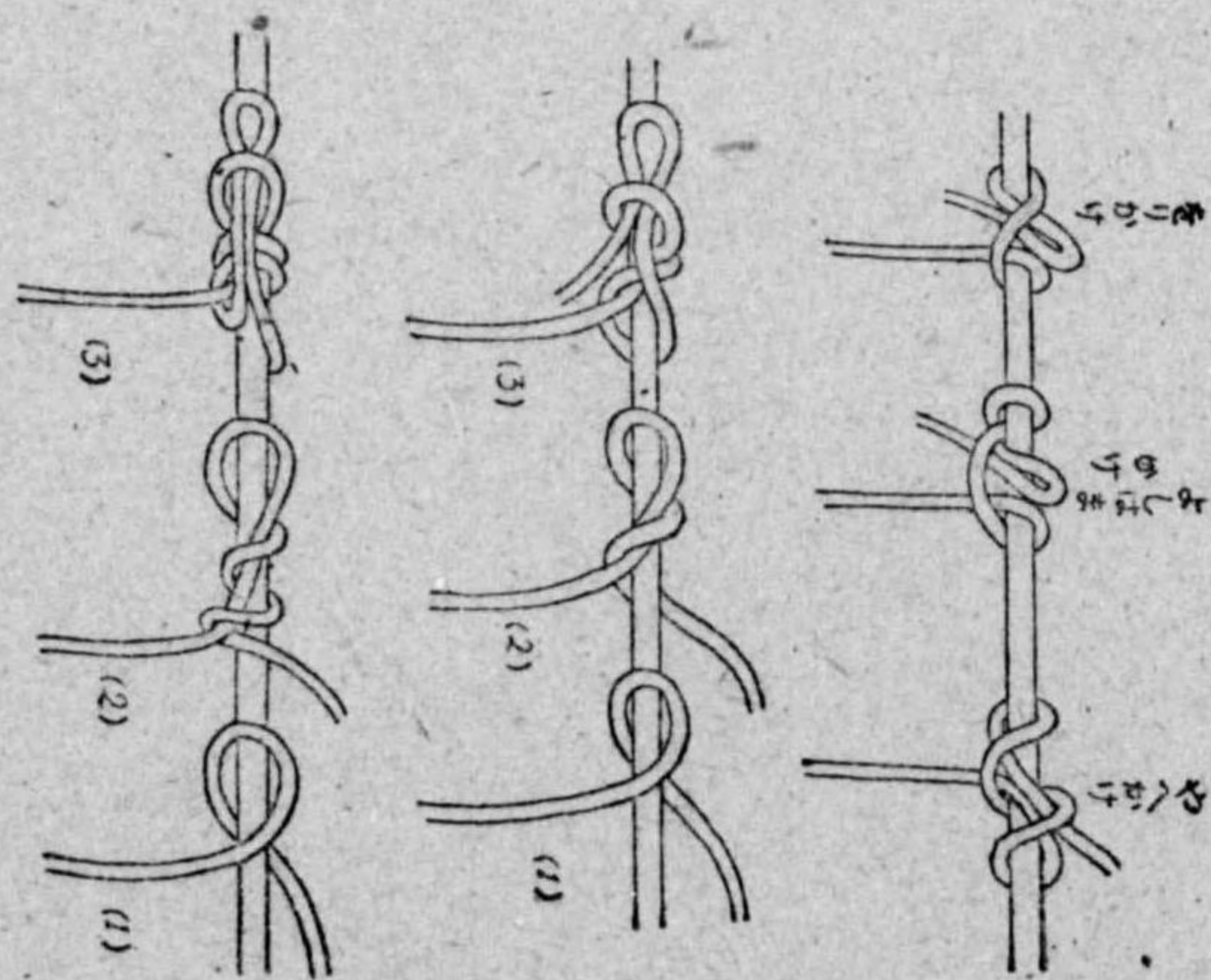
第九十二圖 ヤマツボの構成圖

(1)(2)(3)……は構成の順序を示す



第九十三圖 「ツボ」へ枝繩を結付する方法

註記、「サカラン」は延繩に於て幹繩用互を結び合わせる場合に用いられるものである。



第九十四圖 小延繩に於て直接幹繩へ枝繩結付法

用中枝繩の紛糾する場合を多からしめ、使用上著しき障碍を生ずるものである。

延繩は縲絲長きものなるが故に、取扱中紛亂を避けることに關し特別の留意を要す。このために繩鉢中に收納するときは、幹繩は勉めて整然と、多くは菊花狀に繰り入れ枝繩も之に従はしめ、釣鉤は鉢の周縁に細き巻藁等を以て釣掛けを設け、順序正しく之に引掛け、幹繩・浮子繩等の端は之を順序正しく鉢側に引き出して、其順序を明瞭に、鉢の周縁に結付又は幹繩完納の上に載せ、運搬中之等の縲絲が移動して紛亂することなき様、止め紐等を以て確實に鉢底に緊縛して、機に臨みて迅速なる使用に困難ならしむることを必要とする。特に細小なる縲絲を用ふるものに對しては、此の點に一層の注意を要する。そのため縲絲細小なる延繩の一鉢の收納量は、繩鉢取扱上の重量のみに依らず、遙かに少量を以てするを普通とする。

延繩は又「ノベナワ」「ナガナワ」等と云はれ、其中を浮延繩類と底延繩類との二類に別つことを得る。

第七節 竿釣具類

竿釣具類と云ふは釣具の内に釣竿を備へ、此の竿に依つて釣鉤が運用さるゝ釣具類を云ふのであつて、竿の用ひらるゝ第一要件は、釣鉤の運動移行を容易迅速に、且つ精細ならしめ得るためであり、兼ねて目的物より受くる衝撃を緩和して、縲絲の切斷・釣鉤の伸折・釣鉤刺痕の擴大開裂等を防ぎ、釣上げ動作を敏速ならしむる等の

利益の故に用ひらるゝのであるから、其の特長を發揮し得るは、竿の及ぶ範囲に大體に於て限らるゝのである。従つて竿釣具の有利に使用さるゝ範囲は、水の上層或は上層に近き範囲であり、甚だしき深所に使用する場合に、其優秀性を消失するものである。即ち竿の長さは實際使用の便宜上、著しく長きを得ず、一〇米を超ゆるものは稀であるが故に、其の釣鉤運用の範囲は、水平方向には数十米以内を出で難きものであるが、此の運用は比較的浅水層にある釣鉤に對しては、相當に認むべき動作をなすべきも、深さ數百米以下に垂下せる釣鉤に對しては、著しき作動を、殊に機宜に適せしめて與ふことは困難にして殆ど不可能となり、目的物の釣上げに就いても竿を揚ぐるのみにては、深層に下せる釣鉤を揚げ終り得ず、更に手繰り上ぐることを要し結局斯の如き深層のものに對して竿の使用は、却つて不便を招くに至る。此の故に竿釣具は一般に、浅水層に使用さるゝに止まり、自然多くは河川・湖沼等淡水に、或は極めて陸岸に近き浅海に使用され、沖合に於ては鰹鮪等、極めて表層に近く游泳するもののみ使用さるゝのである。

竿釣具に使用さるゝ縲絲は、必要の強靱度を有する範囲に於て、なるべく細く輕量のものを使用さるゝを普通とする。縲絲の長さは普通竿の長さに従ひ、之より甚しく長きものも、甚しく短きものも、目的物を釣獲したる場合取り外し及び餌付けに非常の不便を感じるものであるが、擬餌を用ひるものに於て、使用動作を適切ならしむる必要上、止むを得ず著しく短き縲絲を用ひるものもある。又竿の先端より中途所々に小環を附し、縲絲を此の小環を通過せしめて、竿の先端より手許に導き、こゝに縲絲を裝備して之に巻き、竿長の數倍の長さの縲絲を、縲絲を運轉して自由に操作して使用するものもあるが、何れも特別の場合と見るべきである。

竿釣具を用ふるに就いて、釣鉤を水面に浮上せしめて使用し、或は水面を基準として或る水層に沈めて使用するものと、釣鉤を水底に沈め或は水底を基準として使用するものとがある。前者を浮釣、後者を底釣と云ふ。浮釣に於ては水の流動に従つて釣鉤が流動するものであつて、水面に用ひるものは餌料又は擬餌が多くは浮力を有するものを選ばれ、餌料を捕食するに水面に浮上してなす性質のものを目的とする場合に適用さるゝものである。水面を基準として或る水深に釣鉤を垂下して使用するものは、多くは縲絲の途中に浮子を附し、之を水面に浮かしめ、釣鉤附近適宜の所に小沈子を附し、浮子以下釣鉤に至る縲絲の長さを調節して、希望の水深に釣鉤を達せしめて、主として中層を游泳する目的物の釣獲に適用する。時には浮子を缺きて直接釣竿を以て、適當の水深迄釣鉤を沈めしむるもの、或は沈子をも缺き釣鉤或は餌料の沈降力のみを以て、所要の水深に釣るものもある。底釣に於ては多くは浮子を缺き、或は浮子・沈子の間隔を其處の水深よりも長からしめ、沈子を水底に到達せしめて主として水底を游泳し、沈澱せる餌料を捕食する性質のものを目的とする場合に適用される。同一の目的物と雖も時期に依り、場所に依り、游泳状態餌料の方法等を異にするが故に、何れの方法を用ふべきやは全く其の場合の目的物の性質に従ふべきものである。

各種の竿釣具中の多くは、趣味を本旨とする游漁に用ひられるもので、漁業用として用ひらるゝものは、比較的少く又輕微であるが、最も重要視すべきものは鰹鮪を目的とする竿釣である。殊に鰹は我國に於ては殆ど全部、竿釣具を以て釣獲さるゝ現状にある。

鰹竿釣具には普通使用されるものに、餌釣具と擬餌釣具の二種がある。餌釣具の釣竿は「バネ」「鰹バネ」等と稱

せられ、眞竹長五十六米、元口直径六十七糎、末口直径一糎内外の強きものを用ひ、末口には縹絲結付に便ならしむるため、強靱なる麻絲を以て「ツボ」を附し、元口の方二尺位の間には古縹絲の如きものを以て把握に便ならしめ、使用せざる場合には釣鉤を掛けるに便ならしむる様適當の裝備をなす。縹絲は上質の麻、二子撚り長さ四・五米、太さ一本の出来上り重量二・五―三・五瓦とし、釣鉤端の方は少しく太さを増して折り返し「ツボ」に造り、竿端の方は二、三重に折り返して釣竿の「ツボ」に結付ける。釣鉤には極上質の麻を以て、太さを縹絲より稍々太く、長さ五〇糎内外に造れる「チモト」(コビヨ又はヒヨソとも云ふ)を、細絲を以て堅固に巻き付け、「チモト」の他端は結節を造りて縹絲端の「ツボ」に挿入して之に依つて連続せしめ、着脱を容易ならしめ、藍色に染めて縹絲の他の部分と明瞭に見別けしむ。此の構造は、使用中「チモト」の附近が最も摩損し易きため取換へ修理に便ならしむると、釣鉤の水面よりの深さを容易に認知し得せしめるとのたになされて居る。釣鉤は錫鍍鋼鐵製で大きさは二五―九〇耗位を用ひらるゝも、普通は四五―六〇耗のもの多く、目的とする鰹の大きさ及び使用する餌料の大小に依つて、適當の大きさのものを使用されて居る。釣鉤の大きさに對する太さは凡そ次表の如く、一般に鰹竿釣に使用するものは、擬餌釣に於ても「アグ」なきを特色とする。是は釣獲動作極めて敏活を要し、釣揚げに際しては決して縹絲を弛むるが如きことなきがためである。

釣鉤全長(耗)	三九	四二	四五	四八	五一	五四
同用材太さ (曲一尺の重量瓦數)	一二	一三	一四	一五	一八	二〇

同用材太さ (一米の重量瓦數)	一五	一六	一七	一九	二二	二五
-----------------	----	----	----	----	----	----

餌釣具には主として餌料を用ふるものであるが、又稀に擬餌鉤(シャグマ)を用ひることもある。使用數は各人登具であるが、豫備釣竿一―二本、縹絲・釣鉤・數組を用意するを普通とする。

擬餌釣具(サグリとも云ふ)は擬餌釣のみを使用するもので、竿は眞竹長さ四―五米、元口直径五―六糎、末口は餌釣竿よりも稍々太き強剛なるものを用ひ、餌釣竿とは同様の裝備をなし、縹絲は(ヲナワと稱せらる)上質麻を以て直径二・五糎内外、長さ一―二米三子又は四子に堅く撚り上げたものを使用し、擬餌鉤に貫通して取り付け、他端は竿端の「ツボ」に結付して使用する。使用擬餌鉤の種類は甚だ多きも、最も普通に用ひらるゝものは「ツノ」及び「シャグマ」(タタキとも云ふ)の二種で、全形の長さ七糎内外のものを普通とする。通常一船中に於て最も老練なる小數のものが主として之を使用するものであるが、釣獲の動作迅速なり得るが故に、餌料に缺乏せる場合或は釣獲容易なる大群に邂逅したる場合には、全員之を使用する場合もある。

鰹竿釣は魚群を發見すれば、其の游泳方向に先じて船位を保ち、活餌を速く投出して撒餌をなし魚群を之に導き、各人釣獲を行ふのであるが、此の釣獲中状況に應じて常に適度の撒餌を行ひ、且つ舷側數十個所より仰筒によりて水沫を飛散せしめ、之に依つて海中より水面を望めば鰹群の集團せるが如き状を呈せしめ、魚群を舷側に近く集合せしめ、釣獲を容易ならしむるのである。故に投餌の要領は、魚群をなるべく永く舷側に近く集中せしむるにある。このため各人の配置も、船首・船尾兩端にはなるべく技術熟練せるものを配置するものとする。釣

獲動作は舷側に立ちてなす地方と、適宜腰掛けて釣る地方とあるが、何れも一利一害を免れざるが如くである。鯉の釣獲に適する時間は多くは短時間なるが故に、釣獲動作は敏活確實なるを必要とする。従つて各人への餌料の配給、撒餌等は各分業となし、餌料係りは各人の背後に置ける餌桶を注意して、其缺乏するときは一回に四五尾宛を配給し廻る。一時に多数を配給するも、小なる餌桶中に於ては永く生活し居らざるがためである。

鮪類の竿釣に於ても、其要領は鯉竿釣と大同小異にして、目的物の大きさに依り釣漁具の大きさ・強さ・餌料の大きさに差異を生ずるのみである。一人にて一本の竿を以て釣上げ得る目的物の大きさは、釣上技術の優劣體力の強弱に依る處多きも、普通鯉鮪類に於ては一尾一〇疋内外であるが故に、それ以上のものを釣獲する場合には、合せ竿と稱し一本の縋絲に二本の釣竿を用ひ、二人協同して各自一本宛の釣竿を持ち運用し力を合せて釣上げるので、稀に三本迄竿を合せることあるも、動作一致を得難く効力充分でない。二本合竿に依つて釣上げ得る重量も、普通一五―二〇疋迄にして、其れ以上のものに對しては竿釣は困難となり、手釣の方法に依るか或は竿を用ふるにしても、單に長き縋絲の中途、竿を使用するに適當なる所を細絲を以て竿端に結付し、釣鉤を運用する動作のみを竿を以てし、目的物が強く引くときは細絲部は切斷するが故に、竿を捨て、直接縋絲を持ち手繰り上げるものである。

第八節 手釣具類

一本釣具類中に於て、深所に使用するに好適せしむるために案出されたるものにして、長き縋絲と釣鉤及び沈子を具有し、竿及び浮子を缺くを普通とし、最も深きものは五〇〇米以上にも及ぶものがあり、其縋絲は甚しく長きを特徴とする。縋絲甚だ長きがため、其操作には竿を附するは却つて不便を來たし、直接縋絲を手執りて操作するを遙かに便とす。これにより此の類を一般に手釣具と稱するのである。長き縋絲は常に整然と收納しあることを必要とするが故に、普通木枠其他の絲卷に巻き付けて收納される。一具は一個の絲卷に收納され釣具數を稱呼する場合は、「幾カラ」と云ふのである。一般に淡水である淡水には用ひられること少なく、海上に於ては甚だ多く用ひられ、一本釣具中の主要なる部類をなして居る。水底の岩礁が粗荒にして、凸凹甚しき場所に於ても或は潮流強き場所に於ても、よく適用して操作し得ることは、釣漁具中に於ても最も適當せる種類のもので、殆ど使用場所の状況に依つて妨げらるゝことなき漁具と云ひ得るのである。

竿を用ひることなきも魚に合せる動作、即ち目的物が釣鉤を口中にしたるとき縋絲を短く強く引きて、釣鉤を口邊に鋭く確實に刺さしめる動作を、適當の強さに緩和し、爾後の目的物の強力なる活動に對しても、よくその衝撃を緩和して縋絲の切斷を保護し、又釣鉤を垂下中に、縋絲を瞬間的に伸縮して餌料を活動せしむる場合、

餌料の活動を圓滑ならしむる等のために、釣竿に代へて天秤を使用して居るもの多く、或は天秤の代りとして重錘の形状を適當ならしめて居るものもある。之等の動作の大小・緩急・等を目的物の性質に従つて適度ならしむることは、手釣に於ては重要な事項である。重錘は普通釣鉤の位置より一―二米上位に用ひらるゝものであるが、潮流強き深所に使用するものに於ては、従つて重き錘を要し、縲絲の切斷さるゝに至る恐れがある、しかも魚眼に著しからざる様縲絲は先端に至る程細きことを必要とするため、かゝる場合には縲絲の數米毎に小さき重錘を附し、縲絲の長さを延ばすに従つて重錘は多く出で、縲絲も亦太く強きものとなり、之に依つて希望する垂直に近く、縲絲を下し得る構造とするものがある。

撒餌を釣鉤を使用する附近に沈めて撒布して、目的物を多數誘集することは甚だ有利なるがため、重錘或は天秤の附近に細目の網地(縲子網等)を以て小さき袋を造り、撒餌少量を入れて結附使用し、刺餌を活動せしむる動搖に従つて、其附近に撒餌が撒布さるゝ様になせるものが甚だ多いが、甚しく深所、例へば數百米の水底に使用せんとする場合は、希望の深さに沈降する迄に撒餌が脱落散亂し去ることがあるから、斯の如き場合は巻き零の方法を用ひられる。即ち適當の沈下用の自然石を用ひ、之に裝餌せる釣鉤・「チモト」・縲絲と云ふ順に先手より巻き付け、「チモト」の附近適當と認むる附近に、潤葉の如きものに撒餌を包みて數個挟み込み、其の上を縲絲にて巻きて投入し、縲絲が解けて沈石が沈降し、必要の深さに達して「チモト」附近が解離する頃に至れば、順次數個の木葉包も又解離して、其附近に撒餌を散亂せしめ、沈石のみは解離して水底に沈下し去り、裝餌せる釣鉤が撒餌の附近に位置することゝなるのである。

手釣具も亦一般に規模甚だ小であるが故に、之を以て行はるゝ漁業は一般に小規模であり、多くは中層以下の各種の魚類を目的として、各種の手釣具が使用されて居る。手釣具を以てする漁業にして規模最も大なるもの、一にして、漁業上最も注目すべきものは鰯撒餌釣(鰯飼付け)漁業である。

鰯撒餌釣漁業は繰業位置を一定して、相當長期間継続的に撒餌をなしつゝ、手釣具を使用してなされるゝものであるが故に、充分なる好結果を納めんがためには、此の定位置に關しては他を排斥して作業の繼續を確保せねばならぬ。このため此漁業は我が國に於ては、主務大臣の免許を要する免許漁業中の特別漁業に、法規上屬せしめられて居る。其起源は約百年前鹿児島縣川邊郡に始まり、爾來次第に好成績を挙げ、現今に於ては高知・長崎等の諸縣に傳播し來り、相當漁業界に認めらるゝに至つたものである。主要目的物は鰯で、位置を一定して長期間(其地に鰯群の回游を見る間)継続的になされるゝこと及び、漁獲状況の良否に應じて使用船數を増減し、其規模を伸縮自在ならしむるの二點を主要の特質とするものである。

此の漁業に於て生命ともすべきところは、占據して従業すべき位置の選定を誤らざることである。此位置の必要條件としては、凡そ次の如きものを挙げ得る。

- 一 鰯群回游の要衝たるべきこと、附近に餌料たり得べき小魚族の群集常に絶えざるが如き地點ならば更に可とすべし。
- 二 就業期節に於て、風浪等のため就業し得ざるが如きことなく、なるべく連日繼續投餌して就業し得る地勢上の良位置たること。

三 水深五〇—一〇〇米を可とす。波浪高き外海に於ては、荒天の場合と雖も波浪の動搖が海底に影響すると甚だしからず、魚群を安靜ならしむるために七〇米以上なるを可とする。

四 底質岩礁にして其廣さ二〇〇米平方以上、岩礁の周圍は一〇—二〇米低下して砂又は泥底なるを可とし、此の岩礁の所在は、水深一五〇米以上の深淵が溝形に進入し來れる海底谷の奥部に近き側縁に位置するを可とする。

五 潮流は微弱のものは常に存在するを却つて便とするも、一時間五—六籽以上の強潮流あり、殊に其の方向の變化常ならざるが如きは從業上の支障となる。

使用する手釣具の構造は、概要次の如きものである。

釣鉤・鋼鐵製延長六—九種、釣鉤一本の重量五—六瓦、丸形を用ふ。

「チモト」、中心上質麻三子撚とし、上巻を綿絲一號（二〇番手四本合）又は稍々細き絹絲を以てせる「セキヤマ」

太さ出來上り一米—二瓦位、長さ六米内外のものを用ひ、一端は「ツボ」に造り、沈子に附着せる「ツボ」に

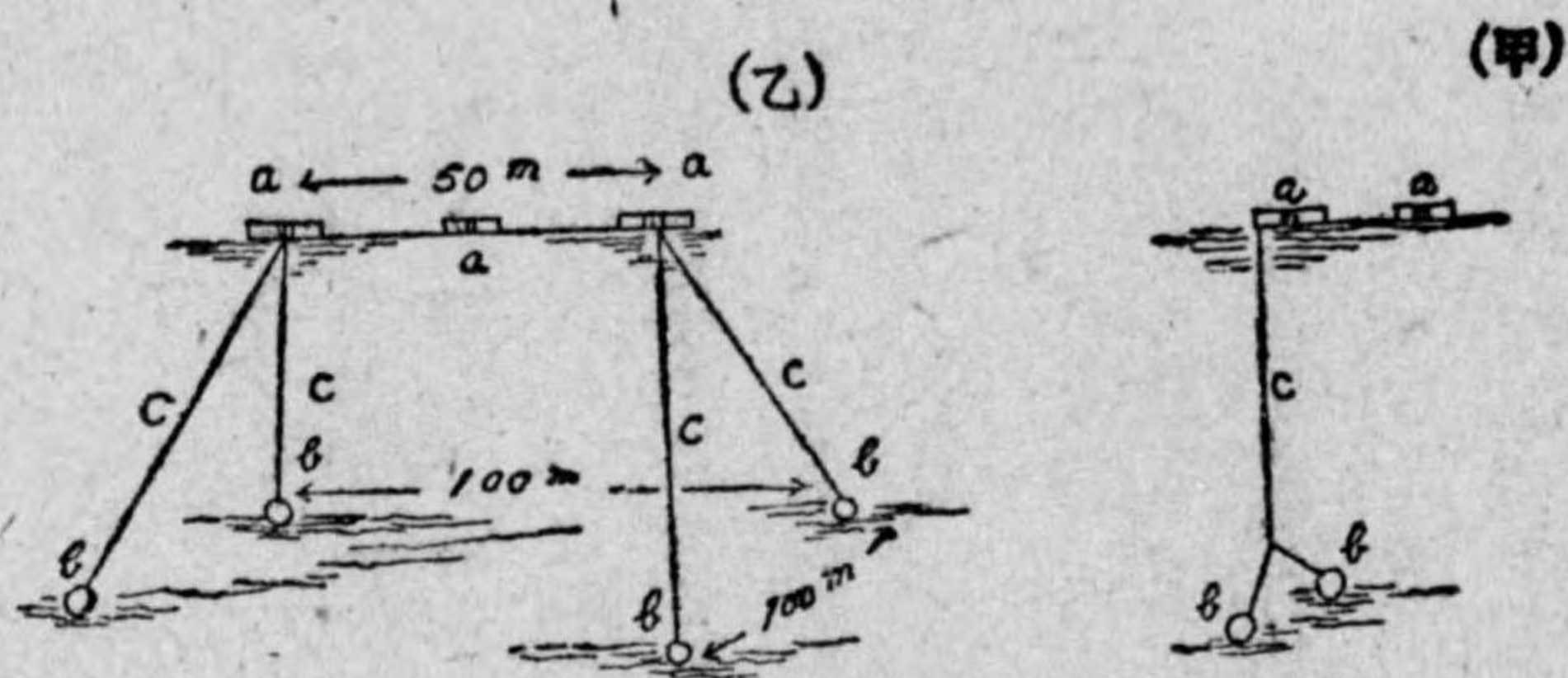
「カタメムスビ」を以て接続せしめ、他端には釣鉤を附す。

沈子・鉛・紡錘形一個二五〇—三〇〇瓦、兩端に「ツボ」を裝し一方は「チモト」に、他方は綿絲に結着する。

綿絲・上質麻二子撚、太さ一米—七瓦内外、長さ八〇—一五〇米を用ひ柿澁染とする。

以上を一具とし、適當の竹籠等の容器に收容して、一人二具及び部分品を適當に準備用意するのである。

餌料は小鰹・秋刀魚・鰻・鱈・鯖・鯖等の鮮魚又は鹽藏品を用ひ、大さは長さ一五種内外を規準として、丸餌は



第九十五圖 鮎撒餌釣用繫船置二種

- a...浮標、竹直徑二〇種内外長三—四米のもの數十本を結束して用ひらる
- b...根礎、石俵三個三〇〇杆内外のものを用ふ
- c...碇綱、マニラロープ直徑三種内外のものを用ふ

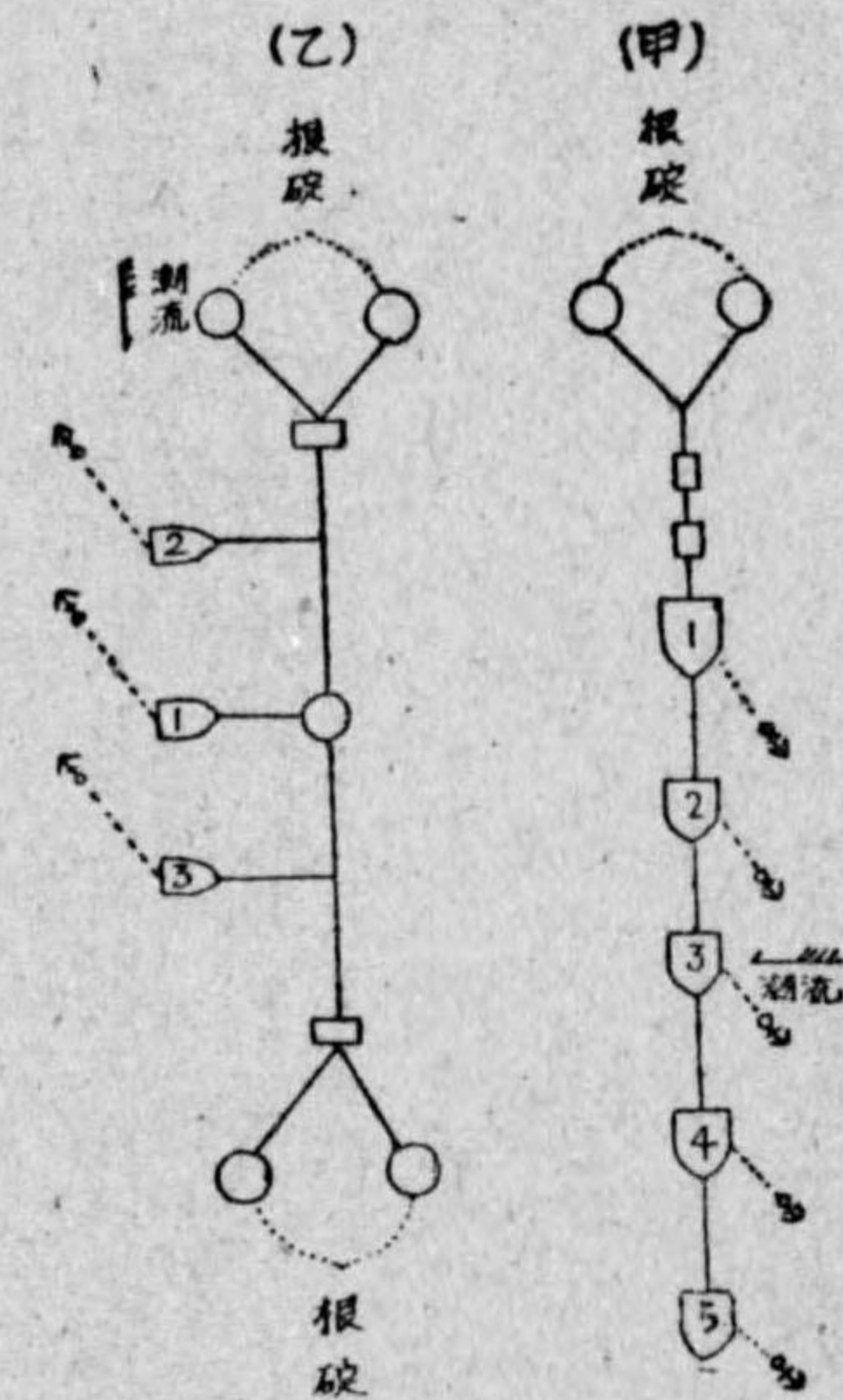
切餌とし刺餌撒餌共に之を使用し、漁船一隻一日の使用量は乗組員の多少、漁況の盛否に依り一定し難く一〇〇疋内外より四〇〇疋内外に及ぶこともある。この故に此漁業に於ては餌料の使用は最も注意を要し、營利上より見れば供給豊富にして價格低廉なるものを選択する必要がある。

使用漁船は肩巾二米内外の和船にして、其數は漁況の盛衰に應じて増減し最高十四、五隻に及ぶこともあり、一隻の乗組員も亦漁況に應じ七、八人より十四、五人に及ぶ。

從業位置には適當の浮標を用ひて位置を標示し、兼ねて毎日の出漁船の滞留就業に便ならしむるため繫船装置を碇置する。

就業のため繫船する方法は、最初は一隻の漁船を以て就業するが故に、直ちに繫船装置に繫留し潮流を船側に（多くは左舷側より）受くる如く、自船の所有する二〇疋内外の錨を投入して船位を保ち就業する。之を瀬口船と云ふ。漁況活況を呈するに至れば漸次増船

するが、之等のものは順次瀬口船に倣ひ、二〇米内外の間隔を以て船列正しく繫泊する。この船列の混亂せる場合は、従つて魚群の來游も混亂して釣獲成績に悪影響を來たすに至る。就業船の増加は其時の漁況に従ふもので、



第九十六圖 繫船順列
1 2 3 は増船位置を示す

膨脹を來たすのみに終ることもあり、漁況は必ずしも逐目的に増減せざるが故に、増船は充分環況を考慮して機敏迅速ならしめる必要がある。此の漁業の成績は、主として漁船を増加して大規模に就業せる時期の成績に依つて決せらるゝが故に、漁況良好ならなるべく多数の漁船を出漁せしむべきであるが、實際に於ては自ら一定の限度を示すもので、十四、五隻以上に増船することは、却つて不結果を來たす様である。

撒餌投入の要領は、潮上舷に於てし、其量の加減は漁況に従ひ、投入位置の遠近は潮流の緩急に應じ、なるべく魚群を船に近く永く引付け置くを主眼とすべきである。潮流急にして撒餌の流去するが如き場合は、巻き零の方法を用ふることもある。投餌量は魚群の大きさに對して過少なる場合は、遂に魚群を散逸せしむる傾向あり、過多なる場合は勿論營業利益を失ふに至る。普通は漁獲價格の二割内外迄に止まる餌料を用ひて可とすべきか。手釣具の使用は撒餌を始むると共に始め、漁況活潑ならざる間は普通左右兩手に各一具を使用し、一方は他方

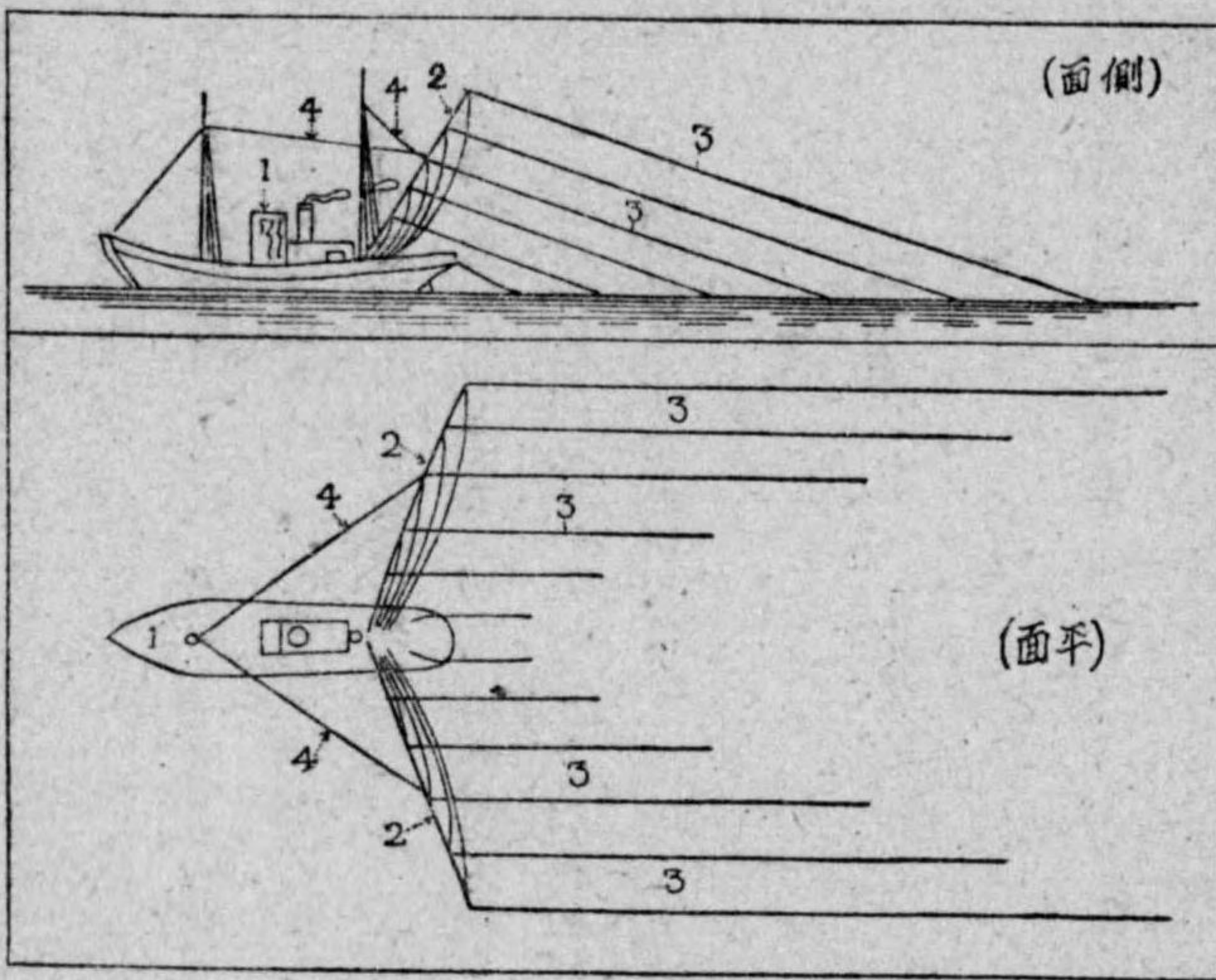
よりも數米淺くし索餌層を探知することに勉む。最初に釣獲し得たるものは其水深を全員に周知せしめ、各人は之に依つて其水深よりも更に數米淺層に釣鉤の位置を改め、釣獲の度毎に次第に釣鉤の位置を淺からしめ、魚群をなるべく淺層に誘導することを努め、漁況最も良好なる場合は、遂に一〇米内外の淺層に於て釣獲するに至るのである。實際に於て多量の漁獲は、多くは極めて淺層に於てなざるゝものである。

漁況衰退するに至れば、之に従つて減船すべきで、此の減船法は全く増船の場合に反對する要領に依り、其順位は瀬口船を除きて、他の船の從來の成績最も惡劣なるものより先にするのである。

此の釣漁業の目的とさるゝ、鰯は、普通釣鰯と稱し、稍々小形にして一尾五―七疋の索餌回游をなすもので、其回游期節は地方に依り多少の差異あり、高知縣に於ては十一月より翌年二月頃迄となれども、一般に水温低き地方に、又深水層に早き傾向を見る。

第九節 曳繩釣具類

曳繩釣具類は水平に使用さるゝ一本釣具であつて、釣鉤と縋絲とを主體とする。其使用は水平方向へ相當長距離に亘つて引曳し、餌料を疾走せしめて釣獲する方式のもので、其引曳は船を航走せしめて行はるゝものである。竿釣具手釣具中に於ても、時に釣鉤を水平方向に移行せしめて使用さるゝものもあるが、之等は船又は釣具



第九十七圖 曳繩使用圖(張出桁を用ひ同時に十二具使用の例)

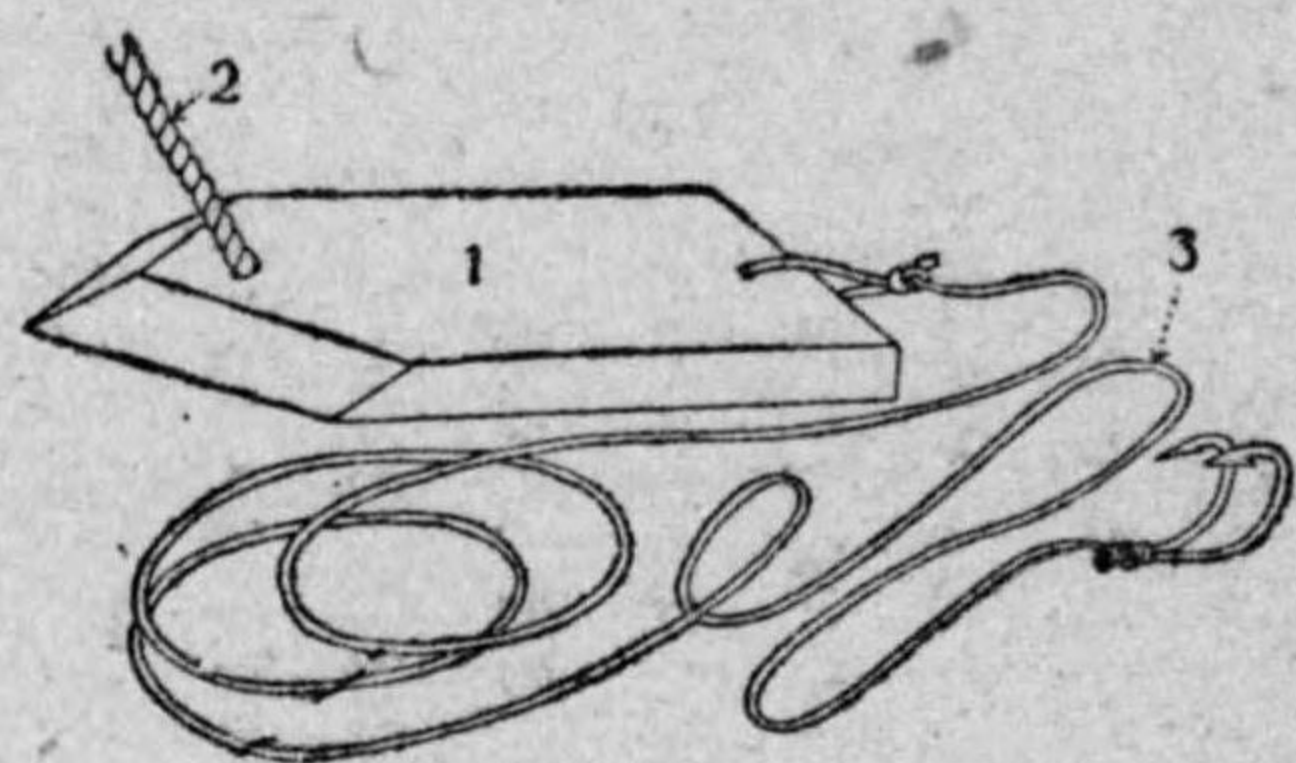
- (1) 漁船
- (2) 曳網張出桁
- (3) 曳繩
- (4) 張出桁控綱

して外方に向き、容易に脱離せざるため「アグ」の著大なる強きものを用ひられ、確實に釣引するために二本三本

の一端は止めて行はるゝものであるから、其移行距離は竿又は縋絲の及ぶ範囲であつて、曳繩類に比すれば遙かに短距離に過ぎず、使用位置を移動せしめて使用さるゝものとは認め難いのである。

水平に引曳する速度は、目的物の性質に依つて多少の差異を要する筈なるも、普通は船の推進力の強弱に依つて差を生ずるのみであるが、余りに遅々たるは餌の疾走が眞に迫らざるため結果良ろしからず。余りに速きに過ぐるは目的物の餌料を追尾するを困難ならしめ、或は釣り得たる瞬間に急止すること困難にして、従つて縋絲の受ける衝撃強く縋絲を切斷し、釣鉤の刺痕を擴大して脱逸せしめ釣上げを困難ならしむるが故に、普通は一時間五―六杆より一五杆内外迄とされて居る。

餌料としては多くは擬餌を用ひられ、或は丸餌を用ひられる。釣鉤は掛り易きため「サキ」の鋭く



第九十八圖 潜水板
(1) 投入板 (2) 曳繩縋絲 (3) 「チモト」

の釣鉤を「クキ」に於て合一せしめ、或は絲釣を附して用ひらるゝこと屢々である。縋絲は一般に大なる衝撃を受け易き故に、最も強靱にして相當の長さを有することを必要とする。即ち鯖の如き大型のものを目的とする場合は、三〇〇米以上を要し、船外に五〇米内外を出して引曳する。「チモト」も又強靱なることを必要とし、屈曲は

左程自在なるを要せざるが故に、金屬線を用ひらるゝこと多し。相當迅速に引曳するが故に、釣鉤の深度を深くすることは困難である。この困難は速力の加はるに從つて増加するが故に、多くは表層若しくは極めて表層に近き部分に使用される。従つて其目的物も亦表層近くを游泳する性質のものに限らるゝ觀がある。この釣鉤を、或る深度を保たしめて引曳するために、鉛の重錘を縋絲と「チモト」との間に使用するものもあるが、速力早き場合は其効果は極めて微少である。相當に効果を納むるものはこゝに木製の簡單なる潜水板を結付することである。潜水板はその傾斜面に對する水の抵抗に依つて、ある程度に潜入せしむる様式のものであるが、縋絲に對する水の抵抗のため

に潜入程度數米を越ゆることは甚だ困難である。近時潜水板の構造を改めて水の抵抗斜面を大ならしめ、従つて潜入力を増強からしめ、曳繩を相當の深度に迄使用せんと考察せられたるものもあれ共、深度を増すに從つて抵抗を増すことを要するため、縋絲は著しく強大なるものを必要とし、實際上に於ては使用容易ならざる憾がある。曳繩は船尾に曳かれ、其縋絲を船内に結着保持せしむる所に、更に少しく縋絲を手繰り、別に其曳繩を曳航す

るに足るだけの強さの細絲を以て止め、若し目的物が釣獲され縲絲が急に強き衝撃を受けたる時は、此の細絲が切斷して、之に依つて目的物の掛りたるを推知する様に装着されることが多い。

一時に使用する曳繩の数はなるべく多きを希望するが、各縲絲の間には一―二米の間隔を置かざれば、互に紛亂する恐あり、使用上甚だ不便であるが故に、船中ならざる漁船にありては、普通一時に四―五具を使用し得るに過ぎぬ。特に多數を使用するため、強き竹竿等を舷外に張り出して、縲絲の縛着部を廣くするものもあるが、この場合に於ても實際に於ては、十二、三具を使用し得るに過ぎぬ。斯の如き場合に於ては船の中心部より外側に使用さるゝもの程、縲絲を長く延べ出し縛着位置を高くするは、目的物釣り上げの際に其縲絲を船尾の中央部に取りて手繰るに、他の縲絲との紛亂を避け得て甚だ便利である。

魚の掛れるを知らば、直ちに船を止めて機を逸せず手繰り揚ぐるを普通とするが、時には航走しつゝ手繰る場合もある。此際縲絲を手繰るに要領を得ざれば、目的物を脱離せしめ、或は縲絲を切斷され易い。其要領は過急ならず、弛緩ならず、常に平滑に、手に感ずる重量の變化なき様に手繰り揚ぐべきである。

曳繩はかくして好適漁場を求め、縦横に航走しつゝ、之に依つて漁獲を揚げるものもあるが、又他の漁具を使用する場合、魚群の存否多少等を探知するために使用されることも屢々あるのである。

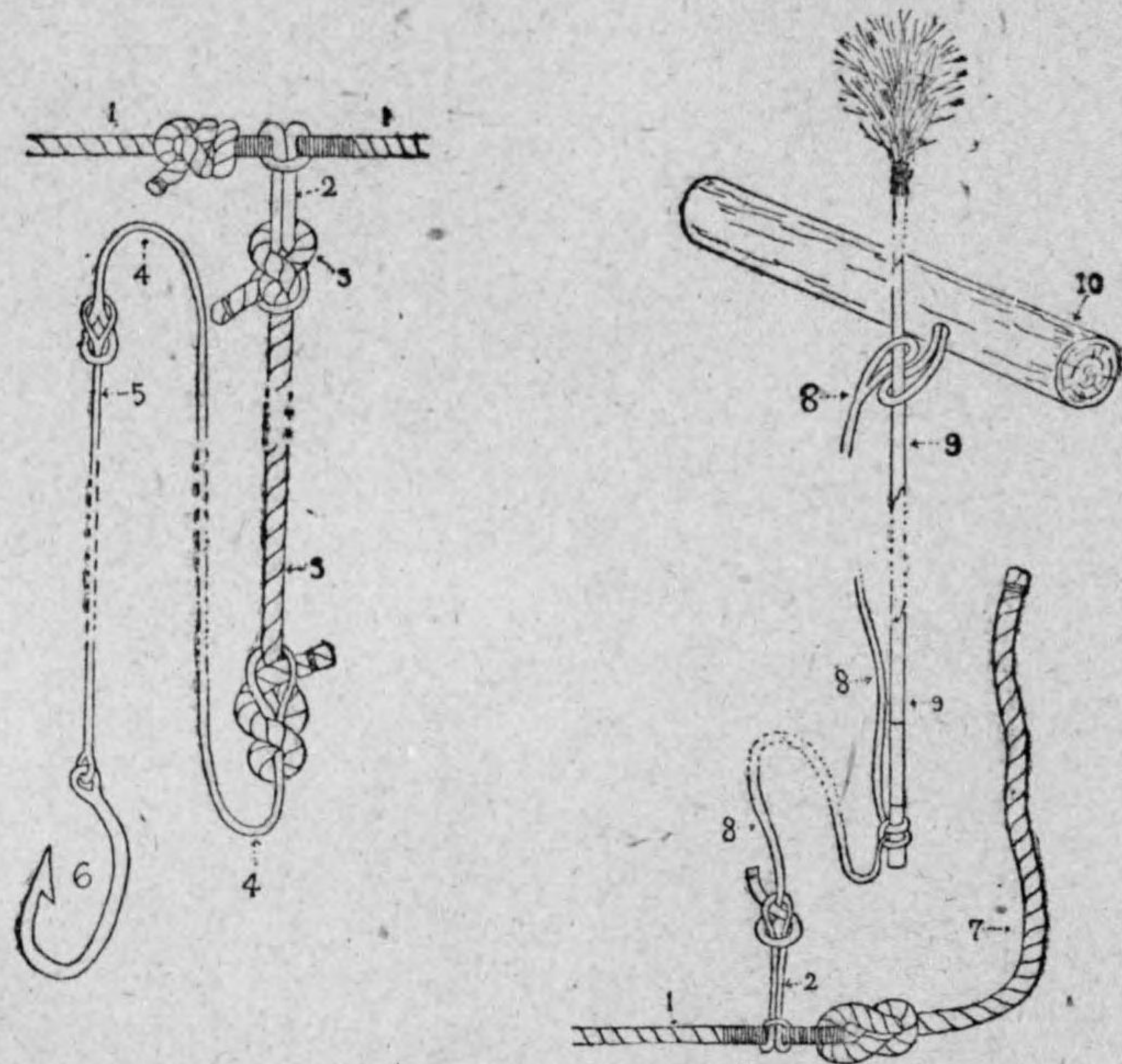
曳繩を以て漁獲さるゝ主要なる魚類は、鮪類・鰹類・旗魚類・鮫・鱒・鯖等であるが、漁具の性質が一時に多數を釣獲するに適せずして、規模を大とすること甚だ困難なるがため、大型にして高價なるものを目的物として用ひられる傾向がある。

第十節 浮延繩類

延繩類中に於て、水の表層に近き所に延伸使用され、主として表面に近く游泳する魚族を目的とする種類のものを浮延繩類といふ。幹繩には所々に浮標繩を附し、之に適宜の浮子又は浮標を附し、浮子浮標の浮力は延繩全部の沈降力より遙かに大ならしめ、浮標繩の長さを加減することに依つて、釣鉤の深さを大體必要の深さに達せしめ、全部に水面を基準として、位置を保たしむる様式のものである。浮標繩は一鉢に一本乃至數本を附せられ、多く等間隔を保たしめるを普通とする。浮標は延繩の深さを保つと同時に、其所在及び延長形を知るに便ならしめるものである。浮延繩は水流に従つて其延下位置を移動し、又形状を變化せしめられる所謂流し延繩とせられるもの多く、之を刺網類中の流刺網類にも比すべきか。浮刺網類の如く延繩の一端、又は數ヶ所を錨の如きものを以て個定し、全延繩の位置を不動にするものは甚だ少い。これは延繩の延長距離は、刺網類に比して甚だ永きを通例として、其延下の形状を個定せしむることは甚だ困難なるがためである。

此の類に屬するものは、鰹延繩・鮪延繩・鰹延繩・鱒延繩・旗魚延繩・鮪延繩等であるが、之等の中現今最も多く用ひられ、規模も亦大なるものは鮪延繩である。

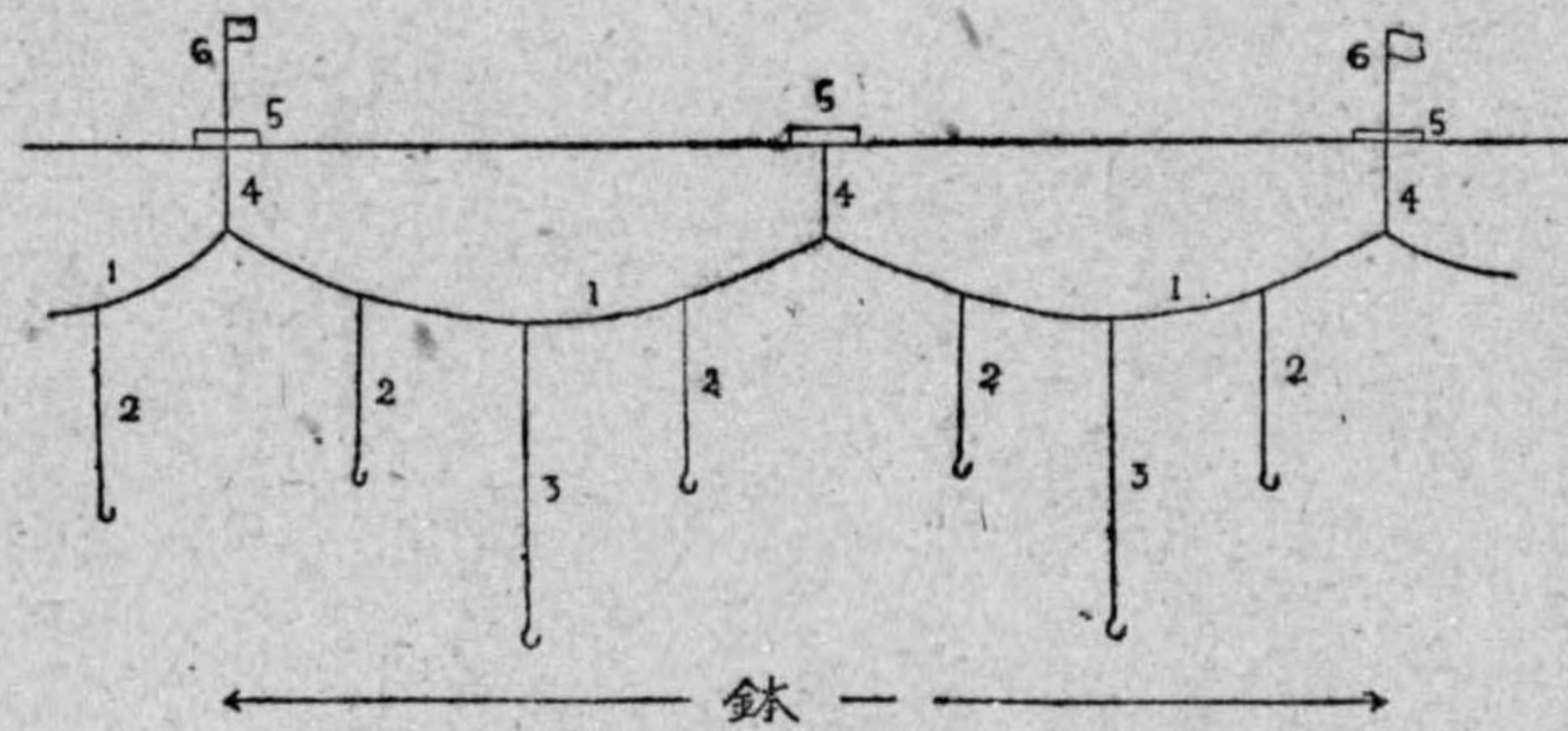
鮪類を目的とする延繩には、三〇―一〇〇呎の大形の鮪類を主目的とする所謂大繩、「ピンナガ」鮪(トンボンビ)



第百圖 鮎延繩構造

- | | | | | |
|--------|----------|---------|-----------|-------------|
| (1) 幹繩 | (2) やまつぼ | (3) 枝繩 | (4) せきやま | (5) かなやま |
| (6) 釣鉤 | (7) うではし | (8) うけ繩 | (9) ぼんでん竹 | (10) うけ(浮子) |

さは普通のものは一三米、長きもの(これを「フラセ」ラクリ)等と云ふ)は三〇、四〇米とする其の数は合計に於て六―九本、内「フラセ」一―三本とし、枝の間隔は三―四五米に於て適宜に決定するのである。即ち一鉢の幹繩の長さ、使用上の便否を考慮して、構成上に都合よき程度に定むべきである。一端は幹繩中の連結點附近に、「ヤマツボ」を装備して、之に結び付け、他端は「セキヤマ」の「ツボ」に結び付けるのである。



第九十九圖 鮎延繩構造一般

(六本付一鉢を示す)

- | | | |
|---------|------------|-----------------|
| (1) 幹繩 | (2) 枝繩(上り) | (3) 枝繩(ふらせ又は下り) |
| (4) うけ繩 | (5) うけ(浮子) | (6) ぼんでん |

て少しく太からしめ、白晝は勿論暗夜と雖も、幹繩の部分と枝繩の部分とを判別するに容易ならしめる。長

があり、何れも目的物の大小に大差あるが故に、其規模構造を異にして居る。
所謂大繩と稱せらるゝもの、一鉢の構造は、大體次の如くで、状況に依つて之を十數鉢、或は數十鉢を連続せしめて使用するのである。
幹繩・材料・南京麻・「マニラ」麻・綿絲等、二子或は三子の堅撚り太さ直径六―一〇耗、一鉢の總長二〇―四〇〇米を用ひ、一鉢に附すべき枝絲及び浮標繩の合計數に等しく等分して、其一端を「ツボ」に造りて順次に結合して一本に連続せしむ。これ繩の混亂せる場合、分解して解除整理に便利ならしむるためである。一鉢の幹繩の兩端には、一米内外の稍々太き綱を附して、他の鉢と連結するために端部の損傷多きに備へる。一鉢の總長を何程とすべきやは、運搬・取扱の便否を考慮して決定すべきである。

枝繩・材料・幹繩と同質のものを用ふるを普通とする。幹繩二子なるときは三子、幹繩三子なるときは二子等とし、又太さも幹繩に比し

(二〇―二〇耗)を主目的とする「トンボ」繩・小鮎類(二―一〇耗)を主目的とする「メヂ」繩等の別

「セキヤマ」中心を上質麻、撚数少ない三子とし、之を綿糸二十番手一號絲位を以て「セキ」巻けるもの、長さ四—五米太さ出来上り一米につき一〇瓦内外とし、兩端を「ツボ」に造り、一方は枝絲に他方は「カナヤマ」に連結せしむ。各枝繩に一本宛を附す。

「カナヤマ」鋼鐵線・三十番十九本撚・二十五番九本撚、等を用ひ、長さ約二米とし、一方を「ツボ」に造りて「セキヤマ」の「ツボ」に對し「カタメムスビ」を以て連結せしめ、他端は釣鉤に確實に取付ける。各「セキヤマ」に一本宛を附す。「カナヤマ」はこの附近が魚に磨擦して、最も損傷し易きために附するものであるが、釣上げのとき之を直接手に持つことは危険なるが故に、其長さは短かきを要す。

釣鉤 鋼鐵製・錫鍍とし、延長一〇糎乃至一三糎位の「フトコロ」狭きものを用ひ、「カナヤマ」を取付ける「カエシ」の部分は環として、その取付けに便にせるものを用ひられる。

浮子網は幹繩と同材料を用ひ、直径五糎内外の太さとし、長さは一五—二五米のものが普通であるが、地方に依り、時期に依り、伸縮して使用される。一鉢には普通一端と中央に一本宛使用され、稀れには一鉢に三本或は以上を使用さるゝこともある。一端は枝繩と同様に幹繩の「ヤマツボ」に結付され、他端は浮子の「ツボ」に結付される。

浮子は桐丸太、直径一〇糎内外、長さ八〇糎乃至一米とし、中央附近に浮子繩結付に便ならしむるため、棕梠網等を以て長さ二〇—三〇糎の「ツボ」を設く。各浮子繩に一個を付するのである。

「ボンデン」各鉢の接合點の浮子に、竹直径三糎内外長さ三米内外のものを、浮子より上に一—二米を出して直

立し得る様に附し、この竹の先端には適當の布片、竹葉等を附して目標とし、一鉢の境介を示し又延長の繩の形状方向を知るに便するものである。

以上の如き構造として使用されるのであるが、枝繩に長短の別あるは、各釣鉤の深さを相當の範圍に廣くあらしめて、鮪の泳游層に當ることを容易ならしむるためであるが故に、「フラセ」の付くべき位置は、多くは浮子繩と浮子繩との中央、幹繩が約懸垂曲線をなして延長されたる場合、最も深き點に附するを原則とする。「フラセ」を又「サガリ」と稱し、之に對して他の短枝を「アガリ」と云ふこともある。

鮪大繩は夜間にも使用すること度々であるが故に、一連の延繩の兩端及び中央等には、特に適當の浮標燈を附して、作業上の便に資して居る。

「トンボ」延繩も亦大繩と大同小異であるが、主目的物が小なるが故に、幹繩・枝繩・釣鉤等が何れも著しく弱小である。一鉢の幹繩の長さは大繩よりも長く、五〇〇米内外とされて居る。これ幹繩の太さ小さく直径三糎内外あるがためである。枝絲は普通綿糸二十番手四十本合せ内外の太さのもの、長さ六—七米を用ひ、枝絲の間隔は一〇—二〇米とし、一鉢の内に大繩用の枝絲（「フラセ」に近いもの）と同様のもの、二—三本を混用して居るものが近時多く見られる。これは同時に大形の鮪類をも釣獲する機會、相當に多きがためである。「トンボ」用の枝絲には直ちに、延長六糎内外の釣鉤を結付して用ひられる。其他の構造に於ては大繩と殆ど同様である。

之等の延繩の餌料は、多くは大繩に於ては二番「イカ」(スルメイカ)の鮮餌、丸刺として、「トンボ」繩に於ては眞鱈マイワシを鮮魚又は鹽藏として丸刺しとして使用される。

第十一節 底延繩類

浮延繩類に反して、水底に沈着せしめ、又は水底を基準として、従つて水底に近き位置に使用さるゝ延繩類を底延繩類とする。水底若しくは水底近くを游泳する魚類を多く目的として居るもので、沈子を以て幹繩の位置を固定せしむるものであるから、沈子は相當に多く用ひられ、従つて其材料は主として自然石を用ひられる。これを小手石と云ふ。小手石は幹繩に直接結付する場合もあるも、水底に岩礁多き場合に於ては、枝絲の内の一本に結付する場合もある。これ一般に幹繩は枝絲に比して強きがため、枝絲のみが岩礁に掛かれる場合は、幹繩を強く引きてその枝絲を引き切り、大部分の延繩を繰上げ得れども、幹繩が掛れる場合は、遂に繰上げ得ざるに至るが故である。海底に基礎を持つが故に、延繩の位置は流動せしめ得ざるものである。

底延繩類の兩端には、其流動を防ぎ、位置を安固ならしむるために木碇・自然石等を用ひられる。又水上に其位置を標示し又は引揚げに用ふるために、此碇より浮標繩を附し、浮標を水面に浮べるものも多しある。浮標を用ひず或は浮標を流失する等の場合もあるが故に、底延繩類の位置はなるべく確實に之を承知し置くを必要とする。此のためには陸上の地物を見得る場合に於ては、底刺網類を用ふる場合と同様に、山立ての方法を以て其位置を確知するを一般とする。

底延繩類に屬するものは甚だ多く、延繩類中の大部分は底延繩類に屬するものであるが、之を以てする漁業には、規模の大なるものは甚だ稀であるが、母船式「レンコ」鯛延繩漁業の如きは、規模最大なるものゝ一つである。

母船式「レンコ」鯛延繩漁業は、母船(總噸數一〇〇噸内外の發動機船)に、小漁艇(幅一、五米内外長さ四―五米)十五、六隻を積載して目的地に出漁し、この小漁艇を以て底延繩を使用して、「レンコ」鯛を漁獲する組織のもので、明治末年頃より大正中年頃に於て最も盛に、長崎縣附近を根據として、東支那海方面に出漁されたものがあるが、大正末年頃同一方面に、目的物を殆ど同一にする。發動機船を以てする手繰網漁業の隆盛となるに及んで之がために壓迫され、一時は殆ど其跡を絶つに至つたが、昭和四、五年頃に之等手繰網漁業の不況に臨み、又た之が再興を見るに至つて居る。

延繩一鉢の構造は、大要左の如くである。

幹繩、綿絲二十番手四十二本合(七本三子撚のもの二本合せ)一鉢長さ三〇〇―四五〇米

枝絲、綿絲二十番手十本合(五本二子撚)長さ約一米總數二五〇本内外

釣鉤、錫鍍鐵製重量千本につき三四〇瓦内外丸長型

繩鉢、杉板製約五〇糎角高さ六―七糎の本箱を用ふ

以上の使用數量は、漁艇一隻に對して一〇〇―一二〇鉢を用意し、一回の使用に於ては、一艇十五鉢内外とし延繩一連結の兩端には、四〇〇瓦内外の石を以て碇として附し、浮標網は幹繩と同様のもの、水深の一倍半位を

附し、浮標には母船機關燃料油の空罐を用ふ。幹繩の中途には八〇瓦内外の小手石を、延べ初めの頃は一鉢三個位を附するも、終りに従ひ漸次増加し、遂に一鉢七、八個を附するに至り、之に依つて後部の繩の沈下を速からしめる。之等の小手石は枝絲に依つて附するものである。餌料は普通鱈類の鹽藏品を、小なるものは二折りとし、首尾を合せ、大なるものは二つ切りとし、合せたる首尾又は切り口を、綿細絲を以て數回巻き餌持ちを良好ならしめて居る。

漁具使用の際は、各艇は母船を中心として放射狀に繩を延長投下し、先方の端に至つて位置を占め、三十分間位の後其方より揚繩し來り、遂に母船に至るのであるが、此作業に於ては漁艇は極めて弱小なるが故に、各艇互に連絡を保ち、又母船はよく之等を監視して、危難を防止し相互扶助の動作を必要とする。又大體使用漁具數に依つて漁獲量は決定さるゝが故に、就業者に比して漁具の使用數量甚だ多く、之に依つて此漁業の規模を大ならしめて居るがために、使用後の延繩の整理、餌料の製作等は皆分業として、根據地の婦女子になさしめて居る。之等の點に此の様式の特徴を見る。

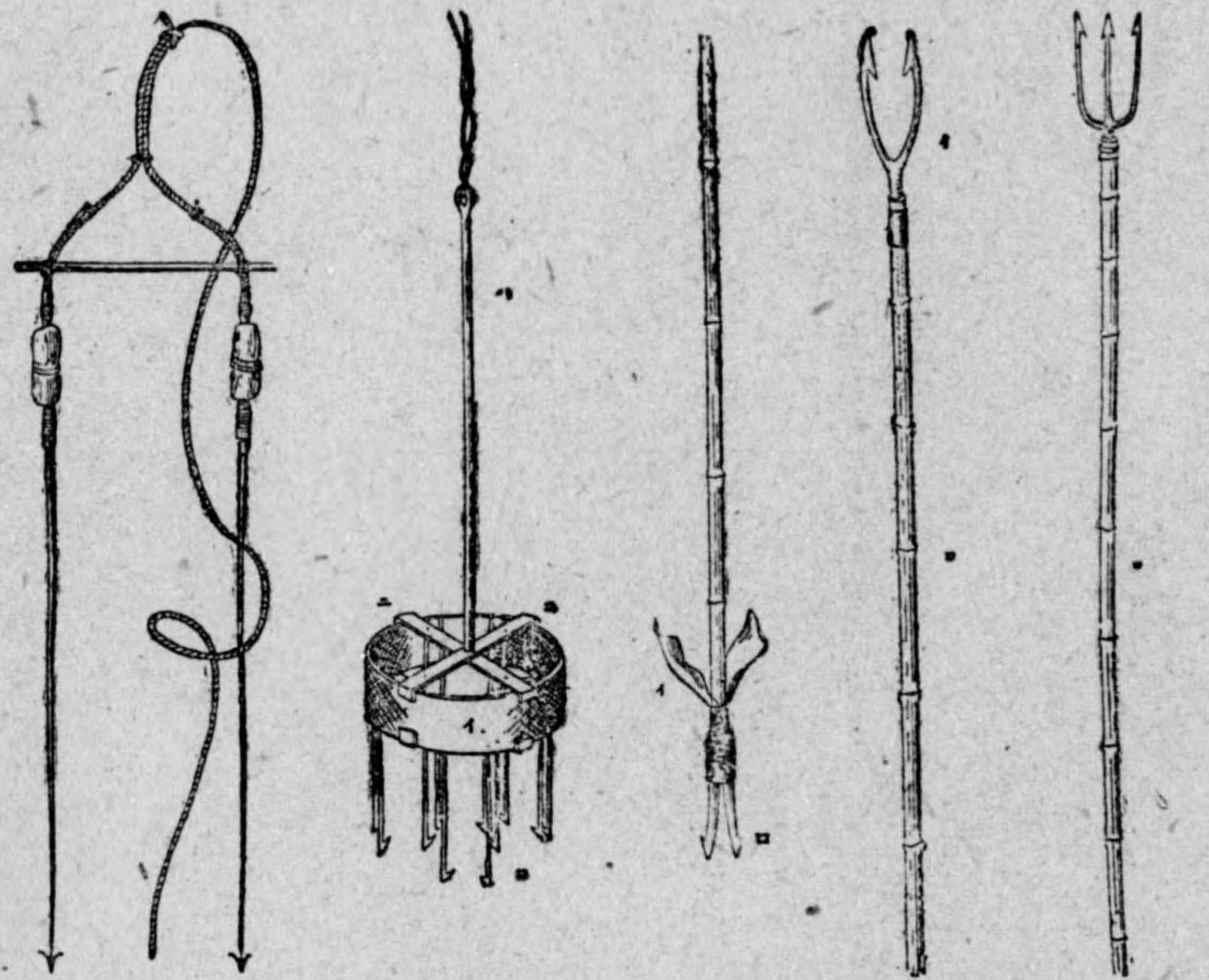
第七章 雜 漁 具

漁具類中最も多く使用され、又漁獲を多く揚ぐるものは、網漁具類・釣漁具類であるが、之等の外に漁具としては猶ほ種々の趣向のものが用ひられる。之等を凡て總括して、雜漁具類とする。多くは何れも小規模のもので、實用上に於て重要とすべきものは甚だ稀れであるが、其の趣向が多趣多様であるために、中には甚だ珍奇妙趣あるものも少なくない。其の目的物の種類・漁撈の場所及び時期に依つては、網漁具類・釣漁具類の及ばざる性能を有するものもあり、雜漁具類の各種の趣向・構造・使用の方法等を研究することは、漁撈學上相當興味あり且つ重要視すべきことである。

雜漁具を分類することは甚だ困難であるが、其漁撈趣向の上より見て、凡そ左の七種類となし得べきか。

- 一、刺突具類
- 二、鉤引具類
- 三、挾振具類
- 四、剝把具類
- 五、誘導陷穿具類
- 六、迷入陷穿具類
- 七、強制陷穿具類

勿論或る場合には同一の漁具を以て、全々趣向を異にせる漁撈に用ひらるゝこともあり、又單一なる趣向に依らず種々異なる趣向を加味して用ひらるゝものもあるのであるが、かゝるものは其主なる趣向に従つて屬せし



(G) 竹鏢突具
(福岡縣に於て使用の一
種手綱を用ひ突具の沈降
力を利用して刺突するも
の)

(F) 海鼠突具
(福井縣に於て使用
の一種手綱を用ひ突
具の沈降力を利用し
て刺突するもの)

- イ 綱輪
- ロ 針
- ハ 心標
- ニ 桁

(E) 海鼠突具
(熊本縣に於て
使用のもの金具
附近に白布片を
附し水深深く尖
端を明視し難き
場合其位置を知
るに便にす)

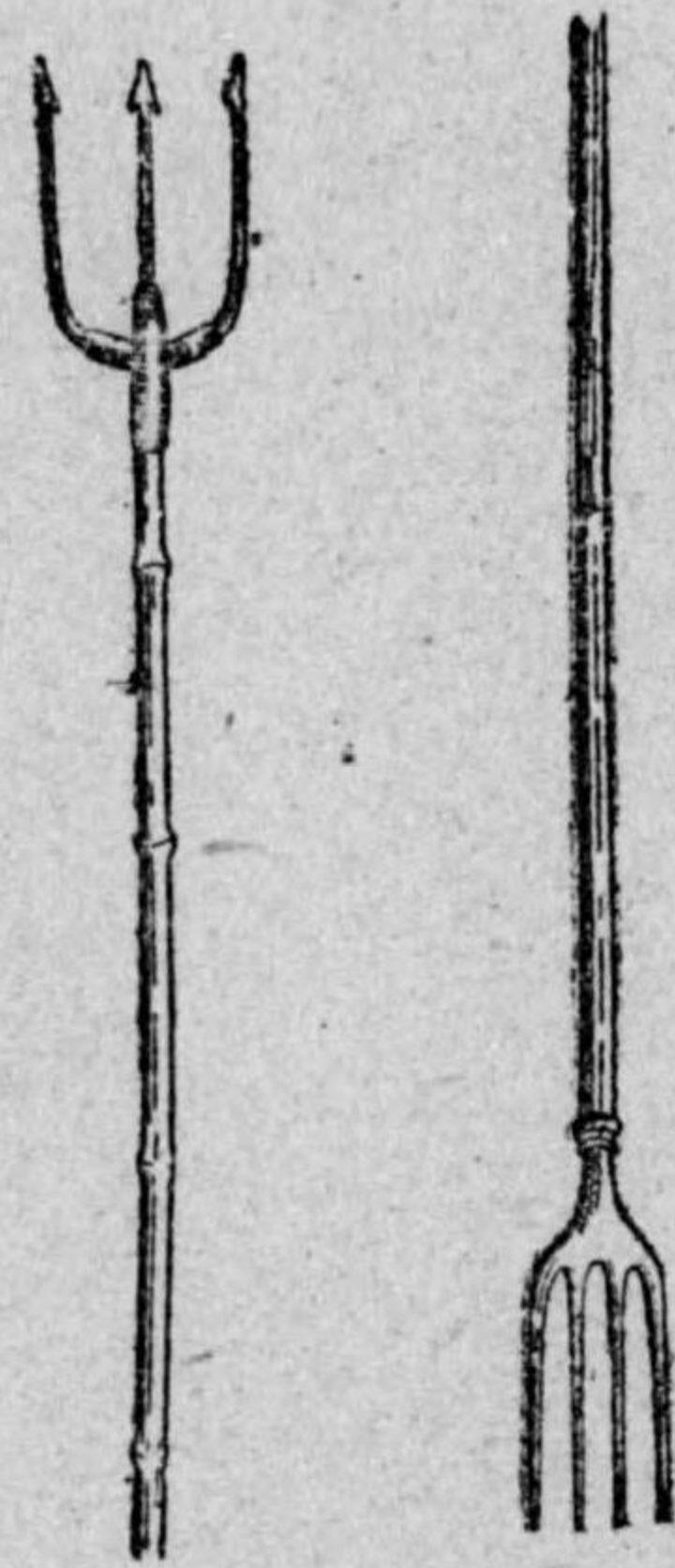
- イ 白木綿
- ロ 長さ一寸五分
- ハ 跨り六分

(D) 鮑突具
(徳島縣にて使
用する一種)
コングリツキ
イ 穂先金屬
長さ各五
寸
ロ 女竹長さ
六寸

(C) 鮑突具
(三重縣にて使
用する一種)
イ 穂先金屬
長さ各三
寸
ロ 柄竹長さ
五間半

めて可なるべく、又雜漁具中には、この七種の趣向以外の趣向を以て造られたるものもあるだらうが、之等は其場合甚だ稀にして、實際上重要なものなきが故に、最も類似せる趣向のものの中に包含せしめても、多く不便を生じないであらう。

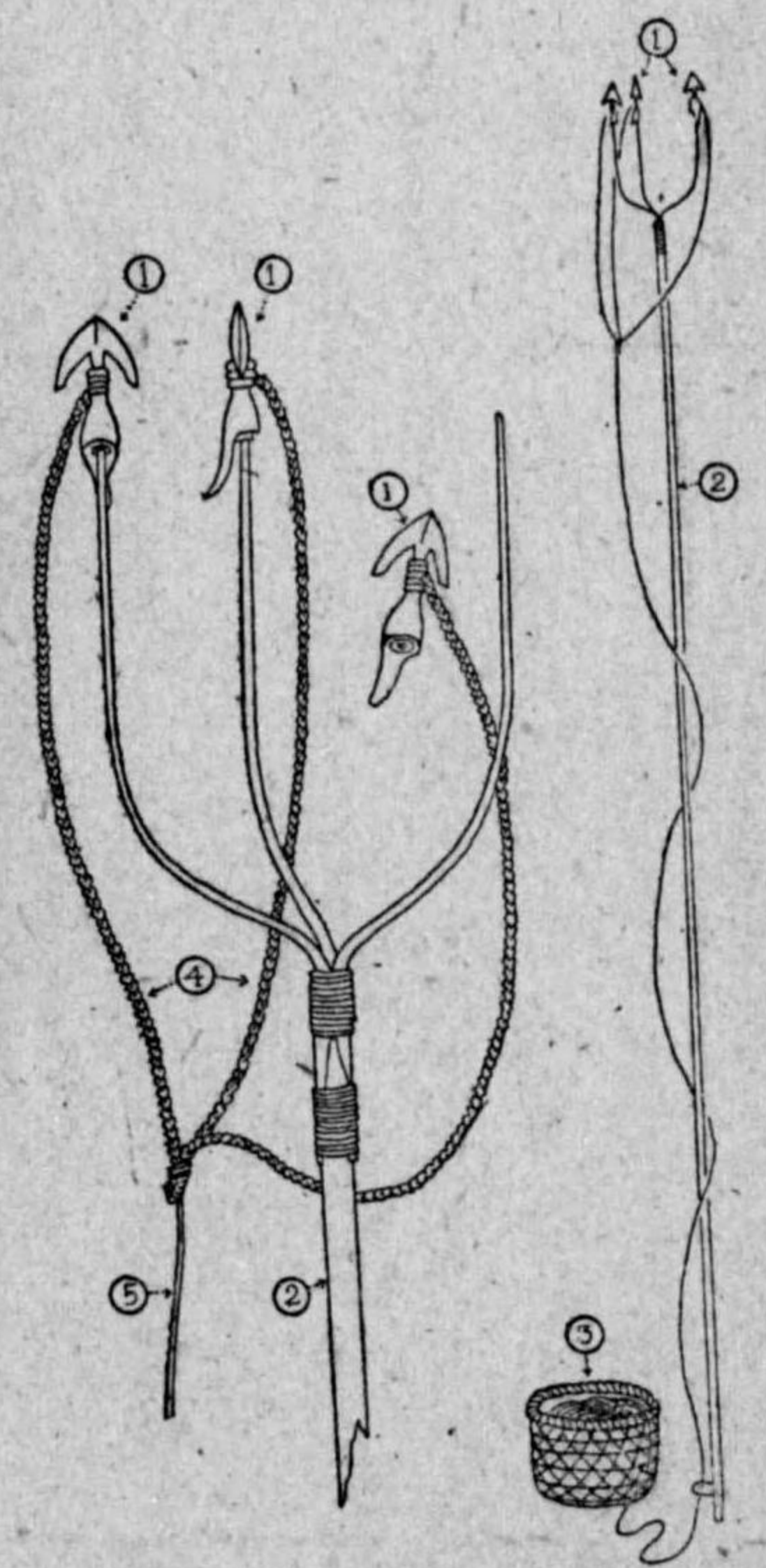
刺突具類は、目的物を刺突して採捕する趣向のもので、多くは金屬の尖鋭なる先端を有し、又一度刺突せる目的物が、容易に脱落することなきために、釣鉤の「アグ」に類似する逆鉤を有するもの、相當に多きを見る。構造上には把柄に先端部の固着せるものと、先端部の着脱し得るもの、着脱し得るもの、先端部には、綱を附して之に依つて目的物を取り揚ぐに用ひ、或は把柄と連絡せしめて居る。又使用上には把持刺突するものと、投射刺突するものがある。投出する方法は直接手投するものと、弓・銃砲・發條投射器等を用ひるものがある。普通に錯と稱せらるゝものは、把持刺突するもので、把柄は多く固着式のものである。把持刺突するものは、主として目的物が弱勢なるか、活動することなきか、活動することとしても甚だ遅緩なるかの性状を有し、且つ極め



(A) 見突具
(千葉縣に於て水
眼鏡を用ひ淺海を
搜索多く魚類を刺
突するもの)

(B) ゑひ突具
(廣島縣に於て鰯
を捕るに用ひ鰯魚
を用ひて誘致して
刺突す)

第 百 一 圖
刺 突 具 (把 持 刺 突 類)



第百二圖 投射刺突具
A 鈎(つきんぼう用)
(1) 鈎(鋼) (2) 鈎竿(樞)
(3) 鈎綱 (4) 根鈎 (5) かなやま



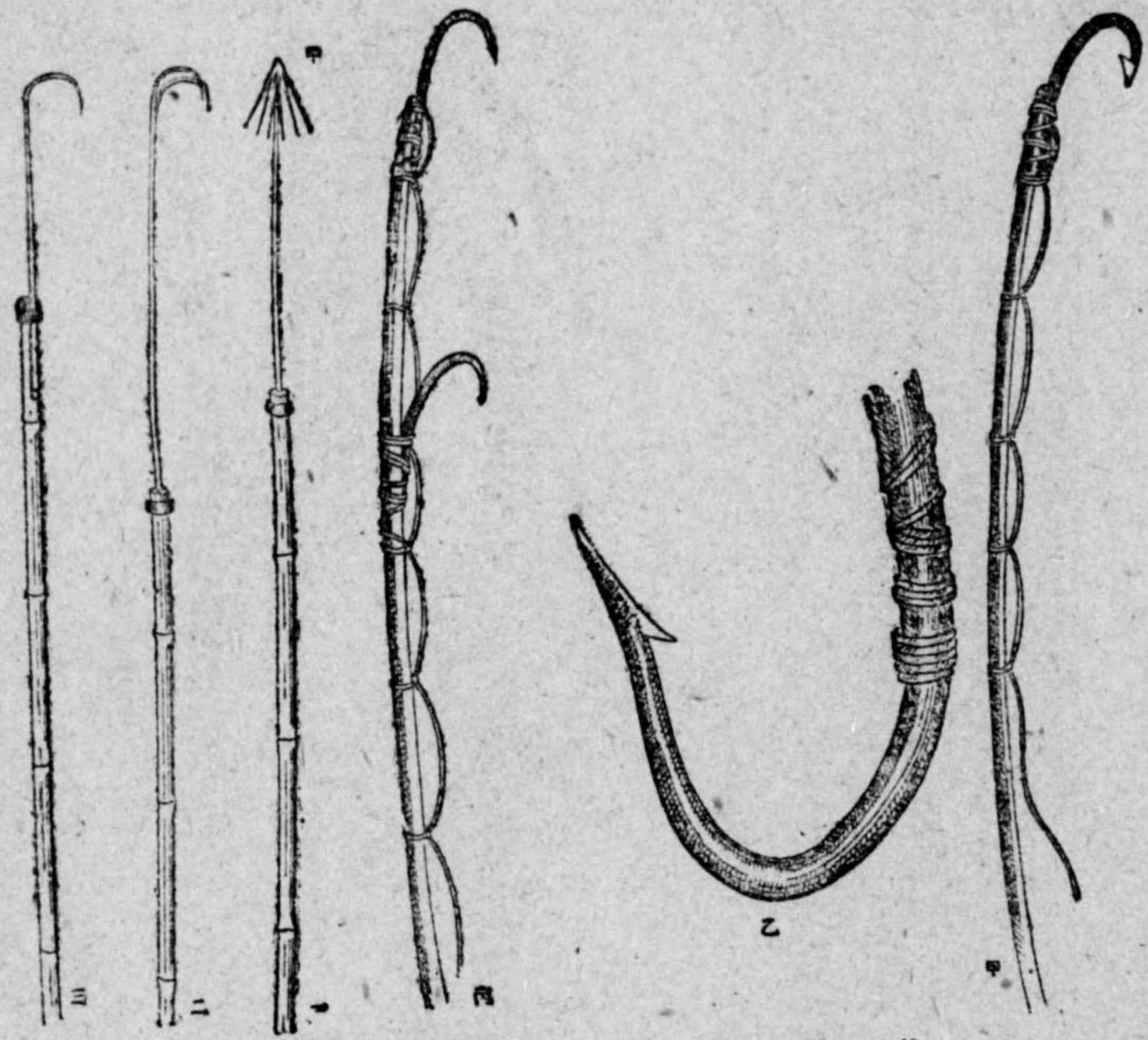
第百三圖 投射刺突具
B ノールウェー式捕鯨砲及び鈎

て近接して刺突し得る場合に、適用さ
るべき趣向の漁具である。
投射刺突するものは、目的物に著し
く近接し得るか、近接し得ても其活
動敏俊にして、容易に把持刺突し得さ
るが如き場合に用ひられるもので、近
接して刺突し得ざる場合、刺突具の命
中は困難となるが故に、投射刺突具の

目的物は一般に大型のものに限らるゝ傾向を生ずる。着脱式のものには目的物が強烈なものに對して、刺突後の
作を容易ならしむるためにされたる趣向であるが故に、多くは脱離し難からしむるために、先端部に逆鈎を備
て居る。大型の目的物に對して使用される放射刺突具類に着脱式のものが多く用ひらるゝは蓋し當然とすべきで
ある。

刺突具類は一般に把柄の及ぶ深さ、或は投入し得る深さに使用範囲が限られ、使用範囲浅水層に限らるゝもの
であるが、海鼠突具・竹鯨突具等には長き手綱を附して、相當の深層に突具を沈下せしめ、其漁具の沈降力を利
用して手綱を以て縦刺突するものもある。其の外此刺突具類に屬すべきものは、其種類甚だ多きも多くは規模
小にして、漁業上特に注目すべきものは、旗魚・鮪等を主要目的とする投鈎類(それによる漁業を俗に「ツキン
ポー」と云ふ)及び捕鯨を目的とする鈎類である。

旗魚・鮪類用投鈎は、有柄着脱式投射刺突具で、鈎柄は樞の如き堅材を以て正直なる直径二―三糎長さ三―四米
の丸棒とし、先端を少しく細めて鈎の装着に便にし、或は二又、三又の金具を裝備して、二、三の鈎を同時に装着
し得せしめ、目的物への命中を確實ならしめて居るものもある。鈎は鋼鐵製にして總長六―八糎、著大なる逆鈎
を双出せしめ、先端より逆鈎端に至る前外縁は尖双ならしめて刺入を容易ならしめ、逆鈎の後内縁はなるべく厚く
して抜け難からしめ、更に鈎尾を側方に曲出せしめ、鈎綱は鈎の約中央に側方より結着せしめて、刺入後は双逆
鈎によるのみならず、鈎綱を引けば鈎全部が目的物内に於て、鈎綱に對して丁字形をなして、鈎の脱抜を甚だ困
難ならしめて居る。鈎には上質麻を以て、稍々太く柔軟なる長さ二〇―三〇糎の根緒を最も堅實に結附し、之を



(C) たこ鉤
(廣島縣)

(B) 鮭罾鉤
(北海道に於て鮭罾を漁獲するに主として上流地方に於て使用されるもの)
甲、單鉤のもの全形 乙、甲の鉤部 丙、複鉤のもの

鉤引具類は刺突具類とほぼ反對の要領を以て目的物を鉤引して漁獲する趣向を以てせる漁具で、此の點に於て釣漁具に甚だよく類似するものであるが、釣漁具の動作は主として受動的であるに對して、之は主として能動的で、釣具の尖端を目的物に刺入するために強く牽引するもので、此の點恰も刺突具類が突出して刺入するに類似して、たゞ其動作の方向全く相反して一方は牽引し一方は突出するの差があるのである。何れも目的物に刺突又は鉤引の好位置に、漁具の位置をあらしめてなされるものであるが、釣漁具に於てはこの



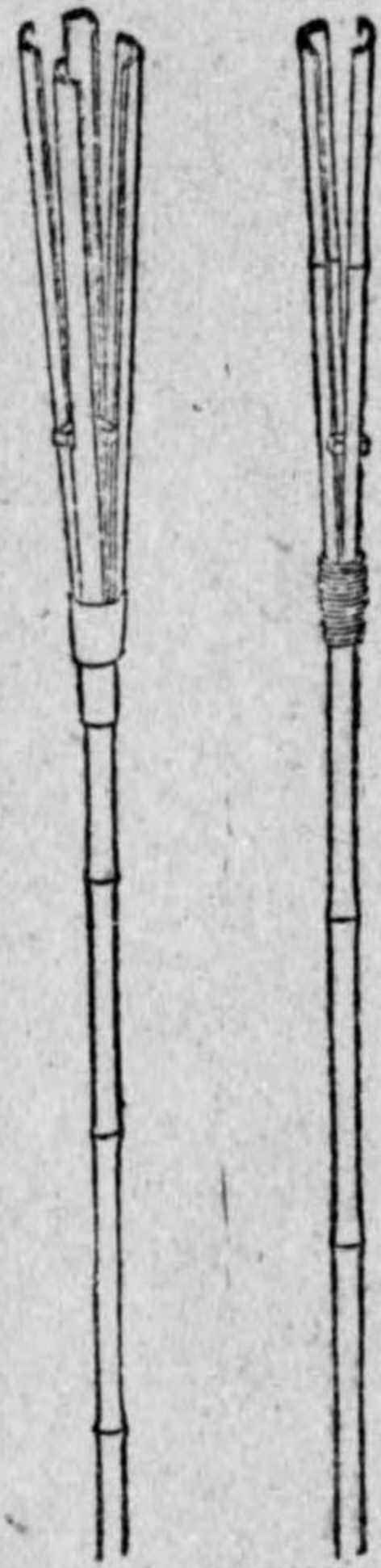
第百四圖 鉤引具
(A) 鮑鉤
(鮑を採捕するに用ひらるる鉤引具)

の様式にして遙かに小型の捕鯨砲、數門を垂直に並べて一體とせるものを裝備し、之に依つて小型の銆を數個同時に發射せしめ、銆の命中を容易ならしめて居るものもある。

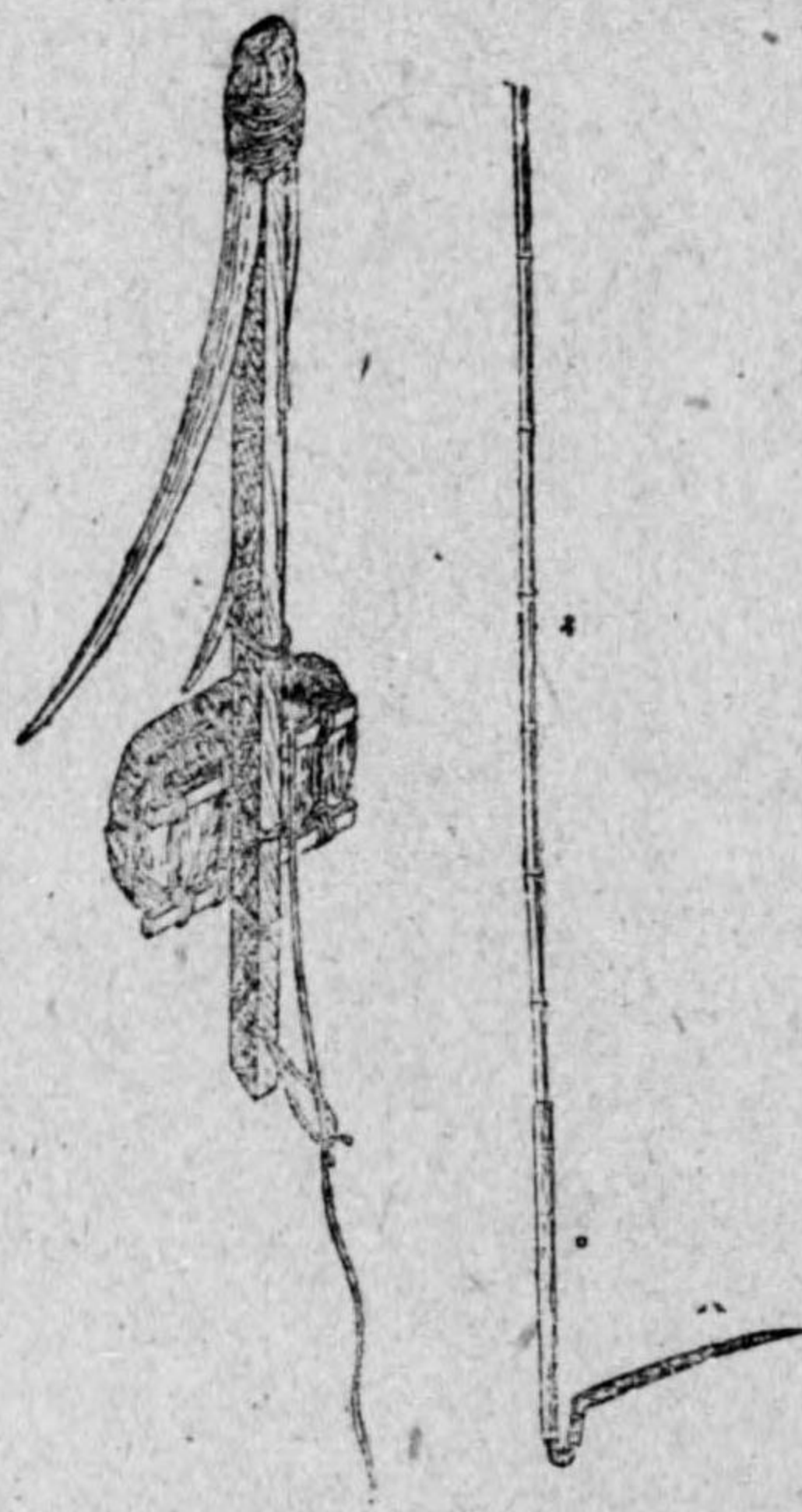
銆網との連結に用ひ、且つ刺入創口が網突後、目的物の活動のため、銆網に磨擦して擴大せしめられることを避けしめて居る。銆網の先端は目的物の體表等に當りて損傷することなき様、鮪大繩の枝絲先端部とほぼ同様に、「カヤマ」「セキヤマ」等を附し以下は上質麻絲、直徑五耗内外の銆網、長さ三〇〇米内外を用ひる。此の銆を使用するには、漁船は十數噸の輕快なる發動機船を多く使用し、船首に投銆臺を設け、之に以上の銆を投射する漁夫二三人立ち、目的物が水面に鏽端を現はして浮游せる等を求めて追跡し、普通二〇—三〇米以内のなるべく近距離に接近して銆を手投して、目的物を刺突漁獲するのである。捕鯨銆は鯨類を目的とするもので、銆の要領は大體前記に類するも、形狀に多少の差あり且甚だ大型にして、諸威式捕鯨にありては、銆の總長二米内外、重量約六〇匁に及び、又銆の先端は着發式の砲彈と同様の趣向を以て、銆が鯨體に突入するや直に爆發して、之に依つて鯨の威力を減殺せしめ、捕獲を容易ならしめて居り、銆網も亦之に應じて強力長大なるものとして居る。使用漁船は一〇〇—一五〇噸の汽船にして、其船首に銆投射用の砲を裝備し、數十米迄鯨に近接して、火藥を以て發射刺突して捕獲する趣向となして居る。又小型の鯨類を目的とするものには、漁船の船首に諸威式捕鯨砲と同様の様式にして遙かに小型の捕鯨砲、



(B) 鰻 挾
(長崎縣)

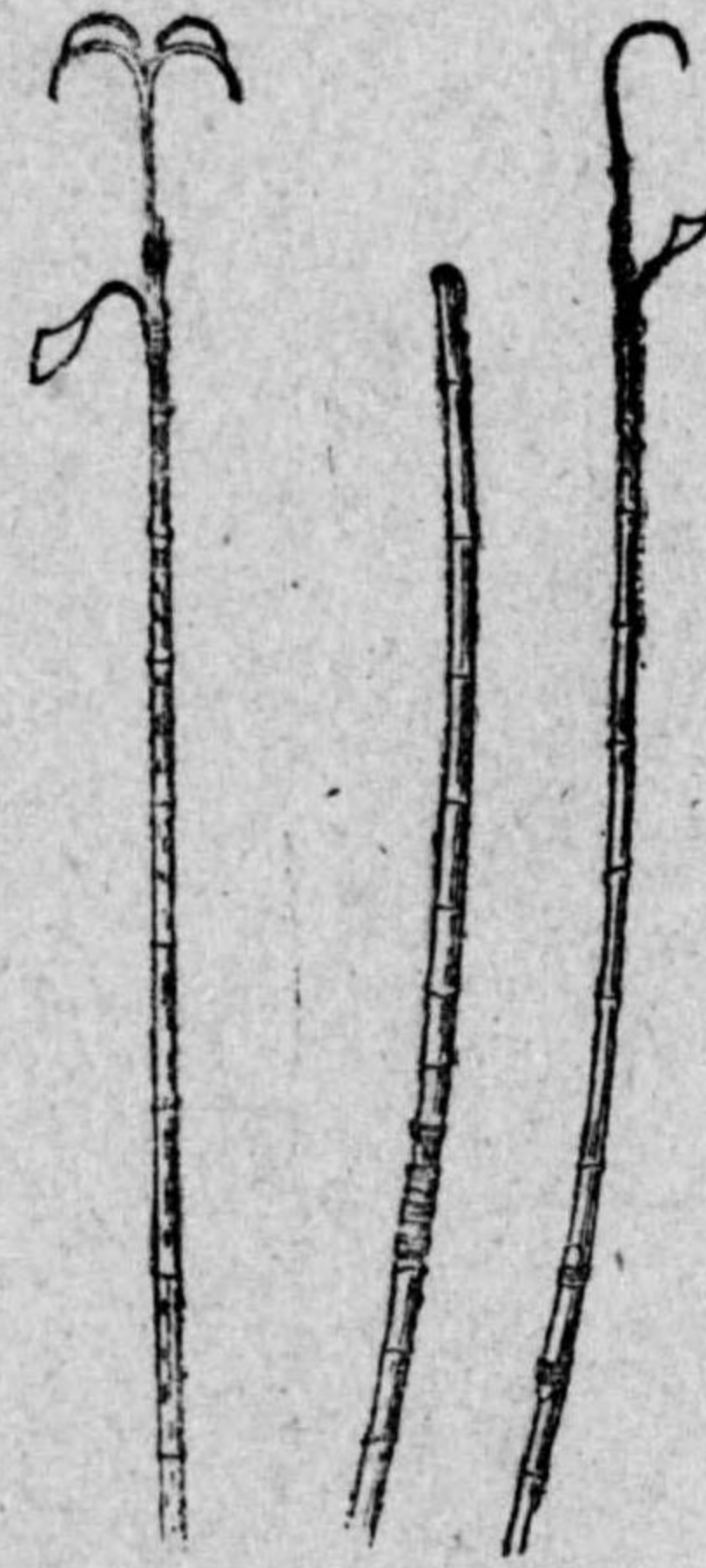


第百五圖 挾 具
(A) さぐえ捕(廣島縣)

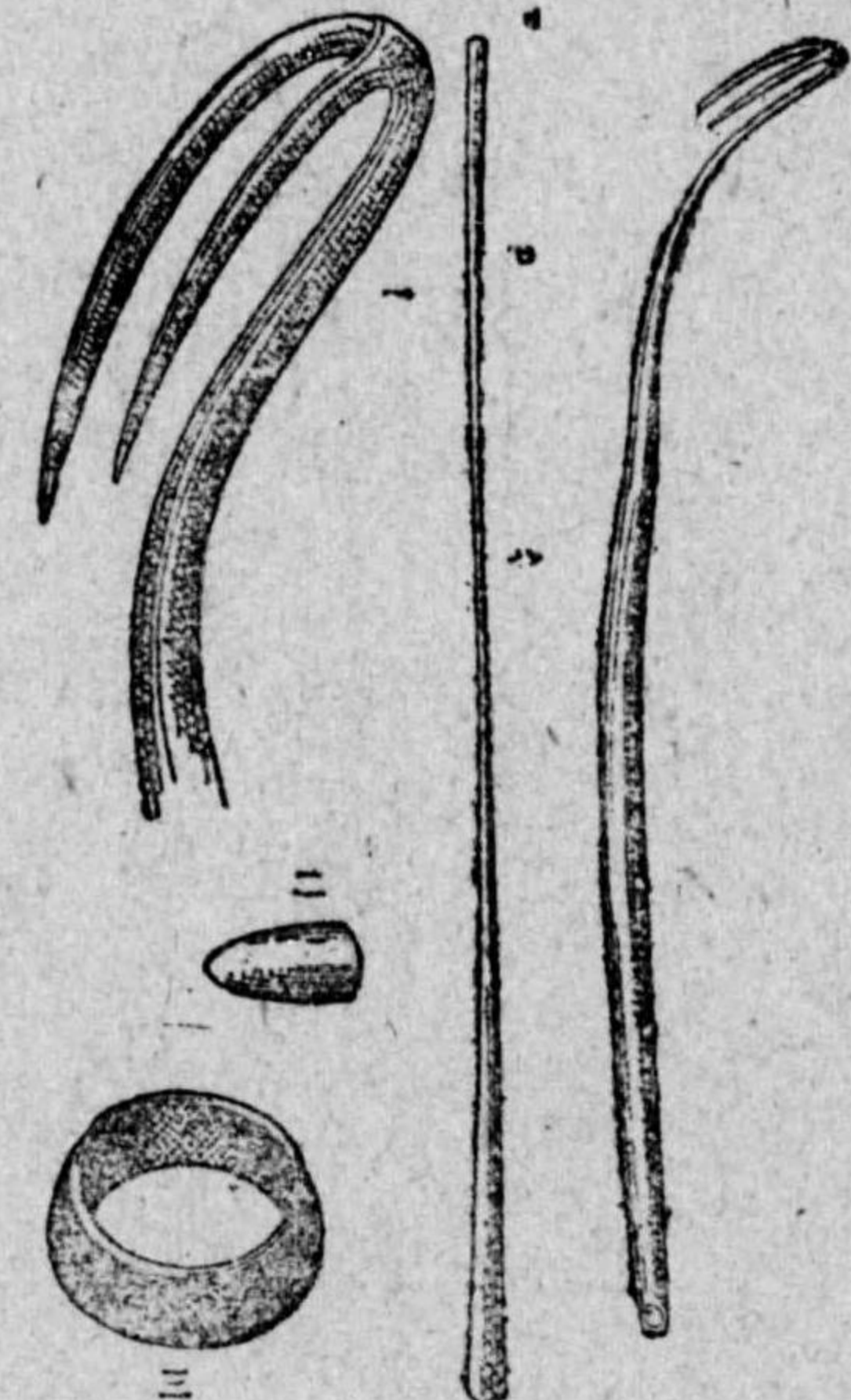


(G) 昆布採底引具 (大分縣に於て使用のもの)
木製にして沈石を付す
(F) 藻採 鈎
(イ) 竹柄長約八米、
(ロ) 木柄部長約五〇釐、
(ハ) 鈎部長約三〇釐、

釣引具も亦一般に規模甚だ小にして、漁業の實際上に於ては餘りに重要すべきものを見ぬのである。
挾換具類は目的物を挟み捕り、或は纏絡せしめて振り捕る趣向の漁具であつて、其内には種々の形状をなすものがある。挟み捕る趣向のものに於ては、手綱を附して之に依つて操作するもの



(E) 海鼠鈎
三重縣にて使用のもの稍々深き所に使用する
場合鈎の位置を示す目標として白布片を付けるものあり

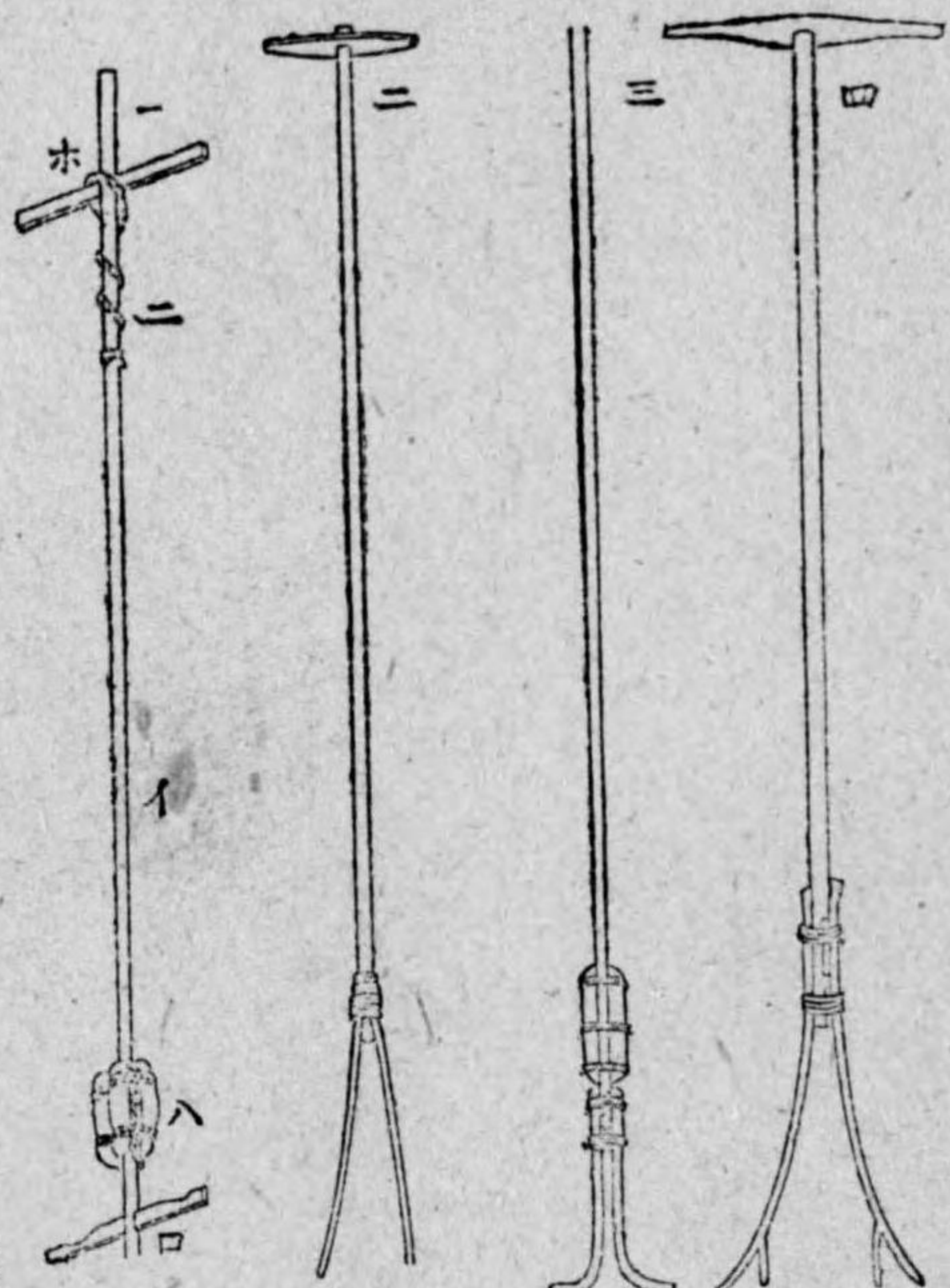


(D) 鰻 鎌
(東京府にて使用のもの、之に長き柄を附し水底
泥土中に三〇釐位刺し込み泥土中を一、二米遠
き處を懸けて漁獲するもの)
一、頭部厚約七釐 ローハ、頭部厚約五釐
二、鈎部大形、三、木柄取付用環、

釣引具類は尖銳の鈎に把柄を附して、鈎の位置を自由敏速に機に應ぜしむるものが多く、又把柄に代へるに手綱を附して之に依つて使用されるものもある。又鈎の尖端部には逆鈎を附して、鈎引を確實にするものもある。牽引刺入の動作は、突出刺

所に少しく趣を異にするところあり、釣漁具は鈎引の好位置に目的物の方を來らしめてなされるものである。大體に於ては斯の如き差異を有するも、多數の漁具の中には、釣漁具と鈎引具との中間に位して、何れに屬すべきやを決し難きものもあるが、之等は其近き方に分屬せしむべきか。

把するものあり、剝落せしむるにも、搔剝せしむるものもあり突剝せしめるものもある。之等は多くは浅水部に使用されるものであるが、把具殊に搔把する趣向のものに於ては、相當に水深深き所に迄使用されて居る。一般に小規模のもので、漁業上重視すべきものは稀であるが、各種の具桁類は相當重要なものである。

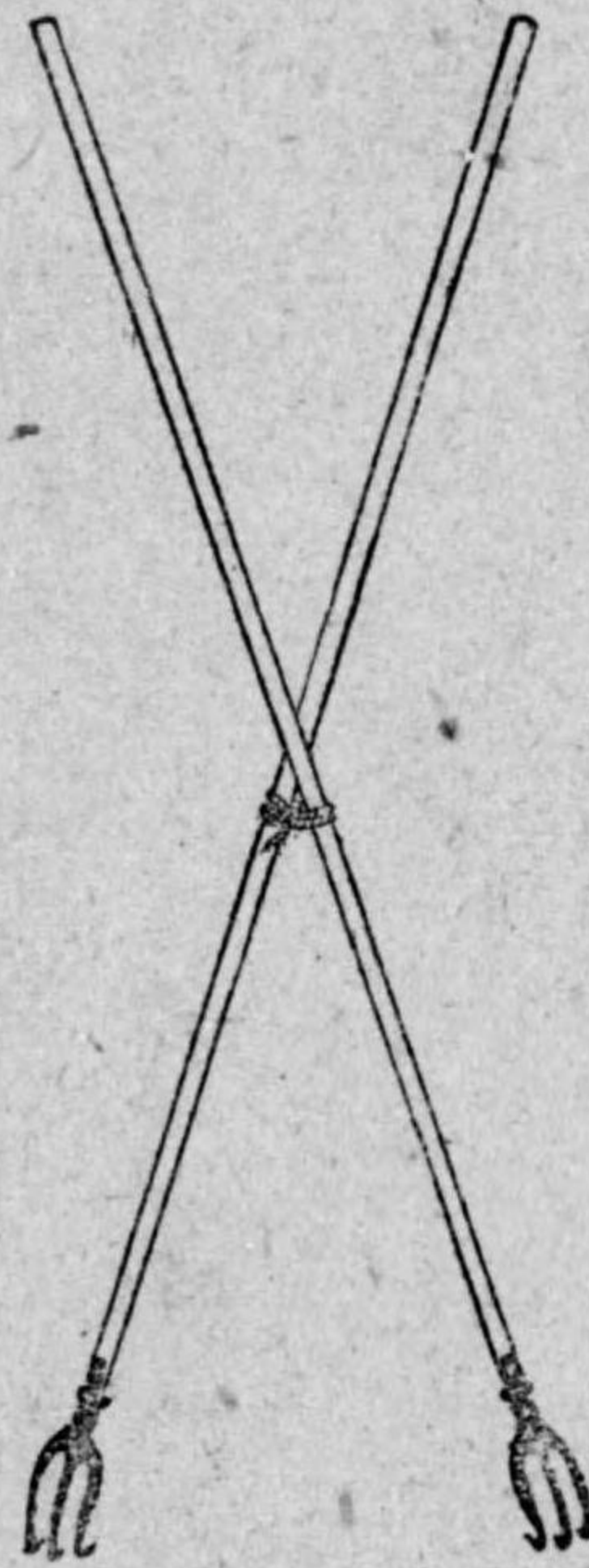


第百六圖 採具 (A) 昆布採具 (北道海)

一、サヲ又はネチリと云ふ。二、柴マツカと云ふ。三、テンジンマツカと云ふ。四、マツカの一類。五、木柄長一〇米内外の堅材を用ふ。ロ、木柄に貫通して設けたる横枝昆布巻締用とす。ハ、沈石重量一三並位先端に沈降力を附し使用に便にす。ニ、把持手取付用鋼。〇、搔把手。

の漁具を併用し、又は同一具に適當の構造を施し其性能を備へしめて居る。把具類に於ても同様に亦把起せるものを、抄ひ捕り、又は挟み捕る等の趣向の他の用具を併用し、又は同一具に其性能を俱備せしめて居るものが多い。把起するに於ても搔把するものあり、掘

剝把具類は目的物が他物に固着潜入せる、例へば蠣・鮑の如きものを剝落せしめて採捕し、蛤・蛸の如き沙泥中に潜入せるものを把起せしめて採捕する傾向のもので、剝具に於ては多くは扁平なる金屬製の先端を附して、之に依つて剝落せしむるが、剝落せしむるのみにては漁撈を完了せざるが故に、之を更に手摺にし或は刺突鉤引等の



(E) かき 挟 (宮城縣長カキを挟み捕るに用ひらる)

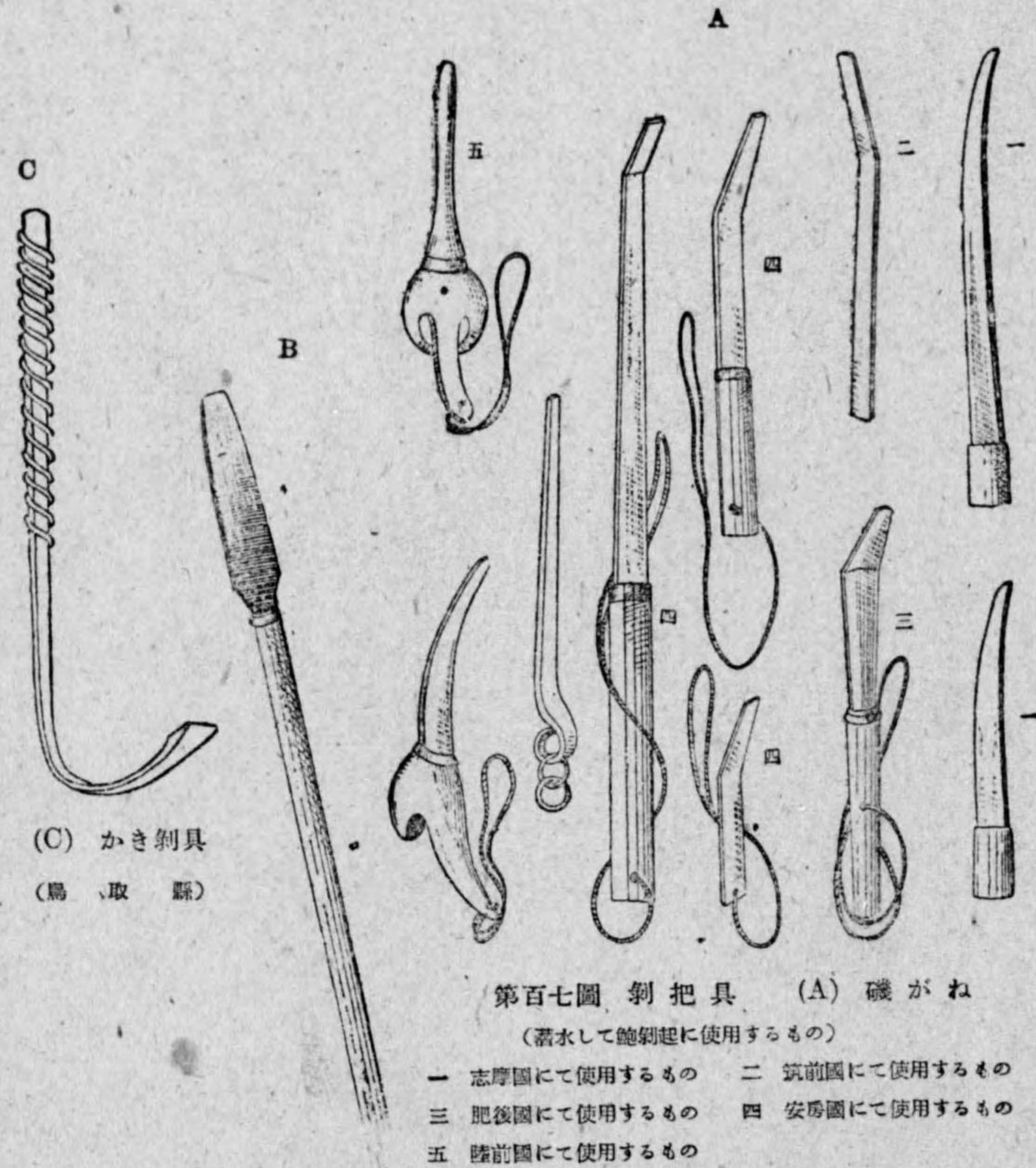


(D) 眞珠具挟 (高知縣) (このものは手綱を引きて貝を挟み採る)



(C) わしづかみ (高知縣) (水眼鏡を用ひ把柄を引きて貝類を挟み捕る)

を相當に見らるゝも、振り捕る趣向のものに於ては把柄を有し、之を以て振らるゝを普通とする。何れも目的物が不動のものであることを必要とし、挟み捕る趣向のものは目的物が堅硬なるか、或は損傷を附することを避ける必要あるものに適用されて其妙趣を發揮し得るものである。振り捕る趣向のもの、海藻類の如く地物に固着して、しかも纏絡に適するものに適用される。場合に依つては挟振の兩趣向を兼ねしめて、確實に挟みて後振り取る如きものもある。何れも水深淺き所に於てのみ使用され、規模も小さく、實際漁業上に於て注意すべきものは殆どないのである。

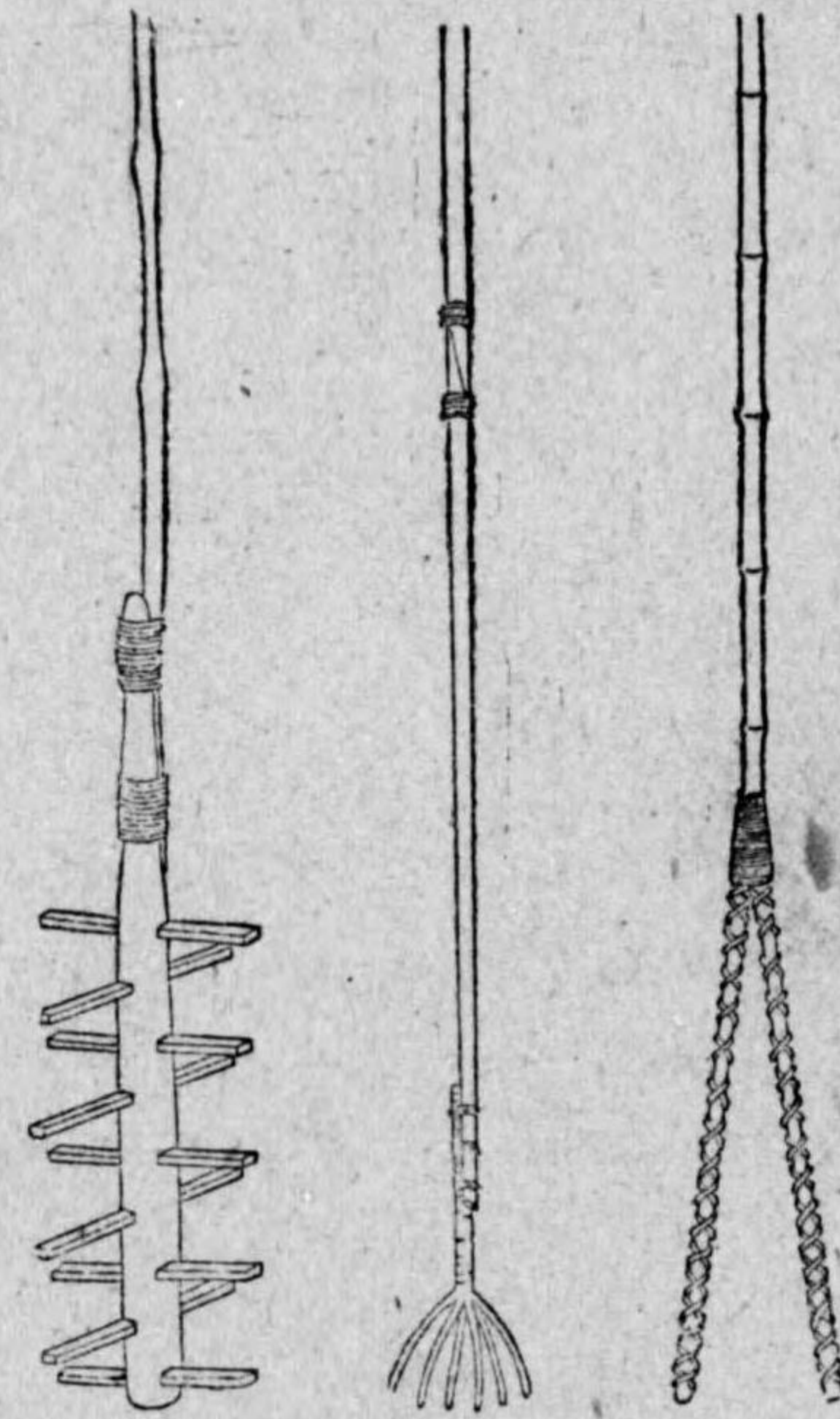


第一百七圖 剝把具 (A) 磯がね
(潜水して鮑剝起に使用するもの)

- 一 志摩國にて使用するもの
- 二 筑前國にて使用するもの
- 三 肥後國にて使用するもの
- 四 安房國にて使用するもの
- 五 陸前國にて使用するもの

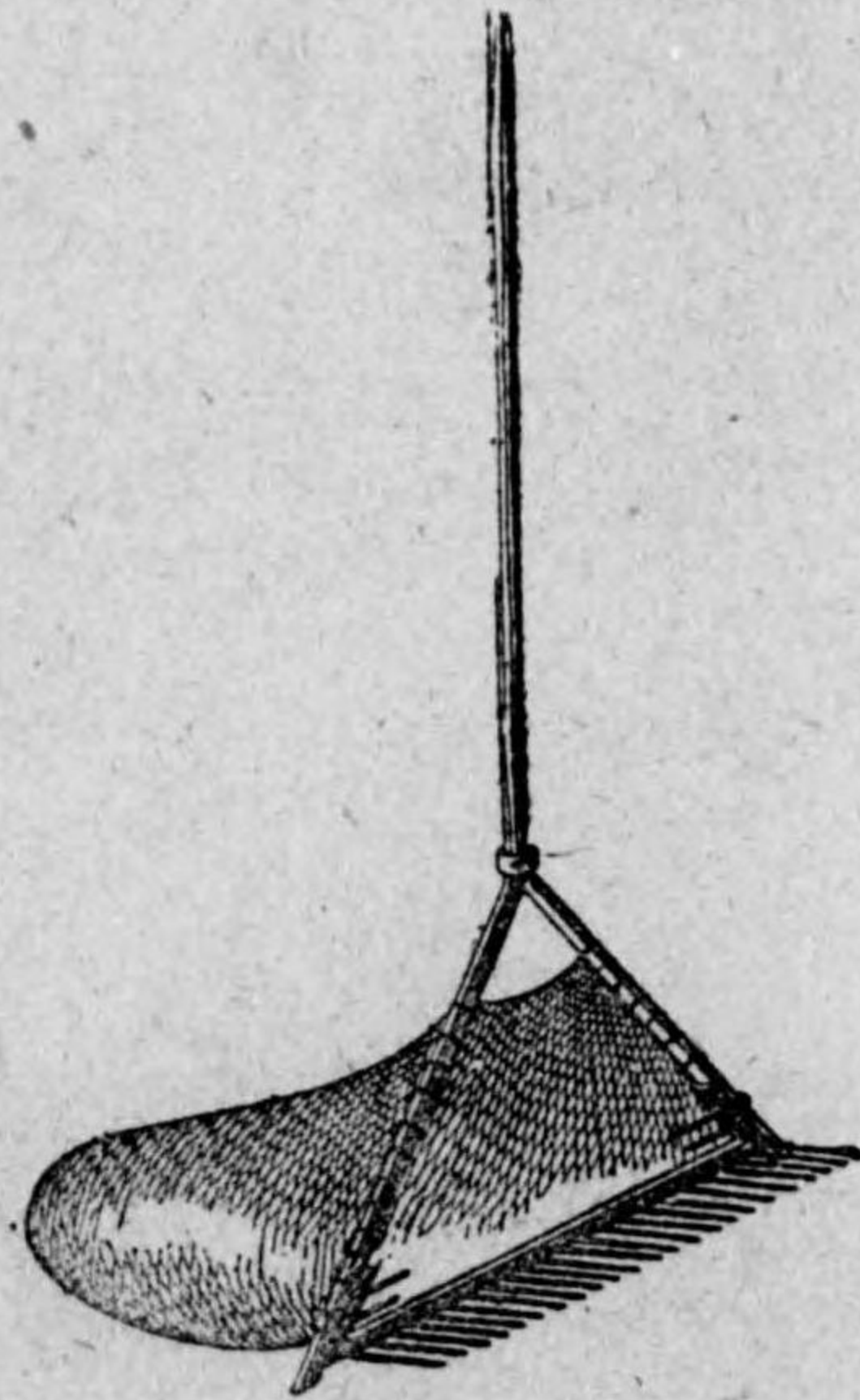
(B) 鮑起し (熊本縣にて使用するもの)
肥後國にて使用するもの 一 穂先金屬長
き四寸七分 先端四分 根元七分 二 柄鐵

誘導陷穽具類は、目的物を誘致導入して採捕する趣向の雜漁具であつて、簀の如き、壺の如き、筒の如き、種々の形状をなすものあり、其材料も木・竹・金屬等の枝條、網地等種々のものが用ひられて居り、誘致の方法としては餌料を用ひ、或は陰影を興へ、或は潛入隠棲し得せしめて漁具中に陷穽するもので、充分に誘致導入せしむれば、必ずしも逃脱に困難なる様返し等を附して混迷せしむるを要せざるが故に、之等の特殊の構造を有せぬものも多いが、漁具は不動に置かれることを必要とする。其の取り揚げに際しては、充分漁撈を確實にせざる不完全のものもあり、これ等には抄網の如き他の漁具を併用して、漁獲を完全にす。此類中には小規模にして、漁業上重要なならざるものも數多あるが、又「タコ」壺の如き相當に重要なものもある。

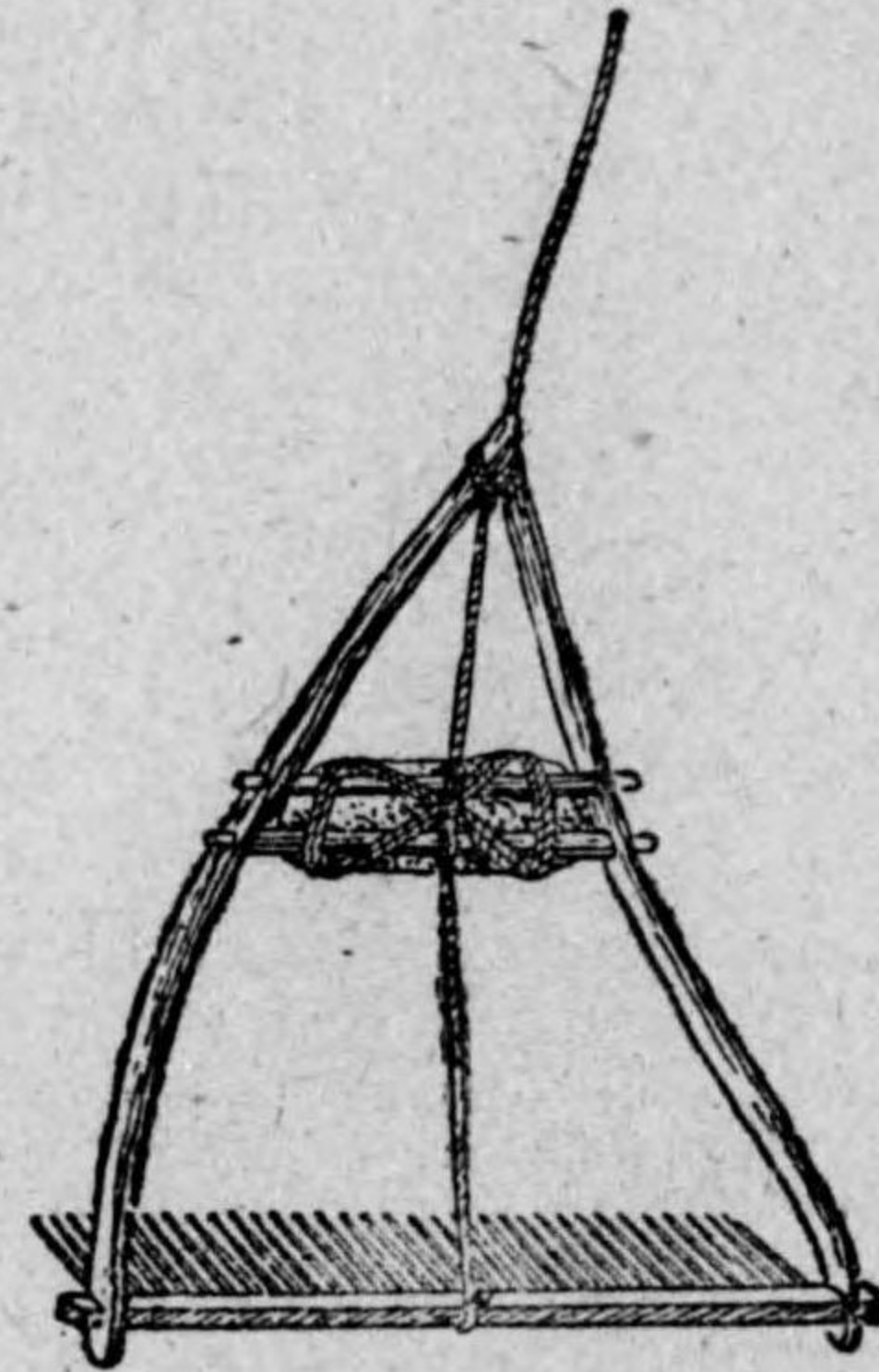


(B) 和布採具
一 鳥取縣 二 三重縣 三 廣島縣

「タコ」壺は目的とする「タコ」の大きさに依り、適當の陶製壺を主體とするもので、延繩類の如く長く強さ充分の幹繩に適當の間隔(枝繩の長さの數倍)に枝繩を數多結附し、この枝繩の端に壹個宛の壺を結付するものである。壺は其口許の所に枝繩を結付するを普通とするが、又時には口許より底部に導きて結付し、引揚の際は壺が

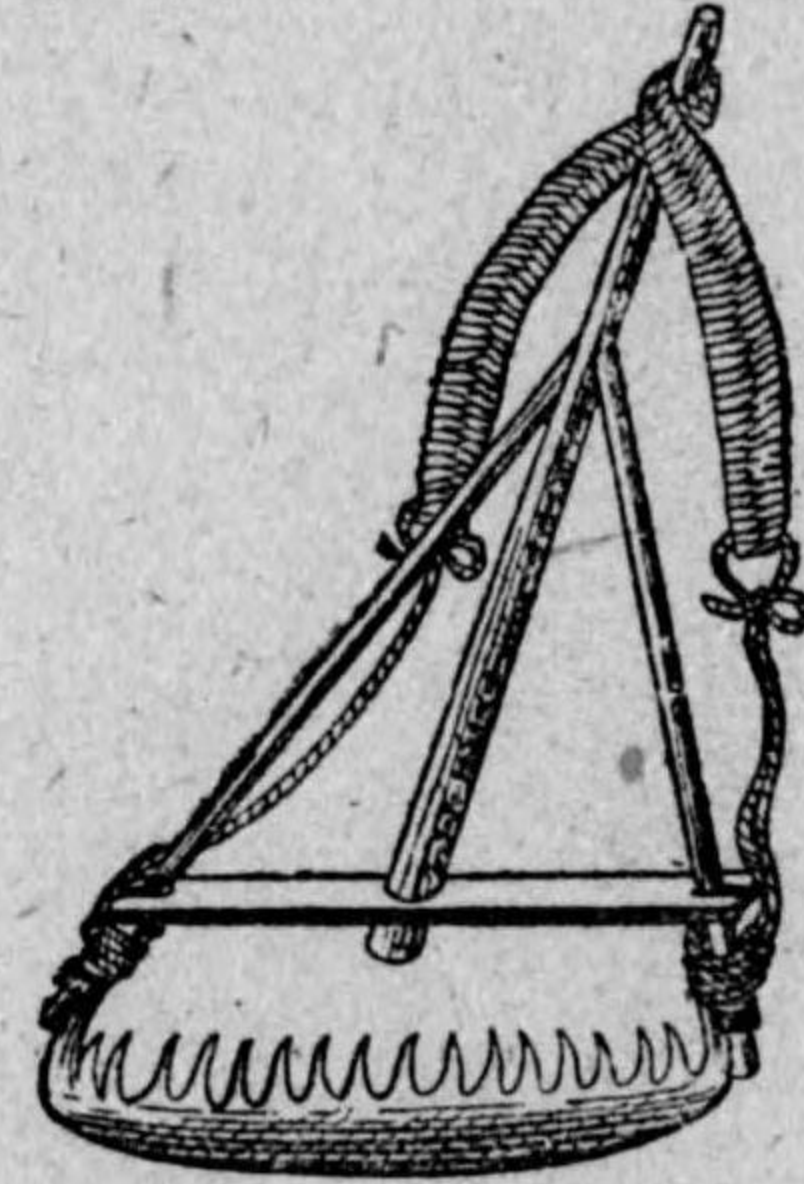


(H) 藻貝搔 (廣島縣)



(G) かぎ

(三重縣に於て石花菜採取に使用するもの)



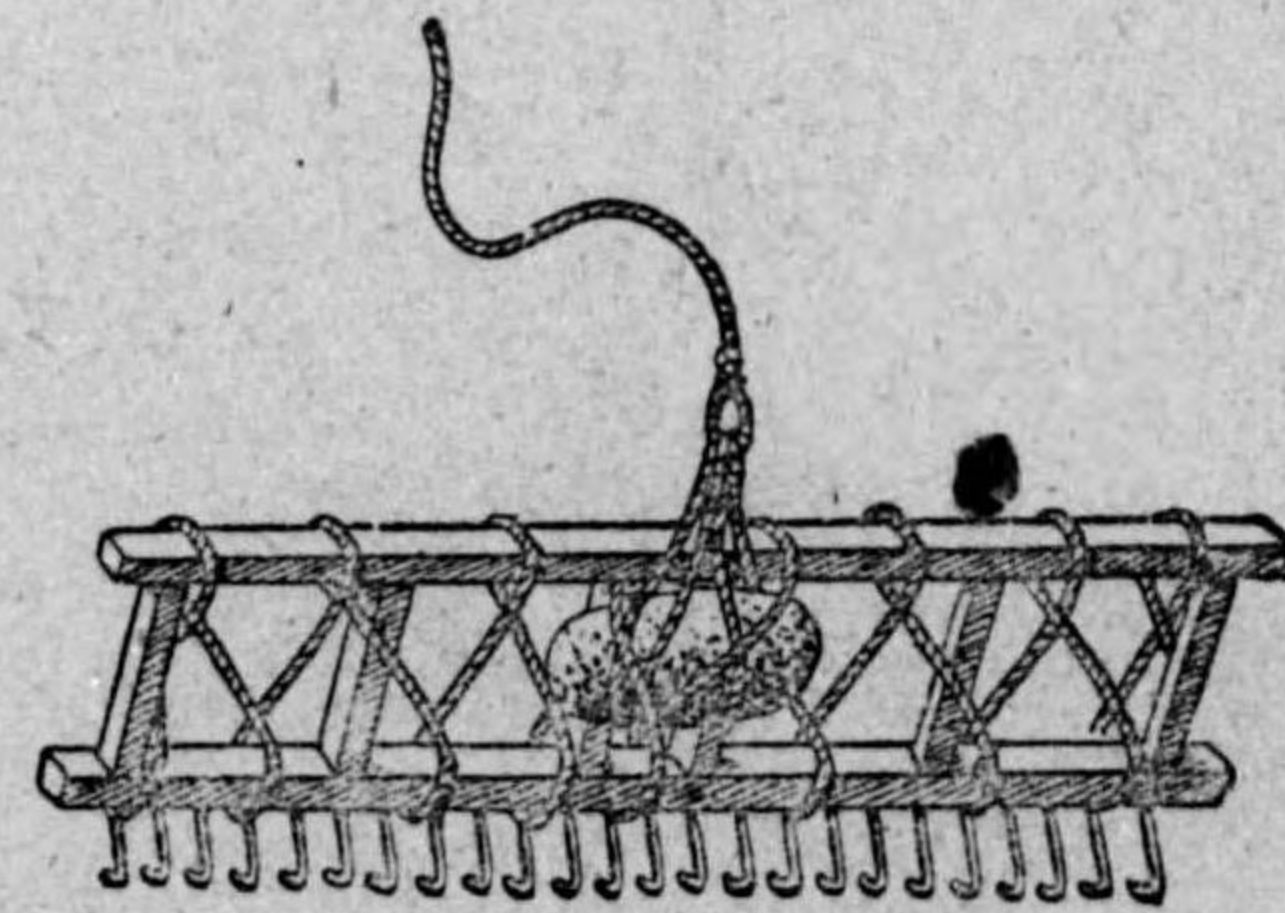
(D) かなどう (東京灣)

(網採捕に使用把柄を持ち紐を肩腰にかけ砂泥中を後退しつつ把起して採捕する)



(F) 藻搔

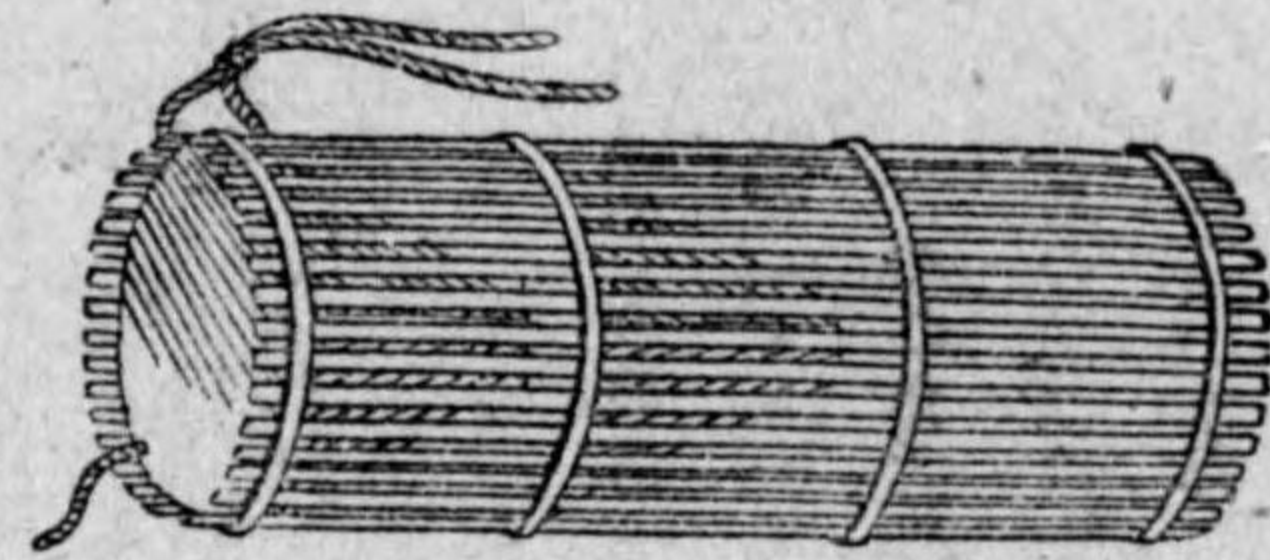
(廣島縣にて海藻の漂流するものを採収するもの)



(E) 藻桁

(鳥取縣にて海藻採取に船を以て漕ぎ引き使用する)

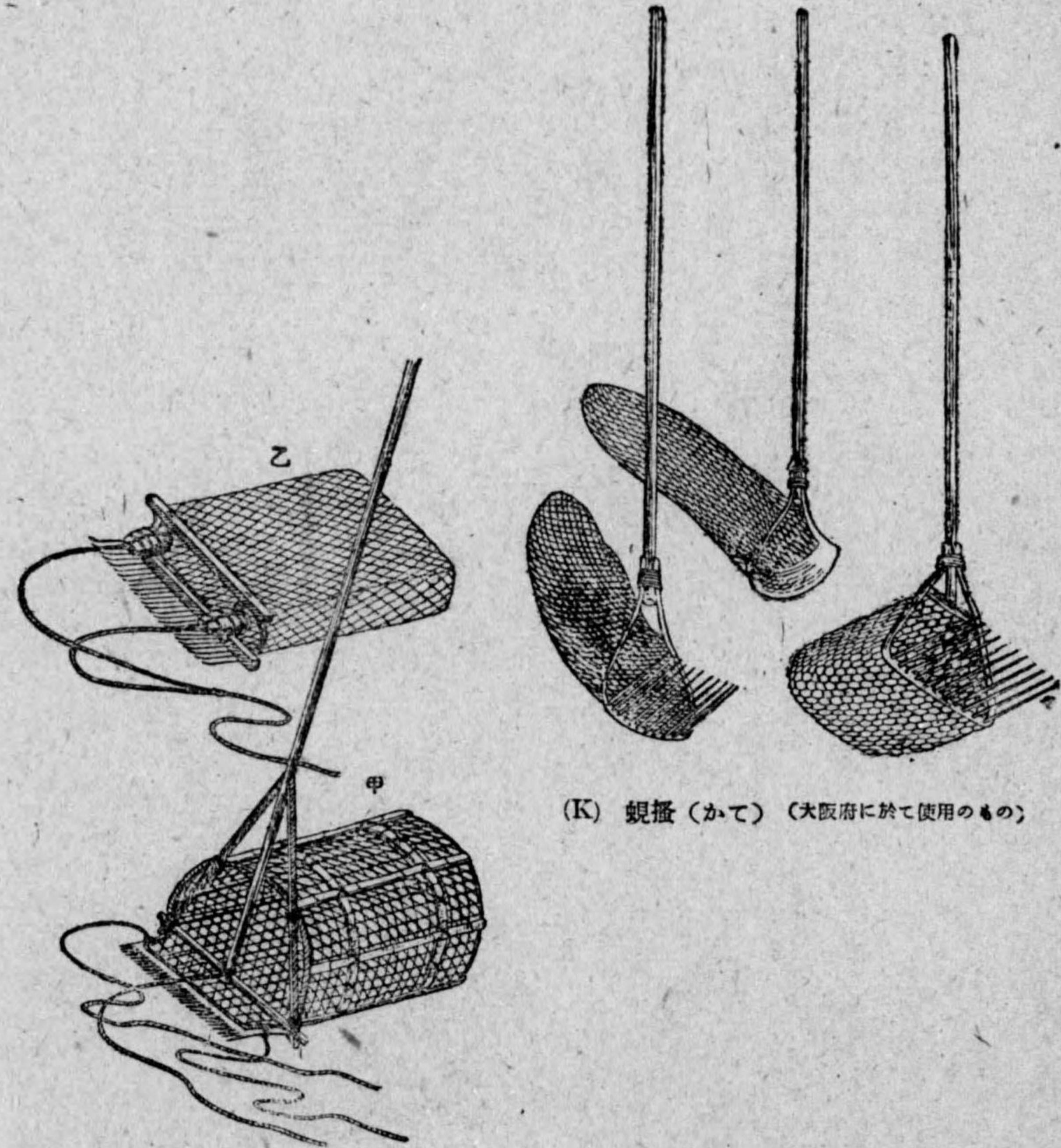
逆に來る様にするものもある。之を好適する場所に延長して、多數の壺を海底に沈下せしめて置き、數日の後に一方より繰り揚げて、壺を船内に取り入れ、中に入れる「タコ」を取り出して、直ちに其壺は元の如くに沈下し行き「タコ」を漁獲するものである。普通の「タコ」は海底に於て孔穴に隠棲する性質を有するが故に、此の壺中に入りて隠棲するが、恐怖するときは孔穴の奥深く潛入して決して出ることなき特性を持つため、この壺の引揚げらるゝときは、壺の移動に甚だしき恐怖を感じ、壺底に密着して遂に捕獲さるゝに至るのである。引揚げたる壺中より「タコ」を取り出すには、單に掴み出さんとしても、壺底へ相當強力に吸着し居るがため、容易



第百八圖 誘導陷罖具 (A) 太鼓ドウ
(千葉縣にて淡水の蝦を漁獲するもの
中に米糠干鰯等の餌料を裝備す)

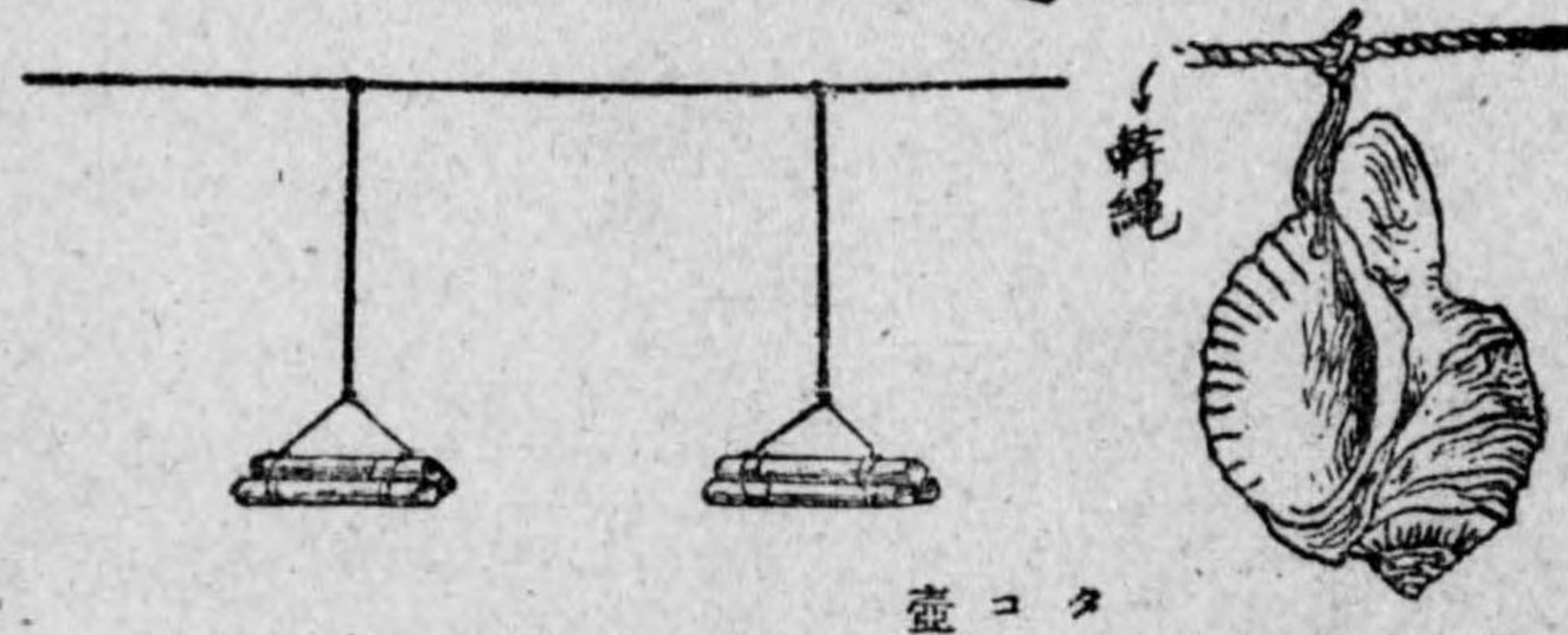
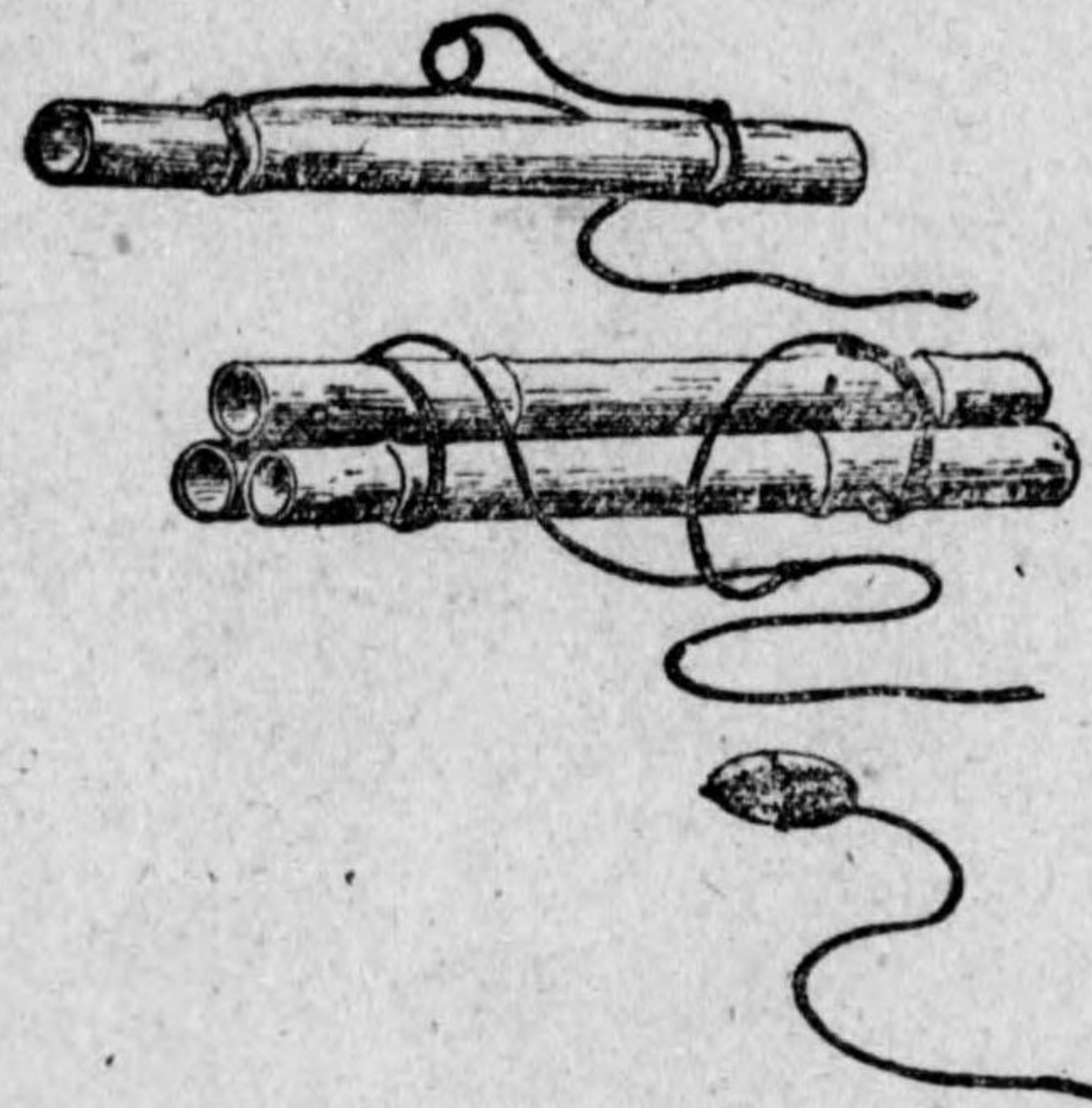


(B) 鯉笊
(千葉縣にて鯉漁獲するに用ふ中に人工餌料を裝す)



(三重縣に於て蛤採取に用ふる貝笊)
(L) まぐわ

(K) 蛸搔(かて) (大阪府に於て使用のもの)

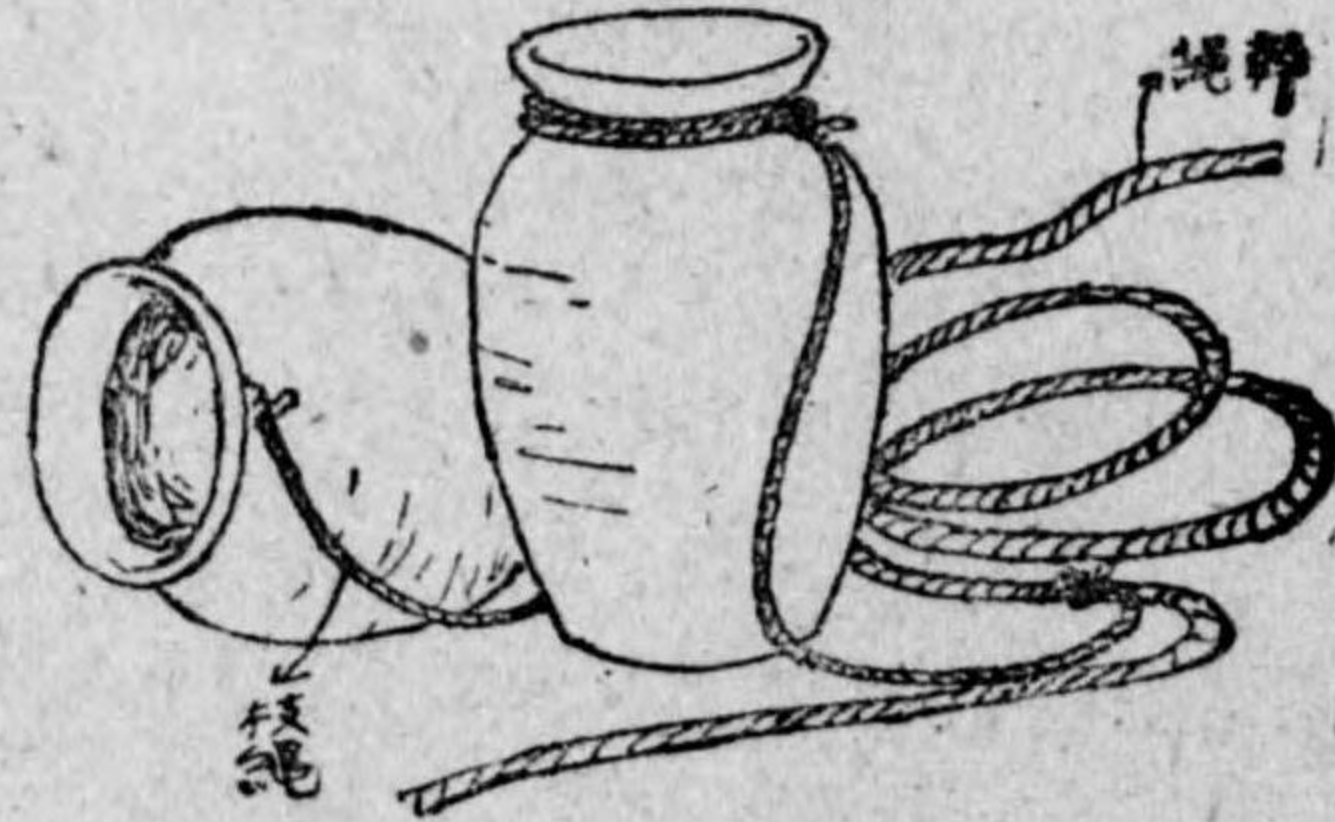


イヒダコ壺

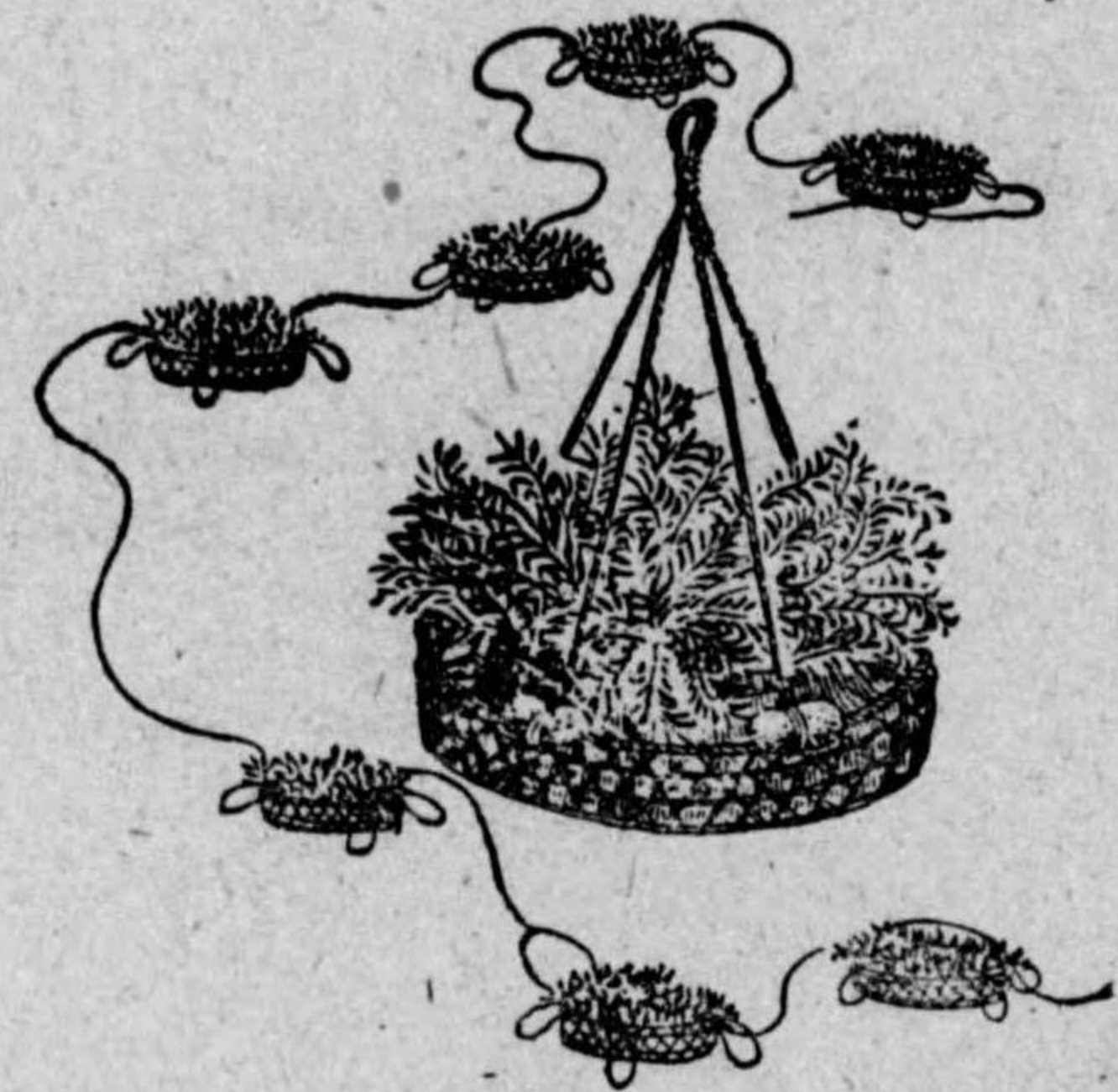
壺コタ

(F) 鱧筒

筒の節は抜き去り泥底の處に沈め置き揚げるときは両手を以て筒の兩端を握りて中に潛入せる鱧の脱出を防ぎて取り揚げる)



(E) たこ壺

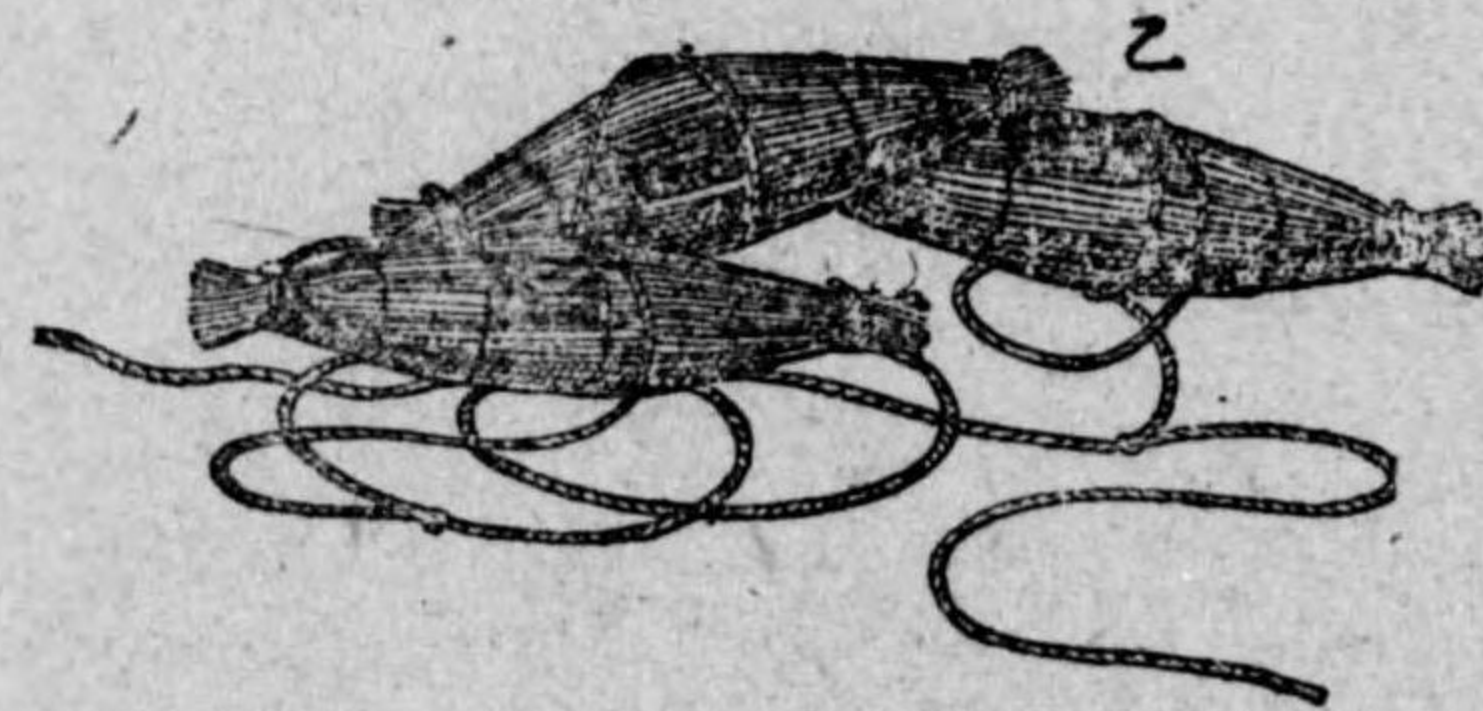


壺を使用するものもある。「イイダコ」の如き小形の「タコ」に對しては、榮螺「ニシ」等の介殻を以て壺に代用される。この漁具は各地に於て相當多く使用され、本邦に於て漁獲さるゝ「タコ」は多くは之に依つ

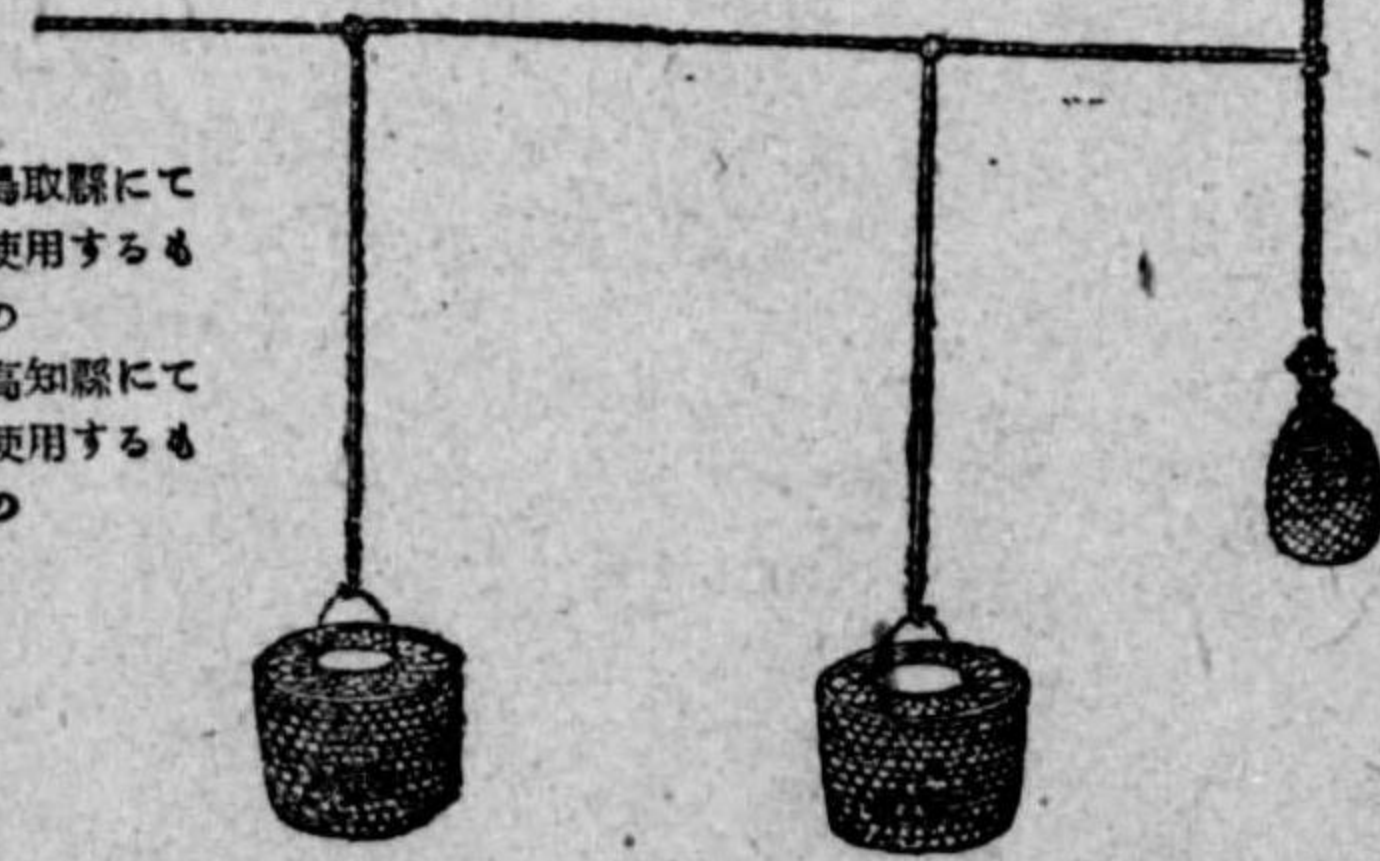
(D) 油螺籠
(中に餌料を裝す)



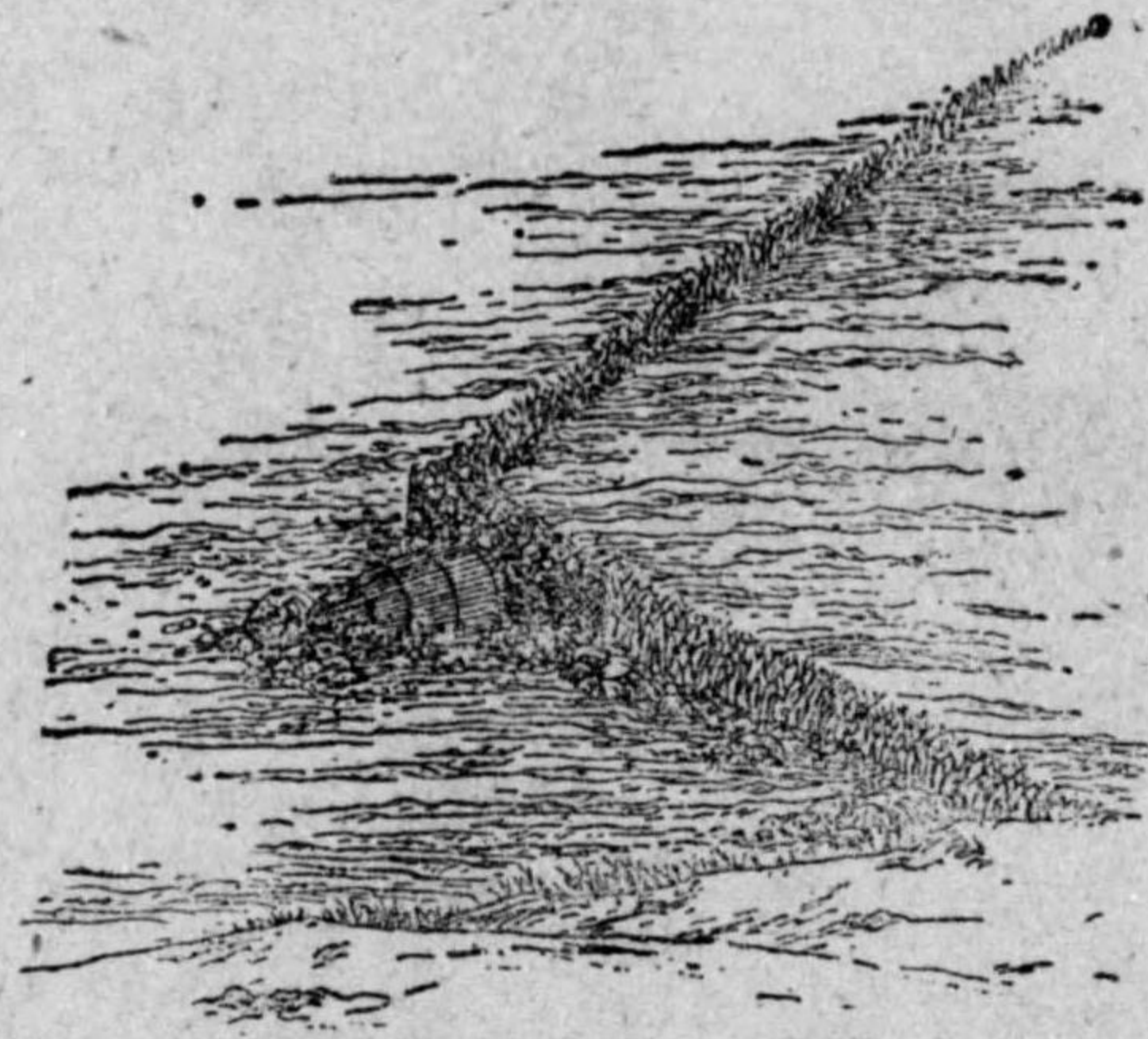
(C) 鳥賊籠
(佐賀縣にて鳥賊を漁獲するに用ひられる)



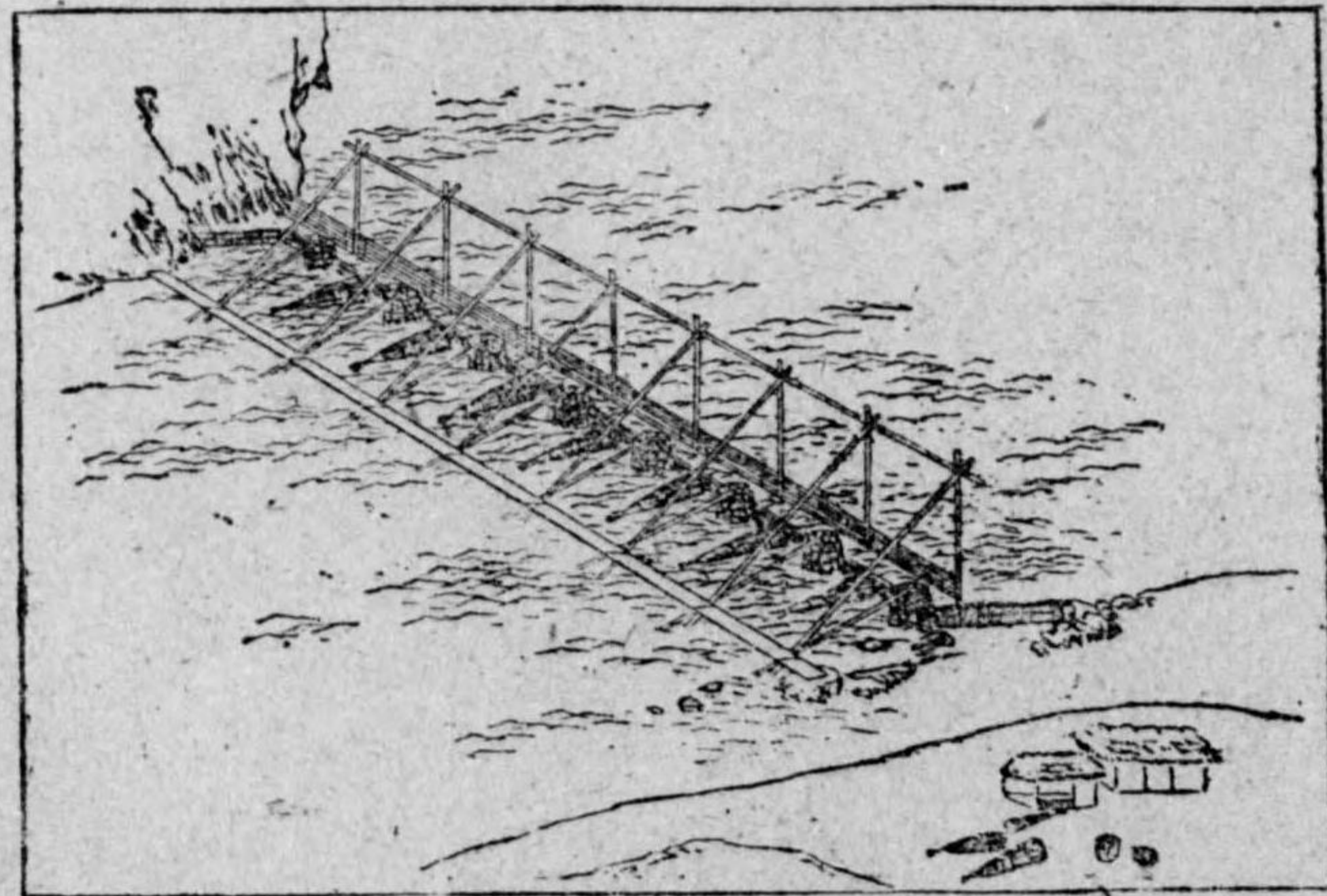
甲 鳥取縣にて使用するもの
乙 高知縣にて使用するもの



ならざるも、壺を逆にし外より壺底を輕打して振響を與ふれば、驚きて逃出するが、又壺底に小孔を穿ちて之に適當の竹幹を當て、一吹呼を與ふるも亦同様に逃出するため、豫め小孔を備へたる



第百十圖 強制陷穿具 (A) 笠装置の圖 (上り笠又は下り笠)

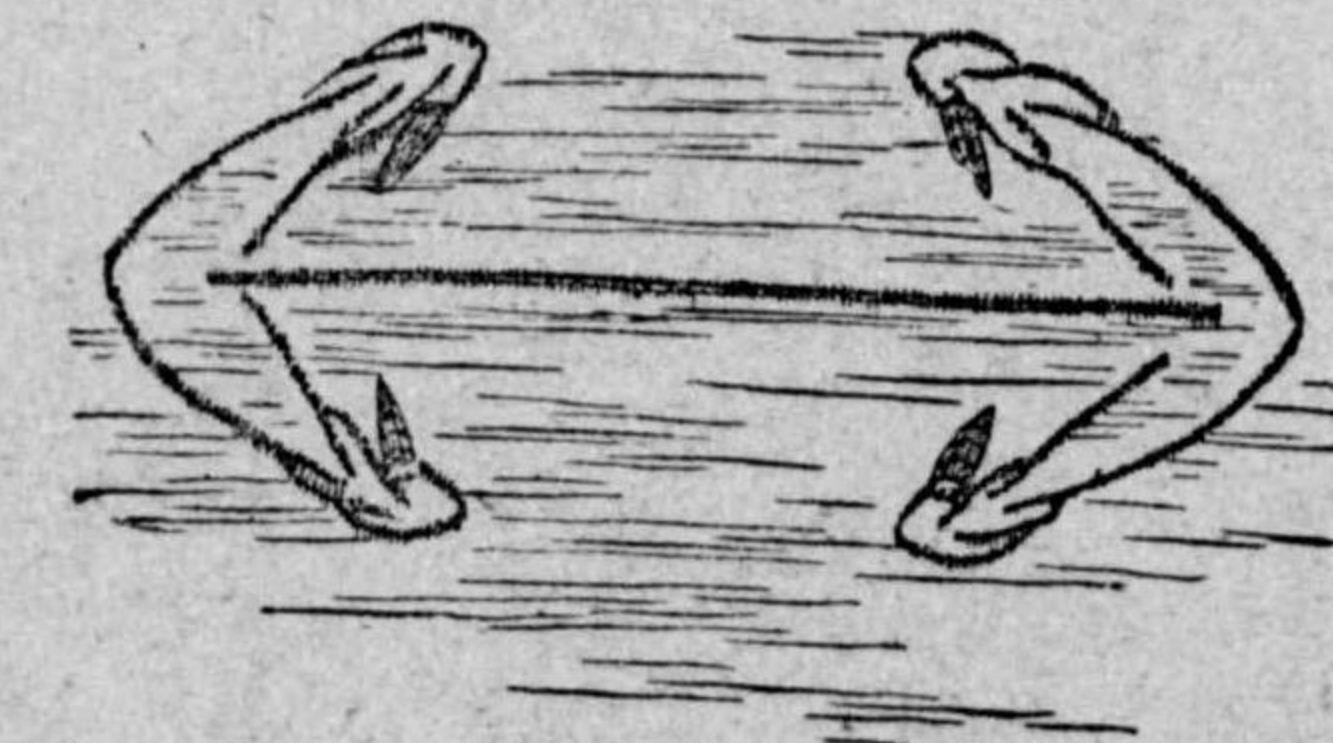


(B) 笠梁装置の圖

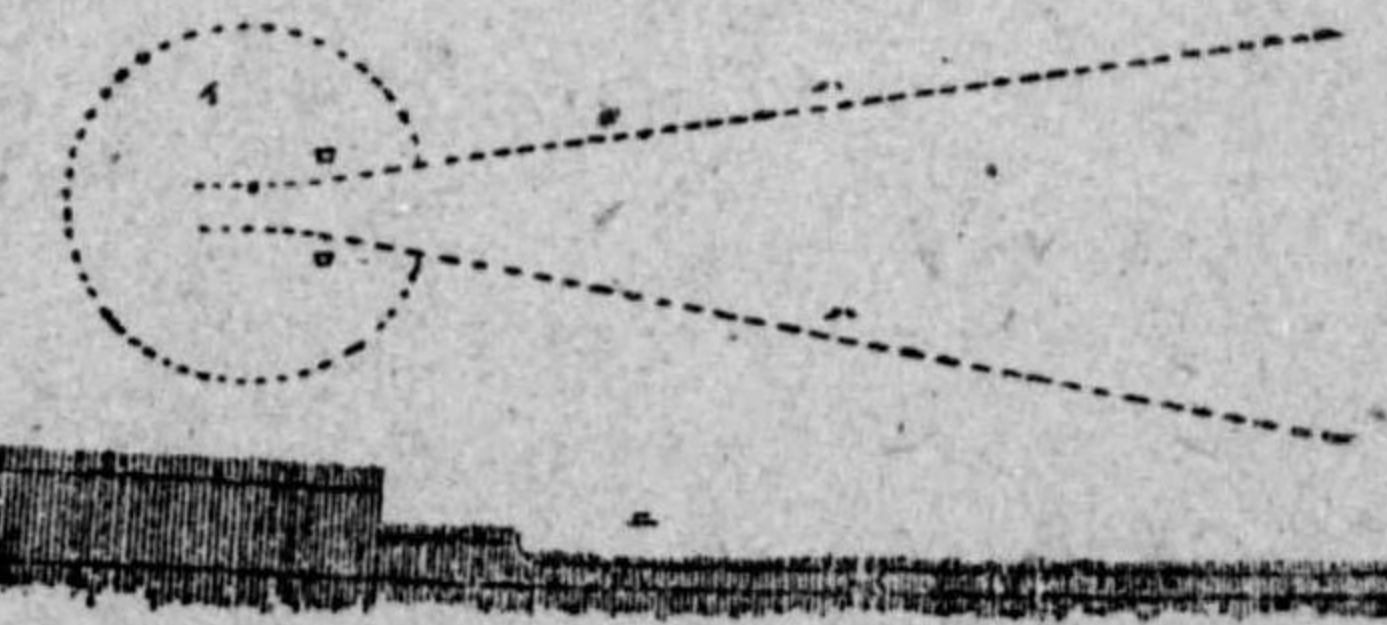


第百九圖 迷入陷穿具

(A) 上り (遊賢縣)



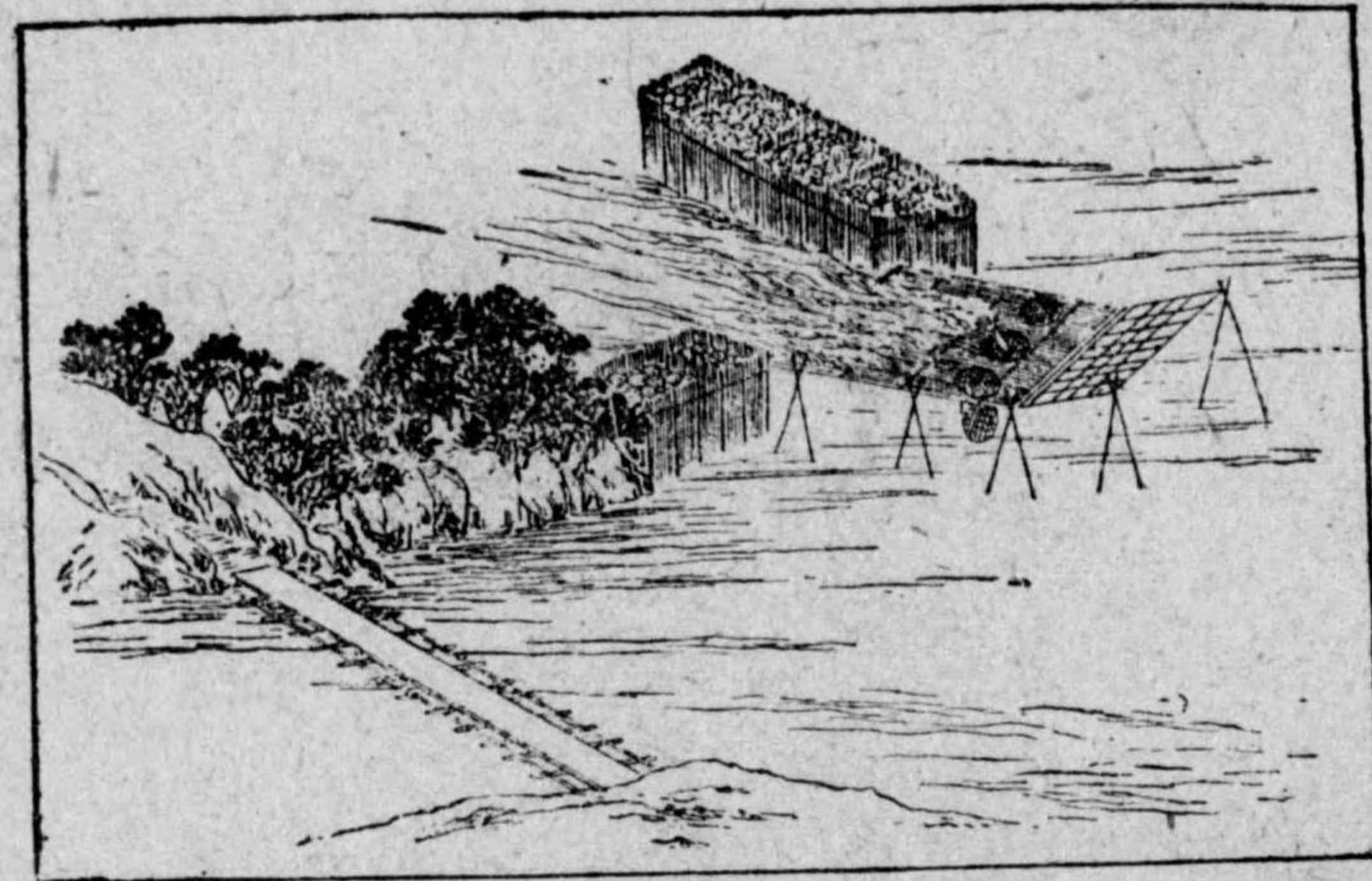
(B) 養建 (茨城縣霞浦)



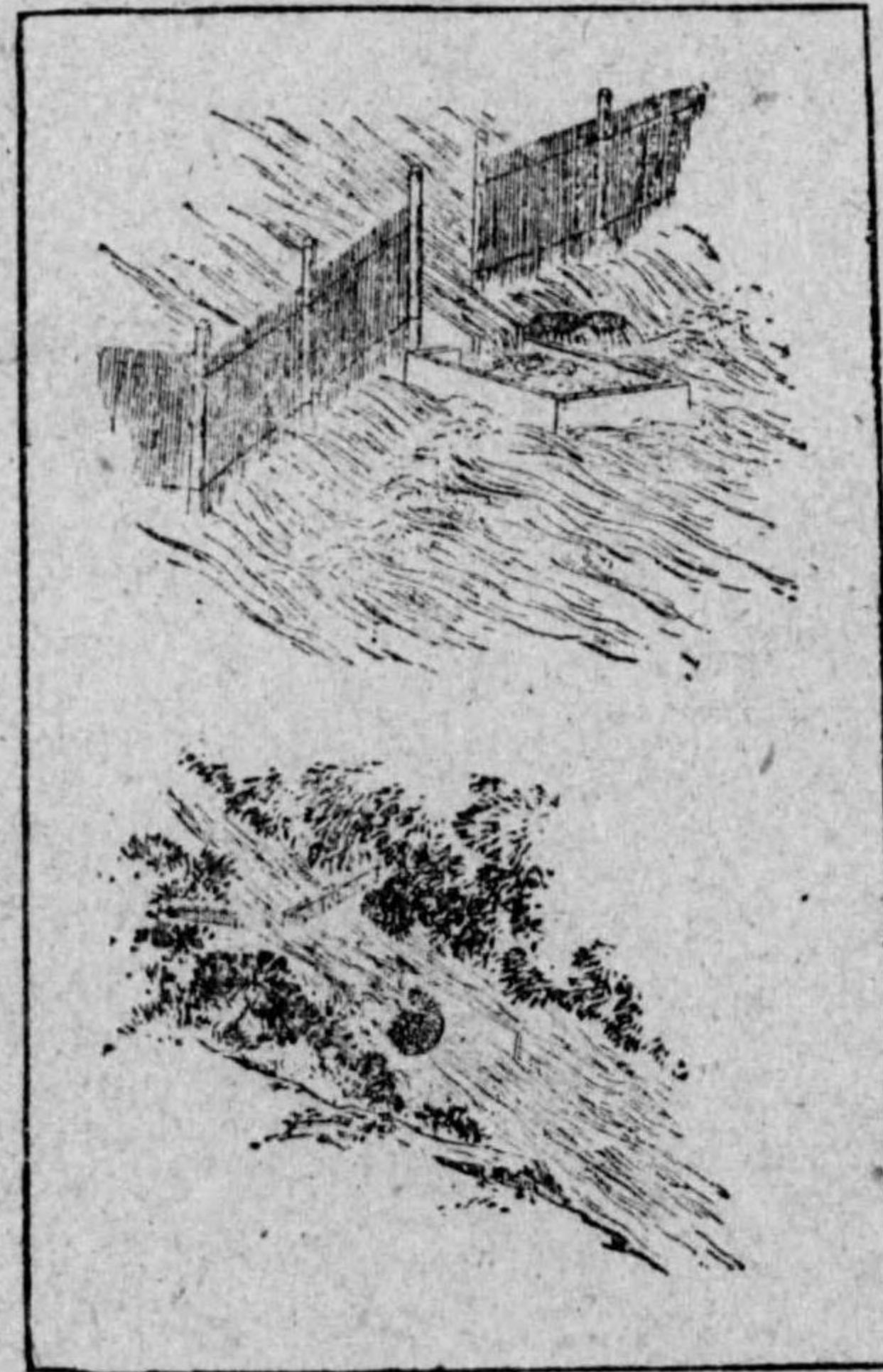
(C) 八重管 (愛媛縣沿岸漁所に用い)

- イ 魚捕部
- ロ 返し (逆逃を防止す)
- ハ 罟袋
- ニ 側面圖

て漁獲されて居る。
 迷入陷穿具類は、目的物が運動中に其漁具内に無自覺的に混迷進入して、遂に漁獲さるゝ趣向の雜漁具で、趣向上網漁具の建網類に酷似して居るが、構造上の主要材料は網地にあらず、主として木竹等の類を用ひられ、稀に網地を用ひらるゝことあるも、之は主材料たる木竹の



(C) 壺梁 (長野縣)



(D) 樋梁

代用のために用ひられるもので、形状は自由に變形し得ざるものである。主眼とする趣向斯の如きが故に、その形状は甚だ複雑なるを普通とし、又目的物の性質に應じ、一度進入し

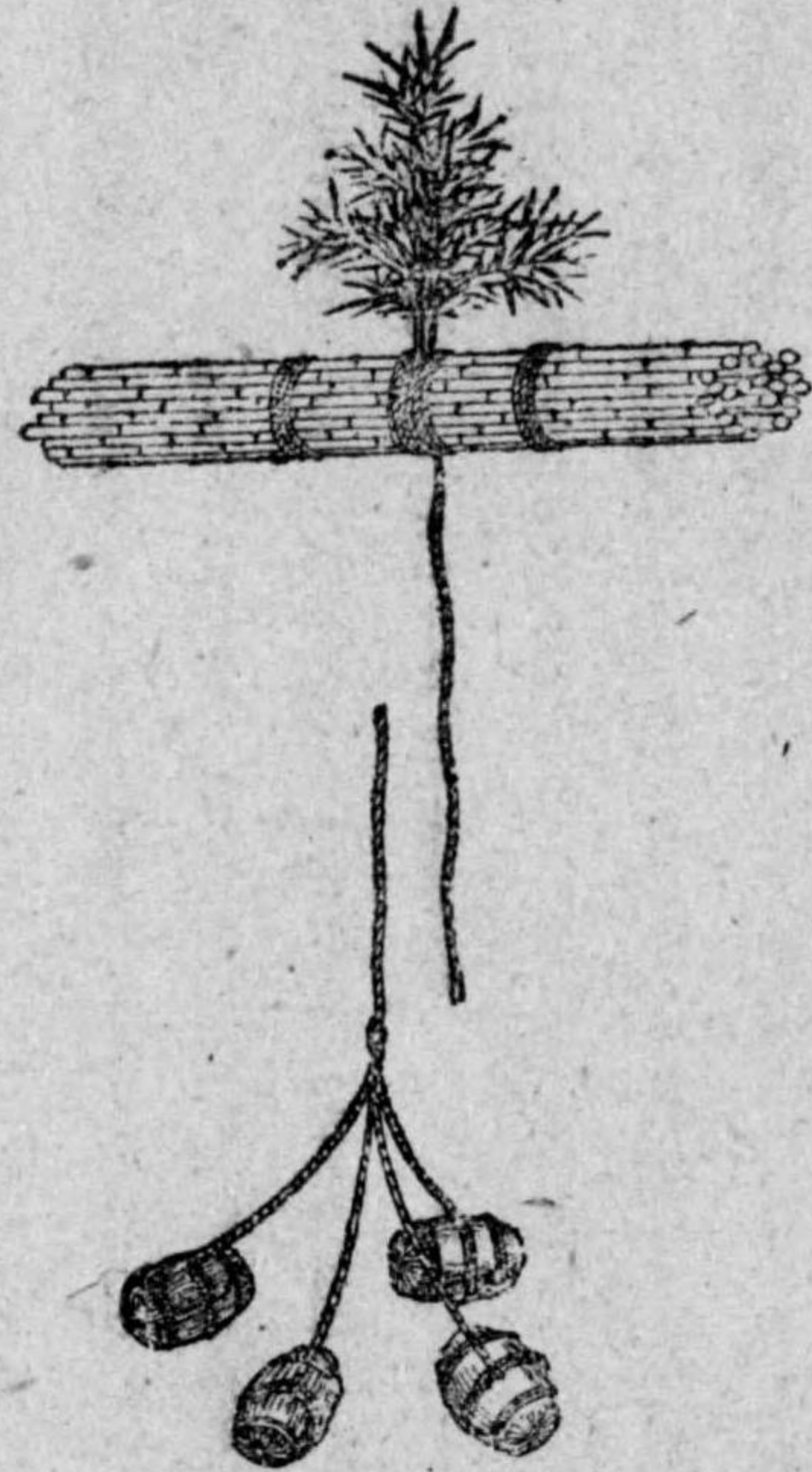
來れるものは再び逆行して逃脫し得ざる様、迷路を適當に構造し、此の遮斷の形状に依つて、漁獲せんとするものである。各種の「エリ」「スタテ」「ハゼ」等と稱せらるゝものが此の類に屬するものである。之のみを以て漁獲を完了し得ず、他の漁具を併用して完了さるゝもの多きも、此の器具を以て兎に角目的物を或る狹隘なる範圍に押し込め、自體の能力を以ては自由に逃脫し得ざる程度に迄制御し、漁獲動作の大部分を遂行するものであるが故に、之を通常漁具の内に包含せしめられて居るものである。目的物が自然に入り來るを待つものであるが故に、其敷設位置は建網類と等しく、目的物運動の要衝點たることを必須とする。一般に構造が複雑で、従つて脆弱であるから、水深極めて浅き且つ波浪靜穩なる靜水部にのみ多く用ひられるもので、従つて河川湖沼等に多く見るものである。雜漁具としては規模相當に大なるものがあり、淡水の漁業に於ては相當に重要視すべきものがある。

強制陷穿具類は、目的物を強制的に陷穿せしめて漁獲する趣向の雜漁具類で、其強制方法としては目的物を恐怖せしむる騒音・騒音・水中の攪亂等を用ひて目的物を威嚇驅逐するもの、水の奔流力を以て押し流さしめてするもの等がある。多くは水域を竹箆等を以て次第に狭く遮斷して、其最後に陷穿部を設け、目的物が他の方向へ自由に逃逸することを防ぎ、止むを得ず陷穿部に陥入せしむる構造を用ひられて居る。各種の築、及び水流を受けて敷設さるゝ各種の下筥クヱリウケ、水流下に向けて敷設さるゝ各種の上筥ホリウケ等は、此の類に入るべきものである。此の種の漁具は其性質上なるべく目的物の迷走自由ならざる處に適用するを可とすがために、河川に多く使用されるものである。殊に水流を利用する築の如きは、相當に急流なる所を必要とする。

第八章 漁撈装置

漁撈の目的を以て目的物を希望する或る特定の位置に集中せしむるために、種々の装置が施されることは實地に於て屢々見受けるところである。此の装置が適當ならば、爾後の漁撈を容易ならしめ能率的ならしむるために、著大の効果を示すもので、漁撈上甚だ重要なものであるが、之等の装置は其目的及び構造よりして、單に目的物を特定位置に集中せしむるに止まり、目的物の行動に就いては何等の掣肘をも加へず、此の装置のみを以てしては、目的物は全く行動自由の状態に置かれて、其の漁撈に就いては全く別個の何等かの漁撈に依る外なきものである。従つて之等の装置に於ては、未だ全く漁撈の意味を示さざるものと考へることを至當とする。此の點に於て普通の漁具に對しては著明なる差異を示すもので、此の種の装置を總括して、こゝには漁撈装置となすのである。漁撈装置の趣向は、凡て目的物の性質に應じ、其好む所を利用誘致するものであつて、小規模のものとしては、株浸木（京都府淡水）、篠漬（各地淡水）等木竹の枝葉の如きものを集めて、適宜の束として、形勝の位置に沈設して、其の陰影に目的物を集合せしめるものがあり、「イカ」柴或は「イカ」巢（瀬戸内海其他）等葉付き木枝を束して之に「イカ」の産卵のために集合し來るを利用するもの、水深浅き湖沼・河川等の一部を堀穿して相當の

深水部を透り、冬季の寒冷に於て多く深水部に集合する。淡水魚の性質を利用して、集合せしむるもの等の種々があり、少しく規模の大なるものにして多く用ひられるものでは、鱒漬（日本海各地）の如く鱒が流木等の陰影を好んで集中し來る性質を利用して、竹幹數十本を集束して長さ四―五米直径五〇―六〇厘の漬として、土俵石俵等を以て適宜に定置し、此漬を水面に浮ばしめて人工的に流木の形を造り、之に集合し來る鱒を適當の旋網具



第百十一圖 漁撈装置 鱒漬

又は手釣具を以て漁獲するものがある。最も規模の大なる装置としては、築磯の如きものがある。築磯は瀬戸内海方面に於て創始されたるもので、始めは規模も小にして、頑丈なる木枠の中に土俵を積み、之に枝付きの木竹數十本を林立せしめて、位置適當なる海底に沈下せしめ、人工を以て目的物の集中す

るに適する據點を、海底に築造してこれに集中せしめ、漁撈上の利便を得たものであるが、近時は次第に大規模に行はるゝに至つて、大なるものでは廢艦を利用沈下せしめて築造するものもあるが、之等の築磯は其れ自體が直接陰影孔穴を目的物に與へて、其の集中を計ることとなるのみならず、海藻類或は小動物の着生の據點を與へて、種々の小動物の集合發育地となり、従つて之等の小動物を食餌とする大型有用動物の集中を促すこととな

るのである。之に更に人工を加へて其効果を發揚するためには、此築磯に對して小動物發育群棲に適當する肥料を沈下せしむるが如き方法も考察されつゝあるが如くであるが、未だ實際に行はるゝものは甚だ稀である。此の方法が次第に根本的に装置或は施設さるゝに至れば、之は遂に養殖の部類に進入するのである。

漁撈が粗太に行はれる間は、之等の漁撈装置は殆ど其必要がなく、自然のままの現地に於て充分漁撈し得るのであるが、漁撈規模が次第に擴大され、積極的に強力のみを以て漁撈されて行く内には、遂に所謂酷漁の状態に入り、自然状態のままでは其の規模の割合に能率が減退することとなる。此の時期に達すれば規模を擴大することは、却つて漁業としては損失の過根をなすがため、寧ろ規模を縮小してもなるべく能率高き漁撈方法を選ぶ必要が生じて来る。そこで漁具の如きも寧ろ小形となり、材料構造共に精選されて、構造の巧、使用の妙に依つて、漁撈の能率を高めることが主として考慮されることとなる。かゝる時期に於ては巧妙なる漁撈装置を考案して、之に依つて一層漁撈の能率を高むることは最も必要なることとなるのである。それ故に漁撈装置の現在多く行はれるのも、河川湖沼等の内水帯か、或は灣入深き内灣、或は陸岸に極めて近き沿岸に限るのである。即ち之等の水帯は作業に安全容易で、吾人の力の最も及び易き水帯であるがため、最も古くから漁撈が行はれ、従つて之等の水帯の漁撈は既に粗大強襲にて足る時期は今日經過し去つて、緻密精巧を主とせざるべからざる時期に入つて居るがためである。猶ほ之等の漁撈装置が陸内水、或は内灣より次第に外海に施設さるゝ傾きある今日の状況を以てしても、將來の漁撈に於ては、之等の漁撈装置の研究考案は、甚だ重要な地歩を占むるに至るものと考へねばならぬ。

第九章 漁 期

漁期とは其目的物を漁獲するに適する時期を云ふのであつて、其初期を初漁期、漁撈に最も好適する時期を盛漁期、その終了する時期を終漁期と云はれて居るが、その目的物が漁獲するに適するや否やは、漁獲の難易、多少、及び漁獲物の價値の多少等に依つて定まるべきものである。多くの場合その目的物を漁獲し得る時期を以て概括的に漁期と考へられる理由は、大概の漁獲物は、通常何時にても相當の價値を有するものであり、又この場合漁獲し得る程度は、實際は通常的手段方法に依つてなし得る程度で、困難と認むべき程度のものにあらず。其數量も亦實際は大概相當數量に及び居り、然らずとするも通例幾何もなく相當數量を漁獲し得るに至るものであるが故に、正しく之は漁獲に適する時期、即ち漁期に該當することとなるからである。しかしながら特殊の場合に於ては相當數量の漁獲をなし得るも、その時期に於てはその漁獲物は價値甚だ少きために、實際には漁獲されざる場合があり、或は相當に價値は有するも、甚だ漁獲に困難であり、従つて漁獲數量も極めて僅少で、其時期には實際に漁獲されざる場合もある。かゝる時期は之を漁期とは認められぬのであるが、之と反對に價値甚だ多き場合は、相當漁獲困難なる時期と雖も、實際は相當に工夫して漁獲され、又價値甚だ少き場合と雖も、容易に

相當大量の漁獲をなし得る場合に於ては、そのため實際には漁獲されるもので、かゝる時期は之を漁期と認むべきである。斯の如き事情にあるが故に、盛漁期としても漁獲の最も容易多量なるがために、價値は相當に低下せる時期と雖も盛漁期となし得る場合もあり、漁獲は餘りに大量にあらざれども價値甚だ多きために、盛漁期となし得る場合もある。しかしながら多くの場合に於ては、漁獲の最も多量なる時期を以て盛漁期とされて居る。この盛漁期は其目的物の種類・漁獲場所・漁獲の方法等に依つて漁期の初期にあり、或は中期に在り、或は後期にありて、勿論一定して云ひがたいのであるが、概して中央又はその前頃にあるものである。

漁期は周年を通じ、遂に一期間として區分し難きものもあるが、多くは一ヶ年を周期として繰り返して來るものである。春・秋等一ヶ年内に二回來る場合も相當多しと雖も、この場合目的物の群集・移動・形態等を比較するときは、多くは之は同等の漁期が一年間に二回繰り返されたものにあらずして、異なる二種の漁期が毎年繰り返されるものとなすべきである。

漁期は其目的物の種類に依つて各其時期を異にして居る。又同一種類のものに就いても、或る時期は網漁具を以て漁獲するに適し、或る時期は釣漁具を以て漁獲するに適する等、目的物の種類と漁獲の方法に應じて、それぞれに固有の漁期があるのである。又之等の漁期は更に地方に依り水域に依つて時期を異にする場合が甚だ多いのである。例へば鮭・鱒の類はオコクク海・カムチャツカ半島方面に於ては、兩種共殆ど同時で、六月頃より一月頃迄の間の河川へ遡上する時期を漁期とされて居るのであるが、内地に於ては鱒は三月乃至六月であるが、鮭は遙かに後れて十月十一月頃の遡河時期を漁期とされて居る。又鱈に於ても日本海方面に於て、流網を以て漁獲

さる、漁期は、山口縣方面に於ては十二月頃であるが、東北水域に至るに従つてこの漁期は次第に後れ、福井縣方面に於ては三月頃、山形・秋田兩縣方面に至れば五月頃となるのを通例として居る。その他斯の如く水域に依つて漁期に差異のある例は甚だ多きもので、従つて漁獲のために出動する操業區域が擴大すれば、漁期が前後に延長されることゝなる例も甚だ多いものである。例へば日本内地に於ける鱈竿釣の如きに於ても、古名句に『目に青葉山ほとゝぎす初鰹』とあるが如く、二、三十年前迄は日本中部太平洋側、距岸四〇—六〇浬の間に出動して漁撈されしため、この時代の其漁期は、青葉の時期即ち四・五月頃に初まり、九月頃に終つたものであるが、爾來鰹の回游の大勢を次第に明瞭にし、出動範圍が擴大されるに従つて、その漁期も前後に延長され、從來の水域に於ては漁期に大差なきも、全出動區域に就いて云へば、今や三月頃より十一月頃迄に及んで居るのである。

漁期は以上の如く漁具の種類に依つて固有の漁期があり、新しい漁具が考案されるれば新しい漁期を見出し得る場合があり、又目的物の生活状況を究明すれば、之に依つて其行動に追尾して次第に漁期を延長し得る場合があるが故に、漁撈に關する各般の智識の向上するに従つて、漁期は益々延長されて、遂に周年に及ばんとする傾向を有するものである。

目的物の種類に依る漁期の變化は、其種類に依り、漁獲に好適する性能を發顯する時期を異にするに依つて生ずるものである。一般に植物性の海藻の如きものに於ては、その生殖前期を漁期とされ、食用とさるゝものは、發育の初期に於て美味或は珍味として尊重され、従つて好漁期とされるもの多く、肥料等に用ひらるゝものに於ては、充分發育せる生殖直前期を好漁期とされて居る。動物性のものに於ても、抱卵期を以て美味珍味なるが故

に、好漁期とされるものが甚だ多く、「ウニ」・「ナマコ」・「ボラ」・「ハタハタ」・「サンマ」等は抱卵期を以て好漁期とされるものゝ例であるが、更に集團性を發顯する時期を以て好漁期とされて居るものも亦甚だ多く、「サバ」・「イワシ」・「ブリ」等は集團時期を漁期とされて居る場合が多いものである。又漁獲に好都合の區域に回游し來る時期を以て、漁期とされて居るものも甚だ多くあり、多くの回游性の魚族が時期に依つて、吾人の漁獲に容易なる近岸に群集回游し來るがために、この時期を漁期とされ、又底棲魚族が時期に依つて深淺移動をなし、吾人の漁獲に容易なる淺海に進入し來ることあるがために、この時期を以て漁期とされ、鮭・鱒等多くの遡河性魚族が、時期に依つて河川に遡上し來り、漁獲に容易となるがために、この時期を漁期とされて居る等は皆この類である。實際に於ては魚族は産卵の時期に群集性を強め、或は淺海に進入し來り、或は遡河し、或は浮游するものが多く、又索餌の時期に同様の性質を示すものも多いため、實際には單一の現象のみに依らずして之等、産卵・索餌・集團・淺水層移動等の諸現象の最も多く混合せる時期を以て漁期とされる場合が屢々である。

日本近海に於ける主なる漁獲物の漁期を示せば、大要次表の如くである。漁期は隣接せる地區は大差なきを普通とするが故に、次表に於ては全國各地方を全部挙げず、漁期に大差なき地方はなるべく省略したる故に、省略せる地方の漁期は、兩隣接地方のものを參照して概略を推定すべきである。

日本近海各種漁獲物種類別漁期表

註 記

地方別	期												摘 要		
	1月	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12			
樺太															鐵ニテ堀取ル
北海道															腰捲・船捲
北 海															腰捲・船捲
青 森															腰捲・船捲
宮 城															腰捲・船捲
千 葉															腰捲・船捲
三 重															腰捲・船捲
高 知															腰捲・船捲
香 川															腰捲・船捲
廣 島															腰捲・船捲
鹿 島															腰捲・船捲
臺 灣															腰捲・船捲
長 崎															腰捲・船捲
山 口															腰捲・船捲
京 都															腰捲・船捲

類

- 一、地方名は大體餘りに近接せざる地方を適宜に選り、北より太平洋側を南に下り、更に日本海側を北上する順序に挙げたり。
- 二、蒐集の材料充分ならざりしため、實際漁獲ある地方に於て其漁期使用漁具を擧ぐるを得ざるもの相當に多く、之を實際其種類は全く漁獲なきため漁期使用漁具を擧げ得ざる地方と區別し得ざるを甚だ遺憾とする。
- 三、従つて表は全く只各地漁期の一斑を知り得るに止まるべきも、之なきに勝るか考へて採録せり。

地方別	樺太	北海道	青森	宮城	千代田	三浦	高知	香川	廣島	鹿島	長門	山口	京都	石川	新潟	秋田	朝日	關東	
1月																			
2月																			
3月																			
4月																			
5月																			
6月																			
7月																			
8月																			
9月																			
10月																			
11月																			
12月																			
摘	摘採	手摘	介殼	摘採	摘採	摘採	摘採	摘採	摘採	摘採	摘採	摘採	介殼・鎌	介殼	摘採	摘採	摘採	摘採	摘採
要																			

アマノリ

地方別	樺太	北海道	青森	宮城	千代田	三浦	高知	香川	廣島	鹿島	長門	山口	京都	石川	新潟	秋田	朝日	關東	
1月																			
2月																			
3月																			
4月																			
5月																			
6月																			
7月																			
8月																			
9月																			
10月																			
11月																			
12月																			
摘	臺網・落網・曳網	地曳網・落網・棒受網・釣	敷網・地曳網・船曳網・八田網・手釣	曳網・建網・縛網・廻網・手釣	地曳網・縛網・手釣・五智網・船曳網	一本釣・縛網・流網・揚絲網・曳網	敷網・手釣・刺網・曳網・八田網	焚入網・釣	地曳網・船曳網・敷網・建網・手釣	臺網・刺網・地曳網・角網	地曳網・船曳網・旋網・刺網・手釣	大敷網・地曳網・巾着網・流網・釣							
要																			

鯨

地方別	樺	北	青	宮	千	三	高	香	廣	鹿	臺	長	山	京	石	新	秋	朝	關	
地方別	道	海	城	森	葉	重	知	川	島	島	灣	崎	口	都	川	湯	田	鮮	東	
1月																				
2月																				
3月																				
4月																				
5月																				
6月																				
7月																				
8月																				
9月																				
10月																				
11月																				
12月																				
摘要	潜水	潜水	潜水	潜水	潜水	潜水	潜水	潜水	潜水	潜水	潜水	潜水	潜水	潜水	潜水	潜水	潜水	潜水	潜水	潜水

地方別	樺	北	青	宮	千	三	高	香	廣	鹿	臺	長	山	京	石	新	秋	朝	關	
地方別	道	海	城	森	葉	重	知	川	島	島	灣	崎	口	都	川	湯	田	鮮	東	
1月																				
2月																				
3月																				
4月																				
5月																				
6月																				
7月																				
8月																				
9月																				
10月																				
11月																				
12月																				
摘要	投網・懸釣	投網・懸釣	投網・懸釣	投網・懸釣	投網・懸釣	投網・懸釣	投網・懸釣	投網・懸釣	投網・懸釣	投網・懸釣	投網・懸釣	投網・懸釣	投網・懸釣	投網・懸釣	投網・懸釣	投網・懸釣	投網・懸釣	投網・懸釣	投網・懸釣	投網・懸釣

地方別	樺	北	青	宮	千	三	高	香	廣	鹿	臺	長	山	京	石	新	秋	朝	關		
地方別	道	海	城	葉	重	知	川	島	島	灣	崎	口	都	川	湯	田	鮮	州	東		
1月																					
2月																					
3月																					
4月																					
5月																					
6月																					
7月																					
8月																					
9月																					
10月																					
11月																					
12月																					
摘	器械網	地曳網・藻曳網・手釣・鮪大敷網	巢曳網・打網・手釣	巢曳網・手繰網・漕曳網	打瀬網・曳網・巢曳網・手繰網	曳網・手釣・巢曳網・鮫鱈網	大敷網・巢曳網・一本釣	曳網・巢曳網・巢漬	臺網・打瀬網・延縄	枡網・一本釣											
要																					

鳥 賊

地方別	樺	北	青	宮	千	三	高	香	廣	鹿	臺	長	山	京	石	新	秋	朝	關		
地方別	道	海	城	葉	重	知	川	島	島	灣	崎	口	都	川	湯	田	鮮	州	東		
1月																					
2月																					
3月																					
4月																					
5月																					
6月																					
7月																					
8月																					
9月																					
10月																					
11月																					
12月																					
摘	手釣	手釣・鮭大謀網・鮪大謀網	(三)六スルメイカ(角網・猪口網)	(七)一ニヤリイカ(瓢網・手釣)	大謀網・器械網・擬餌釣	手釣	手釣	手繰網・一本釣・擬餌釣・柔魚漬	漕網	手釣・夜焚釣	(四)九スルメイカ(手釣・大敷網)	(八)一ヤリイカ	手釣	手釣	臺網・角網・猪口網・手釣	手釣	手釣				
要																					

柔 魚

地方別	樺	北	青	宮	千	高	香	廣	鹿	臺	長	山	京	石	新	秋	朝	關
1月																		
2月																		
3月																		
4月																		
5月																		
6月																		
7月																		
8月																		
9月																		
10月																		
11月																		
12月																		
摘要	<p>角網・地曳網・揚繰網・待網 地曳網・流網・揚繰網・棒受網・角網 臺網・巾着網・地曳網・刺網 地曳網・揚繰網・流網 角網・臺網・地曳網・揚繰網・刺網 臺網・縛網・巾着網・棒受網 地曳網・船曳網・巾着網 巾着網・地曳網・船曳網 地曳船曳網・揚繰網・刺網 地曳網・箕入網・搖籠網 大敷網・地曳網・揚繰網・刺網・八田網 地曳網・船曳網・流網 大敷網・地曳網・刺網・流網 臺網・角網・地曳網・刺網・揚繰網 角網・地曳・船曳網・流網 地曳網・流網 地曳網・船曳網・巾着網</p>																	

眞 鯧

地方別	樺	北	青	宮	千	高	香	廣	鹿	臺	長	山	京	石	新	秋	朝	關
1月																		
2月																		
3月																		
4月																		
5月																		
6月																		
7月																		
8月																		
9月																		
10月																		
11月																		
12月																		
摘要	<p>地曳網・船曳網・角網・抄網 地曳網・抄網・張網 地曳・船曳網・抄網 地曳網・船曳網・瀬曳網</p>																	

玉 筋 魚

地方別	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	摘要
樺太													大謀網・機械網
北海道													臺網・縛網巾・着網・棒受網
青森													地曳網・揚繰網・刺網・八田網
宮城													地曳網・棒受網・揚繰網
千代田													
三重													
高知													
香川													
廣島													
鹿島													
臺兒													
長崎													
山口													
石川													
新潟													
秋田													
朝鮮													
關東													

潤目鱈

地方別	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	摘要
樺太													角網・地曳網・棒受網・揚繰網
北海道													地曳網・棒受網・揚繰網・八田網
青森													敷網・角網・揚繰網・地曳網・刺網
宮城													地曳網・船曳網・巾着網
千代田													曳網・棒受網・揚繰網・刺網
三重													地曳網・揚繰網
高知													地曳網・船曳網
香川													臺網・角網・地曳網・揚繰網
廣島													角網・瓢網・揚繰網・地曳網
鹿島													地曳網・揚繰網
臺兒													
長崎													
山口													
石川													
新潟													
秋田													
朝鮮													
關東													

脊黑鱈

樺太	北海道	青森	宮城	千代田	高知	香川	廣島	鹿兒島	臺灣	山口	京都	石川	新潟	秋田	朝日	關東	地方別
																	1月
																	2
																	3 漁
																	4
																	5
																	6
																	7
																	8
																	9
																	10 期
																	11
																	12
																	摘
																	要

車 蝦

樺太	北海道	青森	宮城	千代田	高知	香川	廣島	鹿兒島	臺灣	山口	京都	石川	新潟	秋田	朝日	關東	地方別
																	1月
																	2
																	3 漁
																	4
																	5
																	6
																	7
																	8
																	9
																	10 期
																	11
																	12
																	摘
																	要

鯨

地方別	樺太	北海道	青森	宮城	千代田	三重	高知	香川	廣島	鹿島	長門	山口	京都	石川	新潟	秋田	關東
1月																	
2月																	
3月																	
4月																	
5月																	
6月																	
7月																	
8月																	
9月																	
10月																	
11月																	
12月																	
摘要		大敷網・竿釣	竿釣 流網・竿釣・大敷網・船曳網	竿釣 (ソウダ鯉) 樹網・流網	建網・竿釣 大敷網・竿釣・延繩・網代網	流網・竿釣・延繩	竿釣	竿釣・延繩	竿釣・延繩								

地方別	樺太	北海道	青森	宮城	千代田	三重	高知	香川	廣島	鹿島	長門	山口	京都	石川	新潟	秋田	關東
1月																	
2月																	
3月																	
4月																	
5月																	
6月																	
7月																	
8月																	
9月																	
10月																	
11月																	
12月																	
摘要		桁網	潜水熊手起		拾取	搔刺シ	牡蠣狭ミ	牡蠣ハサミ・鐵篋									

牡蠣